
新説関ヶ原 《完結済》

サンタマスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新説関ヶ原 《完結済》

【Nコード】

N8573F

【作者名】

サンタマスター

【あらすじ】

秀吉は本当に貧しい農民の出だったのか？書き尽くされ「ペンペン草も生えない」と言われるこの時代を新しい視点で解き明かす。四百年の時を経て、真実の桶狭間が、本能寺が、そして関ヶ原が、今初めて日本人の前に姿を現す。衝撃の連載歴史ミステリー！

序の巻 二条城会見（前書き）

ご案内・・・ブラウザにFirefox系をご利用の方は、IE系に切り替えると読み仮名のルビを正しく表示させることができます。

序の巻 二条城会見

慶長十六年（1611年） 関ヶ原の十一年後の京都二条城

「それにしても・・・」、と家康はつい半時ほど前に終えた秀頼との会見を思い返した。

この日、家康が関ヶ原の後に洛中に造営した二条城において、先代將軍徳川家康と豊臣家の後継者である羽柴秀頼との会見が執り行われた。

広大な中庭を見渡す縁台に立った家康の視線は遙か遠くであった。

「まるで若き日の信長公が目の前におわすかのようであった」

それほどまでに秀頼には大叔父である織田信長の面影が色濃く現れていた。

家康は幼少の頃、織田家の人質としてすごし八つ年上の腕白盛りの信長とよく遊んだのだった。

かたわらの本多正信がしみじみと返した。

「しかしながら秀頼様が太閤殿下にひとかけらも似ておらなかったことは、徳川にとってこの上も無い幸運で御座いましたな」

正信の言葉とは裏腹に家康は、秀頼が間違いなく太閤の嫡流であることを確信した。

「もつと早くに確信に至るべきであった。

信長公の野心に、お市様の美貌、それに加えて太閤の血筋
そして何より、あのだれをも圧倒する偉丈夫さよ！

よもやあれほどは」

（秀頼は身の丈六尺五寸（196センチ）、体重四十三貫（161キロ）と平均身長が160センチそこそこの当時としては異例なほどの巨漢であり、
まさに武人の鑑というべき容貌であった）

「 傑物である」

よもやこれ以上あの秀頼の成長を許しては徳川に禍となる。

このとき家康は依然幕府に組み込まれずにいる豊臣家を、自身の存命のうちに滅ぼすことを決意したのであった。

このとき家康六十九歳、秀頼十九歳であった。

序の式 お茶々

天正十六年（1588年）関ヶ原の十二年前の大坂城

「殿下！ いかがなされましたか」

懇談中の三成は太閤の異変に気付くや、そば近くに駆け寄った。

鳩尾みぞおちのあたりを押えながら突っ伏した秀吉が呻くようにこぼした。

「まただ 近頃急に差し込みが」

大坂城の天守の奥で、引き攣るような胃の痛みに襲われながらも秀吉はまだ諦め切れぬことがあった。

三年前におねねの兄の子、秀秋を養子には迎えていた。

いずれは豊臣の家督を継がせる心積もりでもあった。

先だつて執り行なわれた聚楽第行幸のおりには、豊臣の跡取りとして秀秋も同席の上で、又左と家康に豊臣家への永遠の忠誠を誓わせた。

後陽成天皇ごうやうせいの御前で。

三成に抱き起こされながら秀吉は豊臣の今後を語った。

「もう大丈夫じゃて。いつおつ死んでも手は打ってある . . .
それに豊臣にはそなたがおるでな」

「殿下!」

三成が弱気となった秀吉を諫めた。

しかしながら人々から「さる」とも「はげねずみ」とも陰口をささやかれるこの老人は、いまだ直系の跡継ぎを得ることに未練を捨てきれていなかった。

「今思えばわしは精が強すぎたのかもしれない」

「如何にも」、と三成が真面目な顔で受けた。

この二人は主君と家臣以上の信頼で結ばれており万事遠慮は無用であつた。

「そついえば佐吉、あれはおかしかつたぞ。

伴天連ばてんれんのふるいすに大坂城を見せてやつたときのことだ。

奥の女中どもを見て、皆わしの妾だと心得違ひしておつた。

あやつ、主の法王とやらにわしのことを妾が三百人もおる好色の国王とでも書いて遣るのだからつて。

立ち枯れの老いばれ法王が、わしのことを何と思うことか」

そのとき秀吉の頭に閃いた。

. . . . 老いて弱つた今が跡目作りには丁度よいのかもしれない .
. . . .

・・・ お茶々なら・・・

昔、藤吉郎の頃より憧れた戦国一の美女”お市の方”。

そのお市の方の浅井あざいへの輿入れの一切を仕切ったのが秀吉であった。まだ敵国だった美濃を無事通過するために秀吉の調略の手腕が遺憾なく発揮された。

その後の美濃攻略の足がかりともなった輿入れであった。

そんなお市様の面影を最も強く受継いだ長女のお茶々が年頃となっていたことを秀吉は忘れてはいなかった。

いや、ずっと待ち望んでいたのだった。

「佐吉よ、・・・ お茶々をな、・・・ 側室に迎えようと
思っておるのだが、そなた異存は御座らぬか」

秀吉には珍しく三成に伺いを立てた。

三成は些かも躊躇せずに答えた。

「それは大変よろしきことと存知まする。
奥向きの儀ゆえ取り急ぎ孝蔵主殿じゆんぐさに手配いたさせましょう。
御殿医を呼んでまいります、しばしお待ちを・・・」

三成は無表情のまま秀吉を残し退席した。

このとき秀吉五十一歳、側室に請われたお茶々は十九歳でありました。

序の参 復讐

…… 母上とのお約束、このお茶々けっして忘れはいたしませぬ……

いよいよ太閤の側室と上がる日、お茶々は心の中で亡き母に固く誓った。

お茶々の記憶に残る”お市”は、生前藤吉郎のことを心底毛嫌いしていた。

幼心にお茶々は秀吉が猿顔の成り上がり者ゆえと思っていたが、それだけではなかったようだ。

お市は戦国一の美女とうたわれていたが、ただ美しいだけの女ではなかった。

市の兄の信長は、「市は男に生まれておらば間違いなく名だたる武将となっていたであろう」と評したほどであった。

賢さと勇気を兼ね備えた戦国隋一の才女でもあったのだ。

市は藤吉郎が、いずれ織田家に禍をもたらすであろうことを見抜いていたのだ。

その猿顔の小男に、お茶々は二度までも命を助けられた。

一度目はその小さな背に背負われて ……

ふつと、藤吉郎の背中のぬくもりの記憶が、殺気立って荒んでいたお茶々の心を慰めてくれたように思えた。

「ふんっ、だれが太閤の子なぞ産んでやるものか」

今こそ父母の仇を討ってやる、死より酷いやりようで。

そのうち必ず訪れるであろう死の病に取り付かれし太閤が、あとは死を待つばかりとなったそのときこそ、そおっと耳元でこうささやいてやる。

…… あれは、おまえの子ではないわ ……、と

あの猿顔の小ずるい小男を、けっして成仏などさせてなるものか。

お茶々は心の中でそう毒づき強がらなければ、今にも泣き崩れてしまっただった。

今は亡き父”長政”と母”お市”に、太閤への復讐を誓うお茶々であったが、母との最後の約束が別のものであったことを思い出すのは、非業の死を遂げるほんの少し前のこととなる。

このとき、お茶々十九歳。

好いた男の一人もいても当たり前前の年頃でありました。

序の四 治長の忠節

大坂城の天守はあの頃と同じように堂々としてそこにあった。

ただ、今まさに焼け落ちようと紅蓮の炎に包まれながら。

ときは慶長二十年（1615年）、大坂夏の陣の大坂城内である。

「……千姫様に大御所の説得などできるのであるのか」

治長は半ば諦めの心中で舞い散る火の粉の中を千姫とわずかな供の者たちを見送った。

もう天守は焼け落ちる寸前である。

みな期待するような、大御所家康が『孫娘哀れ』と想ってくれるかどうかなど詮なきこと。

大御所の関心は秀頼様がまこと太閤殿下の御嫡子か否かの一点に尽きよう。

もし某のことを今だ不忠の不義密通者と思いきんでおれば、あるいは秀頼様御存命の目も出てこよう。

それゆえ千姫様に託した助命嘆願である。

~~~~~ 此度の騒乱、ひとえにこの大野治長一人の所業によるもの。

よって我が身の切腹と引き換えに、淀の方ならびに秀頼様のお命の御安泰を願ひ奉りまする　　〳〵〵

しかし、大御所が秀頼様の父親が太閤殿下その人と見抜いておれば、残念ながら秀頼様に明日のお命はなかるう　　・・・

先の二条城での会見は迂闊であった。

「見事な偉丈夫に御成長あそばした秀頼様を目のあたりとすれば、あの老獺家康とその御威光にただただひれ伏すでありましょう」

そのように申す清正の言葉を鵜呑みにしてしまつたが、所詮は武辺者の浅知恵であつた。

秀頼様に並々ならぬ御血筋を見て取つた大御所は、自身の命のともし火が尽きる前に何が何でも豊臣家滅亡を企ててくるであろうことを。

その清正も、まさか家康より先に寿命が尽きてしまおうとは。

ああ、清正もろとも徳川に加勢したあの「関ヶ原」「こそが今となつては悔恨の極み。

この上はいかなる不名誉をこの身に浴びようと、某の命に代えて秀頼様をお守りいたさねば。

それが一度は命を賭けて愛したお茶々への治長の今も変らぬ忠節で

あつた。

このとき秀頼二十三歳、千姫十九歳。

乳兄弟として幼き日々を共に過ごした治長と淀の方は、ともに四十  
七歳であつた・・・

## 序の五 父秀忠

「千姫の無事帰還が叶うなら豊臣家の安堵とて許そうぞ」

千姫奪還の命を、徳川軍の全部隊に出してより、すでに丸一昼夜がたとうとしていた。

炎上の後、無残に崩れ落ちた天守閣の方角を見やりながら將軍秀忠は、すでに掌中に収めた戦勝の喜びより千姫の消息に心をとらわれていた。

千姫は家康の三男秀忠と、お市の方の三女お江こゝろとの間に生まれた最初の子であった。

祖父の家康からも父の秀忠からも大変な可愛がられようで育った。

わずか七歳の幼さで十一歳の秀頼の正室として嫁ぎしより十一年、秀忠は一日として千姫の平安を願わぬ日は無かった。

秀忠自身は父、家康から可愛がられたり優しくされたことなど一度たりとも無かった。

戦働いくさばたけきに向かぬ自分を父、家康が疎んじていたことは己おのだけでなく近習の家臣たちにも公然のことであった。

ゆえに我が子には並々ならぬ愛情を注いで育ててきた。

秀忠は家庭や平時に於いては、よき父親であり、よき統治者であった。

十五年前の「関ヶ原」は秀忠にとって初陣であった。

しかし途中の上田城攻略に手間取り「関ヶ原」の戦勝に間に合わなかった。

そのとき父・家康は家臣たちの面前にも関わらず秀忠を手酷く叱責したのだった。

あのと時秀忠は廃嫡をも覚悟した。

後から何度思い返しても、その度に身が縮むような心持になった。

それが禍して、此度の大坂攻めに於いても、またまた大失態を晒してしまうこととなった。

荷馬も軍馬も徒<sup>かち</sup>すらも、全て置き去りにして僅かばかりの手勢で清洲まで駆けつけたことを、それが將軍の行軍かともたしても大御所から手酷い叱責を食らうという恥の上塗を演じてしまった。

秀忠は何としてもこの城攻めで天下に將軍秀忠を示さねばならなかったのだ。

しかし戦には勝った。

あとは千姫の無事だけが父秀忠の願いであった。

## 序の六 千姫の賭け

「よくぞ無事にもどられた」

大坂城落城の翌日、僅かの共を連れた千姫が將軍の本陣に無事辿り付いた。

父秀忠と千姫にとって実に十一年ぶりの親子の再会であった。

久々に見る千姫は父の目にも一段と美しく成長して見えた。

「お父上、秀頼様のこと・・・」

久し振りの父との再会を喜ぶ素振りも無く千姫が切り出した。

「治長からの助命嘆願は正純より聞き及んでおる、そなたは何も案ずることは無い。

まずは体を清めて休まれよ、積もる話はそれからじゃ」

焼け落ちる大坂城から命からがら脱出してきた千姫は煤だらけであった。

秀忠は大御所家康から豊臣家と秀頼の処遇一切を一任されていた。

千姫無事救出の上は二度と徳川に齒向かぬほどに疲弊した、豊臣の家名だけは残してやることも許されよう。

治長の申し出を呑んでやるうとも思っていた。

淀の方は秀忠の妻お江の姉であり、秀頼は義理の甥でもある。

従兄妹同士の秀頼と千姫に子が授かれば、それは徳川と豊臣の太い架け橋ともなるろう。

そもそも、そういう思惑での千姫の輿入れであった。

ただし、譲れぬ条件がある。

「千よ、一つだけ父の問いに答えてはくれまいか」

秀忠は千姫が幼い日に見覚えたのと同じ優しい顔で千姫に問いかけた。

「幼くして嫁いだとはいえ秀頼様のおそばに十二年寄り添ったそなたに聞く。

千は秀頼様を、まっこと太閤殿下のお子と思っておるか」

……きたっ！……

千姫は心の中で身構えた。

徳川方にたどり着けば必ず問われるだろうと覚悟はしていた。

まさか父、その人から問われようとは。

少しの間を置いて千姫はきっぱり答えた。

「秀頼様はまごうことなき豊臣のお世継ぎにございます。太閤様は千がこの世に生まれる前にすでにお亡くなりでございます。面影を辿ることはわたくしにはかないませぬ。されど秀頼様の立ち居振る舞い、すべての者への細やかなお心配り。淀の母上様ほか豊臣家の御家中の方々の御信望の厚さは、秀頼様の見事な偉丈夫さと相まってまさに天下人の風格。とうてい余人の立ち入れるものではございません」

千姫の言葉を聞いた秀忠の顔がわずかに曇った。

同席していた本多正純はじめ武將たちの不吉な雰囲気察した千姫は更に力強く言い放った。

「將軍職を継ぐのにふさわしいのは評判芳しからざる弟、竹千代より秀頼様でございます。……」

## 序の七 將軍秀忠

「將軍職を引き継ぐのにふさわしいのは評判芳しからざる弟、竹千代より秀頼様でございます」

そこまで言い放って千姫ははっと息をのんだ。

……いけない……

眼前の父、秀忠の顔が優しい父の顔から、みるみる非情な將軍のそれへと変わっていった。

……ばかなことをしてしまった……

千姫はここに及んでようやく治長の意図を悟った。

……治長殿はこのことを恐れて、己が身を投げうつてまで、わたくしに賭けてくださったのではあるまいか……

……わたくしが浅はかだった……

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

遡ること十五年前の「関ヶ原」において。

まだ八歳の秀頼様を押し立てて奉行の石田三成が祖父の大御所に覇権を賭けた戦いを挑んだ。

祖父は密かに豊臣家ゆかりの大名たちにこう吹き込んでいた。

「三成の担ぐ秀頼様は三成が淀の方と通じてもつけた子である、豊臣家を三成めにくれてやってもよいのか」と。

石田様を知る方なら、このような戯言は根も葉もなき策略と気がついたであろう。

しかし、元々石田様のことを疎ましく思っていた加藤清正、福島正則、そして決定的な戦力で参戦していた小早川秀秋ら本来、豊臣家の家臣、親族の徳川方への加勢により勝敗は決した。

もし、幼い秀頼様に太閤様の御子であるという確証があったなら、命が無かったのは祖父と父のほうであった筈。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

これが「関ヶ原」に対する千姫の見立てである。

「関ヶ原」は千姫が四歳のときの出来事である。

見事な洞察力である。

さすがは戦国一の才女、お市の方の血をひく姫である。

しかし、ここではそれが禍した。

今度の戦は「関ヶ原」とは状況が真逆なのだ。

今は秀頼が正真正銘太閤の子であつては命が危ういのだ。

無理も無い、いかな才女、千姫といつてもまだ十九。

どす黒き謀略の世界を垣間見るにはまだうぶすぎる。

大御所家康は、先の二条城の会見で秀頼に並々ならぬ血筋の発露を見て恐怖した。

ひるがえつて己が一族に更なる成長を遂げるであろう秀頼に対して人物、財力、人気で対等に渡り合っていける人材が輩出できるのか。

否。<sup>いな</sup>

徳川にそのような地力は無い。

所詮、三河の田舎大名が陰謀と戦に長けた家臣団によってあれよあれよと成り上がってきたに過ぎない。

……しかし、筑前ちくぜんの奴は特別だったのだ……

秀忠は自らの失策に気づき泣き崩れる千姫を気にも留めずに傍らの正純に命じた。

「秀頼と淀の方に切腹を申しつけよ」

まさに二代將軍徳川秀忠が真に將軍そのものとなった瞬間であった。

## その八 家康の置き土産

慶長五年（1600年）関ヶ原の年の正月 京都三本木にあるおねねの隠居屋敷

数羽の烏の群れが五度ほど鳴きながら北山の方角に飛び去って行くのが見えた。

「はてさて、家康殿の申されていったことは、まことでありましょ  
うか」

正月の挨拶に訪れた家康を見送った後、おねねはさつきまで家康と腰掛けていた庭を見渡す縁台に腰掛けて、大坂城で北の政所として過ごし日々を思い返していた。

その噂は天逝した秀頼の兄の鶴松が生まれた頃より、奥の女中たちの間で囁かれていた。

西の丸の主のおねねの耳にも、届いておらぬはずがなかった。

…… お茶々様のお産みになられたお子は、太閤様のお種では無いのでは……

…… 御正室の北政所様をはじめ十何人もの側室を持ちながら、あのお年までお子が授からない太閤殿下には子種がござらぬ……

それが奥の女中どもはじめ伽衆いけどうの暗黙の了解事であった。

ところお茶々が側室におさまったとたん、たて続けに二人も身籠るとは。

真冬の弱い日差しが庭先に点々と残る柿の実をより一層赤々と照らしていた。

家康はわざとらしく困り果てた顔をして耳元で北政所に言い含めた。

「このままでは秀頼様を押し立てて治部少輔じぶしょうぶめが兵を挙げ、この家康と天下を二分して争うこととなりましょう。それはそれは大きな戦となりまする」

黙り続けるおねねに、家康は腹の底から響く声でこうも囁いた。

「豊臣は太閤殿下と北政所様のお二人がここまで築き上げられたもの。このまま三成と淀の方にくれてやってもよろしいのか」

「ふーっ」、とため息をついて、故郷と同じ低い山々に囲まれた京の空を見上げたおねねは、藤吉郎と出会った頃の尾張時代に想いを馳せてみるのだった。

## その九 おねねと藤吉郎

永禄四年（1561年） 桶狭間の翌年の尾張領内

「おねねー、今帰ったぞー」

藤吉郎は土間で足をすすぐのももどかしく、奥で縫い物をしているおねねに覆いかぶさった。

奥といっても貧乏侍の長屋である、戸が開いていれば表から丸見えである。

藤吉郎はいつでもこころであった。

御屋形様のお供でいく日も家を明けていたのならともかく、お城勤めで毎日家に帰って来られるときでも、すぐにおねねにのしかかっていた。

だんだんに慣れたが嫁いで間も無い頃には、おねねはきゃーきゃーいいながら外まで逃げ出していた。

何しろおねねは十四で藤吉郎に嫁いだのだ。

養父の浅野長勝は、苗字すら持たぬ藤吉郎との結婚を身分違いと許さなかったが、おねねは十七年上の愛嬌のあるこの小男を嫌いではなかった。

ある日、城から帰った長勝は藤吉郎におねねの実家の木下姓を名乗

らせることで、すんなりと二人の結婚を許した。

媒酌は長屋の隣に住む前田犬千代、松夫婦がつとめ、ささやかな祝言が行われた。

祝いの客も無く馳走とて無いままごとの様な祝言であった。

こののち藤吉郎が天下人まで登り詰めるなどと誰に想像できただろう。

このとき藤吉郎が犬千代と松にしたためた礼状の文字が不釣合いに達筆であったことがおねねの記憶に強く焼きついていた。

十二年後、近江の浅井長政を滅ぼした功績で出世した藤吉郎は、ついに近江長浜に城を得て一国一城の主となった。

名も羽柴秀吉と武将らしく改め、織田家の家臣としての地位を固めつつあった。

しかし、いつまでたっても子ができぬおねねに対して辛くあたることも多くなり、この頃から徐々に側室を持つようになっていったのである。

## その十 長浜時代

おねねはその娘時代から、領主である織田信長の覚えが良かった。

美しく聡明なおねねは信長の妹、お市と重なるところが多かったのだろう。

長浜城時代、おねねは信長と共に一芝居打って秀吉に冷や汗をかかせたことがあった。

なかなか子どもが出来ないおねねに秀吉が冷淡になり浮気が絶えなくなっていた頃、秀吉の行状を相談するふりをして、信長に秀吉を懲らしめるための書状をしたためてもらったのだ。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

この前、おねねと久々に会^あったが、そなたはまた一段と美しくしゅうなっておった。

藤吉郎がそなたに不平不満をたらたら申しておるようだが、かようなことは言語道断である。

あのはげねずみめが、そなたより素晴らしきおなごなどをいっただけで見つけられようものか。

だからそなたも安心して城主の奥方らしゅう堂々として、やきもちなぞ妬かぬことである。

この書状は必

ず藤吉郎にも見せるように

~~~~~

なんと政治上手。

これで秀吉は信長の目の黒いうちはおねねを粗末に出来なくなった。長浜城時代、多忙を極めた秀吉にほったらかしにされることが多くなったおねねは、自分が出会う前の夫のことを何一つ知らないことによつやく疑問を持ち始めた。

苗字すら持たぬ賤しい身分の出のはずなのに、騎馬武者顔負けに馬を乗りこなしたり、書状を書けば熟達の僧侶も及ばないほどの達筆であったりした。

元々農民だった者がわずか数年で武士の作法や政務をこなすなどあり得ぬことであった。

それは後から呼び寄せた、弟の秀長とて同じであった・・・

## その十一 蜂須賀党

いつどこで知り合ったのか秀吉にはほかの武士連中とは様子の異なる輩やからが付き従っていた。

蜂須賀小六はちすけがこくろくや前野将衛門しょうえもんといった連中は、いったいどこからやってきたのだらう。

彼らの戦は一風変わっていた。

野戦もするにはするが、最も得意とするのは城攻めだった。

日干し攻め、兵糧攻め、水攻めと、大規模な土木工事を伴う戦が多かった。

それがため、他の武断派の武将達からは腰抜けの臆病者よばわりもされたが、信長様はそんな筑前ちくぜんを評価して取り立てていた。

そういえば秀吉の官位に対する執着も尋常ではなかった。

信長様の計らいで朝廷から筑前守ちくぜんのかみの官位を頂いたときの喜びようは大変なものであった。

秀吉の官位好きはその頂点を極めるまで終生続いた。

そして官位と並んで秀吉が好んだのが名家のおんなだった。

この場合、いつも若いおんなにこだわる秀吉が年にはこだわらなかつた。

室町以来の名家の京極家を討ったときには、すでに二人の子持ちの竜子を側室たうこに迎え家中の者を驚かせたことがある。

たしかに竜子は、お市様にも勝るとも劣らぬ絶世の美女ではあつた。

竜子は気位が高く、おねねとは生まれの身分も大違いであつたが気さくなおねねには好意を持ち、共に夫の悪口で意気投合する良い話し相手となつたのだつた。

## その十二 聚楽第

正月だというのに日差しが暖かく、庭先に長居しても身が冷える心配はなかった。

冬の京にはめずらしい小春日ひつめひの昼餉時ひるめしであった。

おねねは夫であった秀吉が、もしかしたら高貴な血筋を引いていたのではあるまいか。

そういう疑念に初めてとらわれていた。

出身や容貌とは不釣り合いな高い知性と教養。

たとえ相手がどんな難物でも必ず最後には丸め込んでしまう人たらしの技。

土木、建築技術や謀略に長けた取り巻き連中たち。

官位や名家のおんなに対する尋常ならざる執着心。

みな禁裏きんりの連中の得意とするところではないか。

おねねは御所内の者達をどうしても好きになれなかった。

北政所として朝廷の使者たちと面談することも幾度かあったが、

顔と腹があれほどかけ離れた者たちとは武家の世界では会ったこと

がなかった。

しかし秀吉はそんな扱いにくい連中とでも、うまく付き合っていくのを苦にした様子はなかった。

信長様が禁裏の連中から悪鬼の如く呪われ、『本能寺』の直後には、禁裏で連日連夜祝杯が傾けられていたのとは正反対であった。

禁裏の主、天子様と秀吉がもつともお近づきになったのは、先の聚楽第行幸のおりであった。

天正十五年に完成した聚楽第は、かつて天子様がお住まいになっていた平安京内裏跡に造営された。

周りに結構な堀と塀を廻らせ、屋根は総金箔張りという絢爛豪華な平城であった。

完成の翌年の後陽成天皇ごようぜいてんのうの行幸のおりは、その豪華さに天子様も驚かれたご様子であった。

太閤のご満悦振りも最高潮の頃、前田利家殿、徳川家康殿が天子様の御前で豊臣に永遠の忠誠を誓わさせられた。

あのとき、豊臣の跡継ぎとして同席していたのは、養子となったばかりの当時八歳の秀秋であった。

## その十三 印し

おねねの疑念から撚られた縦糸と横糸は次第に綾を成し、霞がかつた錦絵の全体像を描いていった。

長い間に見慣れてしまい、すっかり忘れていたが秀吉には身体的な特徴があった。

右手の指が六本あったのだ。

(注 化学物質も放射線もタバコすら無い時代だったので遺伝的な染色体異常と思われる)

たいていは幼子のうちに余分な指を切り取って、成長とともに自然な形にしていくのが当時の習いであった。

(注 現代においてもそうである)

秀吉の母の家政所はずいぶん変った人であったが秀吉のことを大層大事に育てたことから、わざと指を残して成人させたというのは何か特別な意味があったのかも知れない。

・・・ 何かの印しとして ……

禁裏に於いては近しい間柄での婚姻が幾重にも重なるうちに、ときに尋常ならざるお子が産まれるという噂を耳にしたことがある。

千年前の厩戸皇子（うづまやどのみつひこ）＝聖徳太子（よすけのみこと）のような天武の才が出ることもあれば、あだとなることもあるという。

人知れず始末されたり隠されたりしておるとか。

もしかして自分の知らない秀吉の生い立ちに、そのような経緯が隠されていたとしたら、今までの出来事があまりにも符合する。

羽柴筑前から異例の関白職就任に際して、秀吉がそれはそれは思案の末に選んだ新しい本姓は、聖徳太子の生前の呼び名である、”豊と総耳”にちなんだ豊臣としたのだった。

おねねは自分の織り上げようとしている図柄の意味するところの恐ろしさに、それ以上の詮索の想いを巡らせるのをやめた。

## その十四 大谷刑部

「北政所様、あまり長く外におられますとお体が冷えまする、そろそろ中へ……………」

そう遠慮がちに声をかけてきたのは、大谷吉継の母、東殿局ひがしどのだった。家康が立ち去った後も庭先からなかなか戻らぬおねねが物思いに耽つてゐることは察していた、しかし暦は正月である。

取り残された柿の実の向こうの冬の弱日有加茂勢山を越すと、この辺りは急に冷え込むのだ。

「……………東殿、もし三成と内府殿が天下を二分して争うようなこととならば、刑部殿きょうぶだんはどちらに御味方いたすでありますようか」おねねは大谷刑部が最近急速に家康に接近していることを知りながらも問うてみた。

東殿局は前触れもなく北政所に難儀なことを問われても、些かも窮した素振りを見せずに答えた。

「我が子ながら吉継は戦場いくさばにおいて尋常ならざる力を発揮する武將にございます。

しかしながら、本当にあの者がその力量を発揮するのは政の裏側に於いてでございましょう。

時流と形勢を読んで、事前に策を巡らせる。

謀略、調略、駆け引きなどの交渉事こそが本領にございます。

だからといって、けっして日和見の卑怯者などと思つてくださいま

すな。

信と義を何より重んじる、まっことの忠義者、剛の者にございます」

それはあらためて問うまでもなく、おねねもよく承知していたことだった。

・・・ だからこそあの佐吉とは互いに気脈が通じ合う仲なのだろうて・・・

おねねは家康の置き残していった言葉を思い返した。

太閤亡き後、やれ内府殿、徳川殿、海道一の弓取りよと、みな我れ先に徳川に靡なびいておるが、いざ豊臣対徳川などと煽り立てられ秀頼が総大将にでも担がれようものならそれまでではないか。

いかに徳川の権勢といっても誰が秀頼に弓ひけようか。

毛利、前田、宇喜多、上杉らの大老たちと、三成をはじめ奉行ども  
の反徳川陣営は元より、今でこそ徳川に靡なびいている清正、正則、幸  
長などの豊臣ゆかりの大名達も、  
先を争って馳せ参じ、大坂城に入り切らぬ兵馬で撰津界隈は収集の  
つかぬほどごった返すであろう。

いかに徳川が六万、七万の軍勢を以ってしても秀頼に指一本触れる  
ことなど叶わぬ。

たとえ太閤の子であろうとなかろうと、相手が秀頼である限りは。

長い静寂がおねねをつつんだ。

おねねは家康が、自分にどんな役回りを演じさせようとしているのか気づき始めた。

## その十五 本多正信

おねねが去った後の大坂城西の丸は、今や豊臣政権の執政として権勢を振るう徳川家康の執務に共されていた。

「さて、北政所様は我らの意図した通りに動いてくれますかな」

家康より四歳年長の本多正信は、この頃の家康に最も影響力のある家臣であり、数少ない友でもあった。

戦働いくちやうたいでより、その謀略の才で家康の右腕にまでのし上っていた。

「北政所様はこちらの意図になぞ、すぐ気付かれるであろう、賢きお方である」

家康はおねねに謀略を仕掛けることに最後まで乗り気ではなかった。

「それも端から算段に入れての仕掛けでありましょう」

家康は見え透いた偽りを言わねばならなかった事に、少なからぬ後ろめたさを感じていた。

「北政所様には『秀頼は三成の子』などという戯言は通じまい。

三成は幼少の頃より清正や正則らと共に、北政所様が我が子の如く育ててまいったのだ。

あの、煮ても焼いても喰えぬ『へいくわいもの』の気性は、散々痛い目に逢っておるわしより遙かにご存知じゃ」

「上様は、北政所様を甚いたくかっっておられますな、惚いたれておられまし

たか」

「正信、いくら其の方とて口がすぎるぞ、ひかえよ」

「人は誰しも本当のことを突かれたときほど腹を立てるものと承知しております。

上様のそういう実直で律儀なところが表向きにあってはじめて、裏の策が生きてまいるのです」

「其の方の喰えなさは、あの治部少めしよめとよい勝負じゃ」

「たとえ北政所様が三成を信じるにせよ、秀頼様が太閤殿下の御嫡子かどうかということについては前々より疑ごうていらっしやるはず。

この西の丸を上様に明け渡して、さっさと隠居してしまわれたのが何よりの証拠でありましょう。

あとは、その小さな種火に息を吹きかけるだけで、回りが勝手に燃え盛ってくれます。

どちらに転んでも徳川に損はありません。

仕上げは三成めが動き出しやすいよう早く大坂を留守にすることですな。

目ぼしき豊臣ゆかりの大名ごと。

そちらのほうの手筈も秘密裏にととのえてございます」

家康はこの正信が徳川方に仕える者であったことを、つくづく幸いであったと思うのであった。

敵ながら見事な忠臣である石田治部少輔三成が豊臣方にあってくれ

たことにも。

## その十六 間諜直江兼継

「上様、喰えぬやつがお好みなら三成や某それがしより、もっと喰えぬ奴が一人おりまする」

家康には三成や正信に比するような喰わせ物には、心当たりがなかった。

「景勝かげかつか、……」

正信は一頻ひとつきり笑いを堪こらえて答えた。

「景勝様は苦勞人ではありませんが生まれついでの殿様。上様と同じで人が良すぎまする。」

申し上げたきは、その景勝様の陪臣ばいしんの直江兼続めにございます。すでに某とは密かに昵懇の仲にございます」

家康には以外な人物であつた。

「兼続とな、奴は太閤のお気に入りであつたはず。高禄での召抱えも断つた剛の者と思つておつたが、出自しゅつじが怪しいのと、上杉家中での出世の早さは太閤のそれと似ておる。」

領地や領国に対する欲より権勢に対する欲にこだわるところは、確かに其の方と三成めによく似ておる。

はてさて……怪物じゃな……」

「御意に。太閤殿下が兼継を欲したは彼かの者の謀略、調略の技と交渉事の上手さにあつたものと推察いたしまする。」

表の政を任せる奉行には三成という天武の才をすでに得ておりましたが、政は表ばかりではござりませぬ。

太閤殿下は隠居してしまわれた黒田如水殿の代わりに、裏を仕切れる者がほしかつたのでありませぬ。

それまで見込んでいた大谷刑部は、あの通り人前には出られませぬゆえ。

何事も正論と理屈でしか考えられぬ三成だけでは、太閤殿下も些か心許なかつたのでありませぬ。

実は兼継は三成ともすでに大いに気脈を通じております。」

ここまで聞くに及んで家康も、正信の企てる謀略の全貌を悟った。

正信は彼らしからぬ満面の笑みを浮かべながら家康に言った。

「此度はその兼続はちめつとつひめに八面六臂はつめんろくべいの活躍をして貰わねば天下は徳川に転がり込んではいりませぬ。」

## その十七 仕置き

天正一九年（1591年）時を少し遡り、秀吉存命の頃の大坂城

「殿下、治長めへの処罰、如何なる仕置きといたしましょうか。  
はるなが

釜茹であろうと、串刺しであろうと、果ては牛馬で引いての八つ裂きであろうと何なりとこの三成めにお申し付けください」

怒りに震える三成と対照的に秀吉は落ち着いた様子であった。

「勇ましいの佐吉。まるで嫉妬に怒り狂つとるのは其の方のようであるかのような言い様ではないか」

秀吉は三成と二人だけで密談をするときにはいつも幼名の佐吉の方で呼んだ。

「佐吉よ、もう良い。わしは治長のこと、お茶々のことも、少しも怒ってはおらんのだ」

三成は驚き「何とお心の広い……」、と感嘆してみせた。

秀吉は笑いながら「そうではない、よいか佐吉……」

秀吉は二人しかいないのにもかかわらず声をひそめた。

「このことを知る者は？」

「奥のごく僅かの者のみにございます」

「治長本人も悟られておるとは気づいておらん」

「はっ。悟られたと気付かば、その場で腹を搔<sup>か</sup>つ切るはずでありま  
しょう」

「ならばこのまますてておけ」

「・・・・・・・・」

「察してきたか、さすがは治部少輔じゃ。」

わしがこれから申すこと、秘密裏に事が進むよう其の方に任せる」

天守閣の奥深くで不可思議な密命が太閤から三成に申し渡されよう  
としていた。

## その十八 当て馬

「鶴松はの、…… 正真正銘わしの子であった」

秀吉はじつと黙って聞く三成に語り始めた。

「二年しか生きなかったが、間違いなくわしの子であった。それ故の天逝よつせいなのじゃ。

お茶々もわしの子と想うておつた、仇のわしのな。

鶴松が生まれてからのお茶々は、わしに優しゅうになった。

仇とは思わんでくれるようになった。

お互いただの親と親じゃ。

わしはもう五十五いそじゃ。

御屋形様よりだいぶ長く生きてしもつた。

鶴松が死んで一度はきつぱりと諦めた。

秀次を関白にもした。

だがな佐吉よ、…… やはりまだ諦め切れんのじゃ。

もう一度、もう一度お茶々にわしの子を産んでもらいたいのじゃ」

「勿論にございます」

「佐吉よ、わしの初めての子がお茶々にしてようやく授かったのはなぜだと思ふ。

それはな、お茶々が初めて浮気をしてくれた女房だったからではないかと思つておるのじゃ」

「……、三成は黙して同意した。

「だから、次も、今まで通りじゃ、よいか、佐吉よ」

「……………仰せの通りにいたしまする」

太閤は満悦して急に大きな声で命じた。

「大野治長に馬廻り役三〇〇〇石を与えよ」

「は、は―御意に」、と他に誰もいないにもかかわらず三成が大げさに受けた。

三成に余計な説明は一切不要であった。

これまでも、そしてこれからも。

部屋を立ち去りかけた三成は太閤にくるりと振り返ってにやり、と笑った。

「当て馬に馬廻り役とは太閤殿下もまだまだご健勝ですな」

ははははははははははと笑いながら三成は秀吉を残して天守をあとにした。

## その十九 直江状

慶長五年（1600年） 会津城

「殿、上杉が機先を制して兵を挙げれば、手筈どおり石田治部少が秀頼様を御大将に大軍勢で押し出してまいります」

景勝はしばらく思案の後に問うた。

「兼継、其の方の云うところの大軍勢とやらの内訳を申してみよ」

待つてましたとばかりに兼継は、眩まばゆいばかりの大軍勢を披露した。

「副将には大老の毛利輝元様と宇喜多秀家様。毛利家からは吉川広家様、小早川秀秋様と御三家が総動員されます。

これだけで徳川本隊と五分の七万。さらに石田らはじめ奉行方で二万。太閤様の御忠臣であられた小西行長様、安国寺恵慶様、長宗我部盛親様、島津義弘様、立花宗虎様らの二万も固いところでございます」

「・・・・・・・・」

「しめて最低でも十万」

些かも興奮した様子も見せずに兼継は続けた。

「いかに西国の外様が主力とはいえ、これだけの軍勢が秀頼様のもと大坂城に集まれば、

今のところは徳川に付き従っておりまする日和見の豊臣ゆかりの大名達、加藤、福島、大谷、山之内らも先を争うてはせ参じるは必至もはや徳川は譜代だけの丸裸となりましよう」

兼継の話を無表情で聞く景勝であったが心中はざわめき始めていた。

景勝は家康が特別憎い訳ではなかった。

天下が欲しいのならくれてやっても良い、 . . . . . ただ。

上杉につまらぬ言いがかりをつけて脅かすのは御免こうむりたかった。

そうでなくても、この会津に国替えとなつてからは周りの伊達と最上との勢力争いに汲々としているのだ。

伊達と最上がことあらば<sup>こそ</sup>挙つて徳川に加勢するのは明白であった。

ここは大勝負に出て徳川もろとも東北を平らげ、勢いに乗って以前の領国の越後まで我が物とすれば東国は安泰となる。

これを以つて豊臣政権の一大勢力として君臨できよう . . . . .

景勝の野心はここまでであった。

兼継がくすぶっていた景勝の野心を燃え上がらせた。

長い、長い黙考の末、景勝は意を決して兼継に命じた。

「兼継、人を怒らせるはそなたの得意とする処、西の丸への返答、  
其の方がしたためよ」

こうして正信と兼継の喰えぬ者同士の目論見通り、徳川と豊臣恩顧  
の大名との連合軍による会津征伐が始まるうとしていた。

## その十九 直江状（後書き）

ここまでお読みいただいてありがとうございます。

直江兼継を二重スパイとみなすのは大河ドラマを出し抜いたようで爽快です。

鎧兜の前楯に『愛』なんて掲げるのは普通に考えれば変だと思  
います。

裏でよっぽど悪いことをに手を染めていた裏返しだと思えます。

だからこそ兼継の後半生は良い統治者であったのだらうと思えます。

人は悪いことをすればするほど『善』に目覚め、良い人間であ  
らうとします。

善きこと即ち悪、悪しきこと即ち善。

このことは、“夜回り組長”と“アナキン・スカイウォーカー”か  
ら教わりました。

話がそれました。

いよいよ「関ヶ原」前夜となりましたが、しばらく一六〇〇年  
を離れて、

お話の核心に入ります。

時間軸がまためまぐるしく行き来しますが、ここまで読み進めていただけの方なら

必ずおもしろくお読みいただけると思います。

奇抜過ぎると感じるか、斬新と感じていただけるかは、

あなた様の頭の柔らかかさに負うところとなるでしょう。

どうぞ、もうしばらくお付き合いいただけるならば、恐悦至極でございます。

## その二十 太閤の遺言

慶長四年（1598年） 関ヶ原の二年前の伏見城、奥

「佐吉、もそつと、ちこつ」

三成は太閤の枕元すぐ近くまで膝で進んだ。

「前々より其の方に託しこと、しかと頼むぞ」

「委細承知つかまつつてございます」

「話をするのも難儀になってきよつた。其の方と話せるのも最後かも知れぬゆえ誰にも明かしたことの無い秘密を明かす。人払いいたせ」

三成は御殿医をはじめ御付の者たちを下がらせた。

「徳川殿は律儀なお方である。それ故、幾度も誓紙を書き記していただき、秀頼が元服するまでの後見をお願いしておる」

三成は最近の家康の不穏な所業について、弱つた太閤に直訴することができなかつた。

自分自身で蹴りをつける、という自負もあつた。

「おみゃーが言わなんでも、徳川殿の専横振りはわしの耳にも届いておる」

「申し訳ございませぬ」、三成は平伏した。

「武士とは、そのとき、そのとき勢いの在る者に皆、靡くものじゃ。わしもそれを用いて徳川殿と天下を取りおうた。

徳川殿もずいぶん長きこと我慢をなされたのよ。

佐吉。我が命が尽きれば、徳川殿の権勢ますます強まり、誰も物申せなくなるやもしれぬ」

三成も同じ見立てであった。

「治部少しうぶのしょうじ、其の方に我慢が出来るかな」

三成は平伏したまま答えた。

「分かりませぬ、すでに我慢の限界にございます」、声が震えた。

「ふふふふ、うっ、っ、つうー」と、秀吉は苦しそくに笑った。

「はあ、なぜ、我慢のしどころなのかを、これからそなたにとくと話して聞かせよう」

太閤から三成への長い、長い遺言が語られ始めた。

## その二十 太閤の遺言（後書き）

いよいよ物語の核心部分へ突入します。

次回より、秀吉から衝撃の真相が語られる。

## その二十一 血脈

「佐吉よ、我が右の手を何と心得る」

秀吉は上掛けの中から枯れ枝のように細った右腕を出して三成に見せた。

医者でなくとも、もうたいして先が長くないことが窺い知れるような痩せ衰え様だった。

太閤の右手には、菜ばし程度の太さの指が六本、見て取れた。

誰もが知っていたが秀吉が関白となってより、そのことを言うものはいなくなった。

「別段めずしいものではございませぬゆえ気にしたことなどございませぬ」

三成の取り繕った答えを聞いた秀吉は、

「確かにそれほど珍しきものはあるまい。二、三十万石の領内なら、年に一人や二人生まれてこよう。

しかし、この手のままで成人するものとなると、更に輪をかけて稀となるう」

三成は今度は有りていに答えた。

「太閤殿下は貧しいお生まれであったからだと存じ上げます」

「正直でよいぞ佐吉。だがな、いくら貧しかろうと小刀一本あれば切り取ることはできよう。

幼子のうちなら跡もほとんど残さず切り取れるはずじゃ。

現にたいがい親は、我が子不憫とみなそうしておる。

だからどんなに貧しい生まれであろうとも、大人で指が六本あるは不自然であろう」

三成は建前で受け答えするのをやめ、正直に思うところを述べた。

「それは、太閤殿下の御血筋に関わることにござりましょうか」

いつもの聡明な三成に戻ったのを見て、秀吉は満足そうに微笑み話を続けた。

## その二十二 忌み子

「いつ加減が悪うなつて御殿医が飛び込んでくるやも知れぬゆえ手短かに話すぞ。」

わしの父親は、先の天子様であらせられた正親町天皇おしぎままぢその人である。母はその妹皇女いもうめの永寿女王であつた。

正親町天皇が皇子おつじの頃に父は十八、母は十六でわしは生まれた。母はわしを産んですぐに身罷みまかわれたそうだ。

わしの本当の生年は天文四年と聞いておる。

禁裏の中の禁じられた子である。

この手はその因縁でもたらされた。

小さく、醜みにくく、手は異形の子である。

わしは忌み子として隠された。

母の女官であつた大政所が引き取つて、公家の伝手がある今川の領内でわしを育ててくれた。

一人でも戦国の世を生きていける様にと、読み書きに乗馬と公家と武家の両方の教養を授けられた。

幼き頃より何事もすらすらと覚えたそうじゃ。

大政所はわしを聖徳太子の生まれ変わりと固く信じておつた。成人すると正体を知るものの居ない尾張に流れることとした。

今川でその噂を聞いておつた織田信長なる人物にお仕えしたいと思つてな。

わしは年を偽り、何とか小物として織田家にもぐりこんだ。

見込んだとおり、御屋形様はわしの才にすぐ目をつけられた・・・

・  
後は佐吉、おみやーもだいたい知つておろつ」

途方も無き事実にも、さすがの三成もしばし言葉を失なつた。

しかし、さすがは三成である。

頭の中の太閤記を瞬時に書き換えてしまったようである。

「信長公に出生の秘密を打ち明けられたのですな」

秀吉は頷いた。

「如何にも。天子様なぞ”へ”とも思っておられぬはずの御屋形様が、『藤吉郎、お前は使える』、とたいそう喜ばれた」

## その二十三 尾張征伐

天文十一年（1560年） 五月十八日 尾張と三河国境の大高城

今川義元は信長の父、信秀の代より長年にわたって一進一退を繰り返してきた尾張と三河の国境の旧領を奪還すべく、大規模な織田討伐軍を仕立てて駿河を発った。

総勢二万五千の大軍勢で尾張国境に近い、沓掛城に入ったのは五月十七日であった。

その軍勢の中に、まだ十七歳の松平元康もあつた。

義元の命により元康が最前線に孤立する大高城に兵糧を届けるために入城したのは、翌十八日のことであつた。

その元康の元に信長からの密使として沓掛の土豪、梁田政綱ら二名が訪れた・・・

「元康様、織田様は幼き頃より馴染みの元康様とは刀を交えとうないと仰せであります」

それは元康とて同じであつた。

元康は幼少の頃を織田の人質として過ごし、八つ年長の信長とはよく遊んでいたのである。

「某にとりましても信長様は兄とも思つておるお方にございます。」

けっして戦いとうなどございませぬ。

しかし、我ら三河は、いまだ国の体すら成しておりませぬ。今川の属領に甘んじている限り義元様の命に従い、どなたとでも戦わなくてはなりません。」

元康は有り体に苦しい胸の内を打ち明けた。

それを聞いた政綱は、膝を打って元康に進言した。

「実は信長様からの御提案を持参いたしておりまする」

元康は困惑の表情を呈した。

まだ若い元康には敵方から調略を掛けられた経験などなかったのだ。

しかし、元康の脇に控える三河の家臣たちの中に、当惑する若き当主に助け舟を出す者は皆無であった。

皆、元康に場数を踏ませようとしているのだ。

話を持ってきた梁田が気心の知れた三河者である安心感もあった。

「元康様は沓掛城には戻らず、このまま大高城に留まり我方の丸根砦と鷲津砦を攻撃されてはいかがでしょうか。さすれば、『孤立した大高城の補給路を確保するため残って戦った』、という立派な口実となりましょう」

元康は驚いて梁田に問うた。

「良いのか、我らが責めればあのような小さな砦、三日と持たぬぞ」

それには、梁田の脇に控えていた蜂須賀小六が答えた。

「一日持てば充分にございます、それで元康様と信長様が、戦場で会いまみえることがなくなるのでしたらお安いものでございます」

三河者達の中に、「ここは一つ織田に賭けてみても良いぞ」、という雰囲気広がった。

「……我ら三河者が抜けた今川軍は、頭数ばかりで実戦経験の乏しい兵ばかりとなる……」

「……首尾よく織田が義元の首でも取るうものなら、労せずして三河一国が転がり込んでこよう……」

「……たとえば織田が滅んでも今川からは褒美が出る……」

「……どちらに転んでも三河に損は無い……」

この合意により、信長は今川方最強の三河軍を決戦場から排除することに成功した。

後に、家康との織田・徳川連合につながる、大きな、大きな調略となった。

## その二十四 朱塗りの輿

「それはまことのことか」

義元は織田との連絡役を任せていた尾張国内の家臣、岡部元信の言葉に耳を疑った。

「信長が天子様の御落胤を庇護しておったとな」

聞けば御落胤は、訳有りの御出生ゆえ、我が今川の領内で御幼少をお過ごしになったという。

いったい何のために今まで落ちぶれ公家どもを庇護してきたというのだ。

信長如きに横取りされるまで気がつかなかたとは。

義元は何としても、その天子様の御落胤が欲しかった。

「織田の要求は何か！」

あのうつつけのことである、休戦どころか三河一國ぐらいよこせと平気で言ってくるやも知れぬ。

元信は平伏したまま義元に言った。

「上様に申し上げます。織田上総介様の御要求は、尾張国境の安堵

と此度の今川義元様御上洛への従軍にございますと。  
御落胤は御上洛の手土産に、輿を仕立てて明日にもこの沓掛城にお  
連れすることにございます」

「何？、上洛だと・・・」

義元は啞然とした。

「あのうつけは、わしが上洛のためにわざわざ大軍を仕立てて、こ  
こまでやって来たと思うておるといのか・・・」

だがしかし、義元は行軍の目的を上洛に切り変えることに吝かでは  
なかった。

天子様への大きな土産が手に入ったからである。

在位三年目の正親町天皇はすでに齡四十三で在るにもかかわらず、  
お子の誠仁皇子はまだ親王にすらなっていない八歳である。

ここで成人した御落胤をお連れすれば、親王、そして次の天子様と  
いう目も充分に在りうる。

後見人として上洛すれば、天下の征夷大將軍にも任せられよう。

義元は己が鎌倉、室町に続く新たな武家の頭領となりうる、千載一  
遇の機会を手にしたと思った。

ここは急がなければならぬ。

ここまで出張つて来ておいて、また駿河から出直すのは、あまりに

面倒である。

これで尾張を安心して抜けることができるということは、このまま大軍を恃たのんで上洛してしまうのが得策である。

織田のせがれめ、今川の上洛軍に領内を蹂躪されると思い、恭順の意を示したほうが得策と考えたのか。

あのうつけも少しは物の道理をわきまえる様になったようだ。

尾張の北の美濃は、うつけの嫁の実家ゆえ信長を先陣に立てれば勞せず抜けることも出来よう。

その先の近江浅井は足利將軍の頃からの馴染みである。

如何様にも丸め込めよう。

何しろこちらは” 親王 ” 様を御輿に担ぐのだからな。

由緒正しい守護大名ならば誰も手出しできまい。

近江まで進めば都はもう目と鼻の先である。

義元はうって変って穏やかな口調で元信に言った。

「織田殿に申し伝えよ。

御落胤を沓掛城でお待ちいたすとな。

さすれば上洛への従軍を許し、尾張も安堵いたそう。

我軍が到着するまで清洲から一步も出ずおとなしく待っておられよとな。

元信、清洲は其の方がよく見張っておれ」

御落胤が義元の野心に火をつけた。

## その二十五 人たらし

「そなたが今川義元であるか。思っていた通りの武者振りでおられる」

着慣れぬ公家装束に身を包んだ藤吉郎は、全く公家らしからぬ飄々とした立ち居振る舞いで義元と対面した。

藤吉郎は自分の素性を嘘偽り無く淡々と語った。

真実だけが持つ迫真の現実感に義元は微塵も疑うことなく、藤吉郎のこれまでの経緯いきさつを信じ、涙した。

藤吉郎の飾らぬ人柄に、義元はすっかり心酔してしまった。

藤吉郎は筆を所望すると、義元の面前ですらすらと書状をしたためた。

その書き連ねた文字は、芸事に秀でた義元も目にしたことが無いような達筆で書き連ねられていた。

書状にはこう書かれていた。

〔 我は正親町おしきまぢ天皇の御落胤しうたゆうにて藤吉郎皇子である。〕

この書状を携えし今川治部大輔しうたゆう義元は我を奉じて上洛し、天子様に我を引き合わせんとする者なり。

何人たりともそれを妨ぐるものは御所に弓引く逆賊として討伐されるものなり 〔

ここにいたり、義元は感極まって平伏し書状を承った。

義元は固く誓った。

このお方を御所へと誘い、必ずや親王に、いや天子様と奉じることこそ武人たる己に課せられし天命であると・・・

藤吉郎も信長の命を忘れ、このまま義元と共に京へのぼっても良いのではとさえ思った。

この小柄な猿顔の小男には、出会う人物を皆、自分のことを好きにならずにはいられなくする人たらしの力が備わっていたのだった。

相手が律儀で筋目正しい人間であればあるほどより強く虜にした。

義元は良い武将であり良い人間であった。

信長はそれを利用した・・・

## その二十六 桶狭間（前書き）

朱色の塗輿ぬりこしそれ一点を目指して、楔くさびの如く織田二五〇〇の全軍が突き刺さった。

分断された大軍勢は、先ず己の恐怖と戦わねばならなかった。

歴戦の三河軍は、いまだ三里先の大高城にあった。

## その二十六 桶狭間

藤吉郎が籠る輿こもの回りでは阿鼻叫喚の殺戮が繰り広げられていた。

真新しい朱塗の輿は、どんな大軍勢にも埋もれず、そこに必ず義元も居ることを指し示していた。

藤吉郎を守るべく輿の回りで織田方と戦っているのは、敵の今川軍であった。

次々に討ち倒されていく武者達の崩れる音が、どさつ、がしゃつと、だんだん輿に近づいて来るように聞こえた。

程なく輿のすぐ傍で、義元らしき唸り声が聞こえた。

すでに何者かに押さえ込まれているようであった。

「む、無念で御座……………」

義元の断末魔は、藤吉郎を御所に誘いざなえなかったことへの謝罪であった。

閉め切られた輿の中で……………藤吉郎は泣いた。

自分もこの混乱の中で死んでしまいたいと思った。

そのとき、「義元が首、討ち取ったり……………」

織田の手の者の勝利の雄叫びが戦場を貫いた。

同時に歓声と失意のどよめきが混ざり合いながら桶狭間山を駆け下りた。

全てが決した。

そのとき輿の戸が乱暴に引き開けられた。

藤吉郎は義元とともに、ここで死ぬことを覚悟した　．．．

「猿、さる　来い！」

懐かしい信長の声であった。

信長は手を伸ばして輿から藤吉郎を引き上げると、自分の馬の後ろに乗せ、その場を駆け出した。

まさに鬼神の速さで混乱する今川軍のさ中を駆け抜けた。

だれもそれが敵の大將だと思っ間も無かった。

信長の逃げ足の速さは、いつも戦国一であった。

止まらぬ涙と、その速さのせいで、周囲の情景すら目に入らぬ藤吉郎であった。

信長の背中の中を温かさを感じながら藤吉郎は思った。

自分はこの魔王の如き男とともに必ず地獄に落ちるであろうと。

それでも良いと思った・・・

## その二十七 正親町天皇

「桶狭間で今川軍の塗輿に乗っていたのは義元殿ではない。

海道一の弓取りと云われた義元殿が輿なんぞ使うわけが無かるう。

輿とは貴人の乗り物である。

公家装束を着せられた、わしが乗っておったのよ」

手柄話のはずなのに秀吉の表情は冴えなかった。

「出世が褒美で御座いましたか」、と三成は問うた。

「いやいや、陰謀の手柄に大っぴらに褒美など出せぬものよ。

……しかしな、御屋形様はすぐに嫁を世話して下さった。

城下でも気立てが良くて器量良しと評判のおねをな。

わしの岡惚れであったのが、御屋形様のお力添えで夫婦となることが叶った」

北政所おねは三成にとっては母も同然であった。

「それでは殿下が初めて正親町天皇おおきまちにお目通りが叶ったのは、いつのことでありましょうか」

「御屋形様が足利義昭將軍を奉じて御上洛なされたおりのもう一つの土産がわした。

特別の許しを得てわしも御所に参内仕った。

簾すだれの向こうの天子様はお泣きあそばしていらっしやった。

わしも泣いた。

お取次ぎの宮廷吏も介さずこうおっしやった。

『事情が許さば高齢の朕に代わり、ここに座していたは其の方であ

つたであるう。許せ』、と。

わしは天皇になぞなりとうもなかったし、ならんで良かった。  
御所あそこは戦国の世の様な、血沸き肉踊るようなおもしろきこと無縁の  
世界である」

「殿下の関白職御就任は正親町天皇のせめてもの心尽くしだったの  
でありましょうか」

三成の問いは徐々に次の核心に迫っていった。

秀吉は答えを少し先に延ばす事とした。

「天子様の御推挙と御聖断がなくば、五摂家専任が慣例の関白職に、  
武家が就くなどと朝議にさえ上らぬであろう。

後陽成天皇こうようせいの聚楽第行幸とて、先の正親町天皇の強い後押しいの賜物  
であつた。

聚楽第はそのためにこしらえたようなものよ。  
行幸のおり後陽成天皇の御前で又左と家康殿に、豊臣に対して永遠  
の忠誠を誓わせたは我人生一番の痛快事であつた。

徳川殿とて所詮は三河の田舎大名。

聚楽第の煌びやかな絢爛豪華さと天子様の御威光に、腹の底まで圧  
倒されたはずだ。

・・・もう豊臣には到底太刀打ち出来ぬ・・・、と。  
それが目的じゃ」

「それ故、用済みとなれば、早々にお取り壊しになられたのですな」

「左様、そのほうが豊臣の力すでに天下無敵と世に示せるではない  
か・・・」

## その二十八 家康暗殺

運命の天正十年（1582年） 安土城下の明智邸

「はてさて、昨今の信長公には困ったものよ……」  
家康は調理場での騒動を聞くに及び、自分が危ういところで命拾いしたことを悟った。

信長公は用意した川魚が腐っていたせいにしていたが、接待役のこの家の主に毒でも盛らせようとしたのであろう。

家康は甲斐の武田を滅ぼした労いと称して、ここ安土で信長から饗応を受けていた。

饗応役は今や織田家の筆頭、これとうひゅうがのみ惟任日向守光秀がその任にあたっていた。

家康は山頂の安土城に至る緩やかな勾配の大手道沿いであって、最も城郭に近い明智屋敷の客として滞在していた。

日向守が諫めていなければ、己はこの安土を生きて出られなかったかもしれない。

この先訪れる堺でも何が待ちうけておるか判ったものではない。

その後家康は信長から堺見物を執拗に勧められた。

信長の支配下である堺で再度暗殺の計画を実行しようというのである。

ろう。

此度は命を救っていただいた日向守殿は備中高松城へ筑前殿の応援と称して厄介払いされる御様子。

家康は長年同盟関係を続けてきた信長が、同盟の解消を意図しているのではないかと疑った。

同盟の解消は即、徳川の滅亡を意味する。

信長公は徳川の権益を甲斐の穴山梅雪殿ばいせつに引き継がせようとしておるのではあるまいか。

此度の饗応の主賓は、実は梅雪殿の方であつて、徳川は口実のための添え物に過ぎなかつたのではなからうか。

家康の疑念は思い過ごしと黙殺してしまうには余りに思い当たる節が多かつた。

梅雪殿は滅んだとはいえ、武田の金鉾はしという財力を引き継いでいる。

徳川にあるのは、今だ武辺一辺倒の三河武士軍団だけである。

天下の平定も目前となつた信長公にとつては、無用の長物の同盟軍より、幕府の運営にいくらあつても足りぬ金銀が大事であるは明々白々。

信長公の”天下布武”がこの安土城に体现されていることは、いざれ諸国、そして朝廷も察知する所となるであろう、  
いやすでに朝廷は信長公排除の尖兵を送りこんで、機会を虎視眈々

と窺っておるやも知れん。

信長公が明智殿ほどの高潔の武將を、我が暗殺に巻き込もうとしたのは、おそらく踏み絵を踏ませたのであろう。

これから始まるであろう、一大名ごときの暗殺などより遙かに凄まじい、朝廷殲滅作戦への覚悟や如何にと。

……それはあの光秀殿には到底受け入れ難きことで御座ろう  
……

信長公は朝廷を利用するだけ利用しておいて、邪魔となれば潰しておしまいになるおつもりなのだろう。

しかし、いざ皇統を守られようとするときの天子様のお力を見くびっておられる。

それは武家にとって、命取りになることであるのに。

「ここは再び、近衛殿このえを通じて、徳川の立ち位置を朝廷にはつきりお伝えしておかねばなるまい。

かつて”徳川”を頂戴いたしたときのように……。

家康は自分の方から織田にみくだりはん三行半を突きつける覚悟を始めていた。

自ら手を触れることは叶わねども、誰かが排除に動くのなら、徳川は沈黙こそすれ邪魔立ては致さぬということよ。

先ずは何も気づかぬ素振りです、堺まで出かけなければなるまい。梅  
雪殿を引き連れて。

## その二十九 天下布武

天正十年（1682年）四月 安土城

毛利征伐の支度で慌しい秀吉の屋敷に安土城の信長からすぐ参れとの使者が遣わされた。

「こつこつときは一刻を争う・・・」

秀吉は取る物も取り合えず薄汚れた格好のままあたふたと参上した。

信長は天主の最上階で待っていた。

密談の間である。

いつにも増して恐ろしい顔をした信長は、格子窓から真っ黒にしか見えない琵琶湖を見下ろして待っていた。

「はあ、はあ、秀吉、はあ、只今、はあ、参上いたし、はあ、はあ・・・」

安土山の中腹にある羽柴屋敷から山頂の天主閣最上階まで駆け上がった秀吉は息も切れ切れに這いつくばった。

秀吉のこつこつかわいらしさを信長は好んだ。

・・・上様が見ておられたのは琵琶湖ではなくその向こう・・・

信長は秀吉の方に向き直るやおもむるに言い放った。

「筑前、毛利と四国を平定したところで、天下布武の仕上げを致す」

信長は近江攻略の頃より事あるごとに口にしてきた”天下布武”の具体的な内容を、織田家二番手の秀吉にだけ明かした。

「よく聞け筑前、手筈はこうだ」

信長は辺りに誰もいないにもかかわらず声を潜めた。

「其の方は得意の城攻めで備中高松城を攻めろ。」

そして堪えきれず落城が間近となるを見極め、予を援軍として呼べ。それを受けて先ず光秀を援軍に遣わす。

予も乗り込むと見せて堺まで出張る。

高松城が落ちれば、毛利は和議に応じざるを得まい。

無傷で落とした高松城は宿無しとなる光秀にくれてやる。

天下布武の足手纏いにしかならぬ光秀は、毛利の押さえとして残す。大好きな義昭と夢でも見ておればよい」

ここまで聞いて秀吉は、信長の企てに不吉なものを感じた。

「其の方は、摂津まで戻り、四国から戻る信孝と長秀の軍と合流せよ。」

そして予と共に堺で待つ信忠を総大将に担ぐ四万の全軍を其の方に預ける。

その四万を以つて電光石火で京を封鎖、戒厳令を敷くのだ」

秀吉は信長の企ての全貌を察して、体ががたがたと震えだした。

「御屋形様は、ま、まさか御所を叡山えいざんの如くに . . . .  
」

信長は無言で頷いた。

御所に暮らす天子様は秀吉の実の父親である。

御屋形様もずっと以前よりご承知のはず . . . .

しかし信長は、秀吉が己に異を唱えるなど端から考えてもいない様子だった。

「筑前。其の方の親は誰か」

秀吉は涙でくしゃくしゃになった顔で答えた。

「我が親は、この世に、御屋形様ただお一人にございます」

秀吉の脳裏に、やはり涙で何も見えなかったはずの桶狭間山の情景が甦った。

今川義元を騙まし討ちにしたとき、命がけで藤吉郎を助けに来た信長の、その背中にしがみついて敵陣を疾駆遁走したあのとき。

嗚呼、あの時、覚悟を決めていたのであった。

この魔王のような男と共に地獄に落ちようよと . . .

## その三十 黒田官兵衛

「官びようよ、これでよいのか・・・」

秀吉は近衛このえまへひさ前久を見送った後、腹心の黒田官兵衛に己の逡巡を隠すこともなく問うた。

前久は五摂家筆頭の近衛家に生まれ、年若くして閑白職に就任したこともある。

その後は戦国公卿として、常に時の有力武家の傍に身を置き、朝廷との橋渡し役を専ら任されてきた。

信長が台頭する以前は、越後の上杉謙信との連絡役であった。

所謂、朝廷の諜報要員である。

極秘諜報などという近代以降の派手な立ち回りのスパイや盗聴、衛星写真などを思い浮かべてしまうが、  
今も昔も重要な極秘情報は相互の信頼に基づく人間関係からのみ得られるものである。

戦国時代には盗聴器も衛星写真も無かったわけであるから、より相互の良好な関係から得る良質な情報が生死を分けることとなる。

現代の機械頼みの諜報組織より当時の人々の諜報能力の方が遙かに優れていたとも云えよう。

前久は、信長の企てを嗅ぎ付け秀吉に翻意を促しに来たのであった。

既に天下布武は朝廷の知るところとなっていた。

「殿、これは天から降ってきた願ってもない好機にござりましょう」  
官兵衛は至つて冷静に状況を分析した。

「信長公が朝廷もろとも天子様までも亡き者としようとしていることがはつきりした今、進む道は一つにございます。

我ら武家は好むと好まざるとに関わらず、天子様を頂いて初めて存在がゆるされるのでございます。

過去に天下を牛耳ってきた武家、豪族の数々を御覧下さい。

蘇我入鹿、平清盛、源頼朝、足利尊氏、皆一代限りのようなものにございます。

如何に天才的な権謀家でもその才は三代と続きませぬ。

天子様を蔑ろにした武家は皆滅ぶ定めなのです。

まして己が天子様に取って代わろうなどは言語道断！」

この官兵衛ほどの筋金入りの悪党にして朝廷は神聖且つ不可侵なものであった。

それをあろうことか、共に地獄まで同道すると覚悟を決めていた御屋形様が、叡山の如く天子様を煩殺やまころそうとするとは・・・

秀吉は親とも慕う信長と、親子を語れぬ正親町天皇との狭間で悩みに悩んだ。

信長はどんな難題を振り向けようと、秀吉が自分を見限るなどはまったく思っていない様子だった。

…… 毛利と四国を平定したところで、天下布武の総仕上げと称して、双方からの凱旋の大軍を以って京を封鎖して戒嚴令を敷く  
……

…… そののち、御所諸共、天子様はじめ全ての公卿や朝廷の息のかかった僧侶どもを、叡山の再現の如く殲滅する ……

” 神をも恐れぬ凶行 ” ぐらいの言葉ではとても足りぬ。

この凶行に関わった者は死した後も何千年と汚名に塗れる事となる  
う。

「天子様はこの機に乗じて、わしに天下を治めよと言って下さった  
ようだが、そのまま信じてよいのか。」

それともわしとて朝廷にとっては捨て駒の一つに過ぎぬのか？」

「けっしてそのようなことはございませぬ。 朝廷は捨て駒を別に用意しております。」

ここは信長様の企てに乗ったと見せ、京をできるだけ長く留守にして、この謀への関与を一切疑われぬことが後々肝要でございませぬ。

此度の備中高松城攻めは信長様の御指示通り、我らが得意の兵糧攻め  
めで時を稼ぎ、その時を待ちましようぞ」

官兵衛の頭の中にはすでに、秀吉の天下取りへの道筋が思い描かれている  
ようであった。

## その三十一 最後通牒

天正十年（1582年） 五月四日 御所謁見の間

「すると」のぶなが” は、たかが小姓如きに返答を持たせて遣したのだな」

おおぎまち  
正親町天皇の怒りは簾越しすだれにも、武家伝奏役でんそうやく、勸修寺晴豊に伝わってきた。

晴豊はただただ平伏するのみであった。

天皇があからさまに感情を表すなど滅多に無いことであった。

十日前に信長に遣わされた朝廷からの問い掛けは以下のようなものであった。

く 甲斐も平定して天下泰平もいよいよ目前にせまりつつある。この辺りで、無役から脱して官職に就かれてはいかがなものであろうか。

さしあたり、太政大臣か関白か征夷大將軍の何れかに就かれたらいかであろうか

物言いこそ柔らかいが、これは朝廷から信長への最後通牒であった。

これ以上官職を拒むは朝廷にたいして謀反の意ありとみなす・・・

・ 朝敵と見做して成敗いたすぞ . . . . . という意味が隠されていたのだ。

これに対する信長の答えは、『跡目の信忠を將軍にでもしておけ』  
. . . . . という気の無いものであった。

返答より何より、使者として遣したのが、信長の慰み物の森乱丸ごときであったことが天皇を怒りに駆り立てた。

「 のぶなが ” の行状については、もはや是非に及ばず、御敵討伐の密命を近衛に即時伝え排除せよ」

かつて一〇〇〇年の昔、朝廷を欲しいままに牛耳り、天皇の眼前で討たれた”蘇我入鹿”以来の朝敵として、信長に対する包囲網が敷かれようとしていた。

一月を待たず信長は、いざ皇統を守らんとするときの天皇の底知れぬ力をその身で味わうこととなるのであった。

## その三十二 御敵征伐

「この様な辛い役回りをしなければならぬのであったなら、最初から武家の真似事などせず、公家らしく歌や書でも嗜んでいれば良かったものを・・・」

近衛前久は、この世で最も厚い友情を結んできた”のぶなが”を朝敵として排除する任を与えられた己の生き方を呪った。

信長討伐を加速させたのは、その後安土からもたらされた家康の密告であった。

『安土に朝廷に対する不穏な動き此れ有り』

『企ての中心は安土殿と羽柴筑前。家中で対抗勢力と目ぼしきは惟任日向守殿、只御一人』

『我が身も既に策中に在り、監視に晒され、堺に向かわねばならぬ身なれば御一報差し上げるのが精々』

ここにもう一人この期に乗じて己を有利に導こうとする人物があった。

徳川家康の工作である。

十七の頃、今川方として大高城にあったとき、信長から調略を掛けられて困惑していたのが嘘のような強かさである。

信長と同じく、生まれながらの殿様であったが、家康の場合は幼年期に人質として過ごした経験が、その後の人生で信長とは、生と死を分けることになる。

前久は鷹狩りという共通の趣味を通じて、信長と厚い友情で結びついていた稀有な人物であった。

朝廷と武家との橋渡し役を任されるために、年若くして最高の官位である関白も経験していた。

所謂、箔付けであった。

調略に長けた前久にとっても今度の任は辛いものであった。

「たとえこの御敵征伐が成就したとしても、我が身は”のぶなが”に殉じて出家いたそう」

前久はそう心に固く決めた。

そう決心でもしなければ、これからもう一人の知己である日向守の調略に向かうのに心が折れそうであった。

このときまだ家康は、秀吉の素性までは知り得ていなかった。

そのことは家康に天下が回る順番を大きく遅らせることとなる。

家康が晩年の前久の口から秀吉の素性を知らされるのは関ヶ原の後、家康が征夷大將軍を秀忠に譲ってからのこととなる。

## その三十二 御敵征伐（後書き）

古来、討伐、追討、暗殺の類は、殺害対象となる人物と最も親しい者を刺客に差し向けるのがセオリーである。

カエサルに対してはブルータスが。（実子であった可能性が高い）

そがのいるか蘇我入鹿に対しては、従兄妹の蘇我倉山田石川麻呂がなかのおおえのおつじ中大兄皇子とふじわらのかまたり藤原鎌足に協力した。

関ヶ原後の石田三成に対しては、親交の厚かった田中吉政が家康に追討を任せられている。

ついでに、ほしひめつつま星飛馬の大リーグボール3号を打ったのは、親友の判忠はんちゆう太だうたった。

親しい者しか知りえぬ立ち回り先や行動パターン、隙や油断など、追跡者、刺客としての適性には合理性を感じる。

## その三十三 踏み絵

天正十年（1582年） 五月十六日 安土城下明智邸

「この腰抜けの役立たずめが・・・」

光秀は信長に足蹴にされ額を土間にごりごりと押し付けられた。

調理場の土間には用意された川魚や山の菜が散らばっていた。

信長は罵声を浴びせながら、散々光秀を小突き回した拳句の暴虐であった。

光秀が家康の暗殺を信長に思い留まるよう諫めたのが、信長の癪気に触れた。

如何に主君の命とはいえ、光秀ほどの高潔の武将が敵方ならいざしらず同盟者である家康を自邸の饗応で毒殺するなど到底受け入れられぬことであった。

命じた信長本人も光秀が素直に従うとは考えていなかった・・・  
最初から自分は怒り狂う予定だったのだ。

光秀は信長の示した”踏み絵”を踏めなかった。

如何に無辜とはいえ、たかが一大名暗殺できぬ者に、これから行お

うとしてゐる”天下布武”に従事することなど不可能。

「光秀、今を以つて此度の饗応役の任を解く」

信長は秀吉と予ねて打ち合わせの通り、光秀の丹波の領国を取り上げ宿無しとして、備中高松城攻めの援軍として向かうよう命じた。

この明智邸の調理場での出来事は、家康が安土城に潜ませた者を通じて、その一部始終が家康の知るところとなる。

饗応役を解かれ、手勢を率いて居城の近江坂本城に向かう光秀の心中は、ざわめき始めていた。

「何故御屋形様は某が到底受け入れられるはずの無い徳川殿の毒殺など命じたのであろう。

徳川殿を亡き者としたのであれば、正々堂々難癖をつけて討ち滅ぼせばよいであらう。

今の織田家にとっては容易なことである筈。

お役御免も領国没収も備中高松城へ無用の応援に向かわせ、当面戻らせない為の方便であらう・・・」

御屋形様は自分に”踏み絵”を踏まされたのではないのだろうか。

自分がいては都合が悪いことを何か企てているのではないのか。

光秀は主君の信長に疑いを持ち始めた。

しかし、これから己に押し寄せる苦難の道を、さすがの光秀にもこの時点で予期することは不可能であった。

## その三十四 愛宕百韻

天正十年（1582年）五月二十四日 愛宕神社

「我が身が如何様な汚名の謗りを受けようとも構わぬが、後の世に止むに止まれぬ事情があったことだけは記しておかねば . . . .

」

近衛前久から信長の企てる”天下布武”の全貌を明かされ、それを阻止できる勢力は京摂津界限で明智軍のみである事。

さらに今回の信長の在京中を逃せば、信長を討つ機会はもう無いことを説明され、光秀は天皇の意思に従うことを決意していた。

. . . . . ここ宍権現は戦勝祈願の神社ゆえ、後世にどのような戦乱が起ころうとも巻き込まれずに記録を残せるはずだ . . . .

光秀は己の悲痛な覚悟を後世に託すため、ここ愛宕神社で親しい者たちを集めて一首連歌の歌会を開くこととした。

経緯を知るものは当代一の連歌師で光秀の盟友、里村紹把（しゅうへ）のみ。

その他は、ただ単に文武に秀でた当代一の武将、惟任日向守光秀との連歌を楽しむにやって来る客であった。

光秀と紹把は、他の一般参加者のつなぎの句に紛れて、彼らの本心を百韻に潜ませるのが目的であった。

百首連歌は詠む歌の多さから、丸一日掛りの大仕掛けとなる。

京を取り巻く山々の最高峰、愛宕山のまだひんやりとした初夏の朝、  
光秀の万感の思いを込めた歌会が始まるうとしていた。

首句は此度の歌会の亭主を務める光秀からである。

光秀の渾身の首句が披露された . . . .

「ときは今、天あめが下くだしる五月むつき哉」 . . . . 雨あめがしとすと降り  
続く五月の頃ですな

掛詞を読み解き、深読みすれば、

もうすぐ天皇すめみまが下死くだなれるる殺気ころしきがみちている、という解釈ができる。

光秀が本能寺で主君信長を討つのは、これより八日の後のこととなる。

## その三十五 雷鳴

天正十年（1582年）六月二日未明 本能寺

信長は桶狭間の日の夢を見ていた。

未明の南の空に、赤々と燃え上がる炎が一つ清洲城の天守から見て取れた。

今川方の大高城を囲む織田方の砦の一つが炎上している炎であった。

それは松平元康が信長との約束を守り、今だ大高城に留まっている証でもあった。

砦はもう一つある。

これで今日一日、最強の三河軍を義元から引き離すことができる。

今日一日が勝負だ。

しかし、信長は事を急ぐことはしなかった。

今川の草の者に義元の言い付け通り清洲城に留まっているか監視されている恐れがあったからだ。

あの炎は義元の沓掛城からも窺えるはずである。

織田が自軍の砦を落とされても動かぬことを見届ければ、義元は慢心して沓掛城を出立するであろう。

いよいよ上洛気分で . . . .

そこを狙いだった。

夜が明けてしばらくすると、もう一つの砦からも煙が立ち昇り始めた。

信長は守備隊に砦が陥落するときには必ず火を放つよう命じておいた。

信長はそれを見極めると、昂ぶる気持ちを押さえるため敦盛をあつもり一差し舞い、具足を付けるのももどかしく清洲城を単騎駆け出した。

あとに続く供回りは、僅か数騎の小姓のみ。

その他の軍勢には、今川方に出撃の報が漏れるのを恐れて待機命令すら出していなかった。

しかし家中の誰しもが信長のそんな出撃方法には慣らされていた。

このような時に備え、信長はいつも単騎駆け出し、最短時間で全軍が臨戦態勢を整える訓練を日頃から課していた。

信長は、集合地点の鳴海砦に向かう途中、熱田神社で神職に戦勝を祈願させた。

このときの信長は、まだ神にすぎる謙虚さを持ち合わせていた。

決死の織田軍と大名行列の今川軍が出会うのは桶狭間の丘陵地帯と

なった。

今川軍は見晴らしの良い桶狭間山の丘の上で、遅い昼飯の弁当を広げるところであった。

双方丸見え同志であった。

ただし、織田軍にとって、今川軍がどんな大軍勢であっても義元の居所を見逃す道理は無かった。

狙いは前日に沓掛城に送り込んだ、真新しき朱色の塗り輿ただ一点。

そこに必ず義元の首もある。

楔くさびの如く織田二千五百の全軍が朱色の塗り輿目指して突き刺さった。

分断された今川の大军は、先ず己の恐怖と戦わねばならなかった。

歴戦の三河軍は今だ三里先の大高城にある。

遠く西の空には、雷鳴がごろごろと地響きの如く轟とどろき始めていた  
・  
・  
・

「何事か！」

信長は何千という軍勢が踏み鳴らす地響きに飛び起きた。

すぐに顔面蒼白となった乱丸が転がりこんできた。

「て、敵襲にございます・・・」

信長にも滅びの雷鳴が近づいていた・・・

## その三十六 謀反

天正十年（1582年）六月二日未明 本能寺

「何事か！」

雷鳴のような地響きに信長は飛び起きた。

乱丸が転がるように飛びこんできた。その顔にすでに血の気は無く蒼白であった。

「て、敵襲にございます」

普段は信長の寵愛を膏かまに家中の武将達にも何等臆なんらおくすることの無い乱丸も、こうなってはまだ十八才の小童こわっぼである。

「何者の仕業か、」と、信長は問い質した。

「す、すぐに見て参ります」すっかり動転して取り乱した乱丸は、  
またも転げるように部屋を出て行った。

正直なところ信長自身、この襲撃者に心当たりが見つからなかった。

京、摂津界限は織田家筆頭の惟任これとらひじょうのかみ日向守の管轄地で、織田の直轄領である。

互いに腹の探りあいを演じている家康は今、手勢と共に堺にあるが

物の数ではない。

洛中には各地の大名の武家屋敷もちらほら出来つつあったが、軍勢と呼べるのを擁するのは別行動中の長男、信忠の軍千五百だけである。

信長の頭にちらと我が子、信忠の謀反がよぎった。

そのとき、少し冷静さを取り戻した乱丸が戻ってきた。

「上様、寺を取り囲んでいるのは織田の軍勢にございます」

信長はやはりと思った。

「信忠であつたか」

乱丸の返答は全く意外なものであった。

「いいえ、惟任日向守様の軍勢にございます」

「……」

信長は愕然とした。

真っ白になりかけた頭で必至に思いをめぐらした。

光秀があれしきの折檻せつかんを逆恨みして謀反にまで及ぶ訳が無い。

家康に毒を盛ることさえ固辞するあ奴に、謀反人の汚名まみに塗まれてまで天下を狙う野心などある訳もない。

”天下布武”は自分と秀吉の胸の内にしかない。

そのとき信長の目に、今だ蒼白の面持ちで打ち震える乱丸の姿が目に入った。

「これが迂闊であつたか」

信長は、朝廷より三職推任を受けた際の返答を、煩わしさの余りその対処に小姓の森乱丸を赴かせたことを思い出した。

「ぬかつたは、簾に腹を読まれたか」

信長は、いざ皇統を守らんとするときの天皇の底力を見縊ったことを悔いた。

堂内には、すでに刺客が入り込んでいるらしく、あちらこちらから争う物音が聞こえ始めていた……

## その三十七 潜入

天正十年（1582年）六月二日未明 本能寺

本能寺の襲撃は最初静かに始まった。

この襲撃を任されたのは明智家筆頭家老、齊藤利三としみつであった。

利三はいきなり騒動になって、信長に秘密の隠れ場所にも入られてしまうと厄介だと考えた。

先ず刺客として潜入したのは、手練てだれの数十人である。

その中に、後年この惨劇を書き記す本城惣右衛門ほんじょうそうえもんも手練の傭兵としてあった。

惣右衛門達は先ず南の門番の一人を労せず倒して首を取った。

門は簡単に開き広い境内に入ると、まるで無人のように静まり返っていた。

惣右衛門が門番の首を手にはぐら下げたまま、様子を探っていると、北から別の隊がやってきて首など捨ててしまえと諫められたいさめ。

惣右衛門は本堂の軒下に首を投げ込むと、首はごろごろと奥に転がって見えなくなった。

次に正面から本堂に忍び込むとがらんとして無人であった。

誰かが寝ていた形跡を見つける。

台所に隠れていた女中を見つけると、女は「上様は白い寝衣ねいせをまとっている」と白状した。

惣右衛門はこのとき女が言った 上様が、誰のことなのか判らなかつた。

惣右衛門は誰を殺せばいいのか教えられずに刺客をさせられていたのである。

「たぶん三河の徳川様だろう・・・」そう思っていた。

それほど隊内にも極秘で信長襲撃は実行されていたのである。

惣右衛門は異変に気づいて、寝衣のまま抜き身を持ってやってくる侍を物陰に隠れてやり過ぎ、背後から切りつけて殺した。

ふたつ目の首である。

やがて境内や堂内のあちらこちらで小競り合いが始まり、だんだん騒然としてきた。

利三は頃合と見て取ると、今度は大規模な兵員を敷地内になだれ込ませた。

「狙うは、御敵、織田信長也、かかれーっ」

ここに至り、信長の警護方も皆出揃って境内は大混乱となった。

しかし、明智軍の囲いは幾重にも固く何人たりとも出入りは不可能であった。

女は殺してはならぬという光秀の厳命に従い、次々と逃げ出す女どもは一箇所に集められた。

ただし男が女に化けて逃げ出すことがあるので、確認のためまったく股座またぐらを握られた女どもが次々と悲鳴を上げた。

寺の内外はいよいよ混乱を極めた。

襲撃に当たって光秀は、敵に火を出さぬよう戒めていた。

出火の混乱に紛れて信長を取り逃がすことを恐れたからである。

信長の逃げ足の速さはいつも戦国一であった。

光秀はそれをよく知っていた。

「生死は問わぬ、必ず御屋形様を見つけ出すのだ」

光秀の長い、長い一日が始まった・・・

## その三十八 乱丸最後

天正十年（1582年）六月二日未明 本能寺

「もうよい、お乱、火を放て」

これが信長の最後の言葉であった。

傷を負った信長は、足を引きずりながら奥の納戸なんどに入り戸を閉めた。

乱丸は言いつけどおり、あるだけの油を板戸や襖ふすまや障子にかけて火をつけた。

すぐに菜種油の燃える黒い煙がもうもくと立ち込めた。

敵方はもうすぐそこまで迫っている気配である。

他の小姓達は、よく持ちこたえてくれていると思った。

乱丸の心は不思議と平静そのものであった。

さつきまでの動転していた自分が嘘のようであった。

初陣である。

初陣で討ち死にである。

別に珍しきことではない。

自分は太く濃く生きた方だ。

ただ、

ただ、もう少し先の世を見てみたかった。

御屋形様が作り直した世を。

まやかしの神仏や呪まじない師など葬り去った理の通る世界。

筑前殿のように才覚一つで出世が叶う世界。

嗚呼、自分も筑前殿のように御屋形様と一蓮いちれんたくしゅう托生の道を駆け抜けたかった。

いつしか乱丸は笑っていた。

自分は筑前殿に追いついた。

あと僅かで滅ぶ身とはいえ、己は今、誰よりも御屋形様に近い。

小姓たちの防御線をかいくぐった三人が乱丸の守る納戸の前に現れた。

面識こそ無いが皆、歴戦の明智軍の手練てだれであった。

もう少し、あともう少し時をかせがねばならぬ。

あたりは息を吸い込むことも出来ない煙と熱気に包まれていた。

三人がほぼ同時に切り込んできた。

乱丸には三人の動きが随分ゆっくりに見えた。

乱丸は腰を落として低く身構えた。

腰から下は煙が薄かった。

一呼吸して真ん中の一人の前足を一文字に切りつけると手応えも無く簡単に片足が吹っ飛んだ。

敵は二人になり、体たいが入れ替わった。

我慢しきれずに煙を吸い込んだ一人が正体も無く咽むせ込んだ。

怯んだ一人は乱丸がまた足を払いにくると思ひ屈み込んだ。

下がった切っ先のすぐ上を上背のある乱丸の横一文字が滑るように越した刹那せつな首が飛んだ。

すぐにうずくまって咽返むせかえる最後の一人の首を跳ねると乱丸にも限界が来た。

大きく息を吸い込むとすぐに膝が落ちた。

初陣で手練の首三つ。

・・・ お乱、でかした ・・・

薄れていく意識の中で乱丸は確かに御屋形様の声を聞いた  
・・・

## その三十九 本能寺炎上

天正十年（1582年）六月二日 白々あけし頃の本能寺

…… 信忠、撰津へ急ぐのだ ……

信長は最後の時を前に自分亡き後の織田を思った。

安土へ戻るのは得策ではない、あの城では光秀を相手に戦えぬ。

撰津へ逃れ、堺の家康を頼み、信孝、長秀の四国遠征軍と合流するのだ。

信長はついこの間まで殺そうとしていた家康にもすがっていた。

そして筑前の三万を呼び戻すのだ、奴は五日で反転できる。

筑前なら撰津も味方致す。

信長はこの期に及んでも、秀吉が自分を裏切ったとは露ほども疑っていないかった。

織田の今後を托せるのは、地獄の果てまで同道すると誓いし、筑前だけであると信じていた。

信長は刀身を己が首筋に当ていつ何時でも自刃できる姿勢をとっていた。

信長の籠る納戸にも煙が濃く漂い始めていた。

信長は飛び起きる直前に見た夢を思い出した。

程なく本能寺は炎上して洛中の未明を赤々と照らすであろう。

義元を謀った砦のように。

坊主どもを焼き殺した叡山のように。

お市の夫、長政を自刃に追い込んだ小谷城のように。

自分には相応しい最後であろう。

信長は自分の倅達に己の特徴が余り受継がれていないことが残念でならなかった。

武家がその思想ごと血筋を残すとは何と困難なことだと痛感していた。

織田家だけではない、どこの所帯も同じようなものである。

信玄亡き後の武田は勝頼があっても滅んだ。

今川も義元的首一つ失せただけで自壊した。

徳川とて家康が失せればあとは益暗ばかりだ。

織田にも徳川にも光秀や筑前のような特別を産み出す地力は無い  
・  
・  
・

この一点に於いて、信長でさえ天皇家を羨望せざるを得なかった。

「なるほど、間違えたは己であったか、是非も無し」

頃合である。

信長は柄を膝の内側で固め背筋を伸ばすと渾身で己が首筋を刀身に擦り付けた。

肩から腹にかけて温かいものが伝わるのを感じた。

遠ざかる意識の中に最後に浮かんだのは、娘のお茶々の愛らしい姿であった  
・  
・  
・

## その四十 人質

天正十年（1582年）六月二日 早朝

「……利三、もう良い。御屋形様がもうこの世に無いことは、わしも合点がてんいたした……」

光秀はようやく信長の遺体探索の打ち切りを命じた。

今日中に始末しなければならぬことは、まだいくつもある。

ここで利三は動向を監視させていた信忠が、予想外の行動に出たことを光秀に伝えた。

「妙覚寺の信忠様が二条御所に立て籠もったようでございます」

すぐ近くの妙覚寺には織田家跡目の信忠が千五百の兵とともにあった。

すでに本能寺ほんのうの騒動を察知して安土へ逃げ帰っているはずであった。

光秀は呆れた。

「全く、御屋形様のご子息とは信じられぬどんくささよ」

これが御屋形様であれば単騎、安土城まで逃げ帰って今頃は天主閣で敦盛の一差でも舞ってしよう。

信長の逃げ足の速さはいつでも戦国一であった。

それは、光秀もよく知るところであった。

だからこそ、御遺骸を自分の目で確かめるまでは生きた心地がしないのだ。

光秀と利三は信長のいた本能寺と信忠のいた妙覚寺を同時には攻撃しなかった。

妙覚寺は天子様の御所と誠仁親王さねひとしんのうの二条御所に近すぎた。

しかし、本当の狙いは千五百の信忠軍を安土まで敗走させることにより、途中で脱落と離反を促し自然壊滅させるつもりであった。

たとえ取るに足らない相手であっても無用の戦闘は避けたかった。

さらに寝返る者があれば少しでも自軍に取り込みたかった理由もある。

来たるべく筑前との決戦に備えて . . .

光秀は信長を討つても織田の家中で正面から光秀に反抗するものは現れないと踏んでいた。

それほど皆、信長について行くのが耐え難いところまでできていたのだった。

敵対する者があるとすればそれは天下布武の片棒を担ぐ筑前だけである。

織田家跡目の信忠は、天下布武の象徴たる安土城を枕に自刃させ、城ごと焼き尽くせばよいだけであった。

安土の城は戦闘や籠城の類には全く向かない造りであった。

ただただ天下に天下布武を成し遂げた織田信長此処にあり、と知らしめるだけの城であった。

天下を治める行政府として、交通や通商の要として特化した商業都市、所謂城下町であった。

攻めるには、これ以上無いほど容易な城であったのだ。

「信忠様は誠仁親王を人質に取ったと見るべきであろう」

のろまだが頭はいくらか回るようである。

一度の騒乱を差配したは朝廷との正鵠を得たか、ただ単に勝手知ったる二条御所を決戦の場を選びしか。

光秀は出だしから朝廷を巻き込んでしまったことが気懸かりであった。

このたびの騒動は表向き、織田家家中の内輪もめ、あるいは下克上としておきたかった。

自分が天子様の御意向に従って御屋形様を御敵成敗したことは、事が全て成就した後、朝廷を奉る幕府体制を打ち立てるまでは秘して

おかなくてはならない。

計画に僅かでも綻びが見て取れば、常に無<sup>む</sup>辜<sup>こ</sup>であらねばなれぬ天子様は手のひらを返したように明智を見捨てるだろう。

天皇家の綿々と続く歴史を知る光秀にとっては、当たり前前の認識であつた。

## その四十一 攻防二条御所

天正十年（1582年）六月二日未明 妙覚寺

「安土まで退いたところで、いったいどれだけの兵がついて来よう」  
それに安土の城ではとても明智の猛攻を防ぎきれまい。

信忠は一刻も早くお逃げくだされという家臣達の言葉を否定した。

残念ながら信忠の頭に安土以外の退却先は浮かばなかった。

頭は良いが機転が利かぬのが、この男の生死を分けることとなる。

そしてこの国の今後四百年間の道筋を大きく変えてしまうこととなる。

「日向守はなぜこちらに攻めて来ぬ」信忠でなくとも不思議であった。

もし織田を滅ぼし己が天下を狙おうというのなら、織田家跡目である信忠もまとめて討ちに来ねば筋が通らぬ。

父、信長に対する恨みを晴らすためだけに、日向守がこのような大それたことを為すとは到底考えられぬ。

あ奴が意味の無い手落ちなどいたすはずがない。

考える、考えるのだ信忠、父はもう身罷みまかっておるのだ、織田の命運

は己がこのときの判断にかかっておるのだ。

信忠の判断は正鵠を得たものであった。

ただし、その後の対処で大きくつまづくこととなる。

「此度の日向守の謀反は朝廷が裏で糸を引いておるに違いない。

我らを攻めて来ぬのは二条御所の誠仁親王さねひとしんのうに類が及ぶのを恐れてのことである。

我らはこれより、二条御所の誠仁親王さねひとしんのうと、御所の天子様を人質として日向守に謀反を断念させる」

妙覚寺を出た信忠軍千五百は目と鼻の先の二条御所になだれ込んでたちまち占拠した。

二条御所は元々が織田家の京都別邸であったものを誠仁親王に譲ったものである。

信忠はじめ織田軍にとっては勝手知ったる我が家も同然であった。

殿中を調べさせたが特に変わった様子は見られなかった。

誠仁親王は普段通り寢殿で起居していた。

信忠と会った親王は、騒乱後の信忠の素早い保護を感謝する言葉を述べられた。

誠仁親王さねひとしんのうの態度からは朝廷の関わりを臭わせるものは何一つ覗えな

かった。

信忠は窮地に立たされつつあった。

誠仁親王が事前に何等備えをしていないということでは朝廷関与の動かぬ証拠が無い。

逆に無関係の誠仁親王を人質に取るは、自分から朝敵の汚名を被りに来たようなものである。

ここでも信忠の生真面目で融通の利かぬ性格が仇となる。

構わず親王の首を打ち、当初の予定通り御所に押し込み、天子を人質とすれば血路が開けたものを、ぐずぐずしている間に本能寺から移動してきた明智軍に包囲されてしまったのだ。

すぐに光秀からの使者が遣わされて来た。

「このたびの騒乱は、惟任日向守光秀が織田信長様の許しがたきお振る舞い此れありてやむなく御成敗致したものだ。

武家同士の私闘に天子様の親王様を巻き込むのは武士として未代まで御敵の謗りを免れなきことにて速やかに親王様を解放されよ」

万事窮す。

光秀と信忠では役者が違いすぎた。

信忠は親王を人質にしたまま朝敵として討たれるか、親王を解放して武士の面目を保って死するかどちらかしかなくなった。

どちらにしてもあるのは死である。

「何たる失策、無念である」信忠は少しでも後々の織田家の面目が立つようと、誠仁親王さねひとしんのうを朝廷と親密な連歌師、里村紹把しゅうはのよこした輿に載せ引き渡した。

紹把がなぜ頃合良く輿まで仕立てて現れたのか疑う余裕すら無かった。

勿論、光秀と紹把が以前より昵懇じっこんで、つい先頃も愛宕権現じゅうごんで百首連歌会を催していたことなど知る由も無かった・・・

## その四十二 ぶせくせ

天正十年（1582年）六月二日午後 堺港

「梅雪殿はやはり船はお嫌いなようだ」

家康は海路に誘えば梅雪は必ず陸路を別行動で行くだろうと読んでいた。

海道に位置する三河者であれば船の移動にも慣れていようが、山里の甲斐者には紀伊沖の荒波に揉まれるなど到底我耐えられるものではない。

家康はすぐに追っ手を差し向けた。

追っ手の首領は服部正成（半蔵）がつとめた。

狙うは梅雪の命と一行が携えし多額の金きんず子であった。

今風に言えば、強盗殺人である。

穴山梅雪の持つ甲斐の金山は天下を狙う者にとっては、咽から手が出るほど魅力的であった。

政治に金が掛かるといふのは、戦国の世も現代も全く同じである。

信長公が身罷った今、当面の身の危険は去った。

密かに集めた家康の警護は精鋭の四百名。

これはもう立派な行軍である。

明智軍が今繰り出せる僅かばかりの追っ手など、返り討ちにすることも出来る充実した陣容である。

後年、僅か十数名で命からがら生き延びたとされる 神君伊賀越えの正体はこれである。

途中の土豪にはば撒いたと云われる金子は茶屋四郎次郎が用立てたものではなく、梅雪から強奪したものである。

後に 神君超え などと美化させたのは、その実際があまりに極悪非道であったことの裏返しである。

勝者が書き残す歴史とは古今東西そういうものである。

実際の家康の一行は結構な人数であったはずである。

それはそうである。

信長は家康を堺で殺そうとしていたのである。

それに気付いた家康が丸腰でのこのこ堺に現れるわけが無い。

しかも異変の雷雲に誘い水を撒いていたのは他なれぬ家康自身であった。

「こつも上手く其の方の思い描いた通りに事が運ぶとは思わなかった」

家康は、この頃から相談役として取り立てていた、傍らの本多正信に謝辞を述べた。

「全ては殿の律儀で無欲な日頃のお振る舞いの賜物でございます、それ故に誰も策略などとは思わずこちらの意図した通りに動いてくれまする」

この初老の男は勇猛果敢な三河者の中にあつては珍しく、戦働いくみはたきでより人の心を読んでの調略、謀略の技に優れた男であつた。

その余りの陰々滅々とした性格から、同じ本多の一族からもつまはじきとされていたが、そんな正信を家康は重用していくのであつた。

数少ない友としても。

## その四十三 焦燥

天正十年（1582年）六月五日

「前久殿はどこにおられるのか」

光秀は焦りに焦っていた。

このままではまことの謀反人として歴史の闇に葬り去られてしまう。

お約束の”征夷大將軍”をいただかなくては京、摂津界隈の小名達の賛同が得られぬ。

京、摂津界隈には有力な大名は存在しなかった。

光秀自身が管轄する織田家の直轄領であつたためだ。

しかし摂津周辺には小勢力ながら南北朝の頃より勢力を保つ豪族上りの摂津衆が今も小名としていくつもあつた。

遠方の大名達が状況を確認かめて腰を持ち上げるのには月単位の準備期間を要する。

その前に身軽な彼らを見方につけて摂津、堺、洛中と近江を押さえ、てしまえば明智幕府を開ける。

電光石火の多数派工作が命運を決するのだ。

しかしながら明智に対する お墨付き が出なければ、いくら信長

を討つたとはいえ只の謀反人である。

それでは賛同者は得られない。

何と言っても相手は南北朝の頃から、このややこしい界限を生き延びてきた海千山千どもである。

ぼっと出の織田や徳川などと違い一筋縄では靡かぬ連中である。

何より朝廷の 御威光 が頼りとなる。

それがいつまで待っても出ない。

「近衛前久様は本能寺のその日に出家いたしました」

信長成敗に連日連夜祝杯を上げる朝廷に何度問いかけても、答えはいつも判で押したように同じであった。

前久は雲隠れしたのだ。

あれほど親しくしていた自分を渦中に投げ込んでおきながら . . .

## その四十四 凶報

天正十年（1582年）六月十一日

「そうか、覚悟を決めねばなるまいな」

光秀は摂津衆の多数派工作がなかば失敗に終わったことに落胆の色を隠せなかった。

池田恒興、高山右近、そして娘婿の細川忠興までもが筑前方に組み込まれたと知らされたからである。

信長の乳兄弟で摂津を任されていた恒興はともかく、「お墨付き」さえ頂けておれば、キリシタンの右近と婿の忠興は間違いなく味方と出来ていたであろうことが悔やまれた。

決戦は山崎の関あたりとなろう。

明智軍一万六千に対して羽柴軍は四万にまで膨らんでいた。

数の上での有利、不利もあるが自軍が織田信長に対する謀反人、反逆軍との汚名に塗れて決戦に臨まなくてはならない事は兵達の士気に与える影響を考えると憂鬱となる。

鬱屈している光秀に追い討ちをかけるような凶報がもたらされたのは、決戦となる日の前日であった。

出家を言い訳に雲隠れをして埒の明かぬ近衛前平を探すのを諦めた光秀は、固い結束の同盟者である里村紹把に、朝廷とのとりなしを

頼んでいた。

その返事を携えた紹把が僅かな供回りと共に光秀の陣を訪れた。

光秀は藁にもすぐる気持ちで紹把の知らせを待っていた。

「日向殿、早速であるが御人払いを願えぬか」紹把は固い表情で光秀を促した。

光秀は利三をはじめ重臣も全て陣幕の外へ退席させた。

陣幕の中央のかがり火の下ですら、紹把は慎重に辺りを覗いた。

光秀が期待した”お墨付き”の類の書状は持参していない様子であった。

紹把のもたらした情報は常に沈着な光秀をも驚愕させる内容であった。

「日向殿、本能寺の日に私に命を助けられし借りがあると、誠仁親王が明かしてくれた秘密がございます」

紹把は少し躊躇いながら続けた。

「実は、羽柴筑前殿は親王様の兄であるとの仰せでございました」

かつて、正親町天皇とその妹皇女様との間に授かりし禁じられし皇子があった。

驚きと失意の中で、光秀は心中で凝り固まっていた氷塊がさらりと溶けてゆく感じがしたのであった・・・

## その四十五 辞世

「なんと筑前殿が、天子様の御落胤であつたとは・・・」  
ことここに至り、光秀はようやく自分が天子様に捨て駒とされたことを悟つた。

しかしながら、天子様に対して怒りの気持ちは少しも湧いてこなかつた。

そも天子様とはそう云う存在であることを光秀は承知していた。

「いざ、皇統を守らんとした時の天子様のお力、畏怖すべし」

光秀は、今や御高齢となつている正親町天皇（おおぎまち）がまだ皇子（おうじ）の頃、若くしてお亡くなりになつた妹皇女（いもうめ）がいたことを思い出した。

確か十六、七の若さでお亡くなりになつていたはずである。

筑前殿のあやふやな生年と重なる。

これまでも、織田家中で出世を競つてきた同士の秀吉には、生まれながらの才覚を感じていた。

もしかすると、自分と同じような由緒ある血筋の未裔ではないのか、と疑つたこともある。

まして、皆の云う貧しい農民出であるなどということとは、到底有り得まいと思っていた。

出会う者全てを魅了する人たらしの技。

幼少の頃より授けられたとしか思えぬ知識と教養。

どのような熟達の僧侶も及ばない達筆の筆。

高度な土木建築技術に長けた取り巻き連中。

熟練の騎馬武者さながらの乗馬技術。

そしてあの右手 . . . .

光秀の頭の中には織田家が躍進するとき、秀吉が重要な役割を果たしてきたであろうことが思い浮かんだ。

今川軍の塗り輿の正体。

信長公の上洛と秀吉の所司代就任。

朝廷の織田家への格別の肩入れ。

近衛前久のもたらした、詳細な”天下布武”の情報源。

そして何より、秀吉自身では御屋形様を討つなどということとは到底叶わぬ信長との固い結びつき。

「天子様は、はじめから自分を主君殺しの謀反人に仕立て、その上で筑前殿に敵討ちの大儀名分を以って天下を治めさせる御積りだったのであろう」

・ ・ ・ ・ ・  
それが天子様の御心<sup>みこころ</sup>であるなら、是非もない ・ ・ ・

光秀は一切の言い訳をせず天子様の御意思に従うことを覚悟した。

ただし己の命運を賭けて最後の決戦には全力で臨む所存であった。

勝負は時の運である。

光秀辞世の句は、

『心しらぬ人は何とでも言はばいい、身をも惜まらず名をも惜しまず』  
であった。

## その四十六 天王山

天正十年（1582年）六月十三日 山崎の関

「いやいや、ひやひやものであった」

秀吉は明智軍壊走の報にようやく安堵のため息をついた。

城攻めは得意とする秀吉であったが、野戦はさっぱりであった。

人が大勢死なねば終わらぬ野戦は嫌いであった。

負け戦は桶狭間で嫌というほど味わっていた。

一方の光秀は野戦を得意としていた。

明智軍の陣の構え方、兵の動かし方は共に見事なものであった。

秀吉は光秀を相手に野戦で勝利を収めるのには三倍の兵力が必要と見込んでいた。

「こちらに恒興つねあき殿がおらなければ危ういところであった。御屋形様は良い乳兄弟を持たれた」

秀吉が漏らした言葉の通り、池田恒興と細川忠興ただあきが明智に付いていたら勝敗は逆転していたであろう。

桶狭間の頃より信長と死線を潜り抜けてきた池田恒興は、両軍膠着状態の中、明智本陣を側面から突いた。

それを見て勇気づけられた細川軍は見事明智軍を押し返した。

それが明智軍総崩れへとつながった。

光秀は後詰の勝竜寺城へ撤退した。

だれの目にも明智軍の再起は到底不可能と映った。

信孝軍の勝利であった。

光秀の追討もそこそこに、秀吉に見方した摂津衆の小名達が次々に戦勝の祝辞を述べにやって来た。

みな、総大将が信長の嫡男の信孝であったことなどすっかり忘れている素振りであった。

摂津衆は皆したたかである。

そうやって、南北朝の頃より時の勢いのある者を見極めて生き残ってきた。

彼らの目は確かであった。

一方、勝竜寺城に退いた光秀は一時も休む間は無かった。

敗走の途中で雑兵は逃げ出し、残るは僅かな譜代の家臣だけとなっていた。

追討軍の追っ手がかかる前にここも逃げ出して、何とか一族が待つ坂本城まで到達したかった。

生きるも死するも、一族と共にそこで決めたかった。

しかし、光秀のそのささやかな最後の願いさえ、天には聞き届けられないのであった。

## その四十七 ぼんくら

「治部少輔、万事正論でしか物事を考えぬ其の方にも、天子様の御威光というものが侮るべからざるものである事、よう分かったであらう。」

この国の形が今後どのよに変わるうとも、天皇家は途切れることなく続くであらう」

「……………」

「それが、武家と天皇家の大きな違いじゃ」

三成は思い出した、古来天下を牛耳ってきた武家の末路を。

清盛公、頼朝公、尊氏公、信長公……………みな一代限りのようなものである。

どんな天才的な権謀家もその才覚は三代とは続かぬ。

信長公にしても後継者に目ぼしき才を持った者は一人もいなかった。

憎つくき家康も跡目は揃いも揃って益暗揃いである。

「殿下、”我慢のしどころ”の意味がようやく分かり申した」

「ふふふ、佐吉にしては、ぼんくらだったの。  
徳川殿が如何に権謀けんぼうに長けていようと、まだ五歳の秀頼とどちらが長く生きられよう。」

待つのだ。耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び、ひたすら待つのだ。

だ。

徳川が痺れを切らして兆発してきてもけっして乗ってはならぬ。  
お役御免だろぅが謹慎だろぅが蟄居だろぅが隠居だろぅが、たとえ  
隠岐に流罪となろぅとも、

そなただけは何としてでも生き延びなければならぬ。

家康殿が息絶え、秀頼さえ存命であれば豊臣はどんなに没落してい  
ようと盛り返せる。

そのとき豊臣に断固必要な男が其の方、石田三成である」

- - - - -

三成は二年の時を待たずして、太閤のこの戒めを破ることになる。

それについては、この物語の佳境で語られる。

しかし、三成はその首が飛ぶその瞬間まで太閤の言い付けを守り通  
したこともここで付け加えておこう・・・

## その四十八 お茶々の秘密

「佐吉よ、謀略に加担し大恩ある御屋形様から天下を掠め取ったよ  
うな豊臣では忠節は尽くせぬか」

三成は太閤にそう問われるのを予測していたかのように即答した。

「たとえ血を分けた親、兄弟とて敵味方となるは、源平の頃よりの  
武家のならいにごさいます、まして殿下は親である正親町天皇をお  
助けしたのでありますから」

秀吉は安堵した表情でこう続けた。

「佐吉、わしは御屋形様のことを心底恐ろしくも、ありがたく、お  
役に立ちたいと思うておったのじゃぞ」

三成は太閤の言葉に嘘は無いと思った、なぜなら・・・

「殿下、三成も殿下を左様に思っております」

秀吉はさも満足そうに三成の顔を見やった後、真顔となって話を続  
けた。

「佐吉、もう一つ秘密を明かす、豊臣の行く末を其の方に託すため  
じゃ」

三成は居住まいを正して秀吉の言葉に耳をそばだてた。

「実は、お茶々の出生にも秘密があるのだ」

お茶々の秘密と聞いて三成の心はざわめいた。

九つ年下の美しいお茶々は同郷の三成にとって、普段はおくびにもださねども、今も昔も手の届かぬ憧れであった。

お茶々の母お市の、浅井家への輿入れは、その後の美濃攻略と絡めて秀吉がその全てを仕切った。

まだ敵の領国である美濃を無事に通過するためには、秀吉の調略の手腕が不可欠であった。

信長は美濃を攻略する頃からすでに、天下布武の志を持っていた。

その為には京、摂津より先に地勢的な要所である近江を押さえることが何にも増して重要と考えていた。

当時、織田にとつての最大の脅威であった北方の武田、上杉に対して越前、近江、美濃、尾張と徳川との同盟により、三河、駿河と弓形に連なる磐石の防衛線を作り上げることが必要不可欠であったのだ。

早く手に入れても金ばかり食う京など、二の次、三の次で良いと考えていた。

信長らしい合理的な理屈である。

浅井に輿入れするお市に信長が託した任務は、天下布武を成し遂げる為に殊更重要であったはずである・・・

## その四十九 市と信長

永禄十年（1567年） 名護屋城

「よいか市、長政の身も心もそなたの虜とすべく、一人、天下布武の尖兵となるのだぞ」

「そのような大任、家中にわたくしの他に任せられる者はおりませんまい、兄上」

信長と市は一つの寢床で互いの身体を寄り添いながら今生の別れかも知れぬ一夜をすごしていた。

「市は兄上にひとつお聞きしたきことがございます」

市は信長の方に向けて聞いた。

「一人敵地に赴くそなたに秘することは何も無い。申してみよ」

「兄上は何故なにゆえ、あの木下藤吉朗なる素性不明ちやうじていの者を重用ちやうじていなさるのでございますか」

少し黙ってから、信長は天井を向いたまま答えた。

「約束した故、そなただけには話そう。夫や子や他の兄弟にすら秘密に致すのだぞ、……」

信長は己だけが知る藤吉朗の出生の秘密を最愛の妹、市に明かした。正親町天皇あつぎまちが皇子の頃の妹皇女との御落胤であること。

それを利用して、桶狭間で義元を騙し討ちにしたこと。  
褒美、市を好いている藤吉朗に面影の似た城下の娘、おねねを嫁に  
世話したことも。

「どつだ、さすがの市も驚いたであろう」

得意そうに信長が市の方を見て言うと。

「少しも驚きませぬ、兄上とわたくしも同じでございます故<sup>ゆえ</sup>」

信長は少し不満そうに問い返した。

「同じとな、しかし我らに子まではおらぬぞ」

市は上を向いて楽しそうに返した。

「さて、それはどうでありましょうか・・・」

信長は寝床から飛び起きた。

「市、まっことか!」

市はゆっくり身をおこし襟元を直すと、「初めてのことゆえ分かり  
ませぬがおそらく・・・」とつつむいた。

さすがの信長も天を仰ぎ、どかっとしりもちをついて座り込んだ。

だがすぐに落ち着きを取り戻し不敵に笑った。

「長政め、妹だけではなく子までくれてやることになるうとは」

市は不安そうに信長を見ていた。

「お市、安心せい。長政は心底良い男ぞ、そなたを疑ごうたりするはずも無い。

だからこそ惜しげものうそなたをやれるのよ。

しかし、浅井あさいの家中に余計な詮索せんさくをされるのもうるさかろう。

藤吉朗にそなたの輿入れおんいれを急がせることに越したことは無かろう」

市の輿入れで織田と浅井あさいの同盟は磐石いんせきなものとなった。

市が浅井に嫁いで最初に産んだ子は女であった。

長政は”茶々”と可愛らしい名を付けて愛した。

長政と市は仲睦まじい夫婦となってさらに女を二人と男の子を一人もつけた。

お茶々の次に産まれた次女に長政は”初”と命名した . . .

## その五十 奇跡の血統

太閤から三成への長い長い遺言も終わりの頃へと差し掛かっていた。

「お市様はわしの素性を御屋形様から寝物語で聞かされておったのであろう。

御屋形様の目指す天下布武とわしの出自との矛盾に、お市様は凶兆を見て取ったのかもしれない。

生前、お市様はわしに心を許されたことはとうとう一度も無かった。浅井の嫡男を、わしが酷い遣り様で殺めたことも恨んでおったであらう。

お茶々は御屋形様とお市様の間に出来た子である、故に誰よりも織田の血を強く引いておるのだ」

太閤の言葉に三成は、お茶々が三姉妹の中でも飛び抜けてお市様の面影を強く受継いでいることにも領けた。

同郷の近江の姫と憧れていたお茶々が実は、織田の中の織田の姫であつたとは。

そして、……

「殿下、それでは秀頼様は正親町天皇と妹皇女ちみづみのお子である殿下と、信長公とお市様兄妹のお子である淀の方を父母ちちははに持つ、

天皇家と織田家の、余りにも純粹な結び目ではございませぬか」

三成は自分の口から飛び出た言葉に自分で驚愕していた。

「左様、神の末裔とされる天子様の御血筋と、神をも恐れず自ら神

となることを欲した織田の血筋がこれほど濃く結びつくとは何と云う皮肉」

「……」、三成は黙して頷いた。

「いや、わしはこれを奇跡だと思っておるのだ」

太閤の目尻からは涙が雫り落ち枕を濡らしていた。

「本能寺で敵対する朝廷に志半ばで討たれた御屋形様の絆が、禁裏の奥深くから染み出たわしと結びついて、だれも予想だにしない血統を生み出したのだ」

太閤の言葉に三成は息を呑んだ。

「これを奇跡と呼ばずして、何を奇跡と云えようか！」

## その五十一 秀頼登場

慶長十六年（1611年） 二条城

「では清正、参ろうか」

秀頼は自ら先頭となり家康の待つ謁見の間へ続く長い廊下を進んだ。ゆっくり大股で歩いて行く秀頼に付いて行くのに、小柄な清正は茶坊主のように小走りとならなくてはならなかった。

清正の目の前に行く秀頼は、大きく、堂々として、立派であった。

清正はこれまでの経緯いきほひを思うと今日の日を迎えられたことは涙が浮かぶほど感慨深く、前に行く秀頼の背中がばやけてしまうのだった。

「嗚呼、あの関ヶ原のとき徳川に味方し、西軍敗北に荷担した己の過ちが悔やまれる」

袂たもとを分かったとはいえ、幼馴染の治部少輔を不忠の不義密通者と疑った己が愚かであった。

少しでも考えが及べば、あの融通の利かぬ”へいくわいもの”が如何にお茶々様に恋心を抱きかけても、太閤殿下おやじひさまに不忠を為すなど、在ろうはずが無いことを。

清正は眼前に行く秀頼の威風堂々とした偉丈夫さに、姿形は全く似ぬども天下人、豊臣秀吉おやじひさまの影を色濃く感じていた。

会見の場である謁見の間では当然という顔で”上座”に家康が陣取っていた。

先制攻撃で若く未熟な秀頼を腰砕けとしようという思惑であった。

秀頼はそんなことは意に介さず一段低い下座に颯爽と座した。

家康の思惑は最初から当てが外れた。

誰がどう見ても下段に座した秀頼の方が上座で横柄に肘掛にもたれる家康より大きく見えた。

秀頼が登場したとたん、”時の権力者”家康が急にみすばらしいただの老人に見えた。

居合わせた全員がそう思った。

それこそが清正の思惑であった。

……如何な老獪徳川殿とて、このような威丈夫に御成長あそばした秀頼様を眼前とすれば、その御威光にただただひれ伏すであらうと……

秀頼は平伏して家康に臣下の礼を尽くした。

元は徳川の方が豊臣の家来筋である。

秀頼にはそのようなことどうでも良いことであった。

幼い頃より広大な大坂城からほとんど一歩も出ることなく、従兄妹

で幼馴染の美しい千姫と裕福に幸せに暮らす秀頼には今の暮らしに何ら不満など無かった。

目の前の家康老人は千姫の祖父である。

皆が言うような敵という言葉も秀頼には空虚な響きとしか届かなかった。

「今日は大御所様に我が大叔父、織田信長公の若き日の武勇伝など伺いたく参上致しました」

屈託無く好意を示す孫娘の婿の前に、家康は背筋に冷たい汗が流れるのを感じた。

己の陰謀の影に志半ばで果てた、織田信長の眼差しに射すくめられている心地がしたのだ・・・

## その五十二 間諜本多政重

慶長二年（1597年）

「其の方は次男に生まれたが長男の正純まさひらよりもわしの特徴をより強く受継いでおる」

本多正信はまだ十七になったばかりの次男、政重まさしげに己が培ってきた調略、謀略の真髓を授けようとしていた。

「よいか政重、調略しようとする相手に二者択一を迫るときには、必ずどちらに転んでも相手に損とならないように仕向けなければならぬ。

我が殿が桶狭間のときに織田から受けた調略は見事なものであった。徳川は織田方のふたつの砦を攻撃する名目で今川の本隊を留守にする大義を得た。

その隙に織田殿は桶狭間山で今川義元を討たれた。

徳川は当主を失った今川家の混乱に乗じて、労せずして三河一国を取り戻すことが出来おおせた。

たとえ織田が失敗して滅んでも今川からは褒美が出たであろう。

この話に徳川が乗らぬ道理が無かるう。調略とはこのように仕掛けなければならぬ」

政重は黙って頷いた。

「そしてこれが最も大事なことである。相手を調略するときには、騙だましたり、嘘をついたり、後で裏切るうとしてもけっして上手いかぬ。

相手も騙されまいと必死に嘘を見抜こうとする。少しでも嘘うそに綻ほび

が見つければその調略は失敗に終わり、かえって窮地に陥ることとなる」

政重はまた黙って頷いた。

「相手に自分を信じさせる為には事実だけを淡々と述べることであり、事実だけが持つ説得力が相手の心を動かすのだ」

正信は雄弁に語る者がけっして調略に向かぬことも説いた。

「調略などというと陰湿で薄汚い印象を持つかもしれないが、わしは調略と厚き友情は紙一重のものであると思っておる。

金品や言葉を尽くして相手に無理やり信じさせるより、先ず自分のことを好きにさせること。

さらに申さば自分も相手に惚れ抜くことこそ調略を成功させる王道である。

信あれば義生まれ、義あれば行動を生む。一人が動けば幾多の者の賛同を集め時流となる。

何人たりともこの時流を覆すことは不可能となる」

このまだ十七年しか生きていない政重少年は父の言葉をよく理解した。

「そなたが徳川の舵を握る本多正信の子であり、徳川を逐電せねばならぬ宿命を背負ったことは豊臣諸侯の歡心を得るに充分であろう。誰も徳川の野心が如何程のものか知りたく、また徳川に付き従うべきか迷うておるのだ。

そしてそなたの年若さこそが何よりの武器となる。

まさかその年で歴戦の軍師をも凌ぐ調略の薰陶くんとうを受けておると疑う者はおるまい」

政重が権力者本多正信を父としながらも徳川を追放される大義名分は、二代將軍秀忠の乳母の子、岡部莊八を諍いさかいの上で殺したことに由来する。

「いかに調略の捨石とはいえ、見知った岡部を無残に切ったは後ろめたく感じまする」

正信は優しく諫めた。

「敵を欺ちかくには先ず味方から欺けというのが鉄則である。この先そなたが行う調略では何千、何万という命が揺れ動くのだぞ」

政重は改めて己の背負いし任務の重さを噛み締めた。

「父上、この政重、たとえ父上とはこれが今生の別れとなるうとも、父上のお心はけっして忘れは致しませぬ」

政重はこの後、徳川の極秘情報を携えて、大谷刑部を皮切りに豊臣諸侯の客分として転々と赴いて行くのであった。

## その五十三 三成の調略

「刑部、早く茶をよこさぬか。のどが渴いて我慢できぬではないか」  
言うが早いか三成は、大谷吉継が手にする茶碗をむしり取り、ごくごくと残らず飲み干してしまった。

この日は朝鮮出兵から戻った武将らを太閤が大阪城に招き、慰労の茶会がとり行われていた。

三成は思うところあって大谷吉継の隣に座していた。

そこは三成が着座するまで空席であった。

三成と吉継は共に小姓の頃から秀吉に仕えていた同士であった。

九州征伐の折には共に兵站奉行を担ったこともある。

共に仕事をこなすうちに三成は吉継の明晰さに関心した。

賤ヶ岳では敵将柴田勝家の子の長浜城主、柴田勝豊を説得して寝返らせた。

朝鮮出兵では明との和平交渉をまとめるなど、奉行として算術に長けているにとどまらず、交渉事や人心掌握術にも並はずれた能力を発揮したことを三成は見逃さなかった。

…… これからの豊臣家に絶対必要な男である ……

三成は吉継と信頼と厚い友情の絆を結びたいと願っていた。

機会は突然訪れた。

茶をすすった吉継は迂闊うかつにもくしゃみをしてしまった。

唾つばが飛沫しぶきとなつて盛大に飛び散った。

誰の目にも茶碗に飛沫が入ったに見えた。

茶道の作法では何事に動揺を見せてはならない。

何事も無かつたように茶碗を回すのが茶道である。

普通であれば。

吉継はらい病を患っていた。

当時の人々にとって、らい病は移りやすい不治の病であつた。

日ごろから吉継が口をつけた茶碗が回ってきてても飲んだ振りをするものも多かつた。

普段は決してうるたえたことなど無い吉継も自分の失態に呆然とした。

そのとき隣席の三成が叫ぶ様に何か言つて、手から茶碗を奪い飲み干した。

三成の機転で吉継はかろうじて面目を保った。

茶会が終わつても三成は吉継とは言葉を交わすことなく、何事も無かつたかのように帰つていった。

居城に戻つた吉継は、

泣きに泣いた。

自分の不運や他人の冷たい仕打ちに泣いたのではない。

石田治部少輔じぶく三成の男に泣いた。

・ ・ ・ ・ ・  
我が短き命、貴様にならいつでももくれてやろうぞ  
・ ・ ・

このことは大谷刑部吉継を慕う家臣、家来、男女を問わず家中の者全員の心に浸みた。

## その五十四 家康の調略

慶長四年（1599年）十月 大阪城西の丸

「且元殿かつもと、秀頼君きみと豊臣家の行く末をお任せできるのは、其の方をおいて他にはおらぬとわしは思っておりますぞ」

家康は賤ヶ岳しずがたけしちほんやり七本槍の一人で太閤より秀頼の養育係を任されている片桐且元をそう言って持ち上げた。

「そなたは華やかな奉行職を治部少輔やそのほかの者に奪われ、己だけが貧乏くじを引いたと不満に思っておるやも知れぬがそれは違ちがうぞ。

太閤殿下は其の方の厚い忠義の心を信じて、秀頼君の守役をお任せになられたのだ」

家康の言葉に且元は感激した。

家康は続けた。

「且元殿、わしとそう年の違ちがわぬ利家殿も身罷みまかわれてしもうた。

太閤殿下より秀頼君の後見を任されておるわしとて、もうこの先何年生きておられるかわからぬ。

幼い秀頼君と豊臣家の今後を思うとわしは死んでも死に切れぬ」

「内府殿、そのような弱気になられては困り申す、ご幼少の秀頼君にとっては内府殿だけが頼りにございます」

且元はつい家康に隙を見せた。

「ときに且元殿、このようなこと其の方にしか聞けぬ事ゆえお答え  
いただけぬか」

なんなりと、と且元は答えた。

「実は秀頼君の御出生に関わる良くない噂を耳に致してある」

且元は内心どきりとした。

「噂によると、秀頼君は実は太閤殿下の御種では無いのではこの事  
だが、まさかそのようなことはあるまいの」

けっして、と且元は答えて黙った。

「その噂によると、太閤殿下の目を盗んで淀の方と通じておったの  
は大野治長はのながではないか、とのことであったが、治長は其の方と同じ  
近江の出身であったはず。

淀の方も近江の浅井家のご出身、しかも治長殿とは乳兄妹であると  
の事ではないか。

もし、本当なら太閤殿下より豊臣家の今後を託されたわしとしては  
捨てておけぬことであるが如何に」

且元は、けっしてそのようなことはございませぬと申し開いた。

秀囲気が変わり、いつしか家康による詰問の様相を呈してきた。

家康は急に穏やかな口調で。

「なに、且元殿、其の方が恐縮いたすことではあるまい。ただ、大野治長は治部少輔や前田利長らと謀ってわしを亡き者にしようとしたかどで、今は捕われの身である。

そのような者がたえ噂であっても秀頼君の父親かも知れぬなどということはけっしてあつてはならぬことであるう」

且元は恐縮して身を小さくしていた。

その様子から家康はすべてを理解した。

「片桐且元。たとえ秀頼君が太閤殿下の御子で在ろうと無かるうと、豊臣家にとつて無くてはならぬ唯一人の跡取りである。

太閤殿下より豊臣家の行く末を任されたわしであれば、目を瞑るところは瞑る覚悟である。

豊臣の行く末を案じるのであれば、今後は我が命を主の命として心して聞く事である」

且元は家康にひれ伏した。

「なに、それがそなたのいっそうの立身出世にもなることじゃ何でも案ずるでないぞ」

家康は且元を残し、勝ち誇った足取りで接見の間を後にした。

## その五十五 政重の調略

「治部少輔様に先を越されては、勝利の果実が小さくなってしましますぞ」

政重はそう言つて宇喜多秀家に決起を促した。

急かされるまでもなく単独で二万の兵力を擁し、勇猛果敢で名を馳せた秀家は、家康と一戦交えるのに何の躊躇も無かった。

しかしこのとき二十七歳の秀家には狡猾な徳川に対しての戦略がまだ見えていなかった。

「此度の上杉征伐に名を借りた、徳川の挑発行動は、けつして磐石の策とは言えませぬ。

如何に六万の動員力を持つ徳川とて、いざ豊臣を相手とすれば十余万の軍勢を集めなければなりませんまい。

今は、上杉征伐が名目ゆえ家康様と行動を共にしている大名諸侯とて大半は太閤殿下のご恩で大名になり上がった者達ばかりにございます。

徳川の権勢に靡く彼の者達とて、いざ豊臣対徳川の決戦となり秀頼君が総大将に担がれてしまえばそれまで。誰が秀頼君に弓引けましようか」

それは事実であつた。

このとき二十歳となつていた本多政重は、豊臣大名の筆頭格である宇喜多家に潜入していた。

その若さに不釣り合いな策謀の知恵と徳川の極秘情報を用いて、まだ若い秀家にとつては、無くてはならぬ参謀役として家老格にまで出世していた。

「徳川が磐石の布陣では無いにも関わらず豊臣を挑発してきたのは、内府様にあせりがあるからでございます」

政重はさすがは家康の右腕、本多正信を父とするだけのもって生まれた軍師の才覚を主君秀家のために惜しげもなく発揮した。

「政重、内府があせる理由とは何か」

秀家の問いに政重は、

「ひとつは内府様ご自身の年齢にございます。

太閤殿下に続いて前田利家様と、共に戦国を生き抜いてきた方々のご他界を目の当たりとすれば、

御自分の余命やいくばくかと心配になるのも無理からぬことでありましょう。

さらにいまひとつ、内府様にはご懸念がございます。

徳川には家康様の後を継げるだけの器量を持った後継者が見当たりませぬ」

それも事実であった。

「内府様は自身が存命のうちに天下取りのみならず、徳川政権を磐石にしようとなさっているのです。

だからこそ、病床の身とはいえ太閤殿下がご存命のうちから無節操に、諸大名との政略結婚を急いだのであります」

政重は事実だけを淡々と述べた。

秀家は時の権勢を誇る内府が後継者問題を抱えていることまでは思いが至らなかつた。

「次男の結城秀康殿は相当な人物とお見受けいたすが如何に」

秀家の指摘に政重は、

「確かに秀康様は人物、知見、武勇共に徳川を継いでゆくに充分かと思われませう。」

しかし、秀康様は太閤殿下の御養子からさらに結城家に養子と出されたお方。

徳川の頭領として出戻るには些か無理がございます。

今思えば太閤殿下の徳川の跡目潰しだったのでございませう。見事でございます。」

「なるほど」、と秀家も太閤の事前の策に唸つた。

死して尚、豊臣を守り続けるとはさすが義父上である。

「三男の秀忠殿なら都合が悪いことは何もあるまい」

秀家はいつの間にか敵である徳川の跡目の心配をしている自分が滑稽であつた。

「秀忠様は、……盆暗でございます」

これも事実であつた。

「それにもうひとつ、太閤殿下の御遺言に従うならば、祖父の内府様にとつても父の秀忠様にとつても目の中に入れても痛くない千姫様を、  
いずれは秀頼様のもとに嫁がせなくてはなりません。

そうなつてからでは、豊臣と事を構えるのはさらに困難なこととなりますしょう。

さらに秀頼様と千姫様との間に御世継でも授かるものなら、もはや徳川は豊臣と抜き差しならぬ縁戚となり共存する道しかありません。

もし内府様が突然身罷つてしまえば、成長を遂げる秀頼様と宇喜多様、石田様はじめ豊臣家の厚い人材の前に徳川はじり貧となつていくであります。

これも太閤殿下の勝ちにございます。まことに太閤殿下の明晰さは某も遠く及びませぬ」

秀家は自分がいつも目の前だけのことに心を病んでいたことを恥じた。

太閤は自分の死後のことをかくも手を打っていたとは。

……やはり太閤殿下の分身ともいえる治部少輔殿を引き込まねば腹黒い家康と互しては渡り合えぬな……

宇喜多秀家は佐和山城に蟄居してこのかた、梃子でも動かぬ石田治部少輔三成を風雲の中に引き戻さなければならぬと堅く決意した。

それこそ、間諜本多政重の任務であった。

「殿、ここは徳川の策略に乗ったに見せて、電光石火で秀頼様を総大将にさえ戴けば、天下の形勢此れ一気に豊臣方に傾きます。明智日向守討伐の折りの太閤殿下の機敏さが、後々の豊臣政権成立の原動力となっていたのは、殿もご存知でありましょう」

政重はさらに決定的な一言で秀家の背中を押した。

「かつて織田信長公が桶狭間に今川義元を討ち果たしたのは、殿と同じ二十七のときにございます」

その言葉が宇喜多秀家の心にくすぶる野心に火をつけた。

己が一番に反徳川の狼煙ろうえんを上げ、今や徳川の属国にまで落ちぶれた妻の実家の前田家を従えて豊臣政権の執権として君臨できよう。

……それが若年の自分を大老にまで引き立ててくれた太閤おやじ殿下さまへの何よりの御恩返しでもある……

## その五十六 兆発

「正信、治部少輔がこれほど我慢強いとは些か想定外であったの」  
家康は苛立ちを隠せぬ様子で正信に問うた。

「御意に、」

正信も過去の三成であるならとつくに不穏な動きが現れて来ねばおかしいと感じていた。

「すでにこちらの意図が読まれているのではあるまいな」

家康は心配になってきた。

「三成が相手でなくては清正や正則は徳川に加勢しにくかるう。  
次の戦は表向き豊臣家内部の内輪もめとしておこなければならぬ。  
大っぴらに徳川が天下を狙ったと見なされては付いて来ぬ大名も出てこよう。」

勝負は時の勢い。筋書きに蟻ありの一穴とてあつてはならぬ」

家康の心配をよそに正信は余裕たつぷりであつた。

「上様、御心配いには及びませぬ。此度は徳川にとって待ちに待つた天下取りの勝負の時。」

かつての信長公の桶狭間、いやそれ以上の大勝負でございます。  
さすれば、備えは二段構え三段構えにございます。三成めも必ず出張つて来ざるを得ぬよう仕掛けてございます。

秀頼君の守役、片桐旦元はすでに上様に絡めとられ、三成失脚後の

豊臣家家老への野心を焚きつけられております。

上杉景勝様には直江兼続めが、東北の覇者と越後奪還の野心を焚きつけております。

宇喜多秀家様には我が次男・政重めが食い入り、前田家と共に豊臣の執権となるべく野心を焚きつけております。

先ず、上杉に拳兵させ、豊臣大名もろとも大阪を留守に。

その隙を突いて宇喜多に決起させ、秀頼君を担いで徳川を一気に葬る好機と欺き、三成を引つ張り出します。

さすれば徳川に靡く日和見の豊臣大名たちも三成憎さを建前に時の権勢徳川に安心して従います。

もちろん秀頼君総大将などという梯子はしこは寸前ではずされ、三成は決起の首領として我々と対峙しなくてはなりませんまい」

家康の顔に幾分安堵の表情が戻った。

「天下取りとはかくも難儀なものであるとは、信長公や太閤の苦勞がいまさらながら俚はばれる」

戦国最後の小田原攻めから十数年、国内で大きな戦は行われていなかった。

太閤の治世の中ですっかり平和ぼけした大名・諸侯に、一族郎党の命運を賭して天下の趨勢を決つする気概などとうに失せていた。

今はどつぱり漬かった平和の恩恵を如何に強者に擦り寄って己が宗家を維持継続するかに汲々とする者ばかりとなっていた。

信長が見たらさぞ嘆き悲しむ有様であつたらう。

いまは、その信長直系の秀頼が天下分け目の朱色しよしよの輿こしに担がれよう

と  
し  
て  
い  
た。  
。

## その五十七 三成拳兵

大谷刑部少吉継おおひのぶのしょうきちゅうは越前敦賀から千の兵を率いて会津征伐に合流する途上にあつた。

先行する家康はゆるゆると近江、美濃を抜け尾張清洲で福島正則のもてなしを受けている頃である。

家康からだいぶ遅れて美濃入りした大谷軍は北国街道を南下して関ヶ原に差し掛かつていた。

ここで北国街道は中仙道と交差してこれより先、名を伊勢街道と改める。

行軍の隊列が中仙道を左に折れるところで側付きの湯浅五助が、これより中仙道を東進する旨を吉継にそつと伝えた。

小姓の頃から吉継に仕える五助は盲目となつた主君を気遣い、行軍の様子を逐一吉継に伝えていた。

吉継の脳裏に見渡す限りのすすきの原が続く関ヶ原の情景がよみがえつた。

左手に一番高い伊吹山脈、右手に南宮山、背後に小高い松尾山が見えるはずである。

吉継の目がまだ見えた頃、この関ヶ原を見渡す毎に、いつの日か己が天下を左右する大戦おほいくさを策することがあるなら決戦の場はここしかないと決めていた。

それほどまでにここ関ヶ原は軍略家の吉継には魅力的な地形であった。

中仙道、北国街道、伊勢街道が交差する交通の要所にして、四方を山に囲まれた盆地であり、広大な平野であるにも関わらず田畑は皆無で誰にはばかることなく存分に大戦を繰り広げることが出来た。

北からでも南からでも東からでも西からでも、どこからでも敵を引き込むことも出来た。

ここなら如何な大軍勢を向こうに回しても必ずや勝利して見せる自信があつた。

たとえ相手が二百五十万石の徳川であろうと・・・

大谷軍の一行は昼過ぎに関ヶ原を抜けた先の垂井の城に入った。

垂井の城は吉継の家臣の平塚為広が城主を務める小城である。

ここからなら尾張清洲城までは行軍一日分の行程で家康に追いつくことが出来る。

そのときである。

吉継に追いつがるように火急の書状が京よりもたらされたのだつた。

三本木の北政所に仕える吉継の母、東殿局からであつた。

~~~~~  
宇喜多中納言秀家様、徳川内大臣家康様に対して決起の御様子。そなたは己の信じる処を全うされるがよろしかろう。~~~~~

暗に吉継も石田治部少の下へ馳せ参じよとの意向が読み取れた。

それは北政所の意を汲んだものでもあろう。・・・

吉継は悔やんだ。

宇喜多の決起は本多の次男坊がそのかしたものに違い無い。

宇喜多に入り込む前の政重は吉継の客分であつた。

自分の手元に抱え込んでおれば宇喜多が早計に決起に及ぶことなど無かつたはずである。

ここで上杉に続いて宇喜多までをも失えば、いよいよ徳川の天下となる。つ。

すでに越中前田は徳川の軍門に下っている。

吉継はこのときほど己の寿命がいくばくと残されていないことを呪つたことはなかつた。

吉継も盟友の三成同様、家康の寿命が尽きるのをじつと息を殺して待つ覚悟でいた。

それまでは徳川に靡なびく日和見を演じながら徳川の手の内を探るつもりであった。

吉継の中で何か音がたてて変化した。

吉継は行軍の疲れも厭わず、すぐさま手綱取りと僅かばかりの供回を従えて中仙道を引き返し琵琶湖畔の佐和山へ向かった。

吉継が佐和山城に到着したのは日も暮れてからであった。

予想外の友の来訪をこぼれんばかりの笑顔で出迎えた三成ではあった。

予想に反して佐和山の城内に緊張感は無かった。

本丸の素っ気ない造作の書院で向き合うやいなや吉継は三成を問いただした。

「かくなる上は其の方とて覚悟を決めたのであろうな」

「・・・・・・・・」

三成の答えは無言であった。

「これ以上大老を失うということは徳川に天下を明け渡すということぞ」

三成は重い口を開いた。

「……刑部、某には大公殿下と交わした約束がござる。

内府が如何に専横を強めようとも耐え難きを耐え、忍び難きを忍びて生き残り、内府の死をじっと待つべしと……」

吉継は彼らしくない緊迫した様子で言い返した。

「専横どころではない。ここで上杉、宇喜多を見殺しにいたさば徳川の権勢いよいよ強大となり、もはや誰も逆らえなくなるは必定。豊臣の執政であることを忘れ、自らが東国に政権を打ち立てること相違ない。

そう、江戸幕府である。

その次に豊臣を待つは悲劇しか御座らぬであろう」

「さりとて遺言を授かりしより二年を待たずして戒めを破るは、亡き太閤殿下に申し訳無き事……」

三成の声は消え入りそうであつた。

「治部少、我が面相を見よ。死の淵がすぐそこまで迫つておるのが判るであろう」

そう言つて吉継は顔を覆っていた頭巾を取つた。

ただれて崩れた吉継の顔面があらわとなつた。

目を背ける三成に吉継は尚も決断を迫つた。

「よいか治部少、某の命の灯火尽きぬうちに其の方に少しでも有利

な状況を残しておいてやりたいのだ」

「・・・しかし・・・」

吉継はよく動かぬ手で頭巾を付け直すと落ち着きはらった声で諭すように三成に言った。

「聞け治部少、某には内府を必ず打ち破る秘策がある」

吉継の言葉に三成の後ろに控えた島左近が身を乗り出してきた。

「よいか治部少、そなたはこじつけでも何でもよいから朝廷から徳川討伐の勅命を得ることに全力を尽くせ。朝廷が勅命を出し惜しむようなら大坂城の地下蔵ぐくわの金銀など全部くれてやっても構わぬ。

その上で秀頼様を総大将に徳川討伐軍を仕立てることが叶えば、日和見の大名小名達とて先を争って大坂城に馳せ参じ、城内に入りきらぬ兵馬で摂津界限はごった返すであろう。戦わずして其の方の勝ちである」

吉継の言葉に三成の心に変化が現れた。

「某には朝廷より徳川討伐の勅命を頂戴する伝手が有り申す」

「・・・」

「太閤殿下は某に豊臣家に関する秘密を御遺言くだされた」

「それがどう役立つ・・・」

今度は吉継が身を乗り出した。

「刑部、さすがの其の方とて心して聞かねば腰を抜かすぞ」

「勿体をつけるな」

三成は大きく息を吸い込んで言葉を発した。

「後陽成天皇と秀頼様が共に正親町天皇を祖父とする従兄弟同士であるとしたなら・・・」

「・・・まつことが・・・」

大谷吉継は言葉を失った。

「あいや、それでは太閤殿下は・・・」

「如何にも、誠仁親王の兄で在らせられた。

しかも正親町天皇と妹皇女との間に産み落とされた、特別濃ゆい天皇家のお血筋でも在らせられた」

「・・・何と、・・・いや、さもあろう。

でなければあそこまでの御出世など有り得ぬ。

しかし、しかし何故今まで公にされて来なかったのだ。

それが本当なら如何に内府とて豊臣家に手出しすることなど絶対不可能」

「秀頼様の母方の祖父が問題である・・・」

「小谷の浅井長政ではないか……！……おい、まさか……」

大谷吉継は三成の言葉を待たず真相に達した。

「……」

「察したか刑部」

吉継は見えぬ目で天を仰いだ。

「本能寺か……」

三成は今更ながら吉継の明晰さに感心した。

「御血筋を明かせぬ訳が解ったであろう。今更太閤殿下を主君殺しの謀反人には出来ぬということだ」

「……」

二人の間に長い沈黙が流れた。

天皇家と織田家という、かつて利用し合い、ついに敵対した双方から濃い血脈を受け継いだ秀頼……

その奇跡の血統は何としてでも秘したまま守らねばならぬ。

それこそが三成が太閤より授かりし遺言であった。

長い沈黙を破ったのは三成の方であった。

「これまでの豊臣と朝廷との良好な関係をもってすれば徳川討伐の勅命を得るはさほど難しいことでは無いかもしれぬ。

しかしいざまだ幼き秀頼様を総大将に担ぎ出すとなれば、淀の方と守役の片桐且元の説得という骨の折れる仕事もこなさねばならぬ。短期間にすべて事がうまく運ぶという確証は御座らぬ。

刑部、その勅命と秀頼様総大将の二つが揃わねば我等に勝機は有り得ぬのか」

三成の苦渋に満ちた表情はほとんど視力を失った吉継にも手に取るように判った。

三成には表情の読み取れぬ頭巾の向こうで吉継がにやりとしたように見えた。

「某に秘策があると申したであろう・・・」

三成には吉継が何を企んでいるのかさっぱり判らなかった。

「上杉と宇喜多の決起に触発されて其の方までも拳兵に及べば内府はどう動く」

「待つてましたとばかりに引き返して来るであろう」

「背後に上杉と伊達を残したままでか」

「伊達？・・・」

「如何にも。そなたも正宗の隠しようも無い野心は心得ておろう。徳川の権勢に僅かでも綻びが見えれば伊達政宗は最上や上杉と組んででも北から徳川を討ちに動く。」

徳川は大坂方との決戦で消耗することは許されぬのだ。

そこで自軍はできるだけ使わず温存させ、我ら豊臣大名同士での同士討ちを策謀してくるはずである。

しからばこちらこそを利用させていただくまで」

三成は目の前の目も満足に見えぬはずの男の知恵に啞然とした。

「徳川本体を出し惜しみしたい内府が必ず食いつく餌が御座る」

「あの老獪な内府を欺けるのか」

「我が婿殿に一働きしていただく」

「……真田か！」

「左様、内府は必ず食いついて来よう」

「して徳川本体が大きく欠けるとはいえ、某への恨みに凝り固まった者達とどうやって戦う」

「待ち伏せいたす、その地はこの佐和山からも目と鼻の先である」

「刑部、それは何処いすこなのだ」

「ふふふ、決戦場は関ヶ原と決めてある」

後に大谷吉継が大坂方に寝返ったと知らされたときの家康の動揺は計り知れないものであった。

その五十八 間諜片桐且元

慶長五年（1600年）七月 大坂城

「委細承知し申した治部殿。内府との決戦には必ず秀頼君の馬印を掲げ、初陣にして総大将の名誉を戦勝で飾りましょうぞ」

守役の片桐且元は意外にも秀頼を総大将に担ぎ出すことに諸手を挙げて賛同した。

三成は賤ヶ岳の先駆衆と七本槍として同列にいた且元が、太閤殿下より守役などという閑職に任ぜられたことを不満に思い、

華やかな奉行職の三成に対して反感を持っていたのではないかと案じていたが、それが杞憂きゆうであつたことに安堵した。

「ところで治部殿、秀頼君を総大将に担ぐには淀の方を説得せねばなるまい。

淀の方がまだ幼い秀頼君を勝算も無い戦に差し出すとは思えぬ。

治部殿には淀の方も納得できるような、内府に勝てる秘策でもおありなのか」

且元は淀の方の説得にかこつけて三成の手の内を聞き出そうとした。

まさか徳川の調略の手が豊臣の最深部まで及んでいるとは夢にも思わぬ三成は己の秘策を且元に明かした。

「太閤殿下と御懇意ごこんいであらせられた後陽成天皇ごようせいより徳川討伐の勅命を発していただく手筈てはづに御座います」

・・・・ 何とこの男には朝廷をも自在に操る力があるのか・・・

且元は今更ながら三成の豪腕ぶりに驚いた。

「太閤殿下が御健在の頃、後陽成天皇が聚楽第に行幸あそばされた折、内府は天皇の御前で豊臣家に対して永遠の忠誠を誓っております。

太閤殿下亡き後の内府の専横は、その誓いを反故にしたものと申せましょう。

豊臣と朝廷とのこれまでの良好な関係をもってすれば徳川討伐の勅命を頂くなど雑作の無いことで御座いまする」

もし治部少輔の目論見通り朝廷から徳川討伐の勅命が発され、秀頼を総大将に担ぐ徳川討伐軍が結成されようものなら、いかに権勢を誇る内府とて絶体絶命の窮地に追い込まれよう。

窮地に追い込まれた内府は形振り構わず、秘すると約束した秀頼君の父親が太閤殿下ではないことを公してしまおうである。

・・・ それでは豊臣が立ち行かなくなる・・・

且元は三成との会見が終わるとすぐに内府に密書をしたためた。

三成の企てる徳川討伐の勅命を阻止しうる極秘情報を且元は握っていた。

秀吉に仕える前、片桐家は近江浅井家の重臣であった。

浅井家中で決して表立って語ってはならぬ秘密を且元は知っていた。

秀頼の生母の淀の方は実は浅井長政の子ではなく、かつて朝廷から御敵と呪われていた織田信長の子であることを。

この極秘情報を内府に漏らせば豊臣の名を汚さずに三成の企てを阻止できよう。

勅命が得られずば秀頼君を総大将に担ぐことも困難となるう。

内府様の御温情にすぎり豊臣家を存続させるためには内府様に逆らう危険分子の治部少輔を排除せねばならない。

さすれば己が豊臣の家老として、徳川の後ろ盾により豊臣の舵取りを掌握することになるう。

守役などという閑職に我慢してきたが、最後につきが回ってきたかのようである。

．．． 何よりそれが豊臣家と秀頼君のためである ．．．

且元が己の取り返しのつかない誤りに気付かされるのは関ヶ原から数年の後、不義密通を疑った大野治長がようやく豊臣家へ帰参を許されたときであった。

その五十九 淀と三成

慶長五年（1600年）七月 大坂城

「秀頼君さえ総大将として御出馬いただければ、それがし某必ず内府に勝つてみせます」

三成は幼い秀頼が如何なる大軍勢より勝敗の行方を支配し得る存在であるかを淀の方に説いた。

「石田殿の申されること、女のわたくしとて充分にわかります、しかしながら徳川討伐の勅命を賜たまわることが出来なければ、まだ幼い秀頼を出陣せせる訳にはまいりませぬ」

同じ近江出身の三成には淀が幼い秀頼を戦の矢面に立たせることに躊躇する気持ちは痛いほど良くわかった。

戦に負けた者はたとえどんなに幼かろうと過酷な運命を背負わされる定めを誰よりも良く知る淀であった。

淀は立ち上がって三成の側に降りて傍らに座した。

「石田殿は太閤殿下から直に御遺言を授かっておいでだったのでありましょう」

淀の表情には羨望と寂しさが見て取れた。

「なに、引継ぎようなものに御座いますれば」

・・・ そつではあるまい・・・

「殿下はわたくしの出生について何か言い残してはおりませんか
たでしょうか」

この頃淀は、自分の生まれに疑問を持ち始めていたようである。

三成は淀に何もかも打ち明けてやりたいという衝動をなんとか抑えた。

「宿敵、内府を葬むりし暁にはきつといろいろとお話できるときが
参るでありますよう」

淀は娘のような眼差しで三成を見て、「きつとですよ、佐吉様。そ
のときにはきつとお話下さいませ」

・・・ もし、それが叶うのなら・・・ と三成も思った。

「それはそれはとてもとても長い、途方もなく長き物語で御座いま
す。

全てを語るには幾日かかるかも知れませぬ。またどのような悪い評
判が立つか判りませぬぞ」

すでにその頃、秀頼が三成が淀と通じて出来た子だという噂が徳川
方によって流布されていた。

「徳川を滅ぼした佐吉様に誰が物申せましょうか」

三成は淀が自分を久しぶりに佐吉と呼んだことがうれしかった。

「お茶々様、この三成きつと内府に勝つてこの大坂城に凱旋して参りまする」

お茶々との叶わぬ約束を胸に大坂城を後にした三成は、遅々として進まぬ伏見城攻略に蹴りをつけるべく東に向かうのであった。

その六十 それぞれの誤算

三成は愕然とした。

秀頼が後陽成天皇と同じ、正親町天皇を祖父に持つ血筋であることを頼りに、朝廷から徳川討伐の勅命を得る算段であった。

正親町天皇の代より朝廷の武家伝奏役を務める、勸修寺晴豊は京都所司代に於いて三成にこう申し渡した。

「本能寺の経緯まで知り得た其の方であれば、淀の方の出自についても亡き太閤より聞き及んでいたことであろう。

秀頼が御敵信長の姪の子ならともかく、直系であつては如何に太閤が先帝の御落胤だとこれ以上朝廷は豊臣への肩入れは出来申さん第一、秀頼が太閤の嫡子かどうかも怪しいではござらぬか。

秀頼も猿顔の六つ指だともいうのなら信じられようが、母方に似てすらりとした大そうな美少年というではないか。

織田の血筋は美男美女の家系として名高きことはあまりにも有名」

三成はお茶々の出生については認めつつも、秀頼が太閤殿下の嫡子に相違ないことを重ねて訴えた。

「太閤殿下は某に秀頼様は間違いなく我が子であると申されておりました。

なかなか子が授からぬ御自身にようやく子が授かったは、同じ身の上を持つ淀の方とならではの奇遇に依る処でございます。

治長と淀の方との密通についても太閤殿下は承知の上でそれを許し、治長を当て馬に御自分の嫡子を得る最後の機会に賭けていたので御座います。

朝廷が織田家を許せない経緯いきざしは某も重々承知しております。
しかしながら天皇家と織田家の狭間で苦悩の選択をされた太閤殿下
にとつて、過去の遺恨を乗り越えてこの世に生まれし秀頼君は、
かつては敵同士と争い合つた天皇家と織田家のあまりに純粋な結び
目にございます。
これを奇跡の血統とは思われませぬか、晴豊殿」

晴豊は誠仁親王まことひとの後晴子あきこの父親であり後陽成天皇の祖父でもある。

ある意味、後陽成天皇より天皇家の血統が濃いともいえる秀頼は晴
豊にとつての脅威でもあつた。

それに、・・・ 散々面倒を見てきた関白秀次を切腹に追いや
り、その妻女子息らを三条河原の露と消し去つた三成に対して晴豊
は腹に一念があつた。

晴豊は食い下がる三成を突き放すようにこう諫めた。

「治部殿、此度の朝議に於いては逆に徳川に対して豊臣討伐の勅命
を発すべしとの意見も出されておつたのだぞ。
幾らなんでもそこまではと、天子様の御意向を汲んで退けられ申し
たが、豊臣討伐の勅命が出なかつただけでも合点されておくのが宜
しかろう」

三成は落胆のあまり床に片手を突いてもたれかかった。

「治部殿、徳川は治長どころか其の方こそ秀頼の父親と吹聴して回
つておるとのことである。

長き付き合ひの友人として申す。

この勝負、どう見てもそなたに分はござらぬ。

如何なる不利益を被^じつても、ここは引かれるのが得策でなかるうか」三成はそう言つて諫める晴豊に謝辞を述べるのもそこそこに失意の内に所司代を後にした。

最後に望みを託すべく、向かうは同じ洛中にある北政所^{おひくひなま}の隠居屋敷であつた。

道中青ざめた顔で三成は此度の失策の理由に思いを巡らせた。

「いったい何者が淀の方の出生の秘密を知り、朝廷に密告したのであるうか」

残念ながら三成には全く心当たりは無かつた。

たとえあつたとしても今更朝廷の決定を覆すのは不可能であろう。

一方、全て順風満帆に見えた徳川にも一つの凶報がもたらされてい

すでに味方に取り込んで上杉討伐軍への合流を期待していた大谷刑部少吉継が大坂方に寝返つたとの報がもたらされた。

大谷軍そのものは四、五千であつたが家康が恐れたのは吉継の作戦立案能力である。

しかも三成には当時最高の実力を誇る猛将、島左近があつた。

絶対にこの二人は組ませてもらはないと警戒していた最強の組み合

わせが敵方に出現した事にさすがの家康も狼狽を隠せなかった。

家康はすぐさまの西行きを取りやめ、江戸に残り更なる多数派工作を余儀なくされた。

・・・ 今度の戦は表向き徳川が天下欲しさに仕掛けたと皆に悟られてはならない・・・

あくまで奸臣石田治部少輔三成を豊臣家から排除すべし、としておこなうてはならない。

年齢という内なる敵とも戦わざるをえない家康にとっては勝負の時であった。

「正信、其の方は秀忠と共に徳川本体七万を率いて中仙道を参れ」

そのあまりの突飛な行軍に真意を測りかねる正信に家康は付け加えた。

「上田の真田を餌に秀忠に道草を食わせて上方にはわざと遅れて参れ」

それは正信でさえ考え及ばぬ背水の策であった。

「その方が徳川に味方するか否かで躊躇している輩が、より恩を着せやすくなる。

いよいよ相当な恩賞が期待できるぞとな。

そしてこの家康こそが己が危険も顧みず奸臣三成を成敗しようとする本当の豊臣の忠臣であると。

欲は人の判断を大きく歪めるものである」

正信は自分のような策謀の士がすでに必要ではないのではと思うほど、家康本人が人心を操る偉大な天下人に近づいたと確信した。

しかしこれより先、正信を傍から手離れた事は後々家康と徳川にとって取り返しのつかない損失をももたらすことになるのである。

その六十一 小山評定前夜

慶長五年（1600年）七月 小山

「まこと秀頼君はそなたの子ではないと申すのだな」

家康は正則の面前で大野治長を詰問した。

「福島殿、其の方とて秀頼君がまこと太閤殿下の御子であるかと疑問を持たれておったはずだ」

福島正則は無言であった。

「あれだけの側室が在りながら、あの御年まで子に恵まれなかったということとは、

太閤殿下には子種が御座らぬというのが伽衆あやむしの暗黙の了解事であったというではないか。

それが淀の方が側室に入るや立て続けに二人も身籠みこもるとはどう考えても不自然」

家康は急に穏やかな口調になつて話を続けた。

「太閤殿下から直々に秀頼君の後見を託されたわしである。

たとえ秀頼君が太閤殿下の御嫡子で有ろうと無かろうと、豊臣家の為ために無くしてはならぬお世継ぎである。目を瞑つむるべきは目を瞑つむる覚悟である。

わしなりに秀頼君の本当の父親は淀の方と同じ近江の出の大野治長か片桐且元あたりであろうと推察いたしておった。

しかし且元を秀頼君の守役に任じたのは太閤殿下御本人である。不忠の不義密通者を守役にはいたすまい。

治長本人もこうして否定した今、疑わしきは秀頼君を担いで豊臣を私物化せんと欲する三成しかおるまい。

そういえば福島殿は、三成とは太閤殿下の小姓の頃より共に過ごした同士で在ろう。

何か心当たりは御座らぬのか」

彼ら羽柴家の小姓たちが初めて武将として名を上げたのは、本能寺以降秀吉と敵対していた柴田勝家と雌雄を決つした賤ヶ岳戦のときであった。

三成、吉継ら先駆衆と正則、清正、且元しちほんやうら七本槍は、成り上がり者ゆえ譜代の家来衆など持たなかつた羽柴家に於いて存在を示した。

越前北庄城きたのしやうから、お市様の三人姉妹達が救出されてきたとき、当時十三歳のお茶々姫の美しさに当時若武者だった彼らは皆目を奪われた。

年下の美しいお茶々姫は城も持たぬ彼らには手の届かぬ憧れの存在であった。

間もなく年頃ともなればどこぞの大身の大名に嫁いでいくものと諦めていた。

しかし佐吉だけは諦めていなかったのを正則は知っていた。

一刻も早く出世を果たし、近江の姫に見合う男になってやるのだと。

佐吉のそんな健気けなげな野心を皆で冷やかし、励ましていた懐かしい頃

が彼らにもあった。

それがいつの頃からか袂を分かち、仇のようにながみあうようになってしまっていた。

如何に三成がお茶々様に憧れの気持ちを抱き続けていたとしても大恩ある太閤殿下おやしなまの女房を寝取るなど有り得ぬこと。

もし淀の方と密通した者があるとすれば、目の前の治長しかおるまい。

しかしここで某それがしが賛同すれば内府殿は三成相手の戦がやり易くなるであろう。

明日にも小山こへで三成拳兵に対しての評定が行われるのである。

憎つき三成を抹殺する為には内府殿のお力をお借りするのが得策。

三成さえ豊臣家から排除してしまえば、義理堅く人情に厚い内府殿は豊臣家と秀頼様を悪いようにはいたすまい。

ここは内府殿の御温情におすがりすることが何より秀頼君の御為である。

正則は意を決して意見した。

「某それがしも秀頼様は三成めの子と存じます」

居合わせた治長が正則の言に驚いた表情を見せた。

正則は、このとき一時の感情に捉われ、豊臣家と秀頼を滅亡に導いてしまったことを生涯悔やみ続けることとなる。

その六十二 且元の調略

慶長五年（1600年）七月 大坂城

「淀の方様、弟君の万福丸様の最後をお忘れて御座いますか」

且元のこの一言が淀に秀頼の出陣を思い留まらせた。

淀がまだ近江の小谷城おたりで母のお市と四人の兄弟姉妹達と幸せに暮らした頃、父浅井長政あさいながまさが同盟を解消した信長の軍勢に城を攻められた。落城の前夜、お市と三姉妹は市の実家の織田方に逃れることとなった。

お茶々は織田方の使者として母娘おやこの救出に訪れた藤吉郎の小さな背に背負われて小谷城から逃れた。

父長政は炎上する城を枕に自刃して果てた。

側室が産んだ異母弟の万福丸は助命を許されず串刺しの刑に処され幼い命で果てた。

串刺しの刑とは、生きながら尻から槍を突き刺し槍の穂先が口から出るまで身体を貫き、死に至らしめる残酷な処刑方法である。

幼い万福丸は恐怖と想像を絶する苦痛の中で悶え死んだであろう。

…… 織田を裏切るところなる ……

串刺しにされた万福丸の遺骸は見せしめに戦場に晒さらされた。

近江衆のみならず織田の将兵も信長の冷酷さに震え上がった。

この処刑を任されたのが、お市の浅井家への輿入れを仕切った木下藤吉朗であった。

処刑は兄弟二人共と命じられていたが、お市が産んだ弟の福寿丸は仏門入りの条件で助命が許された。

藤吉朗が市の為にできたのはそれが精一杯であった。

藤吉朗は殺戮さつりくを好まぬ珍しい武将であった。

しかし、藤吉朗の思いは通じず、母市と共に茶々は父と弟の仇と恨み続けた。

実はどちらも茶々とは血のつながりの無い者達である。

戦に負けるということは、たとえ幼い身にさえ、如何に過酷な運命を強いるものか、お茶々は幼心に刻み付けた。

…… 秀頼を弟万福丸と同じ様な目にはあわせられぬ ……

「石田殿に伝えよ、徳川討伐の勅命が得られなかった以上、秀頼を

総大将に差し出すことは出来ぬと」

苦渋の選択ではあったが淀はこれもまた善しと思った。

勅命や秀頼の御威光などに頼る必要など御座らぬ。

内府などに一度でも靡なびいた裏切り者など豊臣にはいらぬ。

この際すべて膿を出し切り膿んだ患部諸共取り除き六条河原にずらりと首を晒してくれよう。

淀は己の身体の中にかくも冷酷な血が流れていることをはじめて知った。

いつも自分を見守り、助けてくれた、石田治部少輔三成であるなら、己が代わりにそれを成せると淀は信じた。

その六十三 三成と北政所

慶長五年（1600年）七月 北政所の京都隠居屋敷きたのまんごうじゆ

「天下無敵の治部少輔殿も万策尽きたといふところでしょうか」

おねねは焦燥しゆうそうしきつた三成から所司代での経緯いきわいを聞き終えるとそう慰めた。

「屋敷を訪ねて来られたときのそなたは死人しひにんの様な顔色でしたよ」
勅命を得られず、秀頼を総大将に担ぐこともままならず、淀と通じて豊臣を私物化する奸臣との汚名まで着せられ四面楚歌の三成は北政所くわんせいまに最後の望みを託した。

とても一人の胸には納めきれない豊臣家の秘密を北政所に打ち明けた三成はいくらか生氣を取り戻していた。

「太閤殿下の出生の秘密を聞かされても、北政所様おふくしんが大して驚かれないことが不思議にございました」

おねねは夫の秀吉の出自について既に推察を重ねそれは概ね正鵠を得るものであった。

「桶狭間や本能寺にまで秀吉が噛んでいたなどとは思ひも至りませんでしたよ。」

信長様の無念の最後やお市様のその後を思うと、お陰で成り上った豊臣にある者として申し訳ない気持ちでいっばいになります」

おねねは豊臣の栄華の影に織田の無念があることを慮おもんばつた。

「佐吉、そなたの申す通り秀頼は織田家と天皇家の奇跡の結び目と云えましよう。」

御屋形様からお預かりした天下を淀の方と秀頼が継がれてゆくのは私にとつても本望。

しかしまあ秀頼は、なんとも信じられませぬ、まっこと秀吉の子でありましたか……」

おねねは淀と秀頼を疑ってきたことを心から後悔した。

「すべて太閤殿下が秘密裏に仕組んだことに御座いますれば北政所様には何の落ち度も御座いませぬ」

三成はこれで淀と北政所のわだかまりが解けると安堵した。

秀頼君の後ろ盾として太閤殿下の御正室である北政所が、再び西の丸にでんと座していただけるなら、二度と内府の好き勝手にはさせない自信があつた。

「佐吉、そなたも気付いておるであらう。家康殿の真の狙いはそなたであるぞ」

おねねは三成に、内府がすでにおねねにも調略を仕掛けてきたことを伝えた。

「秀頼がそなたと淀の子などという戯言ざわいごなど、そなたを知る者なら取り合わぬであらう。」

しかし徳川の権勢に靡なびきたがってうずうずしている者達にとっては、渡りに船の大義名分となりましよう。

たとえそなたが秀頼を担ぎ出したとしても「それ見たことか、豊臣を乗っ取る気だ」、と騒ぎ立てるつもりでしょう」

冷静さを取り戻した三成には内府の謀略に対抗する手立てが見えてきていた。

「かくなる上は刑部の練り上げた戦略を信じて徳川を正面から迎え撃つしか御座いません。

そこで北政所様おひくろにいくつかお願いしたきことが御座います」

非情に徹する覚悟を決めた三成の反撃が始まるうとしていた。

その六十四 ぐれいしあ

「生き様で足跡そくせきを残せる人は幸福であります、私には死に様しか残せるものが無いのですから」

珠たまはその父親に似て類稀な才女であった。

珠と対面した伴天連修道士は、これほど明晰な日本女性と話したことは無いとさえ書き残している。

その美しさと相俟あひまって会う者全てを虜にする魅力を持っていた。

夫は名高き教養人の舅いひぢほどには多芸ではなく、利に敏く粗野な男であったが、並々ならぬ美貌の珠にぞっこん惚れ込んでいた。

しかし珠は夫との間に跡取りまで授かりながらも、夫のことが好きではなかった。

好いた者同士が夫婦いづれになれる世ではなかった。

珠と夫の忠興は当時の主君、織田信長の強い勧めで夫婦となった。

そのとき珠は十五、忠興十六であった。

舅の細川幽斎を織田方に取り込むための政略結婚である。

はた目には幸せそうに見えた珠の人生が大きく狂い始めるのは、十八年前、本能寺に於いて珠の父が主君織田信長を打ち滅ぼす事態となつてからである。

夫、細川忠興は珠の懇願にもかかわらず明智方に加勢することを拒み、それが決定的な要因となり父は筑前守を相手に山崎の関に散った。

かかる事情を珠は父から何も知らされぬまま、父光秀はこの世から去ってしまった。

珠ほどの才女の父である。

織田家筆頭の武将である。

武功のみならず、歌や茶にも素養を發揮した当代一の教養人の父である。

交友関係は広く公家や朝廷に出入りの歌人からも、豪商などの町人からも慕われていた文化人の父である。

何か止むに止まれぬ事情があつたに相違ない。

珠はどんなに謀反人の娘呼ばわりされ、苦難の人生を強いられようと父を恨む事は一度たりとも無かつた。

二年にもわたる幽閉が解かれ我が家に帰されても、偏執的な夫は一切の外出を許そうとせず捕われの身であることに何ら変わりは無かつた。

毎日毎日一時一時ときが針の筵しじみに座らされているようで、地獄で永遠に苦しむとはこういうことかと一人思った。

いつの日にかこの国にも女が自由に外出できて、己が才覚で稼業を持ち、好いた男と結ばれるような世が訪れることがあるのなら、ぜひそんな世に生まれ変わってみたい。

そのときにはきつと高山右近様のような方と結ばれてみたい。

”ぐれいしあ”はそのような生まれ変わりの人生など、天主てんしゅの教えには無いことを思い出し、死に様に己が人生の全てを賭けようとするのであった。

その六十五 殉教

「私は”ぐれいしあ”とも呼ばれるのです」

珠は殊更じゆくわい平静に家老の小笠原秀清に言った。

珠は密かにぐれいごりお神父の手により洗礼を受け”ぐれいしあ”という洗礼名を授かっていた。

すでに細川屋敷は三成の遣した五〇〇の軍勢で取り囲まれていた。

「奥方様と御同道できるのでしたら、黄泉よみへの旅路もまんざら捨てたものでは御座りませぬ」

珠は自分の為に命を捧げる者が、こんなに身近にいてくれたことに、今まで気付かずいたことをすまなく思った。

「某もすぐにお供仕ります」

きつと珠の父、光秀の周りにも最後まで父を見捨てずに運命を共にした家臣が大勢いてくれたのであろう。

「某のように多ぜい人を殺めてきた者には奥方様の行かれる天国とやらまではとても辿り着けませぬが、

地獄の鬼共が奥方様に悪さをせぬよう閻魔大王の前まではしっかりと護りいたしまする」

珠は信教の異なる小笠原が精一杯自分を慰めてくれる言い様が悲し

くもおかしくうれしかった。

「ぐれいしあ様、御心配には及びませぬ、怖い思いも、苦しい思いも一切感じぬようにお見送り致しまする」

小笠原は珠の小さな祭壇を壁の際からぐつと前に引き出して、障子との間にやっと一人座せるぐらいのまで移動した。

珠は促されるまま障子を背に祭壇に向かって座し、祈り始めた。

小笠原は障子の向こうの闇の間で片膝を付いて控え、腰の長刀を音がしないようにそおっと抜いて身構えた。

祭壇のろうそくの明かりで障子に珠の等身大の影が投影されていた。珠の祈りが佳境に入ったと察した小笠原は、意を決して障子越しに珠の背後から心の臓を目掛け一突きにした。

切っ先は何の抵抗も無く珠の柔らかな身体を深く貫き心の臓に達した。

すぐに刀身に珠の体重がのしかかってくるが、小笠原は珠の身体が崩れるに任せて刀身を抜いた。

傷口は極少で心の臓を貫いたのにも関わらずほとんど出血は見られなかった。

見事な介錯である。

小笠原は珠の僅かに乱れた裾を直して遺骸を祭壇の前に横たわらせ

た。

抜き身を鞘に収めると小笠原はいつも珠がしていたのを真似て不器用に指を組んで祭壇に短く祈りを捧げた。

全ての罪人を許すという奥方様の信じる天主てんしゅの神よ、もし奥方様に僅かでも罪が在るのなら全て己が引き受ける故、

哀れな明智珠を極楽浄土へ誘い、出来ることなら何のしがらみも無い来世に甦よみがえらせたまえと。

その六十六 因果応報

「治部少輔様に申し上げます。細川家の明智珠様^{たま}、屋敷に火をかけ御自害に御座います」

・・・ぬかった・・・

三成は珠の捕縛を与力に任せたことを心底後悔した。

この事態が東軍に伝わり、徳川に従う豊臣大名達が己に対して更に憎悪を燃やすのは明白であった。

・・・よりによって細川の珠様が御自害とは・・・悲劇に過ぎよう・・・

三成は珠が密かに切支丹に帰依していた情報を掴んでいた。

切支丹であれば教義により自害は在るまいと侮って与力に捕縛を任せきっていた。

三成にとって珠は人質として最も利用価値が高い妻女だった。

細川忠興の珠に対する執着は尋常の域を超えていた。

それ故に此度の悲劇により忠興の怒りもはや何人も留める方策が見つからないであろう。

三成は最早^{もはや}これ以上大坂城に東軍の妻子を呼び寄せることを断念せざるを得なかった。

大名家の妻女たちに圧倒的な人気と影響力を持つ北政所様おふくろに西の丸に入っていただけ、豊臣大名の妻女たちを説得していただき、それをもって大名連中を東軍から引き剥がす計画であった。

秀頼君の御出生に何の疑いも無き事。

淀の方きたのまんどころと北政所様が仲睦まじく秀頼君を愛でている姿を見せ、豊臣家の家内も跡継ぎも磐石であることを夫達に妻自身の筆で伝えさせ豊臣家への帰参を促す算段であった。

珠の非業の死によって、全て御和算どころか状況が更に悪化してしまった。

明智の無念の怨念がこんなところで豊臣家を危機おとしに陥れようとは、三成は己の運の無さを呪い、因果応報の宿命を感じずにはいられなかった。

その六十七 信長の娘

「危うきところであった。これで安堵して江戸を出立させた。」

江戸城にて各地の大名諸侯に多数派工作を仕掛ける家康の元に片桐且元から朝廷工作の成功と秀頼不出馬を知らせる密書が届いた。

最初に家康の元に且元より喫急の密書が届いたのは、上杉討伐に向かう途上の駿府でのことであった。

・・・ 治部少輔に徳川討伐の勅命を得ようとする動き此れ有り。

捨てておけば勅命が発され、秀頼君が担がれる恐れ大なり。

勅命を止める秘策、我に有り・・・

淀の方が織田信長の実の娘であるという極秘情報を且元は家康に漏らした。

秀頼が御敵信長の直系である秘密を利用すれば、徳川討伐の勅命は容易に止められるであろうことも。

そもそも家康は勅命をもって上杉征伐に赴く途上であった。

その勅命を覆す徳川討伐の勅命発令は朝廷にとっても無理を押ししての側面があることは否めなかった。

僅かの綻びでも朝廷が躊躇するは必然であつた。

実は家康も浅井あらいの長女の出生には以前より疑いを懐いだいていた。

家康の三男、秀忠の正室には浅井の三女、お江こゝろが嫁いでいた。

お江に、姉の京極高次正室が次女にもかかわらずなぜ初と名付けられたか問うても要領を得なかつた。

淀の出自を知つた家康の頭には、東軍を有利に導く新たな調略の一手が思い浮かんでいた。

それは淀が由緒有る浅井家あらいを滅ぼした張本人の娘であることを利用するものだった。

かつて今川義元の先鋒として大高城に在つたとき信長が家康に示した調略。

……元康は織田の二つの砦を攻める大儀名分で今川本隊には戻らず大高城に留まられよ……

かくして信長は手薄になつた義元を正面突破で討ち取つた。

今度は家康が砦とりでの砦を用意する番である。

その六十八 囷の誓

大津は琵琶湖の一番南にあつて京にも近いことから湖上物流の中継点として平安の頃より栄えていた。

湖岸に隣接するように普請された大津城は港湾設備を守る為の城塞である。

成り立ちが商業目的の平城のため特に堅固な造りとは云えなかつたが、湖面を背にした立地ゆえ、いざ籠城となれば攻め手にとっては厄介な砦になり得ると家康は見抜いていた。

「いよいよ大津城の出番である」

上杉征伐に向かう途上、大津城に縁戚の京極高次を訪ね一晩の宿としたとき、家康はそう心に留め置いた。

京極家は浅井が台頭するまでの北近江の支配者で、元々は浅井は京極家の配下にあつた。

浅井は信長に滅ぼされ。京極は秀吉に敗れたが、高次は絶世の美女との誉れ高い妹の童子を秀吉に差し出し大名として生き延びた経緯がある。

秀吉も高次の正室に淀の妹の”お初”を受け縁戚関係を強めた。

高次は妻の姉が大坂城の主の淀の方で、妹のお江が家康三男の秀忠正室という微妙な立場に立たされていた。

ところで家康には、大坂方との決戦に及ぶに至って、敵には回したくない武將がいくつかあった。

石田家中の島左近は致し方ないにしても、会津遠征に加わるはずだった大谷吉継が大坂方に寝返ったのは大きな痛手だった。

そしてもう一人、最も気掛かりなのが筑後柳川城主の立花宗虎（後の宗茂）である。

九州の強国、島津をも打ち破ったことがある戦上手の立花宗虎は動員力も一万以上が見込まれ、対決は何としても避けたかった。

今度の戦は表向き徳川が天下を狙って仕掛けた私戦と見られてはならない事情があった。

あくまで豊臣家を私物化しようとする奸臣、石田三成を排除する豊臣大名同士の内紛が名目でなくてはならない。

万が一にも秀頼を担がれないために。

だからこそ徳川本体の七万をわざと遅参させ、戦闘は豊臣大名達に任せ家康は見守り役に徹しようとしているのだ。

狙うは、石田治部少輔三成の首ひとつ。

三成さえ排除してしまえば豊臣家の実権はすでに家康の手中にある。

豊臣政権の中枢に座して如何様にも天下を仕切れる。

此度の戦では戦力の均衡が何より大切である。

立花家の一万はその強さから、他家の三万と見込まなければならぬ。

宗虎に参戦されては、秀忠率いる徳川本体の七万も加えた総力戦で望まなくてはならなくなる。

徳川の圧倒的な陣容に三成が怯み、講和に動いてしまつては元も子もない。

如何に三成を欺き、己が有利と思ひ込ませ、美濃みの近江おうみ境まで引きずり出すか。

三成を大垣城までおびき出せばしめたもの、居城の佐和山城を背負えばおいそれと退く事もままなるまい。

如何に切れ者の三成でも己の居城を落とされるは許容できるものではない。

「ここは大津城を囿の砦に仕立てられるかが天下分け目である」

その六十九 浅井の姉妹

大津城に井伊直政の使者が大坂方の目を避ける為に船頭を装って訪れたのは、高次が西軍の一武将として大谷吉継と共に北陸の守備に赴く前日のことであつた。

「京極殿に徳川内大臣様より何卒東軍への御加勢の儀を、お願い致したくまかり越しました」

微妙な立場にある高次は迷惑に思ったが使者を丁寧に出した。

すでに大坂方が支配を固めている南近江まで辿り着くにはさぞ命がけであつたらうと察せられた。

使者は前置きも無く口上を述べた。

「京極殿には東軍先鋒として大津城に籠もり、大坂方諸將の足止めを致されるようにとのご依頼に御座います」

高次は困惑して問い返した。

「内府殿は孤立無援で某に捨石になれとでも仰せか」

使者は懐深くから一通の書状を取り出すと高次に差し出した。

「徳川秀忠様御正室より、奥方様への書状に御座います。先ずは奥方様と共ににお読みになつていただいた上で、ご返事をたまわれとの言い付けに御座います」

高次のこれまでは失敗続きの人生であった。

鎌倉より続く名家であったのに浅井に領国を奪われ、明智については負け、いつも負け組みに身を置いてきた。

今度ばかりは負けるわけにはいかぬ。

高次は兵員の動員数、総石高、地の利、それに秀頼を奉じる大儀名文があることからいっても当初から西軍が優位と見ていた。

皆は嫌っているが治部少輔とは同じ近江の育ちで気が合ったし、隣国の誼よしもある。

つい先日も酒を酌み交わし固く同盟を誓ったばかりである。

心は変わらぬ。

高次は使者から書状を受け取ると、妻のお初が控えし五層四重の天守に一旦消えた。

小半時もたたずして高次は使者が待つ書院の間に返した。

使者は近づくと高次の踏み鳴らす力強い足音を聞いただけで色よい返事が得られることを確信していた。

「内府殿の策をお聞かせ願おう」

高次は先ほどと打って変わって前のめりに使者の話聞く態度を示した。

はたして三女お江から姉お初への書状には長女のお茶々の出生の秘密が語られていた。

舅の家康がお江しゅうに書かせたものである。

・・・・ 姉上様、近江と江戸に遠く離れ離れに居ようとも、われら浅井の姉妹の絆には些かの翳りも御座いませぬ。

ただ、残念ながらお茶々姉ねえには浅井の血は一滴も流れておりませぬ事が判り申した。

お初姉は大坂城のお茶々姉に御味方なさるか、それとも私がおります徳川に御味方なさるかで御腐心なさっておることと存知ます。しかし、御迷いになるには及びませぬ。お茶々姉の父親は我等の父と兄の万福丸を無残に殺あやめた織田信長その人にございます。

兄上の無残な最後をよもや姉上は忘れてはありますまい。どうか越前北庄城きたのしょうで母上かみが申し残されたお言葉を思い出して下さいませ。

『決して浅井の血を絶やしてはならぬ・・・』母上は何度も私達にそう言われました。

浅井の血を受け継ぎしは姉上様と私だけに御座います。

そここのところくれぐれも御勘案下さいますようお願いいたします。

・
・
・

高次のこれまでの人生もひたすら京極の家名を残す為だけにあった。

妹の童子を秀吉に差し出してまで保ってきた京極家である。

お初と高次の宿命が一致した以上もはや迷いは無くなった。

・
・・・・ 今度ばかりは付く相手を間違えるわけにはいかぬ
・
・

お江^{お江}からもたらされた淀の方の出生の秘密は、お初をして夫高次を徳川に向かわせた。

その七十 無敵の鉄砲隊

「太閤殿下の恩義を忘れて徳川に味方するぐらいなら死んだほうがましである」

立花宗虎はそう公言して領国の筑後柳川ちくごやながわからはるばる大坂に参陣していた。

すでに鳥居元忠が籠もる伏見城は宇喜多、小早川らによつて落とされた後であつた。

宗虎は新たな獲物を狙つて徳川方に付いた伊勢の諸城を攻略すべく津城、松阪城を目指して大和の国を南下していた。

伊勢の小城の数々など数日で落とし反転北上し徳川軍を美濃界隈で近江方面と尾張方面の南北から挟撃する手筈であつた。

徳川家謀臣の井伊直政の使者が接触してきたのは伊勢に向かつて伊賀山南部を山越えしようかという直前であつた

「内府殿には何十万石積まれても御味方出来ぬと返答済みである」

宗虎は取り付く島もない口調で使者に申し渡した。

使者の口上は果たして予想外なものであつた。

「此度、徳川内大臣様の御言い付けでまかり越しましたは御味方へのお誘いでは御座り申さん。

立花宗虎様は裏切りを企てるであろう京極高次殿を大津城にて御討

「ち下さいませ」

「何！・・・」

宗虎は使者の目配せ具合でその申し出の真意を即座に読み取った。

その場で使者を切り捨てようと思えば切り捨てられた。

「熟考するゆえしばし待たれよ」

宗虎は使者を接見の場に残し、一人静かな本陣の裏手に座して思索した。

頑なに信義を重んじる理想主義者の宗虎は、後の世に太閤の恩義を忘れ豊臣を見限った裏切り者と呼ばれることを何より嫌った。

それに宗虎には相手がどんな大軍であろうと必ず撃破出来る無敵の鉄砲隊があった。

勇猛で知られる島津軍だろうと、五万の明軍みんだろうと宗虎の敵では無かった。

宗虎の父、立花雪道せつどうは必勝の鉄砲速射術を編み出していた。

一射分の火薬と弾丸を油紙に分封した包みを入れた竹筒たけづつを、帯状に鉄砲隊の肩から袈裟けさがけ架けさせ、他家ではまねの出来ない速射を浴びせかけ敵陣深く突撃することが出来た。

云わば紙製の薬莖やくきょうである。

立花家の鉄砲隊には指揮官の”撃て”の合図など存在しなかった。

射手は各々玉込めが済み次第、次々と連射し発砲音が途絶えることなど無かった。

相手方にすれば隙間無く打ち込まれる弾丸に次々打ち倒され制圧される状況にたちまち総崩れとさせられてしまう。

宗虎は当時唯一人、鉄砲を突撃銃として活用した武将であった。

通常、野戦における鉄砲の使い方は緒戦に於いて押し寄せる敵の騎馬や槍隊の威力を減じるのが目的で使われ、双方入り乱れての混戦となるに至っては無用の長物であった。

鉄砲隊は遠距離から一射か二射して混戦になる前に後方に退き、また射撃の機会を窺うという使い方であった。

高価な鉄砲を敵に奪われないように突出させないのが常道であった。

鉄砲隊を主戦力として突撃に使いこなしたのは宗虎の軍勢だけであった。

家康は何よりそれを恐れた。

立花の二千丁の鉄砲は他家の壹万丁の鉄砲にも値すると恐れたのだ。

このことを家康は朝鮮出兵で宗虎と共同して戦ってきた清正から聞いて知っていた。

武断派と険悪な三成に、このことを知らせる者があつたのかは疑問である。

宗虎は柳川の立花山城たちばなやまに留守居とした家老の薦野増時こものますときの言葉を思い起こした。

「立花家に御幼少の殿を養子にいただくことを決めたのは、御先代の道雪様と某それがしでございます。

殿は我らの期待に違たがわず御立派に成長され、今やこの日の本随一の武将になられたと確信しております。

しかしながその殿をして今だ欠けておるものが一つございます。

”親の心”でございます。

跡目のおられぬ殿にとつては、己が武人としての名誉が全てでございます。いましうが、臣従する家臣達には皆それぞれ妻や子がおります。筋を曲げてでも妻子は守る”ということもこの世の中では正道なのでございます。

殿が鍛えし立花勢が如何に強かろうとも津波のように押し寄せる軍勢には飲み込まれてしましましょう。

此れ時の勢い、時流でございます。

如何に太閤殿下に御恩義あれど、今は徳川様の時流でございます。皆、そう心得ておれば面従腹背で従ごうておるので御座います。

殿と共に明軍と戦った、あの勇猛奇烈な加藤清正殿とて。

今は耐え難たきを耐え偲び難きを偲び、立花一万参千の精鋭を温存し、秀頼様の御成長を待たれるのが太閤殿下への忠義と一族郎党の為で御座います」

直政の使者がもたらした条件は宗虎の自尊心と立花家の安泰を両立する絶妙なものであつた。

「秀頼様さえ御健在なら家康の失せた徳川など某がいつでも討ち果

たしてくれらる」

宗虎は使者を帰すと、隊列を元来た方向に転進させるて南近江の大津城に向かわせたのだった。

ここに家康に理想的な勝利をもたらす関ヶ原最大の調略は成就した。

その七十一 京極高次の決意

「越前敦賀から美濃に向かうはずの京極高次が大津城に舞い戻り、武器食料を運び入れ籠城の支度を始めた。東軍への寝返りである」

この知らせを大坂城にもたらしたのは、伊勢に向かう途上の立花宗虎からの使いであった。

大和南部まで進軍していた立花軍が、なぜ琵琶湖の情勢に気付いたのか疑うような切れ者はすでに大坂城に不在であった。

石田三成はお飾りの西軍総大将である毛利輝元を大坂城の留守居役に残し、すでに大垣城まで進軍していた。

東軍との決戦がいつ始まるかも知れないときに、背後の大津に兵力を差し向けるわけにはいかなかった。

自然、大津城には大坂から後発隊として三成に合流するはずだった、後詰めの毛利元康、小早川秀包ら毛利一門が赴くこととなった。

迎え撃つ京極方にも万事抜かりは無かった。

はじめから勝利など見込めない持久戦である。

高次は普段らしからぬ大音声で、「見渡す限り焼き尽くせ、刈り尽くせ」と命じた。

敵の大軍に城郭ごと包囲されるのは致し方無いにしても、敵方が雨露をしのげないように付近の建物はことごとく焼き払われ、井戸

には汚物が投げ入れられた。

収穫間近の田の稲も全て刈田してしまった。

領民達の不満はこれ以上無いほど高まったが、高次は一向に気にならなかった。

「もはや大津は我が領国に在らず」

街道の街としてにぎわった大津の城下は一面の焼け野原となっていた。

京極高次の覚悟の程がうかがい知れる有様であった。

九月七日に一番手に到着した毛利元康はその光景を見ていやな予感がした。

…… 此れはたかが宿場町の平城と侮れぬやも知れぬ ……

毛利元就の八男にして輝元の叔父の元康は、毛利の為にはそれもまた善しと思うのであった。

…… 此処で時を空費しておれば大垣に行かずとも済むということか ……

行き掛かり上西軍に属してはいても、本気で徳川と戦う気概を持つ者は実はそれほど多くは無かった。

その七十二 攻防大津城

「大津は西軍を分裂させる為の内府の囷である」

大谷吉継は敦賀から後発して来るはずの京極高次が途中で離脱して水路、大津城に舞い戻った知らせを受けると、高次が徳川の調略により囷になった事を即座に見抜いた。

このまま大津に突出した形で籠られては戦意の乏しい西国大名達の格好のありばい作りに利用され、西軍戦力が殺そがれてしまう。

吉継の動きは速かった。

大垣城の三成に急変を知らせ、大坂城の毛利輝元はじめ大津城を取囲もうとする諸将には監視の人数だけを残してすぐに大垣城に合流するように催促する書状を發した。

遅れて大垣城の三成からも各将宛に大津に留まらずに即座に大垣城に集合する旨の書状が發せられたがこれらは故意に無視された。

伊勢經由で尾張、美濃と北上して合流するはずの立花宗虎まで大津に馳せ参じて僅か三千の城兵に二万以上の攻め手がたかる情景は如何にも不自然で不合理であった。

「目前の裏切り者を後方に残して先には進めぬ」、というのが立花勢はじめ諸將の言い分であった。

皆、徳川との直接対決の場に居合わせたくないという思惑が見え隠れしていた。

反面、包圍軍の大津城への攻撃は、ありばい作りの停滞と悟られない様に一見苛烈を極めた。

立花勢は当時まれに見る塹壕を掘り進んでの得意の鉄砲射撃を大津城に浴びせ掛けたが、突撃も無い射撃をいくら浴びせても城門一つ破壊できず時間は刻々と過ぎた。

毛利元康に至っては大筒まで持ち出してきて向かいの山上に引つ張り上げて城内に打ち込んだが、当時の大砲は命中率は絶望的で口径も小さく炸裂弾でもなかったのでたまたま城内に落ちてても直接兵士に当たらなければ損害は皆無であった。

本気で城内を制圧したいのであれば、わざわざ手間をかけて重たい大砲を山上などに引つ張り上げず、城門を正面から討ち抜けは良いのである。

ただし、大筒の派手な発射音は如何にも盛大に攻め込んでいるという演出には一役も二役も買っていた。

すべては本心を隠す為の本気のふりである。

こんな状況では大津城如きを鎮圧するのに幾日要するのか不明であった。

三成が手を下すまでならだと攻めあぐねた伏見城の二の舞になるのは明らかだった。

攻め手の心理を読んでいた吉継は同時にもうひとつ手を打っていた。

それは、吉継の母の東殿局ひがしどのを通じて北政所きたのまんどころを動かし、一刻も早く和睦による開城を実現させることであつた。

開城させてしまえば西軍諸将も進軍せざるを得なくなる。

かくして久方振りに北政所の政治手腕が発揮されることとなるのであつた。

その七十三 北政所動く

「孝蔵主、佐吉が助けを必要としておる、急がねばならぬ」

おねねは大谷吉継の知らせにより京極高次の寝返りを知ると、大坂方の足並みに乱れが生じ徳川との決戦を直前に控えた三成が戦力不足に陥ることを危惧した。

徳川に靡なびいている豊臣ゆかりの大名達の妻女を大阪城に呼び寄せ、夫達を豊臣家に帰参させようという三成の策は、細川忠興正室明智珠の死の抗議の末に破綻していた。

大名家の妻女たちに圧倒的な人気と人望がある北政所が、不仲と噂される淀の方と仲睦まじく秀頼君を愛めでる姿を妻女たちに目の当たりとさせ、

豊臣のお世継ぎにも北政所のご機嫌にも何ら問題の無いことを妻君達の筆で知らせ、暴走する夫達の目を覚まさせるはずであった。

「明智珠さまの御自害は、明智を討って天下を取った豊臣への死の抗議であったのでありましょう、織田や明智の無念の上に成り上がった豊臣にとっては因果応報であります」

豊臣の暗部を知った北政所はこのまま豊臣が衰退したとて致し方ないとも思えた。

「珠さまの抗議は豊臣だけに向けられたものとも云えますまい。義父である明智様に味方するのを拒んで、秀吉様に靡いた細川忠興様の日和見の姿勢が今も何も変わっていないことへの絶縁であるとも思えます」

連れ合いを持たない孝蔵主が珠に共感するのは、共にこの時代に女として生まれるにはあまりにも才能に満ち溢れた者同士であるゆえだろうとおねねは思った。

おねねは大阪城で珠に会えたなら、父親の明智光秀がなぜ御屋形様を本能寺で討たねばならなかったかを話してやろうと思っていた。

理由も知らされず、父を奪われた珠の悔しさを思うと、それぐらいのことは許されようと思った。

真相を知った珠が、今更父親の名誉を回復を図るとも思えなかった。

ただただ、尊敬する父親が重大事じゅうじゅうだいじに及ばざるを得なかった、止むに止まれぬ事情を知りたかつたであろうと。

何も知らされずに命果てた明智珠が哀れでならなかった。

おねねが今もつとも気掛かりなのは甥の小早川秀秋の動向だった。

緒戦の伏見城攻めにおける小早川軍のやる気の無さは西軍中でも評判が悪く、秀秋が心情的には東軍に属しているのは公然のことであった。

かつて跡目のいない秀吉が豊臣家の跡取りとして、おねねの兄の子を養子にしたのが秀秋であった。

後に側室に入ったお茶々が鶴松を産むと、用済みになった秀秋は秀吉の忠臣で子の無かつた小早川隆景の養子に預けられ、知る者もな

い九州で寂しい少年時代を過ごした。

太閤の数少ない縁戚である秀秋は小早川家で大切に扱われ、秀秋にとっての安住の地はもはや木下でも豊臣でもなく小早川であった。

後に北政所よりも、豊臣よりも、自分を大事にしてくれた小早川の家臣達に報いたいと思うようになるのは自然なことであった。

北政所は幼い頃の秀秋をあまり可愛がらなかったことを後悔していた。

自分に子が授からない故に貰い子をしなければならぬ己の境遇が許せなかったこともあった。

武家の、しかも頭領の政所として、もっと秀吉の跡目作りに理解を示せばよかったのかとも悔いた。

秀吉の臨終の際きわに既に成人した跡目があったなら、皆、何の苦労も無かったものを。

やはりあの頃に佐吉をわが子としておればよかった・・・

おねねは少年の頃の佐吉を養子にと何度も秀吉にせがんでいた。

成り上がり者ゆえ譜代の家臣など皆無に等しい秀吉は、跡目よりもかく有能な部下を必要としていた。

佐吉は有能に過ぎた。

しかも清正や正則も同じような境遇で手元にあった中、佐吉だけを

特別扱いするわけにもいかなかった。

…… 嗚呼、何もかも秀吉と同じ、いやそれ以上の才能を持つ三成に豊臣の後継者の地位があつたなら、人に好かれぬ堅苦しい欠点も全て君主の徳として崇められたものを ……

おねねは三成が豊臣の後継者の座に据わり、若侍の頃からひそかに思いを寄せていたはずのお茶々を妻に迎えてやっておれば、何と素晴らしき未来が豊臣家に開けていたことかと心の底から悔やむのであつた。

北政所は懇願するかように孝蔵主に命じた。

「そなたの力で豊臣の息子を助けてください。大坂城などに立ち寄つても埒が明かぬ、すぐに大津へ向かい京極高次を説き伏せて和睦に導くのです。

高次の正室の初には油断めさるな。徳川と通じておるのは初の方やも知れぬゆえ。

高次が何を言つても言つことを聞かぬようなら当家の客を出汁だしに使つて脅しを掛けるが良い。

” 田楽刺し ” と聞けば高次も悪い夢からも覚めるであろう ”

北政所の屋敷には戦火を避けるため洛中に非難していた京極高次の妹、竜子が客として逗留していた。

その七十四 女傑

慶長五年（1600年）九月一四日

昼夜休まず大津城を包んでいた銃声と砲声がしばし止んだ。

北政所の女官、孝蔵主いっそうすが高野山の木食もくじき応おう其上いしやう上人じんにんを伴って、休戦の静寂のなかを大津城最後の砦となった天守各を訪問したのは九月一四日の夜半のことであった。

城内にも攻め込まれ、本丸だけを残すに及んでも京極高次は頑強に和睦を拒み続けていた。

大局はすでに決しているにも関わらず、攻め手側の毛利も立花も北に向けて一向に進軍しようとはせずに大津にしがみついていた。

大垣城では今にも西軍と東軍の決戦の火蓋が切って落とされるやもしれぬ緊張が続いていることであろう。

…… 時がかかりすぎておる ……

孝蔵主は心中は急せいていたが努めて平静を装った。

何発か命中したうちの一発がたまたま天守の屋代骨を打ち碎き三層目から上が傾いていた。

会見は埃が舞う天守の一階の広間で行われた。

高次夫人の初は同席しなかった。

女の出る幕では無い。

沈黙を破る形で孝蔵主が口火を切った。

「京極殿の此度の遣り様には北政所様は大変ご立腹であらせられる。一度は盟約を結びし治部少輔殿を裏切り内府に鞍替えするは名門の誇りを汚す行いでありましょう。

たとえ東軍が勝とうとも北政所様と内府様が大変に御親密なのはご承知であろう。

如何に御正室が徳川家と縁戚だとして北政所様の御意向を内府殿が無視出来ようか。

内府殿にいくら恩を売ったつもりでも内府殿とて豊臣家の家臣、北政所様が御健在である限り天下を我が物と出来るとお思いか」

北政所様も御味方であると家康に吹き込まれていた高次は、北政所が治部少輔に肩入れし自分に立腹であると聞いて慌てた。

孝蔵主はなおも、「京極家が今あるは太閤殿下の御温情の賜物であることを高次殿はよもお忘れであったか」と問い詰めた。

孝蔵主の怒気に負けじと高次はむきになって答えた。

「某、豊臣家の御為を思い奸臣石田三成を討つべく孤軍大津に決起するに及んだので御座る」

高次の頬はふるふる震えだした。

「ほう、石田殿を奸臣とな」

「左様、太閤殿下を欺き淀の方と通じ、己が子である秀頼を豊臣の跡継ぎに据え、豊臣を乗っ取る悪人を奸臣と呼んで何が悪い」

激高した高次はそばに控えた重臣達の静止を振り切つて一気に言い切つた。

孝蔵主は高次に徳川の調略の一端を云わせた。

「京極殿、そのような話一体誰から吹き込まれたでありますか。長年大坂城の奥を取り仕切つてまいつたこの孝蔵主に、そのような戯言ことば通用すると思いか。さあ、一体誰から聞いたのじゃ」

高次はさすがに内府から聞いたとは口が裂けても言えなかつた。

言えば家康の立場を危うくすることになる。

「さしたる根拠も無く、亡き太閤殿下も北政所様も御信任厚い治部少輔殿を奸臣呼ばわりし、豊臣の跡継ぎである秀頼様を愚弄した上はそれなりの御覚悟は御座るうな」

簡単に高次は追い詰められた。

女と思つて甘く見たのが災いした。

たとえ近江美濃境で東軍が勝利しても自分は助からぬかも知れぬ。

孝蔵主は今度は静かに諭すように高次に言つた。

「北政所様は直々に”豊臣の子、三成を守れ”と申された故、私はゆえこうして参つたのだ、京極殿は北政所様も奸臣の仲間とお討ちにな

ると申すのか。

それに、かつて京極殿と同じように盟約を破り滅んだ名家がこの近江にあった事をご存知であろう。

その名家の世継ぎがまだ幼いにも関わらずどのような惨い目に逢わされたかも。

私が色よい返答を持ち帰らなければ、妹御いもぎみの童子殿も即刻”田楽刺し”に処せらると覚悟致すがよい”

これには高次も怖気付いた。

近江出身の高次にとって、”田楽刺し”と聞いただけで恐怖の光景が蘇る。

織田信長に浅井が滅ぼされたとき、長政長男の幼い万福丸は惨むじたらしい田楽刺しに処せられ戦場いくばくばに晒されたのであった。

浅井に続いて京極も秀吉に敗れ、高次は秀吉の側室に妹の童子を差し出して一命を助けられていたのであった。

戦火を避けるため洛中に退避させたはずの童子は今、北政所の手中にあると。

高次の抵抗もはやここまでであった。

かつて自分のために身を捧げた童子を惨い目は逢わせられぬ。

「致しかたありません、和睦を受け入れます。ただし某の仏門入りをもって家中の者達への仕置きはご勘弁くださいますな」

孝蔵主は頷いた。

「では早速、今宵のうちに剃髪して御退去頂けましょうか」

高次は着替える間も与えられず木食もくじ応おつし其上じゆうじやう人の付き人の僧しゆうに剃髪され戦陣衣のまま城外に連れ出された。

城内外を取り囲む毛利方、立花方の兵士達の合間を掻き分ける様に、僅かばかりの供回りと共に久方ぶりに城外に出た高次は七日間の猛攻に耐えた大津城の天守各を見上げた。

…… おそらくこれで充分であろう、これ以上竜子までは巻き込めぬ ……

大津から高野山までは三〇里の道のりである。

高次一行が高野山に到着したのが九月一八日であった。

家康からの第一の使者が高野山を訪れるのはそれから僅か五日後のことである。

その七十五 宗虎北上

京極高次の投降を見届けるとすぐさま孝蔵主は城塞と目と鼻の先にある立花本陣を訪れた。

すでに大津城の開城と高次の投降を知らされていた立花本陣は戦勝気分が緊張が緩んでいるのが素人目にも明らかだった。

あたり一面焼け野原の殺伐とした戦場には似つかわしくない女人の到来に立花本陣はどよめいた。

あの女が強硬に開城を拒む京極高次を説き伏せ投降させた女傑かと、本陣をのぞきに來る者が引きも切らなかつた。

「まるで内府殿でも討ち取ったかのような浮かれようで御座いまするな」

「ひんね勞いすらない孝蔵主の挑発的な云い様に本陣は凍りついた。

立花の侍頭らしき壮年の武者が言い返した。

「我らは七日間昼夜休まず城攻めをしてきたので御座います、如何に北政所様の名代とはいえ口が過ぎますまいか」

すでに酒が入っているようであつた。

北政所が孝蔵主に付けた手練の衛士二人が緊張の面持ちでずいと前に出て牽制した。

騒然とする中、甲冑かっちゅうを着直した宗虎が本陣に現れた。

それまでいきり立っていた家臣、家来連中は我を取り戻して陣幕後方に下がって控えた。

「女傑と評判の孝蔵主殿とはそなたか」

宗虎が吠えた。

戦勝のはずなのに苛立っている様であった。

「立花宗虎殿であるな、たった今、そなたの御家来衆が七日七晩城を攻め続けてくれただと酒臭く息巻いておった。

立花宗虎、

太閤殿下の御家人衆随一の軍団である其の方らはいつからこれしきの平城ちひらに七日もかかるのるまに成り果てたか。

太閤殿下から聞き及びし立花軍は僅か三千の兵でも二十万の明軍の包囲を突破して籠城する清正を助けたと記憶しておるが、わらわの覚え違いか」

宗虎は苦々しい表情で立ち尽くしていた。

・・・痛いところをずけずけ突いてくるわい・・・

宗虎は、「京極の妻女は淀の方の御妹ゆえ御身に類が及ばぬよう加減して城攻め致しておったので手間取ったのだ」、と如何にも苦しい言い訳をした。

孝蔵主は家臣が取り巻いておっては宗虎の本音が引き出せぬと見て。

「宗虎殿、お手前にも面子が御座ろうゆえ人払いを願いたい」と勧めた。

宗虎は少しほっとして家臣を下がらせた。孝蔵主の衛士も陣幕の入り口に控えた。

陣幕の中は篝火かがりびを脇に挟んで宗虎と孝蔵主の二人だけとなった。

東の空はまだ漆黒で夜明けの気配すら無かった。

静まり返った中、孝蔵主が声を潜めて話し出した。

「此度こたびの大津城の事態收拾に赴くにあたり、北政所様より尾張での昔の出来事を伺って参り申した。

徳川の権勢の前にすっかりちじこまってしまった虎の尾も、それを聞けば再びしゃんとするかと思ひ宗虎殿にもお聞かせ致すとしましよう。

北政所様が太閤殿下と夫婦めづとなる少し前に、尾張の国が今川義元の大軍に蹂躪されようかという事態に直面したそうに御座います。

そのとき今川軍の先鋒として織田領に突出する大高城にやって来たのが松平元康、若き日の内府殿で御座いました。

その、元康殿のところには信長公の調略の使者として太閤殿下の古参、蜂須賀小六殿が遣わされたそうで御座います。

如何に信長公と幼な馴染みとは申しても、とても今川は裏切れぬ元康殿に信長公が持ちかけた調略が御座いました。

”元康は大高城を囲む織田方の二つの砦を攻めるを口実として大高城こに残られよ”

この調略の成功により今川方で最強の三河軍を排除することが出来

た信長公は正面から今川軍と激突して見事義元の首を取ることが出来た。来たそうぞ御座います。

はて、これと似たような話を何処かでお聞き及びでは御座いませぬか、宗虎殿」

孝蔵主こそうぢにすばり心中を言い当てられた宗虎は、血走つた眼で考蔵主を睨み返した。

無礼討ちにしようと思えば出来様。

だからといって女を切つたり打ち据えるような宗虎ではなかった。

「某は内府如きに怖氣付いてここに居座つたのでは御座らん」

そう吐き捨てるのと陣幕を出て、控える家臣たちに大声で命令を下した。

「支度を急げ、大垣城に向けすぐに出立致す」

立花軍はにわかに慌しく行軍の支度に取り掛かったが七日間の大津城攻めで無駄に消耗した為、弾薬の調達に夜通し掛かり出立は翌十五日昼前となっていた。

すでに大垣城からは今日未明にも近江美濃境の関が原に於いて本決戦が始まりそんな気配である旨の早駆けが大坂に向けて何度も通過していた。

…… 悪い夢を見ておつたのだ ……

宗虎は徳川に上手く言い包くめられ”その場”に居合わせないことを

選択したことを激しく後悔した。

早駆けの知らせ通りなら、すでに関ヶ原は戦場となり阿鼻叫喚の殺戮の最中であろう。

今となつては、大方の予想を裏切り西軍の奮闘により戦況が膠着し決着が明日に持ち越しとなることをただ祈るのみであった。

私利私欲無く信義に殉じる大谷刑部吉継殿の奮闘と最後も長く人々に語り継がれることとなるであろう。

それに引き代え同じ時代に生きた武将であるのに、たった十数里手前にあるこの立花宗虎を語る者はいったいどれだけ現れようか。

宗虎は関ヶ原を目指して琵琶湖東岸をしずしずと北上するのであった。

その七十六 珍客

慶長四年（1600年）二月 山形城

「義光殿、ようやく駒姫様の御無念を晴らせますな」

最上義光の本拠地、山形城を珍客が訪れたのは、関ヶ原の半年前のことであつた。

「最近ようやく駒姫のことを思い出しても涙が零れずに済むようになり申した」

義光は立ち上がると天守の西側の鎧戸を開け、麓まで雪化粧をした出羽山脈の方を見遣つた。

駒姫が幼い頃、毎日一緒に眺めた景色である。

真冬の柔らかな日差しと共に乾いた冷気が客の膝元まで床を這つてきて手の甲を舐めた。

涙が零れぬと言つたのは客を気遣つての嘘であることはすぐにわかつた。

壮年を過ぎているにもかかわらず、義光は筋骨隆々逞しく品格と勇猛さを兼ね備えた稀有な武将であると見受けられた。

客はこの御仁の甥子にあたる伊達の当主にも少しは品格が受け継がれていても良さそうなものだと思つた。

「我が居城に其の方をお迎えすることになるうとは夢にも思わなかつたことごとござる」

義光は巨体をゆすって愉快そうに笑い、戸を閉めた。

外から差し込む光が途切れる間際、義光の目じりが光って見えたがそれが悲しみのものか、冷気にあたったためか、笑ったためなのかは判らなくなっていた。

客は義光よしあきが心の底から善い人物であると確信した。

・・・ 必ず調略できる ・・・

「この豊かな辺境の地で政争に巻き込まれることも無く、日々安穩に暮らしたいと願う我ら田舎大名にとって、太閤殿下亡き後の天下は徳川様が差配さばいなさるのが最も安心で御座います」

客の言葉に義光は頷いた。

奥州出羽おくしゅうでわはその石高以上に豊かな土地である。

干ばつや風雨の害も西国に比べれば驚くほど少なく病害虫も然程たしか心配ない。

この地の人々は生活の知恵に富み、山の菜を良く食し、害虫であるはずの稲子いねこまで無駄にせず食するのであった。

質素で堅実で連帯感が強くよく助け合う良い領民である。

「出羽を気に入られましたかな、兼統殿」

客は隣国、庄内・会津百二十万石の上杉家家老、直江兼統であった。上杉との領土争いが絶えぬ最上を兼継が訪れた訳は調略である。

兼統が本多正信と企てる豊臣と徳川の覇権を賭けた大戦での、それぞれの役回^{やくまわり}を話し合いに来たのだ。

義光はその手の話の呑み込みが早かった。

自身も調略によって無用な戦を極力避けてきた経歴を持っていた。

たとえ長年の敵であっても降伏や和睦を許し、家や領地の存続もできる限り認めてきた。

最上は寛大であるとの評判が広まり、敵対していた者も安心して最上の戦列に加わるようになった。

そうして最上は領土を拡充してきた。

「義光殿、南側の景色を拝見出来ますかな」、兼統が所望^{しつぼう}すると義光は南側の大きな鎧戸^{かんぬき}の門を抜いて開け放した。

先ほどとは段違いの冷気が二人の全身を包んだ。

一里半ほど先に頂上^{ていじょう}に城塞^{じょうさい}を頂いたこんもりとした小山が覗えた。

兼統はその小山を指して、「我が上杉軍が攻め立てるのは、あそこ

に見える山城が丁度よかろうと存じまする」

義光は怪訝けげんそうに兼統を見て、「あれはこの城の支城しじょうの長谷堂城ながやだうじょうに御座います、城と云うより砦とりでのようなもので御座るがんなもので宜しいのか」

義光が遠慮がちに聞くと兼統は、「この山形城は義光殿と駒姫様の思いがまつた奥州隋一の美城、戦まみに塗れるには勿体なげのうございませ。

それに城下には駒姫様の菩提寺ぼだいじが建立けんりゅうされたばかりとお聞きしております。城下を戦場いくさばにするわけにはいきませぬ。囿いりこの砦とりでにはあの城山で充分に御座います」

兼統の言葉に義光は感激して一も二もなく賛同した。

かくして家康の一つ目の囿の砦が成った。

二つ目は、……すでにご承知のとおりである。

その七十七 駒姫

文禄四年（1595年）八月 三条河原

「何を躊躇ためらつておる、ひと思いに胸を刺し貫しかぬか」

三成の凜りんと響かく甲高かんだかい声が刑場に響き渡った。

刑の執行には慣れきっているはずの刑事達でさえ、その手はぶるぶると震えていた。

最初に処刑されたのは年端もいかぬ幼子達であった。

両腕を抱えられた子らを次々と執行人の手槍が背後から差し貫いた。

「なぜわれらから殺さぬ」

母親達は半狂乱となって自分達から殺してくれと叫んだ。

中にはすでに正気でない母親も見受けられた。

子らの処刑が済むと母親と側女そばめ達の番であった。

順に一人づつ引き出され次々と三条河原の露と消えていった。

皆、首を落とされる前からすでに魂は抜け去り死人しにん同然であった。

二つに分かれた遺骸は包まれることも無く刑場脇に掘られた大穴に

無造作に投げ込まれた。

妻女達の遺族は遺骸を貰い受けることさえ許されなかった。

最初は野次馬気分で集まった都の人々も此度の処刑はいつもとは様子が違うことに凍りついた。

野次を叫ぶもの一人としていない静寂の中で首切り役人の”えい”の掛け声だけが響き渡っていた。

見物人の中に女子供の姿はすでに無かった。

やがて静まり返っていた見物人が十六人目の罪人を見てざわめき出した。

駒姫であった。

ほっそりとした首の上に、雪の様に真白な小さな顔が乗っていた。

うつむいて表情を消しているが、その姿の美しいこと。

・
・
・
秀次様の測女そめめにあのような気品溢れる娘がおったか
・
・

三成は処刑者を書き記した書面を取り出し見た。

十六人目には三成も見知った別人の名前が記しるされていた。

怪訝なそぶりの三成に京都奉行の前田玄以げんいが小声で囁いた。

「最上の駒姫に御座る」

書面をよく見ると最上駒の名は一番最後に書き足すように記されていた。

…… 噂に名高い出羽守殿の御息女か ……

三成は何度も足を運んだはずの聚楽第で駒姫に会ったことなど一度も無かった。

「治部殿、何かお気に掛かる様でしたらあの者は後に回しましょうか」、と玄以が聞いた。

一瞬考えた三成は、「いや、それには及びませぬ」、と処刑を続けさせた。

…… まるで北庄城から落ち延びて来られた頃のお茶々様のよ
うに美しい ……

三成の脳裏に羽柴家の若侍だった頃の記憶が蘇った。

…… 太閤殿下がああ姫をご覧になったら刑場に飛び込んで行
って止めるであろうな ……

そう三成は思ったが、自分にそのような権限は無かった。

駒姫はいよいよ刑場の真ん中へ引き立てられてきた。

見物人の中からはすすり泣く声や念仏を唱える声が漏れ聞こえてきた。

駒姫にとって会ったことも無い秀次に連座しての仕置きであった。

あまりにも理不尽な処刑である。

にも関わらず駒姫は、一切取り乱しもせずすくにすく筵すくの前に引き出され膝まづいた。

筵すくはすでに幾多の血飛沫ちしなげを吸って赤黒く汚れていた。

なぜこのような理不尽な仕儀となってしまうたのか。

それは秀吉の出生の秘密に由来していた・・・

その七十八 破滅への一步

文禄四年（1595年）七月 聚楽第

「其の方なら叔父上の素性について何か知っておるはずだ、将右衛門^{しやうゑもん}」

秀次に詰め寄られて前野長康は返答に窮した。

秀次は淀の方が二人目の子となる秀頼を産んだことで、自分には後が無いことを悟っていた。

…… 叔父上は必ず自分を排除に動く ……

秀次はこれまでの秀吉のやり方から自分は必ず詰め腹を切らされると確信していた。

…… 利休殿の様に ……

「利休殿はその明晰さで叔父上の出世に関わる秘め事の核心に迫ったのであるう。叔父は秘密を守るために武人でもない利休殿に腹を召させた」

秀次は幼少の頃より文武に秀で、戦国ゆえの養子縁組で他家を渡り歩かされてもその利発さが幸いしてどの家中でも大切にされてきた。

全て幼い頃から学問を授けてくれた祖母の大政所のお陰であった。^{おおまんどころ}

母の智子も聡明な女^{ひと}であったが、弟である太閤について何かを語っ

てくれた記憶は無かった。

秀次は自分の経験から鑑^{かん}みて、叔父の秀吉が貧しい農民から出世して関白にまでの昇りつめたなどと云うことは到底信じられなかった。

「将右衛門、其の方は叔父上が織田家に仕える以前より叔父上に付き従っていた衛士なのだろう。

大政所様の学問作法の知識は武家どころか並みの公卿以上であった。我も関白となつてより多くの公卿や茶人・歌人などの文化人と関わるようになってはつきり判った。

大政所様は御所の相当身分の高い公家の娘か女官であつたのに違くないと」

長康は秀次の推察が的を得ていることに驚いた。

「織田家の躍進と叔父上の出自^{しゅつじ}には何か関係があるのではないか。

信長公は朝廷の力を巧みに利用して勢力を拡大した。

それが過ぎて朝廷をも蔑^{ないがし}ろにしようとしたことが織田家没落の原因であろう」

「秀次様、そのようなことどこで吹き込まれました、不用意にそのようなご発言をなさるとお命に関わりませぬぞ」

長康がたしなめようとしても秀次は、「御所内では公然と語られておる。信長公は朝敵として惟任日向守^{これとうひゅうがのかみ}に討たせたのだと。

そして叔父上が日向守を反逆者の大儀名分で討ち果たした。

朝廷と叔父上は実は最初から組んでおつたのではないのか。

最初から公家の血を引く叔父上を武家の頭領に据えるために仕組まれたのが本能寺だったのではないのか。

そうとでも考えなければ農民上がりの叔父上が関白にまで登り詰められるはずが無い」

「秀次様」、将右衛門は秀次が危険な領域に首を突っ込んでいると恐れた。

「将衛門、其の方いつから叔父上の警護を任されたのだ、叔父上が織田家に潜り込むときには小六共々すでにその配下にあつたのである。」

家来も雇えぬほど貧しかったはずの木下藤吉郎にそなた達ほどの熟達の戦士を雇う身分も金もあつたはず無かるう。

おかしい。おかしいではないか」

将右衛門は追い詰められた秀次が窮鼠猫を噛むの例え通り太閤から実力で実権を奪おうとしているのではと危惧した。

「秀次様は太閤殿下の秘密をお知りになって、いったい何をなさろうとこのうでありますか」

・・・ やはり秘密があるのだな ・・・

秀次は不敵な笑みを浮かべて答えた。

「もちろん己の身は己で守るのよ」

しかしそれは秀次にとって破滅をもたらす思いつきであつた。

その七十九 秀次の叛意

文禄四年（1595年）七月 御所

毎日、日の出と共に騒々しく鳴き始める蝉の大音声だいおんじやうも御所の奥まで届かないとみえ、しんとしていた。

謁見えうけんの間は外の暑さがうそのようにひんやりした空気に満たされていた。

それだけここが外界から隔絶された別の空間であると訪れる者に告げていた。

簾すだれの向こう側に人の気配が現れた。

秀次は平伏して御言葉みことばが掛かるのを待った。

関白になってよりまだ日の浅い秀次であったが、なかなかどうして堂に入った所作立居振舞いしよさたちいふるまいであった。

宮中での評判はすでに先代の太閤を凌いでいた。

「そなたが関白となられてより度々参内さんだいしてくれるようになり喜ばしく思っております」

後陽成天皇ごようせいは親しみを込めて関白豊臣秀次に言葉をかけた。

その言葉のとおり前任の太閤は全く参内しようとしなない名ばかりの関白であった。

後陽成天皇と秀次は年も近く、諸事芸事に秀でた秀次は後陽成天皇の最も親しい友人となりえていた。

滅多に御所外へ出掛けることなど出来ない後陽成天皇にとっては、秀次から諸国の珍しい話や合戦の裏話などを聞くことは何よりの楽しみであった。

いつに無く神妙な面持ちの秀次が面を上げて話し始めたことは・・・
叔父の太閤秀吉の出生しゅうしゅうと出世の秘密についての問いであった。

後陽成天皇は目の前の友人の役にたつのなら太閤と自分との血縁を教えてやりたいと思ったが、それが本当に秀次のためになるのかは疑問であり、自分自身それほど多くのことを知る訳では無かった。

太閤と交流の厚かった先代天皇の正親町天皇おのおのぎまちはすでに二年前に崩御ほうぎょされており、その子で後陽成天皇の父親の誠仁親王さねひとは天皇に即位することも無く正親町天皇に先んじて身罷みまかっていた。

故に後陽成天皇は祖父である正親町天皇の養子となってから天皇に即位したのである。

太閤に新たな男子が授かった事は後陽成天皇も聞き及んでいた。

関白秀次が苦しい立場に置かれている事も察しが付いた。

後陽成天皇は簾の向こうで蒼ざめている友人の力になってやりたいと思った。

「そう言えば」、後陽成天皇が独り言を装って小声で口にした言葉

を秀次は聞き漏らさなかった。

「我が父が存命の頃、関白秀吉殿は我が兄であると漏らしたことが御座った」

・・・何と・・・

秀次は自身の心臓の鼓動が聞こえるほど仰天した。

想像していた以上の真相に触れて秀次は半ば放心し暇いとまの挨拶もそこそこに御所を後にした。

聚楽第に戻った秀次は書院に籠って一人考えをまとめることに没頭した。

叔父は正親町天皇の御落胤であったのだ。

女官だった大政所が預かり我が子として育てたのだ。

真相を打ち明けてくれた後陽成天皇の方が太閤の甥であり、秀頼とは従兄弟ということになる。

叔父にあるのは育ての親の大政所に対する恩義だけで、その大政所もすでに他界した今となっては自分と叔父を結ぶものは何も無い。

自分と叔父とは一滴の血のつながりも無かったのだ。

織田家の躍進の影に叔父の出生の秘密が大きく関与していたのは間

違いではなかった。

桶狭間にあったという謎の朱塗りの輿の正体。

信長公の上洛と叔父の京都所司代への就任。

朝廷の織田家への格別の肩入れ。

本能寺とそれ以降の豊臣家の隆盛。

そも豊臣姓の由来。

五摂家が専任であるはずの関白職への異例中の異例の任官。

そしてあの右手。

亡き大和やまと大納言ははじめ我が一族の類稀たぐいまれなる才覚にも納得がいった。

そして叔父こそが主君殺しの大罪人たいざいにんであったのだ。

秀次の胸中に太閤に対する反転攻勢の心が芽生えた。

古来、子が父親を討つたり追放する例は少なからずあった。

保元の乱で源義朝は親兄弟と袂を違えて戦い、甲斐の武田信虎は子の晴信（後の信玄）に駿河に追放された。

秀次が太閤の人に知られてはならぬ出世の秘密を暴き、太閤を隠居に追い込もうと考えたのも無理からぬことであった。

その八十 太閤の逆鱗

「何と申した将右衛門」

秀吉は今だかつて無い怒りの表情で前野長康を睨みつけた。

太閤秀吉の最古参の家臣、”前野将右衛門”の一命を賭しての言上は無残に踏みにじられた。

長康は関白と太閤の関係修復を願って単身伏見城を訪れていた。

長康の言上した提案は幼少の秀頼君が成人するまでの間は秀次が後見として関白を務め、その後は秀頼に関白職も豊臣家も譲り渡し隠居するという至極順当なものであった。

秀吉も秀頼と秀次の娘を婚約させることで豊臣政権を円滑に秀頼に引き継がせようとしていた。

秀吉の逆鱗に触れたのは、和解の内容とは別のことであった。

それは、秀次が秀吉の過去を暴こうとしていることが漏れ伝わって来たことである。

秀吉の詰問に対して秀次家老の長康は、「秀次様は関白職に邁進する内に太閤殿下の御出生の核心にたまたま迫ってしまったので御座います」、と秀次を庇う返答をせざるを得なかった。

しかし秀吉は秀次の心に芽生えた叛意を見抜いていた。

「おのれ秀次め、大政所への御恩返しのために関白にしてやったのに、予の出自しゅつじを疑い追い落とそうとするとは畜生にも悖もとる恩知らずめ。将右衛門、其の方が傍そばに付いておりながら何という失態、斯か様な事態とならぬ様、其の方を秀次に付けた我が意が解らぬそちでは在るまいぞ」

長康はただただ平伏するのみであった。

ことここに及んでは秀吉は如何なる理由をこじつけてでも秀次を排除するしかなかった。

大政所や大和大納言が存命であれば事態はここまで悪化しなかつたかも知れない。

秀吉は覚悟を決めた。

己の出生しゅっしゅうの秘密に迫る者はたとえ縁者であつても一族諸共肅清しゅじゅうすべし。

まだ幼い秀頼に豊臣政権を順当に引き継ぐための”中継ぎ役”をさせようとしていた秀次が、自ら墓穴を掘って失脚することによって、事態は豊臣家の行く末を最悪の方向に捻じ曲げていく事になる。

秀吉の胸中に家康のほくそ笑む姿が思い浮かんだ。

新たな手を講じておかなければならなくなった。

しかし、秀吉にはそれほど多くの時間は残されてはいなかった。

その八十一 助命嘆願

文禄四年（1595年）八月二日 伏見城

三条河原でもうすぐ駒姫が処刑される事態に及んで、最上義光は徳川家康に太閤への最後のとりなしを願い出た。

事態を重く見た家康は義光を伴って伏見城の秀吉に喫急の接見を求めた。

義光は一命を賭す覚悟で訴えた。

「太閤殿下、駒姫は秀次様に請われて遠路はるばる出羽から到着いたしましたばかりで御座います。

秀次様に加担することも、秀次様の御子を宿すことすら有り得ぬことで御座います。

その駒姫が何故連座して処刑されねばならぬのでしょうか」

家康の口からも駒姫が奥州から聚楽第に到着したのが秀次が高野山に出家した後であること。

駒姫は秀次とは一面識も無いことなどを改めて述べ、駒姫まで連座して処刑する非を説いた。

駒姫のために太閤に助命嘆願をとりなしてくれる家康に最上義光は心の底から感謝した。

秀吉は終始無表情で取り付く島も無いといった風情であった。

駒姫の処刑の刻限は刻一刻と近づきつつあった。

ここに及んで義光は秀吉に最後の条件を提示するしかないと感じを決めた。

「太閤殿下、駒姫の命をお救い頂ければ、駒姫は生涯殿下のおそばに仕えさせます」

義光は自分より十歳以上も年上の秀吉老人に、それで命が助かるのならと駒姫を差し出す覚悟を決めた。

それを聞いた秀吉は表情には出さずに内心ほくそ笑んだ。

・・・ ようやく言いおつた・・・

「義光殿、其の方がそこまで申されるのなら合い判り申した。駒姫は助命いたそう」

秀吉は傍に控える小姓に即刻駒姫の処刑中止を知らせる早馬を出すように命じた。

小姓は少しも慌てることなく、今や遅しと待ち構える馬回り役に取り次いだ。

義光は太閤の術中にはまったかのような無力感を感じたが、ともかく駒姫が助かることに安堵した。

緊張の解けた義光は両手を付いてへたり込んだ。

それを見届けた家康は義光を促して立たせた。

「よう御座った出羽守殿、さあ我らも駒姫様をお迎えに参りましょ
う」

そう言う家康の表情にはなぜか沈痛な面持ちがあった。

まるでこの直後に義光をおそう悲劇をすでに知り得ているかのよう
に・・・

その八十二 畜生塚

文禄四年（1595年）八月二日 三条河原

はあともきやあともつかぬ声が刑場を包み込んだ。

駒姫の華奢な首珠くびたまは百合の花を折るより容易たやすくこぼれ落ちた。

二つに分かれた駒姫の遺骸も他の者と同じように穴に放り込まれた。

淡々と次の罪人とされる妻女が引き出されてきたその時。

太閤の馬回り役が騎乗する早馬がどけどけの掛け声と共に刑場に乗り込んできた。

見届け役の三成と玄以げんいを見つけた早馬は二人の前まで駆け込んだ。

「待て」、刑吏に三成が叫んだ。

嫌な予感が三成の背中を冷たく濡らした。

下馬した伝令は三成達の前にかすくと、「太閤殿下より火急の御命令に御座います。」

最上出羽守様の御息女、駒姫様助命せよとお申しつけに御座います、と一気に述べた。

三成と玄以は呆然ぼうつぜんと顔を見合わせた。

それを見た馬周り役は己が間に合わなかったことを察した。

「間に合つはずで御座つた」

その一言で三成は合点した。

. やはり殿下は駒姫に目をつけておられた

「一町ほどの差で間に合わなかつた。何かの手違いであろう」

. 本当に手違いか

三成は自問した。

. 他の罪人達は順序通りに処刑されていたはずであつた

刑場に居る全員が三成を注視していた。

三成は今更取り返しもつかぬことであるし、要らぬ騒ぎになつても收拾がつかぬと思ひ、処刑の続行を指示して平静を装つた。

僧侶出身の前田玄以は動揺を隠し切れず、今にも念仏を唱え出しそつであつた。

「某それがしの責任で処置致すゆえ御心配召さるな」

三成はそう言つて玄以を諫いさめた。

三成も三人の娘を持つ父親である。

駒姫の父、最上義光もがみよしあきの落胆は察するに余りあつた。

・・・これが遺恨とならぬ道理が御座らぬ・・・

この日、秀次に連座して処刑された者は、幼児五名と妻女側女むすめわきめ三十四名の計三十九名にも及んだ。

太閤の秘密を守ろうとする執念と恩を仇で返された怒りの猛烈さがうかがい知れる。

遺骸をすべて呑み込んだ穴は埋め戻され石碑が一本建てられた。

碑に掘られた文言は”畜生塚”の三文字のみであつた。

塚の台座には高野山で切腹し果てた秀次の首がぼつんと晒されていた。

これより僅か五年の後、三成も六条河原で二身ふたみと分かれ、ここ三條河原に晒される定めとはこのとき到底思い至らなかつたあろう。

三成を晒し首へと誘こほつ者の中に駒姫の父、最上義光もがみよしあきが重要な役回りやくまわりに

その八十三 攻防長谷堂城

慶長五年（1600年）九月十五日 出羽長谷堂城

「兼続殿、城兵千人足らずの支城如きに上杉二万五千の全軍で総掛かりになることは御座らぬではないか。

四、五千の軍勢を割いて見張っておれば事は足り申す。それより敵の本拠地の山形城は目と鼻の先で御座る。

そちらとて四、五千足らずの城兵しかおらぬのに何故、城下に攻め込まぬのでありまするか」

上杉家新参与力の上泉主水かみいずみもんどは兼続の煮えきらぬ攻撃方法に業を煮やして食って掛かった。

「主水殿もんど、其の方は新参ゆえ最上の強さを判っておらぬようだな」

兼続はいつもの人を食ったような物言いで主水に言い返した。

「最上は二十四万石の小国ながらその実は五十万石にも匹敵する軍備を備えておる。

鉄砲の数も我が上杉と互角の二〇〇〇丁は下らぬ、しかも堺で買い付けたばかりの命中率を上げた新型の鉄砲である。

米も豊富ゆえ兵糧も数年は持ちこたえるであろう。ほれ、其の方が今足で踏んずけておる稲穂だけで茶碗に一杯分は御座ろう。出羽の国力を侮ってはならぬ」

何がなんだか判らぬ屁理屈をこねて、兼続は一向に本気で攻め立てる気が無いようである。

主水は無理繰り兼続から五〇〇名の先方隊を借り出すと、先頭にたつて城山目掛けて勇ましい突撃を仕掛けた。かに見えたが城山の周囲は畦道しかない田んぼである。

細い畦道に行くものは一列になったところを鉄砲で狙い撃ちされ、それではと田の中に行く者はぬかるんでまともに進めないとところを狙い撃ちされると、攻め処が全く無かった。

最上は長谷堂城に籠る千名の城兵に五〇〇丁もの新型鉄砲を用立てて武装していたのである。

一本あつたはずの城山へ繋がる荷駄道はすでに破壊されてそこも泥^{ぬか}にされていた。

城代の志村光安はなかなかの軍略家で戦上手だった。

なにしろ最上には半年もの準備期間があつたのだ。

長谷堂城は徹底的に要塞化されていた。

城兵は自在に山を昇り降りしているようだが攻め手からはどこに通路があるのか判らなかつた。

鬱蒼^{うっそう}と山を覆う山林には至る所に罾^{なわ}が仕掛けられて迂闊^{うごん}に近寄れず、城兵だけが移動出来るように塹壕^{えんごう}が掘られていた。

城山の周囲の収穫間近まで実つた稲穂には至る所に鈴が取り付けられていて、夜襲を掛けるのも厄介である。

…… さすがは最上殿、なかなか堅固な砦に仕立てられておる。

これなら手間取ってもいくらでも言い訳が付く

その同日同時刻に関ヶ原に於いては、予想外の西軍の奮闘により膠着状態が続いていた。

その八十四 関ヶ原会議

慶長五年（1600年）九月十五日 関ヶ原

今まさに関ヶ原では諸国の主だった大名達が集い今後の豊臣政権の指導者を誰に決めるかの会議が開かれようとしていた。

全国の知事や市町村長が一同に会して総理大臣を選ぶようなものである。

ただし議場を飛び交うのは意見や主義主張ではなく弓矢や鉛玉であり飛び散る火花は剣戟けんげきの火花である。

正まに実弾が飛び交い命の遣り取りで意見を通す迫真まことの議場である。

事前の根回し有り、多数派工作有り、議論の行方によっては多数派が割れたり、途中棄権する者が現れたり、主義を翻ひるがえす者が出たりするのは会議の在るべき姿そのものである。

薄うすに覆おほわれた荒野の議場はすでに埋め尽くされていた・・・

双方の布陣は日の出前にほぼ終わっていた。

日が昇るにつれて消え失せるであろう霧の海原を眺めながら、家康はようやくここまで辿り着いたという感慨に浸る余裕があった。

霧よしみの海に呑み込まれず、山上で旗を朝日にはためかしている輩は日

和見連中である。

家康は、たとえこの合戦に敗れたとしても痛くも痒くもなかった。

譜代の武将は、まだ二十才にもならぬ四男の忠吉とその舅ただよしの井伊直政、そして本多忠勝だけである。

徳川直参の兵は全部合わせても一万いるかないかであった。

虎の子の徳川本隊と後継者はわざと遅参させて温存たごしてある。

戦で消耗するのは皆、豊臣の大名達である。

奴等は朝鮮での消耗からすら立ち直っているとは云えない。

だからたとえここで負けても伊達と組んで幾らでも再戦出来る。

伊達も徳川も半島への渡海を免れ消耗していなかった、
.....

太閤の意図に反して。

この決戦に際しての家康の危惧は事前に全て解決済みであった。

越中前田利久が越前で大谷吉継に足止めを食らったのは確かに痛かった。

おそらく吉継の巧みな調略によって懐柔されたのであろう。

その強したたかな大谷吉継さえ潰す手立ては講じてある。

立花宗虎の無敵を誇る鉄砲隊も決戦の場から遠ざけてある。

秀頼が千成瓢箪せんなりびょうたんの馬印を掲げて総大将に担ぎ出される心配も消え失せた。

家康にとって、これから始まる合戦は天下分け目でも何でも無く、ところてんの様に天下が自分の目の前に押し出されて来るのを見守るだけのものであった。

……命がけて戦に臨むなどもうこりこりだ……

思い起こせば、家康が本当に命を賭けた記憶は、信玄に挑戦した三方ヶ原と浅井長政の裏切りから窮地に陥った信長を逃がす為に、秀吉と共に殿軍しんがりを務めた朝倉攻めのときの二回だけだった。

その武田の赤備あかぞなえは井伊直政の配下として眼前にあり、双壁を成した上杉は兼続が反対方面に連れ出している。

……戦とは勝つことが判ってから勝ちを拾いに来るものである……

家康は随分前から自分自身にそう課していた。

その八十五 抜け駆け

「西軍の布陣はかくも完璧なものであるか」

家康の元には密かに放っていた甲賀衆から逐一西軍の布陣の情報がもたらされていた。

「合戦の火蓋が切られる前に霧に晴れられては腰が引ける者が現れるやも知れぬな」

これに及んで家康に一抹の不安が残るとすれば、それは最もやる気まんまんで先鋒を買って出たはずの福島正則が土壇場で裏切りに及ぶことであつた。

家康に加勢した豊臣大名の多くは、語らずともこの合戦に東軍が勝利するということは、ゆくゆく天下が豊臣から徳川に移ることを予感しているはずであつた。

清正と正則を除いては。

小山評定でも、岐阜城攻略でも豊臣大名の中で最も家康鼻肩ひこかただつた正則ではあつた。

しかし、それもこれも憎い三成を討ち果たしたい一念ゆえの方便であるとしたら。

いざ西軍諸將と対峙して馴染みの旗印が目の前に並び立つたとき、悪い夢から覚めたかのように寝返らないと果たして言い切れるだろうか。

万が一そのような事態とならば精緻に書き上げた関ヶ原の筋書きが全て狂ってしまう。

念には念を入れるべく家康は中堅に布陣する謀臣井伊直政に、戦の作法に反するのは百も承知で、ある指示を与えてた。

薄れ行く霧の向こうに西軍の最大勢力、宇喜多の旗が幾重にも並び立つのが見えてきた。

最前線に立つ福島正則は果たして家康の読み通り、この期に及んで心中に浮かんでは消える疑念と自問自答していた。

・・・内府殿は本当に秀頼様を盛り立てて下さる御積もりがあるのだろうか・・・

正則は秀頼が淀の方と治長の子などとはどうしても信じられなかった。

まして内府が皆に触れ回っているように三成の子などとは到底信じてはいなかった。

・・・いくら三成を孤立させる為の方便とはいえ、あそこまでするだろうか・・・

治長を馬回り役に取りたてたのも、且元を守役にしたのも、三成を奉行として重用したのも太閤殿下御本人である。

三成憎しに目も心も曇った自分は内府に上手く乗せられて、先陣まで来てしまったのではないのか。

……俺はこんなところで何をしているのだ……

正則の心を覆っていた憎悪の深い霧に一筋光が差し込もうとしたその時、薄れゆく霧の先に赤く動く一隊が目に入った。

先鋒の自分達より前には敵しかいないはずである。

福島家家臣の可児才蔵が正則の処へ駆け付け注進した。

「井伊直政殿、松平忠吉様の初陣の見物と称して抜け駆けを仕掛ける気配に御座います」

……内府め、心を読みおつたか……

前方からの「てー」、の合図と共に赤い一群が一斉に宇喜多勢に向けて発砲してすぐさま引いた。

一瞬、宇喜多の旗に動揺の揺らめきが見て取れた。

しかし、宇喜多の火縄にもすでに火は点いていた。

今度は宇喜多から猛烈な一斉射撃が発せられた。

反撃の矛先は当然相對していた福島隊であつた。

正則の耳元をひゅんひゅん弾丸が抜けていった。

我に返つた正則は突き上げた指揮劍の先を宇喜多勢に差し向けて大声を發した。

「鉄砲隊、てー」

戦場に双方から開戦の号砲が鳴り響いた。

．．．．ここに及んでは是非もなし．．．．

正則は奈落に向かつて突進するのみであつた。

その八十六 緒戦

福島正則を抜け駆けして戦端を開いた松平忠吉と井伊直政は、一旦自軍に引いて再突入の機会を覗うことになる。

彼らは家康から、もうひとつ重要な密命を帯びていた。

宇喜多、福島双方が撃ち掛けた最初の斉射では死傷者はほとんど出なかった。

当時の鉄砲は二百米も離れてしまうと命中率も殺傷能力も著しく落ちてしまふのだった。

敵を壊滅するにはあくまで敵陣に突入して槍と刀で制圧しなくてはならない。

大軍勢の宇喜多は北国街道沿いの藤古川を天然の掘に見立てて何段にも陣地を構築していた。

数には劣るが、東軍先鋒の任務を帯びた福島隊の一段目が鉄砲を先頭に静々と宇喜多の陣地に擦り寄った。

その後ろには援護の弓隊、次いで突撃を担う長槍隊、最後尾に混戦を制圧すべく手槍を携えた武者隊という陣形で押し出して来た。

かつて種子島と呼ばれ珍重された鉄砲も、当初に比すれば安価に量産される様になり、どの大名家も陣形の先駆けに弓矢より射程の長い鉄砲を用いるようになっていた。

とは云え、鉄砲の連射は熟練者でも一分間に二、三発が精々であり、相手から応射されたり矢を射掛けられたりすれば更に連射速度は落ちざるを得なかった。

鉄砲が最も威力を発揮するのは、射手が身を隠せる城砦の銃眼から、近づく敵兵を狙撃するという籠城戦である。

身を隠したり敵の接近を遮る掘りや城壁の無い野戦では、敵の最初の突進を弱めることが精々であった。

速射がきかない鉄砲は混戦に巻き込まれては無用の長物であり、高価な鉄砲を敵に奪われない為にも鉄砲隊は早めの手仕舞いとなり野戦の主戦力には成り得ていなかった。

只一つの例外は立花の突撃銃であったのだが、歴戦の立花は未だ大津にあった。

それぞれの隊の中央と両脇には騎乗した兜首が付いて足軽雑兵に檄を飛ばしていた。

騎馬の機動力は突撃より連絡と撤退の逃げ足に使われ、敵を蹴散らす騎馬武者など後世の空想の産物である。

もし霧が晴れた関ヶ原の全体が見渡せたなら、三成も左近も『勝てる』と思っただけである。

西軍が大驚おおわしの如く翼を広げて待ち構える中にこのこやって来た東軍はまさに袋の鼠であった。

西軍は宇喜多、毛利、小早川ら、それぞれ一万五千以上の大所帯で

取り囲んでいるのに対し、東軍には核となる大軍勢は存在せず、家康の桃配山本陣ですら段構えも作れないほど貧弱であった。

東軍はどの勢力も五、六千の中規模部隊で構成され、最前線で石田隊と向き合う東軍の主力と思しき軍勢も黒田長政、細川忠興、加藤嘉明らの混成部隊であった。

これらを個別に撃破、吉川、毛利が家康の後詰めを突けば西軍の勝利は揺ぎ無いかに見えた。

さらに家康が中仙道、伊勢街道のどちらに退路を求めても長束正家、長宗我部盛親が遊撃する手筈でもあった。

大谷吉継が三成に授けた策は、正に完全無欠、鉄壁の布陣であった
・
・
・

東軍の先鋒で戦闘力も抜きん出ている福島隊を緒戦から圧倒したのは、一万七千の最大動員で西軍の主力を担う宇喜多隊であった。

動員数の差もさることながら、宇喜多の二段構えで隙間無く撃ちかける鉄砲の数の多さに、さすがの福島隊も突入の機会がつかめなかった。

すでに関ヶ原は晴れ上がった霧に代わって黒色火薬の硝煙が中空を覆っていた。

西軍の各部隊は僅か一昼夜の間に自然の地形を利用した手堅い陣を敷いていた。

守りが堅い大垣城から、野戦を得意とする家康に関ヶ原に誘き出されたかに見えた西軍であったが、実のところ誘き出されたのは家康の方であった。

三成と大谷吉継は初めからここ関ヶ原を決戦場とすべく家康が上杉討伐に出払った後、密かに陣地を構築していた。

家康が野戦では敵無しと過信している裏をかいいたのだ。

宇喜多と福島のにらみ合いとは別に、北国街道を挟んだ東側では黒田、細川ら東軍主力の混成部隊が、こちらも西軍の石田、小西隊に押しに押されて東に戻されて行くところだった。

このとき期せずして西軍の中央に隙間が生じた。

「婿殿、今で御座る」

井伊直政と松平忠吉率いる赤い軍勢は、この機を逃さず中央突破を試みて突進した。

側面を突かれることを恐れた宇喜多の鉄砲隊は牽制の弾幕を井伊の赤備えに振り向けなければならなくなった。

正面の弾幕が薄れた。

正則はこの機を逃さなかった。

「鉄砲隊、突撃」

先ず鉄砲隊が突っ込み一射浴びせた。

「弓隊続けー」

すかさず弓隊が鉄砲隊の前へ出て山なりに連射しながらどんどん間合いを詰める。

宇喜多の鉄砲隊に上空から矢が降り注ぎ、弾込めが遅れたした。

福島隊の鉄砲隊と弓隊は交互に前進して波状攻撃を仕掛けどんどん間合いを詰めた。

間もなく始まる両軍入り乱れての混戦では連射がきかない鉄砲は敵の獲物になってしまう。

「槍隊、突撃ー」

双方弾込めが間に合った鉄砲隊がもう一射ずつ撃ちかけて後方に下がると福島家自慢の槍隊がそれまで空に向かって担いでいた長槍を前方に据えると、一糸乱れぬ一列横隊でやはり宇喜多の前面に立った槍隊に突っ込んだ。

すでに双方の恐怖と狂気にゆがんだ表情が判るほど接近した。

無音のスローモーションの直後、槍の擦れ合う音、氣勢を吐く声、胸といわず腹といわず顔面といわずざくざくずぶずぶ槍の穂先が体にめり込む音があちこちから聞こえた。

負傷して足を引きずって下がる者、飛び出た腸を押さえてのたうつ者、地べたに突っ伏して動かぬ者、たちまち死傷者の山が築かれて

いった。

これより展開される混戦の阿鼻叫喚の殺戮では頭数の勝負となる。

福島騎乗した隊長が宇喜多の長槍隊に取り囲まれ四方八方から突きまくられ落馬すると何人も雑兵が押さえ込んであつという間に兜首を持ち去った。

混戦の中に呑まれた地に足の着かぬ騎馬武者など成す術すべも無く長槍に突き捲まくられるただの肉団子である。

方や宇喜多方の手槍を振り回して雑兵を蹴散らす、さぞや名のある槍の使い手が福島隊長の餌食となつてめつた刺しにされると福島の陣営に引きずられて消えて行った。

槍の名手も剣の達人も関係ない、雑兵の長槍に囲まれたら死である。

思いのほか西軍優勢に始まつた緒戦の関ヶ原を桃配山本陣の家康からは見渡すことが出来なかつた。

このとき家康の興味はすでに合戦の勝敗などには無かつた。

後々如何に徳川が有利になるような勝ち方をするかの一歩であつた。

その八十七 反故

福島正則に宇喜田勢への突撃の機会を与えて抜け駆けの借りを返した井伊直政と赤備えの軍団は、いったいどこを目指したのか。

普通に考えれば笹尾山の三成本陣に突入すべく、前線の島左近と華々しい戦鬪を繰り広げるはずである。

はたして井伊直政と松平忠吉が相対したのは西軍陣地の二番備えに陣取る島津勢であった。

大きな溜池の池寺池を背後に背水の陣を敷く九州の覇者島津義弘は七十三万石の大々名にも関わらず、関ヶ原には僅か千五百の寡兵かへいでしか参陣していなかった。

・・・ 金が無かったのである。

島津は半島出兵で金を使い果たしていた。

三成は遠路はるばる参陣する西国大名に大坂城の地下蔵に秀吉が遺した金銀を気前良く配るつもりだった。

しかしすでに家康の軍門に下りし且元の反対で、いっさい手が付けられなかったのである。

「秀頼様も金も出せぬ、あくまで此度の戦は豊臣家中の家臣同士による主導権争いの戦であり、秀頼様はどちらにも加担いたさぬ」

三成は土壇場で且元に梯子はしをはずされていた。

島津義弘は毛利勢とは別ルートで家康と不戦の協定を取り結んでいた。

家康は毛利、吉川、小早川との交渉を黒田長政に、京極、立花、島津の調略は井伊直政に任せていた。

輝元とは不戦の密約を結び、京極には囀の砦を演じさせ強豪立花に決戦不参加の大儀名分を与えた。

成り行き上ししぶ西軍の本陣脇にまで参陣した島津とは、交渉に当たった直政本人がアリバイ作りのための睨み合いを仕掛ける手筈であった。

……直前までは……

島津はその傑出した兵士個々人の戦闘力の高さを拠所たよりにした軍事力と琉球を通じた明貿易で得られる経済力を背景に、今後の徳川支配を脅かす反対勢力となる恐れがあった。

石高、国力から推し量れば関ヶ原には二万余の大軍で押し寄せるかとも予想していた家康であった。

ところが実際ふたをあけてみれば島津の兵は千五百足らず。

どさくさに紛れて目の上のたんこぶを始末するのは徳川のお家芸である。

「直政よ、島津の調略を苦勞して成し遂げた其の方ゆえ異存も御座ろうが曲げて願ひ申す。」

島津を残さばゆくゆく徳川にとって計り知れない脅威となるやも知れぬ。この千載一隅の機会、逃すべからず」

家康が出陣直前の井伊直政に福島正則への抜け駆けと共に与えた密命が島津義弘との密約を反故とする討伐であった。

さすがの井伊直政も躊躇いの色を見せたが、そこは本多正信と左右の腕を分かち合う家康の謀臣である。

「委細承知仕りました御座います」

一切不服の言葉を返さず承知した。

家康は後継者とすでに決めている秀忠と行動を共にする正信と、この直政こそが徳川千年王国の基礎を築く影の功労者であると心から感謝するのであった。

その八十八 左近の咆哮

「かかれーー」

騒音に埋め尽くされた戦場に一際通る大音声が響き渡った。

その声を味方の兵が聞けば、萎れそうな心を鼓舞され再び新軍の援軍の如く敵に挑みかかっていった。

その声が敵の兵に届けば、虎の咆哮を聞いた犬の如く闘志も勇氣も吹っ飛んだ腑抜けとしてしまった。

左近が恐れられる理由は、この敵味方を同時に鼓舞萎縮させる特別な声の力にあった。

人間のその原始の頃に細胞に擦り込まれた、恐怖の根源を呼び覚ます力が、この壮年の男の喉から絞り出される声に宿っていた。

後年この関ヶ原に於いて左近の軍勢と槍を交えた黒田家中の老兵達が集う機会があった。

皆で敵將の島左近とは如何なる風体の武将であったかが披露されたが、二人として同じ意見が出なかった、七尺に及ぶ大男であったとか、三間もある大槍を唸らせていたとか、

馬の胴体を一刀両断にしたとか、おおよそ人間技で無い風聞が披露された。

結局のところ左近の大音声が余りにも恐ろしくて、誰もまともに顔を上げることが出来なかったのであるうという処に落ち着き、全員

で猛将島左近に乾杯を献上したとのことである。

細川忠興は何度攻め立てても一向に埒があかない事態に焦り出していた。

忠興が偏執的な愛情を傾けていた明智珠の仇、石田三成の首は目の前の山上にある。

三成が陣取る笹尾山の麓には、いつ作られたのか小高い土塁が連なり、敵の鉄砲隊は身を晒すことなく攻め手に斉射を浴びせてきた。

「物陰から隠れて撃ってくる鉄砲などに当たってたまるか」、と密集隊形で突入を図るも今度は中腹に据えられた大筒が火を吹いて土煙と共に兵を蹴散らした。

当時の大砲はまだ炸裂弾ではない只の鉄球ではあったが、高所から撃ち下ろす威力で地面には大穴が空き、大音響と共に攻め手に与える心理的な効果はなかなかのものであった。

この光景は戦史にかつて刻まれた経験をなぞっていた。

忠興や黒田長政ら中堅の武将達でさえ、織田信長と武田勝頼の長篠城の合戦には若輩ゆえ参加していなかった。

今まさに自分達がかつての武田の軍勢の如く何度押しても敵陣を制圧できずにじりじりと攻撃力を殺がれているとは気付かなかった。

「何をもたついでおる、密集して突っ込めー、いや、散開して突っ込めー」

攻撃の指示も場当たりになっていた。

この先彼らに待ちうけているのは西軍の反転大攻勢による総崩れであった。

織田信長が編み出した後手必勝の戦術を西軍の軍師、大谷刑部吉継が関ヶ原に再現させていると誰一人気が付いていなかった。

・・・ いや・・・ それに気付いていた者が一人だけいた。

信長と共に長篠城の合戦を勝利した徳川家康その人である。

「ふふふ、戦下手かと思うておつたが治部殿もなかなかやり申す。

いや、これは大谷刑部の献策であろうな。

大筒までも山上に据えてあるとは、大垣城から夜陰やいんに紛れて出てきた割には随分と段取りの良いことである。

こちらの動きにつられてやむなく出張てはつて来たかに見せて、実は端はなから関ヶ原こに我らを誘いこむつもりであったのであろう。

敵ながら見事な戦略、この家康感服つかまつた」

そう言いながらも家康は内心ほくそ笑んだ。

南近江を根城とする甲賀衆はすでに徳川の諜報機関として全国各地の大名諸侯との書状の遣り取りや探索に暗躍していた。

西軍が関ヶ原の北西部に堅固な野戦陣地を構築済みなのは甲賀者の探索で既に承知するところであった。

では何故家康は三成と吉継の仕掛けた策略にかかると承知で関ヶ原こに兵を進めたのであろうか・・・

その八十九 戦術 対 諜報

関ヶ原は中仙道に沿うかたちで東西に長い沖積平野である。

土壌は葦や薄すすりなどの植物の残滓くずが何百年と腐らずに積み重なった泥炭地である。

水捌みずはけけが悪く畑作に向かず、さりとて稲田にするには河川が貧弱という中途半端な土地であった。

ゆえに交通便利な広大な平野にも関わらず、長きにわたってほとんど耕作もされず放置されてきた。

秋口ともなれば一面に穂を垂らした薄すすりの原となる。

その関ヶ原の北西部の南と北から山裾やますそが迫る狭窄地帯せうさくちたいに西軍の防衛線が密かに築かれていた。

当初は三成自身の居城である佐和山城一帯も待ち伏せ適地として検討されていたが、余りに策略臭いことと、伊勢方面から大津に別動隊を差し向けられると挟撃される恐れがあった。

そのため吉継と三成は、より自然な形で東軍を誘い込める関ヶ原を決戦の地を選んだのである。

東軍は行軍途上での流動的な遭遇戦として場当たりの対応をせざるを得ないであろう戦略である。

迎え撃つ西軍にしてみれば周到に野戦陣地を構築しての迎撃戦であ

り、動員兵力の差がそのまま勝敗の行方を左右する後手必勝の鉄壁の布陣である。

それは西軍全体の布陣を見れば一目瞭然である。

関ヶ原の北西のどん詰まりに土塁を築き石田、小西、島津ら戦意と戦闘力が共に高い部隊が防衛線を死守する。

待ち伏せを悟られぬための囷として、平野部に突出した最大勢力の宇喜多勢が多段構えの堅固な陣を張り、東軍主力の攻撃を耐え凌ぐ。

機動力の高い大谷勢は回り込もうとする敵を遊撃する。

何度攻勢を掛けても崩れぬ防衛線に攻め手は焦り攻撃は単調大雑把になり、次第に攻撃力が殺がれていく。

そのタイミングで無傷の援軍の大量投入で一気に反転攻勢に打って出れば攻め手は為すすべも無く総崩れの全滅である。

これが二十五年前に、兵士個々の練度と戦闘力で圧倒する武田軍を、信長が兵員の頭数だけで打ち破った長篠の戦いの本質である。

後世有名な鉄砲と馬防柵は野戦陣地の一部の特徴だけが過大に喧伝されたもので、そんなものが施されていると予め知られていれば側面に回り込まれて、はいそれまでである。

つまり一度しか使えない手品のような戦術で、ネタがばれてしまえば二度と誰も引っからない。

現に第二次世界大戦の時、フランス陸軍の誇るマジノ線は余りにも

有名になりすぎて誰も相手をしてくれず、迂回したドイツ機甲師団により、あつという間にパリは陥落した。

あくまで相手には遭遇戦と思わせることが本作戦の肝であり、モチベーションはともかく動員兵力をとにかく数多く掻き集めることが本作戦の本質である。

まさに頭数だけは立派な西軍向きの作戦である。

家康もまさか自分が武田に勝利した歴史的な戦術を自らの身で味わうことになるうとは……予見していた。

家康は、その必勝パターンを逆手に取るうとした。

焦点となる動員兵力の切り崩しによって……

三成と吉継は陣地構築や誘導などの戦術に重きを置いた戦略で正々堂々家康に挑んだ。

一方の家康は、本多正信・政重親子や井伊直政、直江兼続、片桐且元、甲賀衆などの諜報部員や間諜を駆使して、極秘情報の收拾や裏切りを促す諜報活動を主とする政略で押しつぶそうとしていた。

時代は戦争の主役を、個々人の戦闘力や陣地構築などの戦術から、多数派工作や裏切りを促す戦略を経て、諜報と利益供与が支配する政略の時代へ、グラデーションを描きながら進化していくのであった。

『信と義』では『保身と利』には到底敵わぬ……寂しい時代へと……

その九十 吉継の勝算

大谷吉継おおたによしつぐについては後世 ” 負けると分かっているながらも三成との友情に殉じた男 ” という見方が大勢である。

西軍の大名の中で只一人戦闘中に自刃して果てた壮絶な最後も、後の世の人々に潔いさぎよい人物と映ったのであろう。

しかしながら当時、戦に負けるといふことは当主の命のみならず一族郎党の生命財産が根こそぎ失われかねない大災厄だいさいやくである。

だからこそ関ヶ原を前にした大名達はどちらに付くかで逡巡しゆんじゆんし、まともな神経の持ち主は皆徳川に加担したのである。

関ヶ原に参陣した大谷軍の兵士は総勢六千人である。

士卒の妻子や親兄妹まで数えたら何万人もの人々の行く末が戦の勝敗に左右される一大事である。

当主の友情云々だけで軽々に負け戦に加担できる訳が無い。

吉継は本当に負けると思っていたのだろうか。

否。

吉継には確固たる勝算があったはずである。

徳川との決戦を前にした吉継は徹底的に家康本人になりきり、家康がどう動くであろうかに思いを巡らせたはずである。

いかに二百五十万石を誇る徳川とて天下を二分する大戦おおいくなに於いて、激しく消耗する訳にはいかない事情を抱えていた。

東北の覇者伊達いの存在である。

大坂方との決戦が長引いたり、徳川が消耗著しいと見るや、伊達正宗は上杉や最上と結んでも電光石火関東へ攻め込んでくる可能性が大いにあった。

家康は今度の騒乱を己の天下取りではなく、あくまで豊臣家中の主導権争いとしておきたいはずだった。

三成を豊臣家に巢食う獅子身中の虫と吹き込み豊臣大名同士を戦わせて共倒れにさせ、徳川を無傷のまま温存し漁夫の利を得ようと画策したのである。

家康が上杉征伐に同行する豊臣大名達に三成が拳兵したことを知らせ、妻子が残る大坂方に付くのか、行動を共にする徳川に付くのか、二者択一を迫るであろうは徳川の支配地の江戸を過ぎてからと予測した。

老獪な家康は大名達が徳川領を避けては西に帰れぬところまで連れ出してから進退を迫るであろうからだ。

そこで真田の出番である。

吉継は来たるべく徳川との決戦を予想して真田を自陣營へ取り込んでいた。

吉継の娘、於利世を真田の次男信繁（後世幸村）に嫁がせていたのだ。

信繁は吉継をして男と見込んだ人物であった。

吉継の意を受けた真田が徳川に反旗を翻すと、はたして吉継の読み通り家康はこれ幸いと徳川本隊の大半を中仙道に振り向けた。

しかしながら真田は長男の信之が徳川方に、弟の信繁と父昌幸が豊臣方へと袂を分かつて、親兄弟で敵味方となる苦渋の道を選ぶ事となったのである。

徳川の大軍に包囲されようかという上田城の於利世から、吉継へ向けた最後の知らせによると中仙道を来る徳川の本隊はなんと七万。

これでは東海道を家康に従軍する徳川の軍勢は僅か一万あるか無いかということになる。

真田に手こずるを大儀名分に徳川本隊をわざと遠回りさせ、豊臣の大名同士を争わせて双方を消耗させる魂胆が丸見えであった。

激戦ともなればたとえ勝ったにしてもその消耗は激しく、多少の加増ぐらいではとても短期間で回復はできない。

その間に徳川の天下を という腹だ。

徳川はかつて上田城で真田に大敗を喫しており、ほぼ全軍ともいえる軍勢を差し向けても誰もそれを疑うことはなかった。

吉継の狙い通りに事は進み、これで関ヶ原で相對するのは家康に尻尾を振る寄せ集めの豊臣大名達ということになった。

吉継の頭脳は全速力で回転し、家康の裏を斯^かく戦略を構築した。

敵の主力は徳川ではなく、三成憎しと怒り狂う細川忠興や福島正則ら戦意の高い連中が前面に出てくるはずである。

頭に血が昇って前のめりになる敵におあつらえ向きの策があった。

当時十六歳の吉継が羽柴秀吉に仕官を求めるときっかけともなった、織田信長が武田勝頼を打ち破った長篠の戦いである。

これこそ天才信長が編み出した後手必勝の待ち受け戦である。

あたかも偶発戦を装って戦意の高い敵を密かに構築した野戦陣地に誘い込み、何度攻め込んでも一向に埒があかない状態に陥らせる。

次第に敵の戦闘力を殺いでいき、ここぞというときに新手の反転攻勢部隊をなだれ込ませ一気に敵を殲滅する戦術である。

無敵を誇るような強力な敵に対しても、頭数さえ揃えれば自動的に勝ちが転がり込んで来る作戦である。

これは自分たちが戦闘力で勝っていると慢心している敵ほど深く嵌まり込む恐ろしい罠である。

無敵を誇る武田騎馬軍団もこの策に嵌り込み、傭兵の寄せ集めに過ぎない織田軍に大敗を喫し、やがて武田は滅亡したのである。

後世、武田は信長が編み出した木柵と鉄砲三段撃ちに敗れたとされるが、それは野戦陣地の一部の特徴だけが強調されて後の世に伝わったものである。

あくまで偶発戦を装うことがこの作戦の肝であり、初めからそこに柵やら土塁やら陣地が構築されていると悟られてしまえば、横に回り込まれてはいそれまでである。

現に第二次世界大戦では、フランス陸軍が誇るマジノ線はドイツ機甲師団に迂回されてしまい、あっという間にパリは陥落した。

さらに吉継は反転攻勢を仕掛ける大部隊の配置に驚くべき細工を施そうとした。

それは家康に味方と思い込ませた大部隊を要所に配し、土壇場で家康方に突入させるといふ恐るべきものであった。

徳川本隊を出し惜しみしたい家康は各地の大名達に自軍に味方するように書状を出しまくっていた。

それを逆手に取り、徳川に内通したかに見せた大部隊をおおっぴらに要所に配置しようと考えたのである。

吉継が白羽の矢を立てたのはかつての豊臣の後継者、小早川秀秋であつた

その九十一 狼煙

「小早川に向けて狼煙のぶしを上げよ」

三成が待ちに待った反転攻勢の機会が訪れているのが笹尾山の本陣から見て取れた。

眼下では島左近と小西行長らが一時半近くも細川忠興いっせきはんや黒田長政、加藤嘉明ら東軍主力の波状攻撃を何度も退けていた。

宇喜多勢も福島正則を当初の位置より後退させている。

大谷吉継の精鋭部隊も藤堂高虎と五分以上に渡り合っている。

東軍は攻勢の頂点を過ぎ、じり貧の状態に陥りつつあった。

西軍の温存部隊で総掛かりの反転攻勢を仕掛けるのは、今この時をおいてほかに無い。

その温存させた小早川の大軍が陣取る松尾山からも、西軍の優勢が手に取るように窺うかがえるはずである。

しかし狼煙を何度立ち昇らせても小早川の幾重にも重なる陣旗しんはたに動きは見られない。

三成の背に冷たい汗が流れた。

……まさか……

「今一度総攻撃の狼煙を上げよ、戦況の検分に夢中になって見逃しておるやも知れぬ」

次いで三成は、優勢を維持するために麓の西側で井伊の赤備えと睨み合いを続けている島津勢にも平野部へ進軍するように伝令を出した。

・・・ 機を逃せば先に東軍に後詰めが入って来よう ・・・

その読み通り家康は本陣に次々届く前線部隊の苦戦の報に速やかに援軍を送る指示を出していた。

「後方の有馬、山内やまのうちのの二隊へも前線への進軍を命じよ」

本来後方側面の南宮山に布陣する西軍の吉川、毛利、安国寺らの大軍を牽制させておくべき軍勢である。

「後方の守りは浅野幸長と池田輝政だけで事足りよう」

・・・ 吉川広家は約束を違えず毛利を抑え込んでおる ・・・

「援軍は平地に突出している宇喜多に集中させよ、主力の前線を持ちこたえさせるのだ」

長篠の戦いとき、囷として平野部で武田の猛攻を凌いだのは徳川の軍勢であった。

…… あそこが一番しんどいのは我が身が一番知るところである……

前半戦に於ける家康の狙いは敵味方の戦力の均衡を図り戦線を膠着させて戦いを長引かせ、双方を消耗させることにあつた。

狙い通り各前線は西軍の優勢で膠着していた。

そろそろ敵の反転攻勢潰しに取り掛かる頃合である。

「敵の本陣から狼煙のろしが上がった様である。頃合である、我が本陣も平野部に前進せよ」

後詰めの援軍に続いて家康の本陣も平野部に進軍した。

何しろ四、五千ばかりの旗本だけの粗末な本陣なので移動も容易たやすい。

…… おかしい……

宇喜多勢との激戦が続く福島正則はこのときになって家康の布陣と攻撃の在り方に疑問を持ち始めていた。

…… どこも敵味方の戦力が予め推し量ったかのように一致し

すぎている

何故戦力を一点に集中して個別撃破で戦局を有利に持っていかぬのだ。

. . . . これではまるで豊臣同士の潰し合いのための戦では無いか

家康は前日に大垣城と対峙する赤坂の岡山に入るとすぐさま関ヶ原に進軍を命じた。

嫡男の秀忠率いる徳川本隊を待とうともせず。

. . . . 内府と東海道を来た徳川軍はいったい何人だ

本多と井伊や忠吉を合わせても一万居るか居ないかなのではないのか。

. . . . さては内府め端から徳川は手を下さず漁夫の利を目論見おったか

正則は先頭を切って家康の御先棒を担いだことを後悔しはじめていた。

しかし時すでに遅し

一方、関ヶ原の命運を握る松尾山の小早川秀秋には三成の狼煙はもとより、家康との間で攻撃開始の合図とした本陣の前進も見て取れた。

このとき秀秋はそれまでの態度を一変させ、誰もが予想しない命令を下すのであった。

その九十二 切り札

慶長五年（1600年）七月十五日 北政所の隠居屋敷

「秀秋、そなたの巧妙な立ち回りこそが、老獺ろうかいで周到な内府殿を謀たばかる最後の切り札となりましょう」

北政所は一時は我子として育てた秀秋に諭すように語った。

三成の秘中の策であった徳川討伐の勅命を得た上で秀頼を総大将に担ぐ策は、淀の方の出生の秘密が朝廷に漏れる事態により頓挫とんざしていた。

かくなる上は総力戦をもって家康と雌雄を決するしか無い。

西国の雄、毛利輝元を総大将に迎えたことで毛利家筋の大名達と西国の外様大名を多数引き入れることに成功した三成であったが、謀略に長けた徳川が次々と仕掛けてくる切り崩し工作に対抗するためには、こちらも敵の懐に飛び込んで死中の活を拾わなければ到底太刀打ちできないと危惧していた。

その重要な役目を、かつての豊臣家の跡取りであり、今は小早川家の当主である秀秋に託すべく三成と北政所は揃って秀秋と向き合っていた。

「御義母上ごぎぼうえ、過去に如何なる経緯けいゐがあろうともこの秀秋、豊臣の一員であることを忘れてはおりませぬ。

なに、心と裏腹うらはらの外面そとへを装うことには養子を渡り歩いて慣れておりますれば必ずや内府を謀たばかってみせます」

まだ自分のことを母と呼んでくれる秀秋に北政所は感涙し、三成も遅しく成長した秀秋を頼もしく感じた。

「秀秋殿、某を恨む者は多御座います。秀秋殿にもこれまで度々不愉快な思いをさせてまいったこと今更ながらこの三成、心より詫び申し上げます」

秀秋の前に平伏する三成に秀秋が擦り寄り手を取って起き上がれせた。

「某は治部殿に何の遺恨も御座りませぬ。豊臣の忠臣として亡き太閤殿下を庇い支えてくれた恩人と思っております」

秀秋は幼い頃より聡明で万事私心が無かった。

それはそうである、秀秋は聡明なおねねの甥子である。

三成と秀秋の和解と固い結束を目の前にして北政所の目からは幾粒もの涙がこぼれた。

「わたくしが至らぬばかりに皆に余分な苦勞をかけ、申し訳なく思っています。
わたくしが臍を曲げたりせず西の丸にこの大きな尻ででんと居座つておれば、家康殿にここまでの専横を許すことも御座らなかつたであらう……」

秀秋は三成の方に向き直って小早川家の現状を有り体に説明した。

「義父の小早川隆景が死去すると譜代の重臣達の多くは他家に出て

行き、今現在の小早川は太閤殿下が秀秋に付けてよこした平岡頼勝と稲葉正成の二人の家老が牛耳っております。

正直に申し上げて、当主と云えども若年の某の意向がどこまで通るか微妙な状況で御座います。

平岡頼勝は東軍に組する黒田如水と縁戚で、その息子の黒田長政とも昵懇である様子。

稲葉正成は継室^{けいしつ}を得てより人が変わった様に利に敏くなった様子に御座います。

この二人の家老が小早川を掌握するための最大の抵抗勢力になることは間違い御座いません」

三成の顔が陰しくなった。

「稲葉正成殿の継室は確か斎藤利三殿^{としみつ}のご息女のお福殿が入られたはず・・・」

三成の言葉に北政所も顔が曇り、三成と顔を見合わせた。

・・・こんなところでも本能寺の遺恨が豊臣に暗雲をもたらそうとは、明智珠様の御自害といひ何という皮肉な巡り合わせ・・・

斎藤利三は本能寺に於いて明智光秀と共に織田信長と跡継ぎの信忠を殺害した明智家の家老である。

二人の心配そうな気配を察したのか秀秋はこうも付け加えた。

「しかし、太閤殿下がお与え下さったもう一人の家臣、松野重元はひたすら豊臣に忠義を尽くす男で、この男だけは信用できます」

三成は内府の小早川に対する切り崩しを逆に利用して、徳川に予想もしない大打撃を与えられるのではと希望が開けた。

「決戦に至るまでの作戦は大谷刑部に一任して御座います。」

刑部の策では先ず伊勢方面を押さえ、京・大坂への東軍の進路を美濃・近江經由に絞り込ませ大垣城を拠点に西軍を集結させます。

その間、密かに関ヶ原に強固な野戦陣地を構築して、あたかも偶発戦を装って徳川方を待ち伏せに致します。

刑部の申すところでは、この策はかつて信長公が最強を誇る武田の軍勢を打ち破った長篠決戦と同じ戦略であるそうに御座います。

勝敗を分けるのは温存させた兵力を如何に頃合良く大量投入できるかにかかっております。

小早川にはこの反転攻勢の大部隊の役を担っていたただきたく存じません。

それまで秀秋様は二人の家老の企てに乗ったかの如く旗色不明のまま徳川に味方する振りを通して、

土壇場で西軍に豹変すると云うのが秀秋殿の身の安全の点からも作戦の上からも宜しかろうと存じます。

布石として明後日からの伏見城攻めでは、わざとやる気の無い振りをして東軍の旗色を公然と滲ませ、某との関係悪化を家老達に印象

付ける振る舞いをされるのがよろしかろうと 「

若い秀秋は大谷吉継の巧みな策に舌を巻いた。

「敵を欺くには先ず味方から で御座いますな」

こうして十九歳の秀秋は心中奥深くに本心を隠したまま運命の松尾山に至るのであった。

その九十三 クーデター

…… 治部殿、いま少し待たれよ。あとすこしで大きな魚が網にかかり申す ……

秀秋に三成からの狼煙は見えていた。

ただもう少し辛抱すれば内府が関ヶ原の真ん中までやってくることも知っていた。

小早川への合図として。

同じ光景を違う目で眺める者がすぐ近くにあった。

…… これはまさに長篠の合戦の再現ではないか ……

家康から軍監として小早川に派遣されていた奥平貞治は松尾山の眼下に繰り広げられる光景に、かつて自分が織田・徳川連合軍として参加した長篠合戦の再現を見せられているかの様な錯覚を覚えた。

西軍の軍師、大谷吉継とはとんでもない男である。徳川殿が警戒されるのももつともである。

はるか二十五年前に当時最強を誇った武田の軍勢を、傭兵の寄り合い所帯で打ち負かした信長公の秘策を、当の徳川相手に仕掛けてこようとは ……。

しかし、それにも増して驚くべきは敵の策を読み切った家康殿の慧眼である。

今時は長篠の合戦の名前だけは知っていたとしても、その恐ろしさまで知る者はまずおるまい。

あれは個別兵員の戦闘力が高い軍隊ほど深く嵌り込み、気が付いたときには敵の反転攻勢に壊滅的な損害を蒙る恐ろしい罠だ。

奥平はようやく己が小早川に派遣された訳を理解した。

「ここで万一小早川が西軍に寝返るものなら東軍はたちまち壊滅させられてしまう。

家康殿が軍監として某を遣わした理由はこのためだったのか。

誰よりもこの後手必勝の待ち受け戦の恐ろしさを知る貞治なら、よもや対応を誤ることは無いであろうと……」

その貞治の向こうでは小早川の若き当主が腕組みをしたまま東西両軍の熾烈な戦いを眺めていた。

その様子からは、秀秋が徳川を裏切る気配など微塵も感じられなかった。

ただただ家康からの総攻撃の合図を待ちわびているかに見えた。

そのとき東軍の後詰から山内と有馬の陣旗の群れが宇喜多に苦戦する福島隊の支援に入る動きが見えた。

さすれば小早川の出番もそろそろである。

すると遙か後方の桃配山の麓にあった徳川の本陣が家康の馬印と共に関ヶ原の平野部中央近くまで出張ってくるのが覗えた。

・・・御味方ながらなんともちつぽけな本陣で御座る・・・

その数五千ほどか。

一方、秀秋の思いは別のところにあった。

・・・内府め、やっと網に入ったか・・・

秀秋はこのときを待っていた。

家康と交わした総攻撃の合図、徳川本陣の前進を見極めるまでは出撃を堪えていたのだ。

秀秋は物見から小早川諸将が待ち受ける陣幕に戻った。

小早川の武将の多くは不承不承ふしょうぶしょうながらも西軍への攻撃命令を待っていた。

秀秋は小早川の軍団長たちをぐるっと見回すと確固たる決意を込めた力強い声で命じた。

「これより小早川は大坂方に御味方致す。第一軍は大谷勢の支援に、第二、第三軍は宇喜多勢の支援に、以降全軍を以って笹尾山本陣を取り巻く徳川軍を蹴散らせ」

松尾山の本陣が「おおっ」とも「はぁぁ」ともつかぬどよめきに包まれた。

あまりの唐突さに呆然とする平岡、稲葉の両家老を差し置いて、徳川軍監の奥平貞治が目を吊り上げて進み出た。

「小早川殿、このような裏切り、お家の為になりま」

背後から何者かが飛び出してきた。

「無礼者め」

奥平が全て言い終る前に第一軍の大將、松野重元が皆の目の前で奥平をたたっ切った。

不意を突かれた奥平は何の抵抗も出来ずに絶命した。

貞治の共の二人も刀を抜く前に松野の手の者に全て打ち倒された。

「殿の上意で御座る。異を唱える者は小早川の者としてこの場で上意討ちに致す」

松野重元が気迫でその場を制圧した。

同時に松野の配下が本陣を取り囲んだ。

これに及んで徳川に内通していた平岡頼勝と稲葉正成も秀秋に従わざるを得なくなった。

「平岡、稲葉、其の方たちの小早川のためを思ふ忠節もつともなれど、我は最初から徳川と戦う覚悟である。
その方たちの返答如何いかんによってはこの場で切腹申し付けるが如何に
！」

このとき有無を言わず二人とも始末しておけばその後のち四〇〇年の日本の歴史は全く別なものとなっていた。

「……………上意に従いまする……………」

「……………仰せの通り……………」

二人は大変な事になったと思いつつもこの場は秀秋に従った。

「殿、この二人はまだ信用なりませぬ、戦が終わるまで縛り上げておいた方がよろしいかと」

松野の提案を秀秋は抑えた「そこまではしなくても良い、両名とも小早川の為を思つてのことである。

東軍への攻撃が始まればもう後戻りは出来ぬ」

松野は秀秋の警護に五十名ほどを残して自分の第一軍一〇〇〇名の部隊を率いて松尾山裏手のの大手道を駆け下って行った。

それを見送った二人の家老達の動きは素早かった。

すぐさま自分の手の者に命じて秀秋と警護の五十名を逆に取り囲んだ。

「平岡、稲葉、何をしておる、我が命が聞けぬと申すか」

二人とも必死である。

「たとえここで徳川に一勝したとしても、徳川の本隊も世継ぎと共にそっくり残っております」

「ここで徳川を裏切るようなことを致さば、いずれ小早川は皆殺しの目にあいますぞ」

彼らには彼らの正義と野心があつたのだ。

稲葉正成は主君の首筋に刃を突きつけた。

「殿、お許し下され。戦が終わるまでは御身柄を預からせていただきます」

たちまち立場が逆になった。

秀秋がいくら命じても兵達は家老達の命令しか聞き入れなかった。

秀秋を無力感がおそった。

秀秋の見張りには若い稲葉が残り、年長の平岡は騎馬の腹心を引き連れて先発した第一軍を追いかけた。

．．．． なんとかしても徳川への裏切りを止めねば小早川は消滅してしまふ．．．．

その九十四 松尾山の行方

三成が島津に伝令に出した八十島助左衛門が困り顔で戻ってきた。

「いかがでした、島津は一向に動かぬではないか」、三成が問いただした。

「島津義弘様、井伊方と撃ち合うのみで一向に攻め込む気配無く、某にも言い掛かりをつけて今にも切り掛からんとの態度で取り付く島も有りませぬ。

あの様子ではすでに東軍と手打ちを致しておるものと推察致します」

・・・ さつきの赤備えの突入は示し合わせたものか ・・・

「くっ、大事なところで頼りにならぬ日和見め」

しかし旗色が不鮮明な島津も毛利も吉川も小早川さえ動かば我先に馳せ参じて来よう。

三成は合図の狼煙を何度立ち昇らせてもなかなか動きの現れない松尾山の山頂を睨んだ。

そのとき山上の長旗がゆらゆらと動き始めるのが見て取れた。

「秀秋殿、待ち侘びたぞ ・・・」

一方関ヶ原の中央まで本陣を進めた家康も小早川の動きを見止めて

いた。

「小僧め、ようやく動き出しおったわ・・・」

家康は松尾山の山頂に出撃の動きが見て取れたことに安堵の声を上げた。

松尾山の山上から関ヶ原の平野部に駆け降りるためには正面からでは樹木が密生する急斜面の為降りられず、山の裏手の山道をぐるっと回って関ヶ原の北西部の谷間から出てくるしかない。

標高三百米メートルの山頂から麓まで徒かちの駆け足で十五分ほどはかかる。

東西両軍どちらの軍も小早川が自軍の味方に加わると思い込んで混戦を持ち堪えていた。

家康は馬の鐙あぶみにつま先をぐっと入れて、もし万が一小早川が西軍についたときに備えて脱兎の如く逃げ出す心積もりに怠りは無かった。

答えはもうすぐ、小早川軍が山陰から関ヶ原に現れた瞬間に判る。

その九十五 主馬離脱

「道は下り坂だ、駆けよ駆けよ」

騎乗する松野重元に率いられた小早川第一軍は松尾山の山頂から関ヶ原へと続く山道さんどうを駆け足で下っていた。

・・・ 急がねば時期を逸する・・・

狭い山道ゆえ武装した兵士二人が併走すると、いっぱいいっぱいである。

雑兵たちは駆けながら自分達がどこを相手に戦をするのか口々に言い合っていた。

「徳川からは目付けの軍監が遣わされていたはずだぞ。ここは徳川に付くのが御家おいえの為だろう」

「しかし俺たちの大将の主馬殿しゅまは確かに豊臣に御味方すると言われて先頭に立たれたぞ」

「そりゃーそうだろう、我が殿は豊臣家の第二位後継者の御身分なのだから」

駆け下りる雑兵たちは自分達がいっただちらに味方するのかよく分かっていなかった。

約千名に及ぶ第一軍の行列は伸びに伸び先頭が山裾に到着した頃、最後部はまだ山道半ばであった。

騎乗して追いかけた家老の平岡頼勝一行は麓の手前で最後尾に追いついたが第一軍を追い越すに追い越せず苛立ちが募った。

関ヶ原から山影になる開けたところで隊長の松野重元は一旦進軍を止め、隊形が整うのを待った。

最後尾をようやく追い越した家老の平岡頼勝らが松野の元へ駆け寄った。

「主馬殿、そこまでで御座る」

平岡の姿を見止めると松野はしまったと思った。

「殿は御心変わりされた。敵は大谷刑部少輔と宇喜多中納言、そして首領の石田治部少輔である」

「おのれ平岡、家臣の分際で殿をどうした」、松野重元は秀秋を本陣に残してきたことを悔いた。

「殿は稲葉殿と御一緒に御無事で御座る、……今の処は。其の方の返答次第ではどのような仕儀となるかは保障できぬ。さっさと第一軍を指揮して殿の御命令通り大谷軍に突入せよ」

兵達は息を呑んで二人のやり取りを見守っていた。

「そんなことが聞けるか」、そう言って松野は抜刀すると家老の平岡に切りかかろうとした。

平岡が叫んだ、「鉄砲、主馬しゅまを撃て」

兵達は隊長の身分の松野ではなく家老である平岡の命令に従わざるを得なかった。

鉄砲隊はやむなく松野重元を目掛けて至近距離から発砲した。

「おのれ平岡、必ず後悔することになるぞ」

兵達はわざと狙いはずしたのである。

松野重元は僅かの側近だけを連れて、やむなく戦列を離脱して北国街道を北に遁走していった。

平岡頼勝は共に駆け下りてきた腹心達に命じた。

「お前達はこのまま第一軍を指揮して一番近い大谷吉継の部隊に攻撃を仕掛けよ。

出来るだけ派手に仕掛けるのだぞ。さすれば予め徳川と内通しておる者達が呼応して加勢に加わって来よう」

攻める相手はころころ変わるは、隊長は兵を残して遁走するはで第一軍は士気も上がらぬまま大谷吉継の精鋭部隊に向かって統率も取れない有り様で攻め込んで行った。

その様子は松尾山からも笹尾山からも家康の本陣がある関ヶ原の真ん中からも見えた。

関ヶ原に居合わせた者全員が小早川の動向を察したとき、それまでの関ヶ原を覆っていた膠着した空気がぐらっと揺れて一気に東軍の追い風に変わった。

「……松尾山で何か御座ったな、後で貞治に問わねばなるまい」

家康は力を込めて踏ん張っていた鎧あぶみを踏む力を緩めると、すでに頭の中は戦後処理へと興味の大半は移っていた。

家康にとっての関ヶ原はここで終わった。

しかし関ヶ原が本当の修羅場と化すのはまだまだこれからなのである。

すでに勝利を収めたつもりの家康とてまだ安心は出来ない。

その九十六 吉継の最期

「くつ、若年の秀秋ではあの強したたかな家老どもを御し切れなかったか
……」

しかし大谷吉継は万一秀秋が小早川をまとめ切れない場合にも備えを怠らなかつた。

「小早川は統率が取れておらぬ、松尾山に押し返せ」

吉継は反転攻勢のために温存しておいた大谷軍の精鋭六百を小早川の押さえに回した。

……切り札の小早川を失ってしまったては今日中にけりをつけるのは難しいぞ……

このときまだ吉継の脳裏には敗戦の二文字は無かつた。

決死の覚悟の大谷軍の兵士と、ついさっきまでどちらに付くのかもはっきりしなかつた小早川の兵士とでは端はなから勝負にならなかつた。満足な指揮官すらいない小早川の一番隊は倍近い人数にも関わらず二度、三度と大谷軍に押し返されあわや腰砕けかと思われた。

そのとき西軍内において、吉継でさえ夢想だにしない動きが現われた。

吉継と共に北陸戦線を戦ってきた脇坂安治がよもやの裏切りで小早川と押し合っている大谷隊の側面を急襲した。

脇坂のまさかの裏切りを間近に見て浮き足だった赤座、小川、朽木らの小早川を東軍に偽装するために松尾山に張り付けていた各隊も勝ち馬に乗り遅れまいと脇坂につられて大谷隊への攻撃に加わった。

押しつ押しされつの最中を側面から急襲されては如何なる軍隊とて耐え切れない。

さすがの大谷隊の精銳もこれには崩れた。

大谷隊の綻びを突いて小早川の二番隊以降の新手が山道から開放されて次々と雪崩をうつつように平野部に押し寄せた。

押し捲まくられながらも一兵として引かぬ大谷隊を呑み込み粉碎しながら、小早川の新手の大軍はくたくたに疲れきっている宇喜多隊とぎりぎりを持ちこたえていた小西隊に襲い掛かった。

目の見えぬ吉継に代わって最前線で指揮を執っていた平塚為広討ち死にの報に及んで、吉継も敗戦を覚悟し本作戦の全責任をとって自刃することを決意した。

人の背より高い薄すすりが密生する藪原にて輿を降りた吉継は、甲冑を脱ぎ捨て誰とも判らないようないでたちになった。

輿はそのまま人夫に持ち去らせた。

平塚為広に送った檄文が辞世であった。

脇差を抜いた吉継は何の躊躇も無く左腹深く突き立て少し右に引くと前方に崩れた。

五助は吉継の右側の首筋に刃を当てると一気に引き上げた。

すでに絶命していたと見えて血は噴き出さなかった。

五助はそのまま主君の首を切り取ると自分の陣羽織に包んでその場を離脱した。

……このまま関ヶ原を脱出することはまず不可能であろう、安全なところに埋めて隠さねば……

身を低くして薄の原を彷徨う五助の前を突如騎馬が率いる小隊が遮った。

……しまった……

騎馬の主と五助の目が合った。

藤堂高虎の甥の高刑であった。

「……！……、其の方、大谷の湯浅五助ではないか」

高刑の目が五助が大事そうに抱えた陣羽織の丸い包みを捕らえた。

五助は覚悟を決めた。

「如何にもこれは我が主君の御印で御座る。」

主君は負け戦の責任を一身に負い腹を召された。

某は一命をかけてこれを隠さねばならぬ。
如何であるう、某の首と引き換えに主君の御印は御勘弁いただけぬ
だろうか」

大谷吉継の首ともなれば大手柄である。

高刑はひとつ五助に問うた。

「この合戦を差配したは大谷殿であつたと申されるのか」

「……如何にも、我が主君で御座る」

二人の間にしばしの沈黙が流れた。

五助の首などよりはるかに重要な情報を手に入れることができた高
刑は五助の願いを聞き届けた。

「委細承知！」

かくして吉継の首は家康の前に差し出されずにすんだ。

一方、宇喜多軍の後方では兵達に撤退の指示を出す武将があつた。

「もはやこれまでである、引け、引け！。死にたくない奴は逃げろ
」

本多政重であつた。

後方の兵が敗走に傾いたのを契機にそれまで頑強に持ち堪えていた

宇喜多軍も崩壊を始めた。

先陣を切っていた宇喜多秀家が家老の本多政重を探したときには、すでに政重は東軍に囲まれる前に北国街道遙か彼方に消え去っていた。

「おのれ政重、初めから我を見捨てるつもりであったか・・・」

ちりじりに霧散した自軍の中から僅かばかりの近習と共に秀家は既に敵兵が渦巻く街道を諦め伊吹山中に活路を求め彷徨うのであった。

「内府が不戦の密約を破りおった・・・」

それまで遠く離れてにらみ合い鉄砲玉のやり取りしかなかった井伊勢が急に島津勢に攻めかかってきた。

「おのれ内府め、こちらが寡兵だと見縊^{みくび}って約束を反故^{ほんご}にする気が」

そのとき敗走する小西行長の兵卒達が島津の陣中を突破して逃げようつとしていた。

「ええい、西軍を討てー」

島津義弘は急遽東軍に衣替え小西の敗残兵を討ち取り始めた。

さすれば井伊直政も思いとどまり島津への攻撃が止むと信じて。

島津からも追われた小西の兵達は北への進路を塞がれ西の池寺池の中へ次々と追い立てられて落とされた。

哀れ甲冑を身に付けて満身に泳ぐことも這い上がることも出来ずに次々溺れ死んだ。

それでも島津への赤備えからの攻撃は止まず、当初千五百いた島津軍はあつという間に残り三百を切る程に減っていた。

北国街道への退路すら既に絶たれ義弘は切腹をも覚悟したが、どうにも家康に一太刀浴びせなければ気が済まない。

「豊久、このままでは死んでも死に切れぬ。家康に薩摩隼人の恐ろしさを味あわせてくれる。

残った兵で突撃隊形を組ませ家康がどれだけ汚い事をしたかを関ヶ原中の大名達に知らしめてやるのだ。

それが先々、徳川への薩摩の切り札となろう。皆の者、これはけつして無駄死には無いぞ」

前代未聞の薩摩の正面突破の撤退劇は、どさくさに紛れて島津義弘を亡き者としようと企んだ、家康に対する命がけの抗議であった。

その九十七 お福

小早川の家老、稲葉正成は松尾山の山頂から人質にとつた秀秋と共に西軍が壊滅する様を眺めていた。

三成の本陣がある笹尾山の陣地が次々と落ちていくのが見えた。

秀秋は暗たんとした気持ちになった。

・・・ 某の力が及ばぬばかりに、大谷殿、宇喜多殿、小西殿、そして三成殿も破滅させてしまった・・・

稲葉が秀秋を振り返って言った。

「殿、この勝利はひとえに我ら小早川の働きによつてもたらされたもので御座いまする。」

殿には内府様より相応の褒美が賜たまわられるに相違ありません。

殿は大威張りで頂戴してよろしいので御座います、家中の者や国許の家族もこれで安泰で御座います」

秀秋はこの独善的な家老に皮肉のひとつも言つてやらねば収まらなかつた。

「それは其の方の若い後妻の”お福”のことを申しておるのか」

秀秋にずばり指摘されて稲葉正成は苦笑した。

「其の方は”お福”を後妻としてより急速に内府に傾いたようであるが、全て”お福”の差し金であつたのではないのか」

「何を言われます、お福はまだ小娘に御座いますれば政治向きのことなど疎う御座います」

そう言いながらも稲葉は今こうして無理やり秀秋を東軍に寝返らせ
たは確かにお福の入れ知恵に相違無いと思ひ当たった。

・・・ 正成殿、次の天下様は徳川様に間違いのう御座います、
ゆめゆめお間違いなさいませぬよう・・・

お福が口癖のように正成に吹き込んでいた言葉である。

稲葉は頭かぶりを振って否定した。

「某は殿と小早川を案じて平岡殿と共に徳川への御味方を御勧め致
したので御座います」

秀秋の方を向いて言い訳する稲葉の視界に麓から戻って来た平岡の
姿が見えた。

平岡はたいそう慌てていた。

「稲葉殿、急いで奥平の遺骸を運び出すのだ」

関ヶ原の趨勢はほぼ決していた。

「いかん、そうであった。このような所に遺骸があつては小早川に
内部抗争があつたことが内府に知れる」

そう言つて二人の家老は兵に命じて奥平の遺骸を関ヶ原に捨ててくるように命じた。

「奥平殿には出奔した松野主馬に代わつて第一軍の指揮を取つてもらつたことといたそう」

「うむ、討ち死になら問題なからう」

「……愚かな、その程度の偽装で抜け目の無い内府の目を謀れ
ると思つておるのか……秀秋にはもう、どうでもよかつた。

二人の家老達は奥平と共の死体を処理するとようやく秀秋にかしずいた。

「殿、此度のご無礼何卒お許しを」

「小早川の御為にはこうするより仕方無かつたことは、殿にもお判りいただけましたものと存じます」

秀秋は何も答えず、悲しそうに眼下の殺戮さつりくの光景をその目に焼き付けるのであつた。

……後世、人々はこの秀秋を何と評するであらう……
主家を裏切つた卑怯者……そんなところであらう……

その九十八 春日局

慶長四年（1599年）伏見城

太閤秀吉が死んで一年と経たないにもかかわらず、家康の権勢はとどまるところを知らなかった。

そんな家康の元に本多正信によつて一人の若い娘が差し出された。

「殿、これが齋藤利三としみつが娘、”お福”で御座います」

齋藤利三とは本能寺に於いて織田信長を討つた明智光秀の家老である。

山崎の関で羽柴秀吉に敗走し、六条河原で斬首された。

顔を上げたお福と言う名の娘は年の頃二十歳ぐらいに見えた。

「母方の三条家に預けられて後、今は稲葉重通の養女となりて稲葉福に御座います」

特別美しいというわけではないが知性と品各がその立ち居振る舞いから滲み出していた。

家康の好みであった。

正信は家康にお福を引き合わせた訳を話した。

来たるべくして起こるであろう大坂方との決戦を控えて、地理的に

も縁戚関係から見てもまず大坂方に加わるであろう小早川を寝返らせることが出来ればどれだけ徳川が優位に立てるか。

小早川はまだ十八の秀秋が当主であるため、実際に家中を仕切っている家老を如何に寝返らせるかが鍵となること。

二人いる家老のうち平岡頼勝は縁戚の黒田長政による調略が期待できること。

残る稲葉正成は正室に先立たれ同じ家門からお福が継室^{けいしつ}として輿入れすることになっていること。

お福は豊臣を、実父斎藤利三の仇と恨んでいること。

そこまで聞いて家康は全て合点した。

「お福、そなた若い女の身で徳川の間諜としてただ一人小早川に乗り込むというのか」

お福はさらりと答えた。

「内府様の御命令とあらば」

さすがの家康も驚いた。

「して、そなたの望みは何か」

お福は顔を上げて家康をまっすぐ見つめ臆することなく答えた。

「徳川のお世継ぎの乳母としていただきとう御座いまする」

家康はきよとんとした。

「徳川の世継ぎは成人してある、乳母などいらぬ」

お福はにっこりして答えた。

「次の次のお世継ぎのことですごくぞいまする」

家康は驚いた。自分もまだそこまでは考えていないことであった。

ほんくら揃いの俵^{せがれ}たちのことで手一杯だったからである。

家康は目の前に堂々と座る、このお福という女がいたく気に入った。

「約束いたそう。そなたが見事小早川を寝返らせた暁には徳川家の跡目の養育係として召抱えよう」

お福は平伏して、「徳川三代目はお福が責任をもって御養育いたします」、「と返した。

そこまで見届けた正信は立ち上がってすーと立ち去った。

お福も正信に続いて下がるものかと思っていたがなぜか一人家康の前に残っていた。

「内府様への忠誠の証として、輿入れ前にこの身をお捧げいたしまする」

家康は過酷な運命を背負い懸命に生きるこのお福という女が、恐ろしくもたいそう愛おしく思えるのだった。

その九十九 薩摩の撤退劇

「皆の者、目指すはあれに見える徳川本陣、続けーーーーー」

島津義弘は僅か三〇〇程の残存兵力で密集隊形を造り、関ヶ原の中央近くまで前進している徳川本陣を目指して駆け出した。

先頭の義久に続いて長槍隊、抜刀隊、騎馬隊が続き側面に鉄砲隊、弓隊が張り付くひし形の一点突破隊形である。

徳川本陣まで五、六百米といったところか。

まさか今頃になって西軍から組織的な反撃が行われるとは誰も予測していなかった。

本陣警護の旗本衆は家康の指示で西軍掃討にすでに大半が繰り出されていた。

本陣は丸裸同然である。

島津の突進に一番最初に気付いたのは宇喜多を討ち破った福島正則であった。

「待て正之、手を出すな」

島津と徳川の間に割って入ろうとする若年の養子を正則は制した。

「負けと決まったのに、あのような捨て身の突撃を仕掛けるなど尋常では無い。

よほど腹に据えかねる事があるのだろう。武士の情けである、一太刀浴びせさせてやれ」

・・・窮鼠猫を噛む、もし島津が内府と刺し違えるようなこととなれば、豊臣にとって最も良い結末になる・・・

正則は島津に一縷いちろうの望みを託した。

かなり遅れてはらばらと井伊の赤備えの一団が林間部から現われた。

「隊列などどうでも良いからさっさと追撃しろー」

騎乗した直政が必死の形相で兵に檄を飛ばしながら追撃に移ろうとしていた。

相当な慌て振りである。

これで正則は自分の読みが当たっていたと確信した。

・・・どさくさに紛れて不戦の密約を反故にして義久を消そうとしたな・・・

・・・内府とはなんと汚い奴だ・・・
・・・俺はあんな奴に手を貸して宇喜多や三成を・・・

「むむっ、何だ今頃・・・」

すでに下馬して次々と入る戦勝の報を聞いていた家康の耳にも島津の軍勢が駆け寄る蹄すけの音がとどいた。

見上げた先に一塊になって一直線に突っ込んでくる、黒地に白抜きで十の旗が見えた。

「島津かつ・・・」

本陣は騒然とした。

家康は恐怖のあまり脱糞ていふんを堪えるのが精一杯で一步も動けなかった。

「義弘がまだ生きておった」

このままの勢いでは本陣に乗り込まれる。

一直線に徳川本陣を目指していたかに見えた島津勢は右に急転して左翼から鉄砲の斉射を本陣に浴びせてそのまま南の方角へ駆け去っていった。

家康の周りを鉄砲玉が空気を切り裂いて通過する音が飛び交った。

生きた心地がしなかったが無傷であった。

義弘の目的は家康と刺し違えることでは無かった。

たとえ家康と刺し違えたとしても全滅は免れないし、薩摩も滅亡する。

この撤退劇で家康が何らかの理由で義久を激怒させた事は諸侯に知れ渡り、無下に島津を滅ぼすことは出来無くなった。

義弘の目的は達せられた。

あとは少しでも多くの兵を薩摩まで連れ帰ることである。

本陣に手を付けずに駆け去る島津勢を必死の形相の井伊直政が追った。

その様子を逐一目撃した正則は舌打ちした。

「ちつ、義弘め、端はなから内府と刺し違える気は無かったな。

あのまま突っ込んでおれば内府を討ち果たせたかもしれないのに。

しかし島津を取り逃がすようなこととなれば内府にはさぞかし痛手であろう。

密約を反故にしてまで義久を亡き者としようとしたことが明るみになれば、この先誰も内府を信用しなくなる。

この戦も豊臣の為などと云うのは欺瞞きまんで、己おのれが野心の戦であったと云う事にもなるう」

正則の心は関ヶ原の混乱の中で、すでに家康から離れていた。

その百 無辜の存在

「治部殿は逃げおつたか・・・」

三成に再起する力も協力する者も得られないとは分かり切っていた。しかしながら石田三成とはたいした男である。

二十万石にも満たない小大名でありながら、二百五十万石の徳川と互角の勝負を演じて見せたのである。

「敵ながら見上げたものである」

しかし家康には三成に対する情けなど一片もありはしなかった。

三成の失脚は天下取りに徹底して利用しなければならぬ。

「治部少輔は必ず生きてままたま捕らえよ。捕縛には田中吉政を赴かせよ、あの者なら万事抜かりあるまい」

家康は三成の追撃に近江に詳しく三成とも昵懇であった田中吉政を任命した。

古来、暗殺や追討には的まととなる人物と最も親しかった者を当てるのがセオリーである。

織田信長は筆頭家臣の明智光秀に討たれ、源義経は保護者の藤原泰衡に、蘇我入鹿そかのいるかは従兄弟の蘇我倉山田石川麻呂が殺害に関わっていた。

カエサルの暗殺には実子であったとされるブルータスが加わっていたことは有名である。

追討や暗殺には、親しい間柄でしか知り得ない行動パターンや立ち回り先や油断といったものが求められるからである。

「その他の大名どもは如何致した」

家康の本陣には西軍の主だった大名や武将達への消息の報が次々もたらされた。

正純が主だった武将達の生死を家康に伝えた。

「西軍の総帥と目される石田治部少は逃亡。

石田配下の島左近、討ち死に。

宇喜多中納言、逃亡。・・・宇喜多家老正木左兵衛、逃亡。

小西行長、逃亡。大谷刑部少、自刃の由。島津豊久、討ち死に。島

津義弘、逃亡。・・・」

そこまで聞いた家康は。

「どうやら西軍の大名どもは、まさか負けるなどとは思っておらなかったと見える」

正純がさも意外そうな顔で家康を見上げた。

「勝つつもりでおったから、死ぬ覚悟が決まらず逃げたのよ」

「・・・如何にも」、正純も我が身に置き換えて納得した。

「やはりこの戦の黒幕は大谷刑部であったようだの」

「はっ、？」

「あ奴だけが戦場いくさばで腹を切った……責任を取ったのである
う……惜しい男であった……」

「……御意に、……」

「このこと秘しておけ、すべての責めは三成に負ってもらわねばならぬ……」

「はっ、」

その後、家康の本陣には次々と戦勝の祝辞を述べに東軍に加わった諸将が訪れた。

一番最後に、辺りをはばかりのようにやってきたのは……平岡、稲葉の両家老に付き添われた小早川秀秋であった。

おずおずと家康の前に進み出た秀秋が口上を述べた。

「内府殿、此度は参戦が遅れ、多大な御迷惑をお掛けいたしましたこと誠に申し訳御座いませぬ」

秀秋は平岡から含まれたとおり感情のこもらない声で詫びを入れた。

家康は上から見下ろすように一瞥すると、「なになに、此度の戦勝

は小早川殿の適切な御判断と御味方があつたればこそ。この家康、厚く御礼申しあげる」

小早川の一行に安堵の表情があらわれた。

「ときに小早川殿、そこもとのところに遣わしておつた奥平貞治が山を降りて討ち死にしておつたそうだが、奥平はまこと討ち死にに相違御座らぬか」

秀秋の顔が引きつった。

平岡が代わってそれに答えた。

「奥平殿は土壇場で東軍への御味方を嫌つた松野主馬に代わつて、第一軍の指揮を買つて出てくれたので御座ります。手柄をあげられたにも関わらずの御討ち死には全くもって残念で御座います」

家康は疑いの目で平岡を見た。

「ほう、小早川では目付けとして遣わされたはずの軍監に最前線の指揮を任せても当然のことであると申されるのか」

平岡も稲葉も顔を上げられなかった。

・・・ やはり松尾山では何かあつたな ・・・

家康は鋭く感付いたがあえてそれ以上問い詰めることはしなかった。

汚れ仕事を押し付けるのに好都合であったからだ。

「小早川殿、敵の総帥の治部少輔は今だ逃亡中である。奴の佐和山城はここから目と鼻の先にある。

佐和山城攻略の先陣は小早川に申し付ける。見事期待に伝えて見せよ」

家康はまるで主のように居丈高に秀秋に命じた。

敗北感に打ちひしがれた表情で秀秋が本陣を去ると、家康は正純に尋ねた。

「奥平貞治に跡継ぎはおるか」

「いえ、奥平には妻子はおりませぬ。年老いた母御ははおんがおるだけに御座います」

そう正純が応えると家康は、「よいか、奥平は合戦の後、傷を負いながらも数日は生きてから没したこと致せ。

松尾山で何かあったと他の者に悟られてはならぬ。

小早川は当主の秀秋自身の意思で徳川に味方致したのだ。

徳川が家老を抱きこんで当主の意に反して無理やり寝返らせたなどと知れてはならぬ。

奥平の母御には供養料として三百石を毎年渡してやるのだ」

正純は家康の意図を理解した。

数々の調略と謀略が渦巻いた関ヶ原ではあったが、徳川は決して汚いことをして勝ったのではない。

時の勢い、人心の掌握によって勝つべくして勝ったのである。

そういうことにはしておかなければ、後々磐石の天下を築くのに差し障りがある。

天下人とはいつの世も無辜むこの存在であらねば世は治まらぬのである。

その百 無辜の存在（後書き）

ここまでお付き合いいただきまして、ありがとうございます。

「定説は覆される為にある」を座右の銘にしていまいりました。

調査資料はWIKIであり先人の小説であり、過去の大河ドラマなど誰でも接する程度の情報を基に想像をはたらかせて書いてきました。

「極秘情報の99パーセントは公開情報の中にある」

物語はまだつつきそうです。

もうしばらくお付き合い頂ければ恐悦至極に御座います。

その百一 逃避行

「刑部きょうぶ、許せ……………」

三成は生死を共にすることを誓い合った大谷吉継を関ヶ原に置き去りにして一人逃げる不義を詫びた。

三成をして友と交わした固い約束より守らなければならぬものがあった。

太閤の遺言である。

…………… 如何なることがあるうとも豊臣の再興のために三成は死んではならぬ……………

たとえどんな生き恥を晒そうとも三成は生きて生きて生き延びねばならぬのであった。

三成は近習の共すら連れずにただ一人、小高い丘陵と呼べるほどの笹尾山を南端に南北に連なる伊吹山脈深く分け入った。

満身に水や食料も携えていなかったのですぐに渴いた。

今朝方までの雨で流れが増した、あまり清らかでもない沢水で喉を潤し、追っ手を振り切るべく尾根筋の東側を北へ北へと逃れた。

本当は己の所領の北近江は西方に目と鼻の先であった。

しかし北国街道も中仙道も、街道筋は東軍に完全に封鎖されてしま

つたはずである。

追っ手が最も手薄になるであろう伊吹山脈の尾根の東側から大きく迂回して小谷・長浜へ降り、夜陰に紛れて佐和山の居城へと辿り付き、一族との再会と再起を果たしたい……………

それまで佐和山がもっていてくれればのことではあるが。

三成はかつて山崎に敗れた明智日向守ひょうのかみの気持ちだが、今なら誰よりも理解できる気がした。

……………ただただ一族の元へ……………

単独行で逃れたのは幸いであった。

目立たず、身軽な三成は追っ手に追いつかれる気がしなかった。

関ヶ原から北に四里の春日村界隈に辿りついたときにはすでに日付が変わっていた。

迂回路を騎馬の追っ手に先回りされた様子もなく村は静まり返っていた。

夜が明ければこの村の民も落ち武者狩りに総動員されるであろうと三成は思った。

とにかく何か腹に入れなければならない。

三成は村はずれの里山との堺の稲田に降り立つと、脇差を抜き収穫間際の稲穂が重く垂れた稲藁を何束が刈り取り陣羽織でくるりとし、ばって脇に抱えると再び里山に分け入り北を目指した。

関ヶ原の敗戦から十二時間以上休むことなく行動を続け、大垣城を出陣してからは二十四時間以上経過していた。

いったい何時間起きているのかさえ分からなくなっていた。

三成はようやく笹藪の切れ目のような山道を見つけると北西に進路を変え、徐々に標高を稼いでいった。

手はせわしくさつきの山郷で刈り取ってきた稲穂からもみごと生米をむしりつつは口に運んでいた。

三成の眼光は野生の狐のように油断無くあたりを警戒して光り、体中の細胞は生存の危機に瀕してかつてないほど活性化しているかのように疲れ知らずであった。

夜明けまでは

その百一 古橋村

いつの間に寝入ったのか三成は腹部の変調で目覚めた。

木漏れ日は山の斜面の正面低くから差し込んでいようである。

まだ尾根の東側にいるはずだから昼前のもようである。

急な便意に嫌な予感がしたが腹痛は全く感じなかった。

潜んでいた藪の中で急いで尻を出すとその場で用を足した。

はじめのうちは普通の便が出たが変化はすぐにあらわれた。

軟便どころではない、まるで水のような便がばしゃばしゃと勢いよく出ると、その中に全く消化されていない糞もみが漂っていた。

「ぬかった、生米はけっして食うなと戦陣訓を垂れていたのは自分自身であったのに生米どころか糞ごと食したは浅はかであった」

沢水と生糞なまもみが逃避行で消耗した三成に追い討ちをかけた。

尾根筋に近いそこでは失った水分を湧き水で補うこともままならず急いで水のある低地まで山を降りなければ生死にかかわろう。

しかし三成はもと来た春日村には戻らず体力があるうちに尾根の鞍部を超えて小谷側おたりへ降りることを選んだ。

「己が所領なら一時身ひしんを寄せられるところが在るかも知れぬ」

妻と父が残る佐和山の行方も気掛かりであった。

途中何度か、やはり水のような下痢を繰り返しようやく新穂谷から中津又谷に至る新穂峠に至る頃には脱水症状と疲労で歩くどころか立っていることさえ難儀なほどであった。

……いつそのこと……いや、ここで死ぬわけにはま
いらぬ……

今は関ヶ原で果てたであろう刑部がうらやましくさえ思えた。

苦労の末にたどり着いた峠に立つと、三成の眼下に琵琶湖畔が見渡
せた。

三成はほつと安堵した。

足元の、今は城砦の名残しかない小谷山おたじやまの向こうに、小さく己が居
城の佐和山の城がうかがえた。

佐和山の健在が三成の脚に希望を与えた。

尾根をまたいで姉川の谷筋に沿って進んだ。

今度はひたすら下り坂である。

とうに体力の限界を過ぎた脚には下るは昇り以上に堪えた。

だいぶ下ると岩肌が露出しているところのから清らかな湧き水が流れ出ていた。

三成はこの湧き水に救われた。

…… どうせまたすぐに下すのであろう ……

そう思いながらも腹いっぱい水を満たした。

下すものがあるだけましであるし、腹の毒を洗い流すことが出来る。

その通り飲んだ水はほとんどそのままの状態で排泄された。

しかしいくらかは体にも吸収されたようでなんとか歩き続けられた。

人里近くまで下りてからは夜中に民家の軒先の干し大根や干し柿を盗んで飢えをしのぎ、夜陰に紛れて姉川を越え小谷城の廃墟が残る小谷山の裏手の古橋村界限まで辿り着いた。

この辺りは三成が少年時代まですごした土地で古橋村は幼馴染の与次郎太夫の在所であった。

星明かりしかない真っ暗闇の中、与次郎の家を探し当てた三成は戸をたたいた。

すぐに戸の向こうに人の気配が現われて戸が開いた。

与次郎本人であった。

「佐和山の …… 石田の佐吉である ……」

それだけ言うと三成は土間に倒れこんだ。

与次郎の背後から女の小さな悲鳴が漏れた。

「佐和山の殿である」

与次郎は心配そうに見守る女房にそう告げると三成を家に抱き入れた。

三成は与次郎宅に匿われた。

小さな村の小屋のような家である。

他の村人に隠し通せるはずも無い事ゆえ、与次郎は翌朝すぐに村の衆達に佐和山の殿が自分を頼って落ち延びて来たことを明かした。

そして、「殿さまを匿いたいと・・・」

重苦しい沈黙ののち、村びとたちのあいだから「殿さまをお助けしよう」、「お助けいたそう」という声が聞こえた。

罰を恐れて異を唱えるような者は誰一人いなかった。

村人たちは団結して三成を匿う事を決めた。

三成の元には村人たちから精がつくようにと鶉ひよこの卵や雉肉きじが差し入れられた。

与次郎からそれらのことを聞いた三成は・・・感涙した。

自分が領民に施してきたことなど、村人たちの決意に比べれば偽善に過ぎなかつたと。

「与次郎殿、古橋村の御厚情この三成生涯忘れぬ。再起が叶うた暁にはこの古橋を日ノ本一豊かな村に致し申す・・・」

与次郎夫婦の介抱で少しずつ生への希望を取り戻しつつあった三成は、床の中で成すすべもなく、関ヶ原の敗因を振り返るのであった。

その百三 発端

「殿下、秀次様御本人に謀反の心積もりなど御座ろうはずがありません。利休殿に腹を召させたときといい此度の無理強いといい殿下はもうろくされたので御座いまするか」

三成は伏見城で太閤秀吉に直言した。

そのようなことを面と向かって秀吉に言えたのは三成と北政所ぐらいのものであった。

秀吉は三成の顔をまじまじと見つめた。

「心配いたすな。もうろくはしておらん。そのうち其の方にも全て話して聞かせるときが訪れよう。」

だから今はわしの言うとおりにいたしてはくれまいか。これにおよんで秀次を生かしておくわけにはいかぬのじゃ」

秀吉は命令ではなく三成に協力を求めた。

三成は太閤の秀次排除には世継ぎ問題どころではない、何か深い訳があるのではと察した。

「ならばこの際、秀次様の御処分に連座して秀次様を担ごうとした不貞の輩も葬り去っておくのが後々の為かと存知ますが・・・」

三成は細川忠興、山内一豊、伊達政宗ら秀次へ肩入れしていた大名をこの際大幅に減封、移封して力を削いでおくことを勧めた。

「佐吉よ、秀次の不安を煽って謀反を焚きつけておる黒幕を誰と心得ておる」

「従兄妹である最上の駒姫の輿入れをてこに閑白家に入り込もうとした伊達様とお見受けいたしまするが」

秀吉はぷいと横を向いて黙った。

三成が答えを違えたときのお決まりの動作である。

「それでは伊達様は目くらまし役にすぎず影で差配するは徳川様、ではいかがですか」

秀吉は三成の正面に向き直って満足そうに頷いた。

「さすがは治部少輔、よくぞ見抜いた」

三成は続けた。

「お茶々様が秀頼君をお産みおそばされたことは殿下と某それがしの念願成就に御座います。

しかしそれに乗じて豊臣家に後継者問題を引き起こそうとする者がいるのも事実。

まだ幼い秀頼君が御成人あそばすまでの中継ぎとして、朝廷の覚えめでたき秀次様はまさにつけてつけのお方にございました」

「左様、秀次の不安を煽って人心の乱れを起こそうとするような者が現われずんばな」

「この際、徳川を討つて禍根を断ち切つては」

「証拠が無い。家康殿はそんなへまは致さぬ御仁じゃ。開き直つて伊達と組まれては一朝一夕には滅ぼせぬ。

騒動の最中にわしが死ねば心変わりするものが次々現われ風向きが変わってしまうやもしれぬ。

徳川殿の政治上手はわし以上であると心得よ」

「では、手足だけでも奪つておかれてはいかがでしょうか」

秀吉は瞑目して言い渡した。

「細川忠興、山内やまのうちに一豊は切腹、最上義光は謹慎、伊達政宗は南部に移封させよ」

しかし秀吉と三成の反撃とて家康の策略には織り込み済みであった。

忠興、一豊は家康のとりなしで罪を免れ、以降家康に頭が上がりな
くなつた。

伊達正宗もぬらりくらりと言い逃れ咎めは沙汰止みとなつた。

哀れ家康の計略で助かる命を一町の差で奪われた駒姫の死は、最上と豊臣に深い遺恨だけを残すこととなつた。

最上義光は上杉を会津に足留めするための囹の役を買って出る
ことになる。

秀次の記録を全て抹消するために聚楽第は取り壊され、さらに秀次

の元の居城の近江八幡城も破壊された。

そのあおりを受けた京極高次は近江八幡城を明け渡す代わりに加増された大津に新たに城を築城し、これまた西軍を足留めする役回りを演じることになるのであった。

関ヶ原は秀吉が健在であった五年前より、すでに家康が仕掛けていたものであった。

その百四 思いがけない同志

「関白秀次様が御健在であったなら、太閤殿下亡き後にこれほど容易く内府に付け込まれずに済んだはずで御座った」

「……………」

三成の腕にニラの卵とじ雑炊をよそる。与次郎の女房を前に三成は敗れた原因を自問自答していた。

「全てはあの時から狂いはじめた」

三成は丁度良くさめた腕の中身をすすった。

卵とじといっても鶉の卵でこしらえたのでニラばかりである。

「誰が考えても太閤殿下が御他界あそばしたときに成人したお世継ぎがなかった事が騒乱の原因」

「……………」

与次郎の女房はおいねという名であった。

「豊臣家という伽藍だけのことを考えれば、内府の次男の秀康殿に豊臣を継いでいただければ内府とて手放して豊臣を支えてくれていたことであろう。」

又は、たとえ宇喜多殿であろうと秀秋殿であろうと、とにかく成人した跡取りさえいたなら内府もおいそれと野心むき出しには出来なかつたはずである」

三成はおいねにそのような話が理解出来るわけないだろうと承知していた。

ただ聞く者がいてくれた方が良く考えがまとまったのだ。

「お茶々様が殿下と某それがしの思惑通りに鶴松君に続いて秀頼君をお産みになられたことが豊臣の不幸の始まりと云うのは何という皮肉」

「！」

お茶々の名前においねが反応した。

「……お家よりお血筋が大事。お殿様はそうおっしゃるの
でございませうか」

初めておいねが三成に問うた。

三成はおいねが精一杯話し相手になろうとしてくれていることが些
かうれしかった。

「もしこのまま豊臣が滅びるようなこととならば、心ならずもお茶
々様は秀頼君を産んだことで浅井あせいの仇を討ったことになるう」

「まあ、……お茶々様が浅井の恨みを晴らすなどと信じられ
ませぬ」

おいねは遠慮がちに言った。

今度は三成が黙った。

「小谷のお茶々様は長政様のお子などでは御座いませんでしょう。尾張の織田様のお血筋だと思ひます。」

だつて二人目の姫君にお初と名付けるなんて百姓だつておかしな事だと気が付きます。

浅井のお殿さまの織田様へのあてつけにございましょう」

「何と、」

三成はおいねの言葉に驚いた。

「織田様が小谷の城を攻め落とされたとき、浅井の若君が惨い遣り様で殺されましてございます。」

お市様のおなかを痛めた弟君は死罪を免れましてございます。

父親を疑つてお茶々様につらく当たられた長政様の母御様は毎日指を一つずつ切り落とされるといふ惨い殺され方をされたそうにございます。

これはいよいよお茶々様は信長様の娘に相違ないと思つておりました」

三成はおいねの聡明さに驚いた。

これより数日のあいだ、三成はこの命の恩人の与次郎の妻おいねを聞き役に聞ケ、原の眞実を探るのであつた。

その百五 二つの砦

衰弱著しく体の利かぬ三成は、おいねを伽相手に関ヶ原の真実を探る思考に浸った。

「某は太閤殿下より直々に御遺言をたまわっておった。
それはそれは長い長い物語にござった。」

織田のお市様がこの近江に興入れされる七年ほど前に信長公と今川義元公の間で大きな戦がござった」

「……………桶狭間にございますね」

寒村のたかが農民の妻にもかかわらず、おいねはこの時代をよく理解していた。

「その頃内府はまだ十七、八の若殿で松平元康の名乗りであった。
三河とて今川の属領に過ぎず国の体すらなしておらなかった。
織田征伐の先鋒として尾張領内の大高城に突出した松平元康のもとに太閤殿下の古参、蜂須加殿が織田の使者として遣わされた。
三河軍は織田の二つの砦を落とす振りをして今川本隊に戻るなかと……………」

かくして最強の三河軍を欠いた義元公は織田軍に正面からの突入を許し首を取られた」

「……………桶狭間は悪天候と奇襲が功を奏して織田様がたまたま運よく勝たれたと聞き及んでおりました」

「謀略で得た手柄や勝利などあまり世間にはひけらかさぬものよ」

「お殿様の関ヶ原もそうだと」

やはりおいねは聡明であった。

「……………如何にも……………」

三成は瞑目してこの三月余りの出来事を思い返した。

「事の起こりは上杉、いや直江山城守やましろうのかみからの内府への挑戦状であった。

今思えば山城守は内府と通じておったのかも知れぬ。

わざと内府が怒るような書状を送り付け上杉征伐の大義名分を与えた」

「そのようなことをしたら主の上杉がどうにかなってしまうのではありませんか。直江様だって困ることになるのではございませんか」

「そもそも兼続とはそういう奴よ。あ奴は領国や石高になぞ興味は御座らぬ。あくまで権力にのみ生き甲斐を求める男よ。

某には兼続のような男の心持がよく判る……………」

三成も兼続と同類であった。

もう一人、家康の右腕本多正信老人も……………

その正信が宇喜多に送り込んだ次男の政重は関ヶ原の陣を早々に引き払い近江の大津堅田に潜伏していた……………手はず通りに……………

やがて政重は再び福島はじめ大名家中を渡り歩き、ほとぼりが冷め

た頃には直江兼続の娘婿に収まるのである・・・正信と兼続が密かに結んでいた状況証拠としては充分であろう。

「内府はかつての信長公に倣い、二つの匣の砦を用意しておった。一つは上杉を会津に釘付けにした最上義光。

いま一つは九州の強豪立花を関ヶ原の決戦から遠ざけた京極高次の大津城・・・」

三成は思い出すのも悔しそうであった。

最上が豊臣を見限る原因となった駒姫の処刑に奉行として立ち会ったのは三成自身であり、京極高次を心を砕いて西軍に引き入れたのも三成であった。

「所詮己と内府とでは役者が違ったということか・・・」

沈みこむ三成の手から空いた椀と箸を取りながらおいねは言った。

「それでも勝つ見込みがあつたからお殿様は徳川様に勝負を挑まれたのでありましょう」

三成は顔を上げておいねを見た。

「如何にも・・・勝算は御座つた」

その百六 明智の怨念

「関ヶ原での戦は霧が晴れるのを待たずに始まった。

普通は悲惨な同士討ちを避けるために奇襲以外では霧中に攻撃を仕掛けることは致さぬのが定石である。

霧が無く、日の出とともに双方丸見えとなっていたなら、果たして東軍の各将は自分達が袋の鼠ねずみとなっていていることに冷静でいられたであらうか。

定石通り霧が晴れるのを待っていたなら双方、睨み合いに終始し、日暮れと共に兵を引き、合戦には至らなかったやも知れぬ。

それほどまでに我ら西軍の布陣は完全無欠で強固なものであったのだ。

戦端は福島隊の方角から鉄砲が打ち込まれたことにより開かれたが、果たして撃ち掛けてきたのが本当に福島の鉄砲かも怪しい。霧が晴れては都合が悪い徳川がけしかけたとも考えられる。

内府は完全にこちらの手の内を読んでいた。

刑部が長篠の合戦に倣って関ヶ原に後手必勝の待ち伏せを仕掛けていたことを、内府は百も承知で関ヶ原に現われたのだ。

作戦の要かなめである反転攻勢は密かに封じてあると自信満々で。悔しいかな策士、策に溺れるとはこのことなり」

「」

さすがにおいねには戦のことはちんぷんかんぷんであった。

それでもよいのだ。

ただそばにあって聞き手となってくれただけで三成の思考の助けとなつた。

「小早川の大軍勢を東軍に偽装して松尾山に置いたこちらの策略は見事に打ち砕かれてしまった。
内府の小早川に対する調略は当主の秀秋殿ひとりの力では覆せぬほど巧妙であった。」

しかし、万が一小早川の偽装工作が裏目に出たとしても狭い山道に押し返してしまえば小早川を松尾山に封じ込めることも出来た。最悪の場合に備えて、刑部はそこまでは織り込んでいた。現に大谷軍は三度小早川を押し戻した。それがまさかの脇坂よ。

そもそも脇坂、赤座、朽木、小川の少数部隊を松尾山の麓に置いたのは、西軍は小早川を東軍とみなしていると見せ掛けるためであった。それが脇坂の寝返りをきっかけに小川も赤座も朽木もつられるように東軍に寝返った。

脇坂の手勢は僅か千である。その僅か千の裏切りが関ヶ原の趨勢を決めてしまったのだ。刑部と共にずっと北陸を転戦してきた脇坂があそこで刑部を見限るとは予見不可能であった。」

「脇坂の殿様はこの辺りのご出身でございます。昔からお仕えするご主君に運の無い殿様でございました。」

「左様、脇坂は浅井、明智と滅亡した主君に仕えておった。しかしその運の無い男が太閤殿下のおかげで大名となれた御恩を忘れるとは嘆かわしや。」

「なにやら京極のお殿さまと似ていますな、脇坂のお殿さまは。」

「！」

おいねがずばり核心を突いた。

京極も脇坂も共に明智日向守の配下であった。

そして小早川を土壇場で東軍に転じた”お福”は明智の家老の娘。

三成を窮地に陥れた”細川屋敷の珠^{たま}”は明智の姫君。

「何ということか、内府は豊臣に怨念を持つ明智ゆかりの者たちを
駆使して豊臣を滅ぼそうとしたのか・・・
それでは勝てぬも
道理」

三成は目の前を覆っていた霧がすーと晴れたような気がした。

その百七 死地へ

関ヶ原より四日後の一九日に与次郎は鎮痛な面持ちで三成の傍らにあらわれた。

その様子から凶報がもたらされしことはすぐに察しがついた。

「おととい、遠くに聞こえた鉄砲の音はやはり佐和山からにございました。

攻め手は小早川秀秋様。

お城はおととい一日持ちこたえましたが本丸を残すのみとなったところで降伏を受け入れ、昨日の朝方に城兵の助命を条件に開城したそうにございます。

ところが東軍は約束を反故（は）にして、開いた城門から田中吉政様の兵が城内に突入したそうにございます。

お父上様と兄上様は御自害。

奥方様もお城と運命を共にされたそうにございます。

城内の者は女といわず子供といわず皆殺しにされたそうにございます」

三成は無言で聞き、その日は一日中押し黙り何も食さなかった。

明けて二十日になるといよいよ三成探索の手が近辺に迫り、三成は更に落ち延びねばならなくなった。

しかし三成は既に覚悟を決めていた。

「与次郎殿、某の探索方は何処（いすこ）の家中の者であろうか」

「田中吉政様の弟の田中氏次様とのことにございます」

「ならば話は早い、田中氏次に三成はこれにあると知らせよ。逃げも隠れも致さぬゆえ余り大事と致さぬよう捕り手を差し向けよと」

与次郎は慌てて三成を諫めた。

「お殿様、見つからぬようにもつと山中深くにお連れ致します。居心地は悪う御座いますが岩屋か炭焼き小屋にお隠れ下さいませ」

三成は悲愴さの微塵も無く軽やかに答えた。

「与次郎、もう良い、もう良いのだ。そなた達のおかげで最後にやるべきことがはつきりしました。

これ以上そなたたちを危険に巻き込むことは出来ぬ。これが三成の為と信じて申した通りにしてはくれまいか」

与次郎は不承不承ながら三成の申し付けに従って隣の集落の庄屋まで出向いた。

「さて、おいね殿。そなたには三成よりたつての願いが御座る」

「わたくしの様な者でお役に立てるのでしたら何でもお申しつけくださいませ」

「そなただからこそ頼める事である。我が遺言を洛中の三本木にお住まいの北政所様へお伝え願いたいのだ。

農民の、しかも女のそなたなら怪しまれずに辿りつくことも容易であるう。

褒美は北政所様より充分に頂けるであろう」

「褒美など頂かなくてもお殿様のお役に立ちとうございます。北山の親戚を訪れる振りをすれば何の咎めも受けずに京までまいれます」

三成は最後の最後に信頼できる同志に恵まれたことでまだまだ天に見放されてはおらぬ気がした。

「北政所様にお会いしたらこれまで三成が話したことをそのまま伝えていただければよろしい」

「はい」

「そして必ず次の三つを伝えて欲しい。

一つは太閤殿下の出自しゅじはけつして内府に悟られてはならぬと。

二つは小早川秀秋が徳川を謀ろうとしていたことも内府に悟られてはならぬと。

三つは太閤殿下の御遺言である徳川の千姫様と秀頼君の婚礼を急ぎ実現されること。

北政所様はそれですべて理解される」

「わかりました」

「また、某の助命嘆願などは決してなされませぬようとも。

内府は絶対に某を生かしておくはずも無く、どのような無理難題を北政所様おかがさまに突きつけるやも知れず」

「・・・・・・・・」

「他に北政所様に何か問われたら、遠慮無くおいねの思う処をお答えするが良からう。」

聡明で美しいそなたはお若い頃の北政所様おつかあまによく似ておられる。きつと話が合うはずだ」

「まあ」、とおいねは少し照れた。

二十一日の早朝、三成の探索方が与次郎に案内されて現れた。

三成の願い通り捕り手に物々しさは感じられず、村の人々も落ち着いていた。

隊長はやはり馴染みの田中吉政の弟・氏次であった。

「石田治部少輔三成殿で御座いますな」

「如何にも」

床で身支度を整えた三成は落ち着き払って答えた。

「成り行きにて治部殿を捕らえる役目を申し付かって参り越し申した」

「委細承知」

三成は続けた。

「なるが、世話になったこの村の者達に類が及ぶは我が本意にあらず。

其の方の一存で、某はこの先の岩屋に一人で隠れていたものを発見した事にしてはくれまいか」

「……………」

「何卒、三成の今生最後の願いで御座る」

氏次の兄の田中吉政は佐和山で三成の一族郎党を皆殺しにした張本人であった。

「……………」承知仕った」

三成はよろよると立ち上がった。

それを見た氏次は与次郎に、

「済まぬが戸板を一枚所望致す」

そう言つて氏次は持ち合わせの金子を全て与次郎に手渡すと満足に歩けぬ三成の為に戸板に寝かせて配下に担がせた。

「かたじけない……………」

三成は見送る和次郎夫婦と村人たちに目で礼を言い自ら死地に赴くのだった。

その百八 本多正純

「佐和山では手違いから御内儀も御尊父も痛ましきこととなり、すまぬことでござった……………」

捕縛ほはくされた三成を大津の手前の膳所ぜんせの宿で一晩預かることとなった本多正純まごせみは、佐和山城の一件を三成に詫わびた。

……………手違いだと……………

……………田中吉政ほどの者が心得違いなどで和議をひっくり返し、降伏した者を殺戮に及ぶわけが無かるう……………

……………全ては諸侯に石田三成こそ西軍の総大将であったと印象づけるために徹底して貶おとしめる目的であったのであろうが……………

三成は自分の一族に対するあまりの非道に対して、徳川を糾弾したい憤りを懸命に堪こらえた。

三成は家康が不戦を貫いた毛利輝元を救済する為に、全ての責任を自分に押し付けるつもりであることに気付いていた。

しかし、奇くしくもそれは、三成の望むところでもあった。

今後の豊臣に、少しでも多く徳川への抵抗勢力を温存する為には、自分が全ての責めを負ってこの世を去るのが最善であったからだ。

「攻め手は小早川と田中吉政であったそうでござるな」

「如何にも、。田中吉政は治部殿とは格別御懇意であつたゆえ、徳川への忠誠心いかりかと試させていただいた。

それが災いしての勇み足となつてしまったので御座ろう。

小早川秀秋殿は関ヶ原での御振る舞いに疑わしきところが御座つたので、誰も気の進まぬ片付け仕事を担つていただいたまで。

しかしこれで小早川への嫌疑は晴れ申した」

正純はそう言つて三成の反応を窺つた。

三成は本心に気付かれぬようにわざと秀秋を非難した。

「秀秋の内通は伏見城攻めの頃よりうすは気付いてはおつたが、まさかあの場面で裏切りに及ぶとは思ひもかけぬこと。

あのような根腐れ者を要所の松尾山に配した事は悔恨の極みである」

「……切れ者の治部殿ともあろうお方が小早川の小倅に見事に謀られたと？」

「如何にも、秀秋は豊臣家第二位の継承者である。

秀頼様の御成人までのあいだ、関白に任ずるとまで約束いたしておつた。

斯様な者が裏切りに及ぶなどは全く以つて思い至らず、全ては某の未熟によるところで御座つた」

三成は己と秀秋が土壇場で家康を謀ろうとしたことをひたすら秘した。

秀秋にはこの急場をしごとく生き残ってもらい、これからの豊臣を支えてもらわねばならない。

正純は三成の言葉に納得したようである。

「ところで治部殿、天下にこのような騒乱を起こした責任を自身で如何にお考えか」

「主家への忠義を軽んずる裏切り者の為にかかる顛末てんまつと相成ったが、我が忠義の志には一片の曇りも無く、全て時の勢いの為せる天命と存ずる」

正純は三成を怒らせて本音を引き出そうとさらにたたみかけた。

「かかる大戦おほいくわに破れて自害もせず、今だ生き永らえようとするは見苦しき事では御座らぬか」

三成は些かも動じず正純に言い返した。

「……大望を持つものは容易に自ら命を絶つことを潔しとせず、どのような恥辱まみに塗れ様とも最後まで望みを捨てぬもので御座る。

そこもとは苦難の末に鎌倉に幕府をうち建てた源頼朝公の故事を御見知り置きでは御座らぬのか」

如何に切れ者の本多正信の長男の正純と言えども三成の明晰さには及ぶところではなく、どのように兆発しても三成は尻尾を出すようなことは無かった。

三成が反撃に打って出た。

「ところで本多殿、そこもとの弟の政重殿まなしげは宇喜多の家老として関ヶ原に参陣しておったはずだが、その後の消息をご存知か」

正純は臆面も無く言い退けた。

「あの者は既に我が一族に在らず。戦場で合見えたとときには討ち果たす所存で御座った」

その口ぶりに嘘は無さそうであった。

……政重の間諜活動は兄の正純の知らぬところで父正信から命じられていたということか……

三成はそう合点すると父親の正信から何も知らされずにえぱり散らす正純が哀れに思えた。

「徳川は此度の騒乱の責任を我が身一身に負わせようとするつもりで御座ろう。

しかし、西軍の中で真っ先に決起したのは宇喜多であり、それをそそのかしたのは政重であったことを其の方は御存知ないのか」

「何を馬鹿な。勘当者の弟とて間諜呼ばわりは許さぬぞ」

「某は笹尾山から西軍の壊滅していく様を逐一見届けておった。

真っ先に崩れた宇喜多勢から、先頭をきって逃げ出していたのは政重殿であったぞ。

今頃はどこかの郷でのうのうとほとぼりが冷めるのを待っていることで御座ろう」

三成の言葉の通り本多政重は天津のすぐ近くの近江檜田の郷にあり、父正信の到着をひっそり待っていたのであった。

政重の兄、正純はその名が災いしてかそれとも幸いしてか弟よりはるかにお人よしで正義感が強いところがあった。

ゆえに父正信は正純には理由を秘して政重を西軍に潜ませていたのだ。

天下を騒がせた大罪人だと決めてかかっていた三成から、自分の知らぬところで弟の政重が陰謀の中核を為していたと聞かされて、正純は自分の顔から血の気が引いていくのを感じた・・・

それは先々正純が將軍家から遠ざけられていく遠因となるのであった。

その百九 大津城

翌日、三成は荷車に乗せられ膳所せせの宿から家康が滞在する大津に連行された。

大津の城下は京極高次により見渡す限り焼き尽くされ、遠くからでも朽ち果てる寸前の大津城が覗えた。

櫓やぐらはほとんど打ち壊され、かろうじて残った本丸の城門には数え切れないほど無数の弾痕が刻まれていた。

屋台骨を大筒に打ち抜かれ上層部が傾かいでいる本丸の門前まで到着した三成は、しかしすぐに門をくぐることは許されず門前脇の古畳一枚に縛られたまま座らされた。

これより続々と登城してくるであろう東軍諸将への晒あし者とするためであった。

ちらと本丸の方を見た三成の目に、傾いた四層部分の格子窓に黒い人影が動いたかに見えた。

家康だった。

……ふん、何と姑息な。あそこから自分に対する大名達の一挙手一挙動を見張っておるのだらうて……

それにしても敗軍の將の三成との面会場所をこのような惨憺^{さんたん}たる戦場跡で行う理由は一体何であろう。

武家屋敷が多数存在する京までは目と鼻の先であるし、ここよりは
ずいぶんとましな伏見城も近い。

……無残な城砦の残骸の中に某^{それがし}を晒すことで、徳川に逆らった者がどれほど悲惨な末路をたどるのかを皆の心に焼き付けたいのであろう。……

三成は家康との対面の前に東軍についた大名達と個別に一戦交えなくてはならない羽目になった。

……いや、これは願っても無い機会。無駄には出来ぬ。……

最初にやってきたのは福島正則の家中であった。

何事も先陣を切らねば気が済まぬこの男はさぞかし踏ん返り返^ぞつて来るかと思えば、なぜかすっかり意気消沈の面持ちであった。

不戦の密約を反故にしてまで島津を騙まし討ちにしようとした家康の汚さを目の当たりにして、この血の巡りの悪い一徹者にも徳川の野心というものがようやく見えてきたようである。

佐和山での和議を反故にしてまでの石田一族の虐殺も非道に過ぎる

と感じたはずである。

遠くから三成を見つけたにもかかわらず目を合わさずそそくさと通り過ぎようとするではないか。

……馬鹿者。内府が見ておる。この後に及んで後ろめたい素振りなど見せるな……

「うおっほん」

三成は大きく咳払いをした。

振り向いた正則と目が合った。

三成は眼を飛ばした。

こうなると後に引けないのが正則である。

三成の前にならずかやつてきて言い放った。

「か、勝てもしない戦を仕掛けるからだ……」

「……」

三成は無言で見つめ返した。

それだけである。

それだけで伝わった。

・・・ 豊臣を頼むと ・・・

にやりとした後、不意に三成が吼えた。

「貴様をこう出来なくて残念であったわ！」

ぶいと背を向けた正則は崩れかけた城門をくぐっていった。

その背中小さく震えていた。

次に現われたのは藤堂高虎であった。

高虎は甥の高刑から関ヶ原の首謀者が三成ではなく大谷吉継であった極秘情報をすでに聞き及んで知っていた。

それを一切公にはせず、家康に同調して自分の立場を優位にすべく利用しようとしていた。

・・・ 三成こそが西軍の首領であると ・・・

三成は東軍についた諸将の中でもこの藤堂高虎だけはなんとと言われることも許せなかった。

三成と同じ近江の土豪の生まれながら幾度も主家を転々としたのち太閤の舎弟の大和納言に長く仕えたときその恩義で大名に取り立てられていた。

それなのに秀吉が死ぬと真つ先に徳川に擦り寄り常に反三成の急先鋒にあつた。

その抜け目のない高虎は三成の様子を見るとすぐに家康が見張っていると察したらしく、恭しく三成に近づいてきた。

「治部殿、此度の合戦での石田軍の奮闘、敵ながら見事なもので御座つた。この高虎感服してお願い申す。我が藤堂家の軍に欠けておるものは何で御座ろうか」

三成はあまりにもつまらない問いをしてきた高虎にうんざりした。

こんなものに掛ける言葉も授ける知恵も持ち合わせてはいなかった。

どうせ家康が覗き見ているからと大物ぶっているだけである。

「鉄砲隊の統率が取れておらぬようにお見受け致した」

三成は早く追つ払うために当たり障りの無い助言をして高虎を追い払った。

次いで連れ立ってやってきたのは黒田長政と細川忠興であつた。

一瞬で状況を理解した切れ者の黒田長政が大きな声で、「よくも生きていられるものよ」と嘲った。

「内府に武田の金山を貰ったのがそんなにうれしかったか」と三成が返した。

「ちっ」と舌打ちをすると長政は自分の陣羽織を脱いで三成に近づいた。

それを三成に掛ける振りをして小声で、「……衛士が聞き耳を立てておる、誰ぞに申し伝えることは御座らぬか……」

「……如水殿に、今一度、豊臣に御忠義をと……」

「……承知……」

三成が大きな声で、「かたじけない！」と言うと長政は去っていった。

忠興は三成と目を合わせず終始無表情で門に消えた。

本来なら珠の仇の三成を最も恨んでよいはずの忠興であった。

その仇を目の前にしても忠興は平静であった。

忠興には珠が殉死を選んだ理由がわかっていた。

……いつも義理よりも自分の利を欲する己の日和見を嫌気してこの世を去っていったのだ……

三成を恨むは逆恨みである。

あらかたの大名達が城内に吸い込まれたとき、逆に城内から出ようと
とするものが一人いた。

小早川秀秋であつた。

そばに居合わせた細川忠興が秀秋の只ならぬ表情から察して思いと
どまらせようとした。

それでも秀明は城門の影から三成に詫びようとした。

そうしないではいられない心持であつた。

……己が不甲斐無いばかりに関ヶ原では家康を討ち漏らし、
三成の一族を滅ぼすことにも加担してしまった……

秀秋に気付いた三成はさすがに慌てた。

……いかん、秀明殿。命取りぞ、こらえよ……

やむなく三成はことさら大きな声で皆に聞こえるように言い放つた。

「これはこれは金吾中納言殿では御座らぬか。太閤殿下の御恩を忘
れし裏切り者め、そなたのような根腐れ者、三成はいまだかつて見

たことも御座らぬ」

三成が秀秋のことを”金吾中納言”と呼んだことはこれまで一度もなかった。

しかし混乱していた秀秋は三成の真意までは読み取れずに、いたたまれずに城内に逃げ戻っていった。

「はてさて、人の心とは読めぬものよのう。正信はどう見た」

「福島と小早川には注意を怠らぬことですな。黒田の倅の方はともかく、九州には如水と清正、それに立花と島津がおりますればそれらが結束して毛利と結ぶようなこととなれば侮れない勢力となりましょう」

「うむ・・・それにしても島津義久を討ち漏らしたは失策であつた。

あれから諸将の間に徳川への不信感が蔓延しておるようだ。

これより先は力で屈服させるよりあるまい。

治部殿には地位も名誉も一族も、何もかも失つた惨めな負け犬として死んでもらわねばなるまい」

大名達と三成との一部始終を見届けた家康はこれより始まる三成との会見に向かうべく、傾いた階段に太った体でしがみつきながら階下へ降りながら思索した。

家康の腹の中で三成の処分はすでに決まっていた。

その百十 対面

埃を清められた本丸一階の大広間には西軍の総大将、石田三成を吊るし上げるために東軍の大名達が詰め掛けていた。

しかしながら裁定者の家康と当の三成は大名達の前に一向に姿を見せないのであった。

いつまで待っても評定が始まる様子がないことに不満の声が出始めた頃、大久保忠隣が家康の代理として現れ諸将に申し渡した。

「石田治部少輔の詮議は上様が直々に執り行う事になったゆえ、皆様方は追って沙汰あるまでこの場でお待ち下されますよう。」

また、門前にて治部少めにすでに遺恨を晴らされた方は遠慮無くお帰りになって頂いてもよろしい」

……なんだ、徳川の連中はいつの間にも内府のことを人前で上様などと呼ぶようになったのだ……

……それに三成を門前に晒したは、その後の詮議を内密に済ませたかったからか……

福島正則は家康のやり方を訝しんだ。

忠隣の言葉に藤堂高虎がさも勇ましく立ちあがって不満の声を上げた。

「治部少に積年の恨みをぶつけられると思ってまかり越したのが無駄足であったわ」

他の大名達も賛同するものと、高虎が辺りを見まわしても誰も同意するものはいなかった。

佐和山城で和議を翻^{ひるがえ}してまでの石田一族の大量虐殺を知った大名達は、後ろめたさから三成に同情的であり正直裁定の場に居合わせずに済んだことにほっとしていた。

ところで何故、家康は三成の詮議を非公開としたのであろうか。

徳川に齒向かって敗れ、惨めな姿を晒す三成を皆で吊るし上げればさぞかし徳川の権威付けと三成に恨みを持つ大名達へのサービスとなったはずである。

家康は今度の騒乱の責任は三成只一人の責任にして、徳川と不戦の密約を結んだ毛利を安堵せねばならなかった。

さらにもう一つは大名達の面前で三成を詮議しては、逆に口が達者な三成に己が野心の証拠を突き付けられてしまうことを恐れたのだ。本丸の奥の書院で三成と相対したのは家康本人と本多正信、正純親子、そして島津義弘を追撃したときに受けた鉄砲傷をおして登城してきた井伊直政だけであった。

家康には三成が生きているうちに是非とも聞き出したい事がいくつがあった。

城門前での惨めな敗軍の将のいでたちとは一変して、髪を結び直し

た三成にはござつぱりとした正装が与えられ、家康と左右の腕を担
う謀臣達との命を賭けた、いや、命を捨てての論戦が繰り広げられ
るのであった・・・

その百十一 一人対十万

八日間に及ぶ激戦と砲火を浴びて無残に崩れかけているかに見えた大津城も本丸の内部は綺麗なものであった。

その本丸奥の書院で三成は家康と徳川の謀臣の面々と対峙していた。さすがは名家の誉高い京極家のこしらえた書院である。

城中とは思えぬ緻密で繊細な造りに平時であればさぞや心が鎮まるであろう造作である。

つい先日、三成が京極高次を自軍に引き入れるときに高次と酒を酌み交わしたのもこの部屋であった。

さつきまでの罪人扱いが嘘のような客人扱いに、家康に下心があることは明々白々であった。

三成は口を強く結んだまま半眼で家康の顔を凝視していた。

目論見通りにはべらべら喋らぬぞ、という意思表示であった。

しばらくの沈黙の後、口火を切ったのは家康であった。

「治部殿 、関ヶ原での戦振り、見事で御座った」

家康の言葉に嘘や誇張は無く、目に怒りや恐れの色も無かった。

「互いに死力を尽くして戦い申した。勝った者と敗けた者が辿る運

命は残酷なまでに違えど、徳川を相手にあそこまで遣り遂げられた治部殿にも悔いは御座らぬであろう。 . . . 」

「 悔いることなら吐いて捨てるほど御座る。ただ、過ぎたことをあれこれ慮おもつても詮無き事。

某には時間が御座らぬゆえ頭の中は豊臣家の先々の事で一杯で御座る。」

三成は家康の野心の程を差し計ろうと駒を進めた。

家康は手応え有りとは踏んで三成に提案を持ちかけた。

「有り体に申す。この家康、治部殿からお伺いしたき事がいくつかあり申す。

おそらく治部殿にもこの家康に問いたきことが御座ろう。如何いかであろう、ここは互いに相手の問いに答える代わりに自分も問いたいことを問い返すというのは。

もちろん互いに全て真正直に答える必要は御座らぬ。

ただし、 どちらかが問いに答えぬ場合にはそれで打ち切りである。

二度とお目に掛かることも御座らぬであろう。

この提案、治部殿に受けていただけのや否か」

三成は家康の巧みな条件提示に腹が立ったが表には出さずに自問した。

大名達から一方的に吊るし上げられる状況よりかは家康の本心に迫れるかも知れない。

大名達の面前で家康の野心を暴こうとしても無理やり口を閉ざされ

ればそこまでであった。

「…… よろしい、その御提案お受け申す」

三成の腹が決まった。

正純はともかく、相手は老獪な家康と智将井伊直政、そして謀臣本多正信である。

…… ちと手強^{つじや}かるう ……

三成は不利な状況を警戒したが怯むことは無かった。

失うものは何も無い。

名誉さえ。

…… ここで徳川の野心に少しでも楔^{くさ}を打ち込んでおけるなら ……

三成にとっての関ヶ原の後半戦が始まるうとしていた。

只^{ただ}一人の ……

その百十二 初手

「此度は治部殿が先手を打たれよ」

「・・・・・・・・」

「関ヶ原では後手をお譲り申したでござろう・・・・・・・・」

そう言つて家康は三成の顔を上目遣いに覗き込んだ。

関ヶ原で三成と大谷吉継が仕掛けた策略など、端からお見通しであったと言いたげだった。

初手からの揺さぶりにも三成は平静さを崩さなかった。

この勝負は感情を表に出した方が負けである。

三成から家康への最初の問いは単純なことであった。

「上杉はどうなされるおつもりか」

家康は目をぱちくりさせた。

「ああ、上杉か・・・・・・・・。上杉はいずれ処分いたす所存である。中央で事が済んだ上は景勝殿とて無益な反抗はいたすまい」

家康は興味薄に答えた。

しかし関ヶ原は、そもそも上杉征伐から端を発した騒乱である。

大騒ぎの果てに勅命まで拝してどやどや繰り出した上杉征伐を途中で投げ出すとは、上杉など端から眼中に無かったと白状したのも当然である。

「秀頼様のまことの父親は誰か」

対する家康は、最初から核心に切り込んできた。

「これは異なことを、内府殿は某それがしが父親であると皆の者に吹聴しておられたのでは御座らぬのか」

家康はにやりとしてしゃあしゃあと言っただけだ。

「それは方便である。どうだ、ほんとのところを申せ、まことの父親はるながは治長はるながであろう」

「・・・・・・・・」

三成は押し黙った。

「なんだ、もう答えられぬのか。これで終いか」

家康は物足りぬといった様子で三成を見た。

意を決した様子で三成が答えた。

「秀頼様は大公殿下のお子に相違御座らぬ」

「ほう、その証拠は」

「治長めとお茶々様との間には確かに関係があり申した

」

家康の目が一瞬^{とつ}獯^{めう}猛に光った。

「しかし太閤殿下はそれを承知の上で治長を当て馬に仕立てられたので御座る。

その方が自分の子が授かりやすくなると信じて。

全て太閤殿下と某とで、お茶々様に殿下のお子が授かるように仕組んだことで御座る。

証拠となるかどうかは知らぬが、当て馬役の治長めに馬回り役三〇〇石を与えたのは太閤殿下の皮肉で御座ろう」

三成は秀頼が秀吉の嫡子であることをここで明言しておいた方が、家康に秀頼を粗末に扱わせぬ抑止が働くと踏んだ。

「 」

今度は家康が黙り込んだ。

秀頼が秀吉の子ではないであろうことに付け込んで、片桐且元を調略したのだった。

且元の働きがなければこうも思い通りに事は運ばなかったはずである。

且元にはまだまだ徳川の手先として働いてもらわねばならなかった。

「いまひとつ」

三成は続けた。

「内府殿には先刻御存知である通り、淀の方は信長公の娘御で御座る」

直政と正純は驚いた様子を顔を見合わせた。家康と正信には動じた様子は見られなかった。

「当の本人ですら存ぜぬことである・・・」

家康は直正と正純に対して肯定してみせた。

「秀頼様は我ら全員の主筋である織田家の血を誰より強く受け継がれた淀の方が産まれた、正真正銘太閤殿下のお子である。そのことくれぐれも御心に留め置かれますことをお願い申し上げます」

三成の言葉に家康は顔を曇らせた。

信長とは同盟者と云う建前ではあったが実際のところは臣従であった。

家康の長男の信康は信長に謀反の疑いをかけられ切腹、その生母で家康の正室築山の方も死を賜わされた。

表に出すことは決してあらねど家康は信長を心の底ではずっと恨んでいた。

信長を本能寺に追い込んだことも、己が野心よりは自己防衛と遺恨がそつさせたのである。

信長の子や孫にまでつけを払わせようとまでは思わねども、秀吉に幾度も煮え湯を飲まされてきた記憶はまだ生々しい。

旗色不鮮明な大坂を今後どう処置するかはまだ不透明であった。

その百十三 次手

「宇喜多はいかなさるおつもりか」

三成は上杉と同格の五大老で西軍の主力を担った宇喜多の今後を案じた。

「秀家殿はその後どうなっておるのだ、正純」

家康に問われた本多正純が答えた。

「宇喜多殿も治部殿と同じように伊吹山に逃れたはずでござるがその後の足取りは全くつかめておりませぬ」

「……上杉征伐の隙を突いて真つ先に拳兵に及んだのは秀家殿でござった。

上杉討伐が無くば宇喜多の拳兵も無く、宇喜田が拳兵せずば某とて反徳川軍を募ることもござらなかつたであらう……さて本多殿……」

三成は家康の右手に控える本多正信に向き直った。

「宇喜田家の家老として関ヶ原に参陣した、御子息の政重殿とはすでにお会いになられたので御座らう」

弟政重を間諜呼ばわりする三成を正純がかつと睨みつけた。

「すでに政重は徳川を出奔致し、本多家をも勘当された者で御座り申す。そのような者とは一切関わり合い御座らぬ」

正信は眉ひとつ動かさずにしらをきつた。

「上杉の拳兵を受けて、秀家殿を反徳川の急先鋒に焚きつけたは政重殿でござろう。」

若年ゆえと見逃しておったが政重殿の器量は父親譲りと見えて大した喰わせ者でござる。

それに加えて逃げ足の速さも天下一品とお見受けいたし申した」

家康は冷ややかな視線で三成を見つめていた。

「治部殿……………」

家康が口を開いた。

「徳川討伐の勅命を得るのに、如何なる方策を用いたのだ」

家康の問いはさらに核心に近づきつつあった。

徳川討伐の勅命が下されるのを寸でのところで食い止めていなければ家康は危ういところだった。

如何な能吏の三成とて、既に勅命を授かった上で上杉討伐に向かう徳川を討つ勅命を拝するなど到底かなわぬ荒業であろう。

「……………内府殿は聚楽第行幸の通りの誓いをお忘れか。

誓紙にしたためた忠誠など絵空事とて、天子様の御前おんまえで誓った豊臣家への忠誠は決して反故にすることまかりならぬ。

如何にどさくさにまぎれて約束を反故にするが得意の徳川殿とて天子様との約束は終生守らなければならぬのが武家の掟。

内府殿の専横はそれを軽ろんぜられたものであった。
徳川討伐の勅命が下されても当然で御座る」

家康はそれだけでは腑に落ちぬといった様子で三成を窺った。

家康と目が合った三成の視線が先に逸れた。

・・・ 何か隠しておる ・・・

家康は三成がすべてを語っていないのではとの疑いを持った。

その百十四 殉教者

「毛利はいかがなざるおつもりか」

三成は無理やり西軍の総大将に据えてしまった毛利輝元のその後を案じた。

毛利は宇喜多、上杉を凌ぐ西国の大大名で、小早川、吉川ら一門の所領を合わせれば裕に二百万石を超え、徳川の二百五十万石に対抗しうる唯一の勢力であった。

輝元自身は一門の足並みが揃わぬことに腰が引けて大坂城から一歩も出張らず、叔父の毛利元康はこれさいわいと大津城にへ張り付き、一万五千を預かった従兄弟の毛利秀元も関ヶ原では日和見に終始して参戦しなかった。

血縁が途絶え、譜代の重臣すら去った小早川の一万五千は明確に東軍に寝返った。

毛利が不戦を貫くにあたっては、羽柴秀吉の時代からの毛利の外交官である安国寺恵慶と反対の立場を取る、親徳川派の吉川広家の暗躍があった。

もし、毛利の一門に一枚岩となって徳川と雌雄を決する覚悟があったなら、借り物の寄り合い所帯の東軍など全く敵としなかったはずである。

ただし、そうとなれば家康の方も丸腰同然でのこのこと関ヶ原には現われなかったであろうが

「治部殿、毛利は端から徳川と事を構えようなど思つてはおらぬ。輝元殿のお頭つむにあるのは元就公から任された毛利の所領安堵のみ。己が豊臣政権の執政として天下に号令を掛けようなどとこれっぽちもござらぬお人よ。」

そなたやわしとはそもそも人間の器が違うのよ。

一か八かの大勝負などとは無縁なのじゃ。

そのような者が支配しておる国など怖くもなんともござらぬ。

毛利は人畜無害、お構い無しで御座る」

家康はいとも簡単に毛利は安堵する旨言い切った。

．．．．だからすべての咎とがはおまえ一人が背負えということか
．．．

それは三成の望むところでもあった。

輝元自身は頼りなくとも毛利には気骨のある譜代家臣が大勢有る。

何より中国に百二十万石の毛利がでんと居座り続ければ、その先の立花、島津、小早川ら九州の親豊臣の大名達の防波堤となる。

自分がこの世を去れば正則同様清正の目も覚め徳川の野心から秀頼を守る核となるであろう。

この先、老獪な家康と互して渡り合っていける者があるとすれば、如水殿しかおらぬ。

今となつては幸いなことに如水、長政の黒田親子は東軍に属した。

如何な内府とて排除する大儀名分は成り立たぬであろう。

中国に毛利が生き残り、加藤、立花、島津、小早川といった九州の強豪が健在であれば十年や二十年豊臣は持ち堪えられる。

老体の家康は間違いなくこの世を去り、後はぼんくら揃いである。

信長公と太閤殿下の類稀な御血筋を引いて成人する秀頼様の敵では御座らぬ。

如水殿は太閤殿下の秘密を知るもはや唯一最後の古老である。

早々に身を引いて御隠居なされたのもそのためであろう。

此度の東軍としての振舞いとして先々に想いをめぐらせての布石に相違なかるう。

如水殿に今一度の御忠義を願うためなら我が身など如何様に朽ち果てようと惜しくは御座らぬ。

三成は今後二十年豊臣家が生き残るために己が身を捧げる覚悟であった。

それは皮肉にもこれまで三成が嫌悪してやまなかつた切支丹の殉教者とも合い通ずるものであった・・・

その百十五 家康の疑念（前書き）

ブラウザにFirefox系をお使いの方は、IE系に切り替える
とルビが正しく表示されるようです。

その百十五 家康の疑念

家康が問う番である。

片ひじを膝に乗せて少し前のめりになった家康が、

「治部殿・・・、聞いておればさつきから大老どもの心配ばかりではないか。

そなた、いつからそれほど他人思いになられた。

それほどまでに他者を慮る器量おもてんばかがあつたのなら、多くの人望が得られ土壇場で裏切りにあつたことなどなかつたであらう。

少しは我が身を案じられた方がよろしいのではないか」

家康は三成に命乞いをさせたかつたのである。

その上で豊臣政権の中枢にいた者でしか知り得ない極秘情報を聞き出したかつた。

なかなか命乞いをしない三成に家康が痺れを切らせた。

「なぜそこまで豊臣に忠義を尽くされる。

関ヶ原で徳川に味方した大名とて、そなたと同じ太閤殿下の御恩を受けた者達ばかりではないか。

それでも己が宗家を維持継続せんが為、徳川の権勢に皆靡なびいたのだ。

そは卑怯にあらず。

多くの家臣を背負う大名ともならば当然の道である。

己が忠義や友情如きの為に一族郎党を路頭に迷わせるような道など、まっとうな頭の持ち主ならば選ぶはずが無い。

類稀たぐいまれな才覚の持ち主であるそなたに、その程度の道理が解らぬはずがなかるう。

「いったい何がそなたをそこまで忠義に走らせておるのだ」

家康は三成の忠義を逆手に取って目的を半ば達しながらも、三成の頑かたくなまでの忠誠心が不思議でならなかった。

「いったいそこまでして守ろうとする豊臣とは何なのだ　・・・」

「

家康の疑念が危険な領域に迫りつつあった。

「・・・すべては大公殿下の御遺志で御座る。内府殿もよく御承知のはず」

三成は慎重に言葉を選びながら答えた。

家康は激昂した。

「太閤は死んだのだ！」

信長公が死んだとき太閤は何をした。

信忠殿のほかに成人した兄弟が何人もいたにも関わらず、直系にこだわるふりをして幼い三法師君を担いだではないか。

哀れ織田秀信（三法師）はそんな豊臣に義理を通して盾となり、岐阜城を攻め落とされ今頃は高野山で経を読んでおるわ！」

「だから秀頼さまから天下を奪い取ってもよいと仰せか」

三成が冷たく言い返した。

「・・・・・・・・」

息を切らせた家康が押し黙った。

その様子を正信は細めた目で見ていた・・・・これだから迂闊に人前で詮議など出来ぬのよ・・・・

家康は危うく己が野心を吐露してしまうところだった。

見かねた正信が助け舟を出してよこした。

「淀の方が織田家の濃ゆい御血筋であろうことは、ずいぶん前から存じ上げており申した」

正信はさも以前より知っていたかのように口ぶりで語った。

本当はつい最近、片桐且元から得た極秘情報である。

「それにしても解せぬのは秀頼様が信長公の御嫡流であるのならなぜそれを隠そうとされたのか。

当の御本人の淀の方すら知らされておらぬとは相当な秘め事であったということ御座ろう。

淀の方はお市様の子ゆえそもそもが織田の御血筋で御座った。

それなのに秀頼様が信長公の直系では困る理由が他に何かあったのでは御座るまいか」

正信はさすがに痛いところを突いてきた。

かつて天下布武を掲げ朝廷を殲滅しようとした御敵信長の直系が武家の頭領となることは朝廷の好むところではなかった。

信長と朝廷の経緯いきまじを知る家康と正信がそれを利用しないはずがなかった。

・・・ 徳川討伐の勅命が取り消された理由はやはり徳川の密告であつたか・・・

三成の顔に苦痛の色を読み取つた正信は勝ち誇つたような笑みを浮かべ座りなおした。

・・・ しかしこれはこれで良い、今更お茶々様の御血筋を辿られようと既に失うものは何も無い・・・

「太閤殿下は信長公よりお預かりした天下を再び織田家にお返しするおつもりだったので御座る。

誰よりも織田の血が濃いお茶々様を側室に迎えられたのもその為。お茶々様を通して太閤殿下は敬愛して止まなかつた信長公と一体となり次の世に生まれ変わられようとなされたので御座る。

某はそのお手伝いをしたまで。それは命を掛けるに値する大仕事で御座い申した」

事実だけが持つ迫真の説得力が三成の言葉にはあつた。

家康も、正信も、正純も直政にもすとんと腑に落ちる三成の告白であつた。

秀頼の奇跡の血統の秘密は守られた・・・

その百十六 三成の逆襲

三成は家康の疑念が秀吉の出自にまで及ばぬように、家康が触れて欲しくない徳川の過去に切り込んだ。

「本能寺で信長公が横死されたとき、内府殿は何処いすしにおられましたかな」

本能寺は十八年前の出来事であった。

「……堺である」

家康は惘然として答えた。

「堺さかい湊みなとにおられたのなら、なぜ海路三河に戻られなかったのをござろうつか。

船旅に慣れた三河者なら危険な陸路に行くより海路を行かれるのが順当で御座ろう」

家康は嫌な顔をしてそっぽを向いた。

代わって正信が答えた。

「堺にはあいにくと手頃な船が御座らなかったのよ」

「……それはそうのござりましょう。四百名よひゃくもの軍勢いくさもなればそうそうおあつらえ向きの船もありますまい」

「……」

今度は正信も押し黙った。

「天下を狙う徳川にとって、武田の金山は喉から手が出るほど欲しいものだったのでございましょうな」

家康は無表情のまま三成から視線をそらさなかった。

「どさくさにまぎれて甲斐の穴山梅雪殿を亡き者になさいましたな」

「……今更そのようなことを蒸し返して何になるというのだ」

家康は開き直った。

「どさくさに紛れて邪魔者を始末するは徳川の御家芸。

関ヶ原でも密約を反故にして島津公を亡き者にしようとなされた」

「……」

「島津が捨て身で敵中突破に及んだは、約束を反故にされたことへの抗議と徳川の汚い遣り口を天下に知らしめんが為……尋常ならざる島津の退き口を目の当たりにした大名達は、もはや今までのように諸手を挙げて徳川に従うことにはござりませぬまい」

「何を証拠にそのような虚言を……」

正信が否定した。

「あのおとき何処いづこの家中小島津と徳川の間割わりって入ろうとはしな

つたのは何故でありましょうな。

徳川に恩を売る最大の機会にもかかわらず、誰一人島津の突進を遮さえぎらなかつたのは実に不思議で御座る。

事情を察して武士の情けと島津に反撃の機会を与えたので御座ろう。それどころか心中、島津が内府殿と刺し違えてくれればと期待していたのではござるまいか。

諸侯の徳川に対する信頼は関ヶ原の前と後ではかくも変貌したということで御座ろう。

先ほど内府殿は某には人望が無いと申されていたが、果たして今の内府殿には人望が有ると云えましようかな」

家康はいよいよ腹に据えかねた様子で手に持った扇子をぱちぱちとせわしなく開け閉めした。

「関ヶ原で敗れた某はすべてを失い申した。

しかし勝ったはずの徳川が失ったものも大きい。

徳川にはすでに諸国に号令する信用も大儀も無く、ただの業突張りと成り果てた。

こんなことなら豊臣家の執政として筆頭大老でおられたままの方がよろしかったのではあるまいか。

内府殿のあからさまな野心が衆目の知るところとなってしまうた今、豊臣家の後ろ盾無くして徳川の治世など到底おぼつかぬのではありますまいか。

かくなる上は秀頼様と淀の方の信頼を損なわぬよう、あくまで豊臣家の執政官としてのお立場を踏み出さぬことで御座いますな」

家康の顔が怒りでぶるぶると震えた。

これではどちらが被告人だか判らぬ詮議と合いなつた。

その百十七 家康の誤算

「治部殿、この場でいくら徳川の策謀を暴いたところで是非も無かる。」

そなたが徳川の深慮遠謀の深淵に辿りついたことはさすがと褒めてつかわそう。

しかしそなたはすでに捕われの身。

誰かと会うことも話をすることもままならず、余命すら我が手中にあるというのに如何にして徳川に齒向かうと申すのだ。

悔い改めて命乞いをいたさば、場合によっては隠岐（おき）の島流しにとどめ、命だけは安堵もいたそうぞ。」

家康は心にも無いことを言っつて三成を懐柔しようとした。

しかし三成にはもう矢うものすら無い強みがあった。

「内府殿 某が何の手も打たぬまま捕縛されたとてもお思いか」

「 」

「某の遺志はすでに内府殿の手の及ばぬ処へ届けられておる。たとえこの場で死を賜ろうと何ら思い残すことは御座らん」

三成はきっぱり言い切った。

. . . . 徳川の手の及ばぬところとは大坂城か、朝廷か、. . . .
いや北政所！ 家康の胸中はざわついた。

・・・ そう申さば

ここ大津城の攻防戦を終焉させたのは北政所の従者の孝蔵主こそうぢであると耳にしておる。

あと一日でも早く片が付いていたら関ヶ原の趨勢はどうなっていたか判らぬところであった。

北政所に本気で徳川との対決姿勢に動かれたら・・・

徳川にとって北条政子ともなりかねぬ。

家康はおねねの政治家としての才覚には一目も二目も置いていた。

だからこそ三本木の隠居屋敷には頻繁に足を運んで豊臣への忠誠心を演じてきたのだ。

己が野心を暴かれるにはまだ時期尚早である。

家康は正信と連れ立って小用に行く振りをして会見の場を中座した。

まだ埃が立ち込める納戸の中で家康は正信に問うた。

「正信、其の方はどう思った」

うーむと唸って正信は。

「某は秀忠様と共に昨日大津に到着致しましたばかりゆえ、関ヶ原

での成り行きも佐和山での一件も目の当たりにはしておりませぬ。然るに治部少輔の申すとおりの事と次第であったのなら諸侯の心が急速に徳川から乖離かいりしているのも無理からぬこと。

城門前に晒した三成に対する諸侯の同情的な接し様も領けまする。島津を討ち漏らしたことで、佐和山で和議を反故にしたことは裏目になり申した。

このまま大坂城に西軍の残党を追い込んだどさくさに豊臣を滅ぼすは如何にも無理が御座りましょう」

「まだ待てと申すのか」

「」

正信は中仙道廻りで家康の傍を離れていたことを後悔していた。

. . . . 正純に上様の補佐を任せたは荷が重すぎた

「わしもそなたも寿命が持たぬぞ」

「恐れながら、最後の最後に馬脚をあらわしてしまいましたれば」

「島津まで討ち取ろうとしたは欲張りすぎたか」

「残念に御座いますが」

「北政所を北条政子にせぬにはどうしたらよい」

「 三成めの助命 でありますかな」

「それは出来ぬ。それは出来ぬぞ正信。いったい何の為の上杉征伐、

いや関ヶ原であつたのだ。それだけは断じて出来ぬ」

「……………」

「ここまで我等の思惑通りに豊臣恩顧の大名達が徳川に付き従つて来たのは石田治部少輔という豊臣家に棲み付く獅子身中の虫がいたればこそ。

此度の戦で三成めを取り除いてしまえば奴等も目も覚め申す。

すでに島津の退き口と佐和山での徳川の非情さを目の当たりにした者の中には徳川に対して不審の眼差しを向けている者もありましよう」

「これより先、如何に振舞えば良い」

「裏約束通り毛利を安堵することは出来なくなりましような」

「何と、しかし広家が黙つておるまい」

「毛利を不戦にまとめ上げた吉川広家はもちろん、小早川も加増せねばなりません。

このままでは毛利は焼け太りとなつてしまいます。

そうでなくとも唯一徳川と拮抗する力を持つ毛利を北政所が乗り出して来るかも知れぬ豊臣側に温存させるは余りに危険。

吉川ごとき小物、不服があろうと泣き寝入りさせるよりしかたありませんまい」

「……………」

「大坂に乗り込めば何かしらいちゃもんを付ける隙はいくらでも見つかりますよ。」

無ければこれまで同様捏造するまで」

「其の方の申すことなら抜かりは無かるう。で、治部少輔はいかが致す」

「上様にはこの後、大坂に向かわれる前に三本木にお立ち寄りいただきまする」

「・・・・・・・・」

「あまり気が進まぬのは承知で御座いますが北政所様との条件交渉をしていただかなくてはなりません」

今は軍勢すら持たぬ北政所様がすべての鍵を握っていると申せましよう。

上様にはもう少し律儀で温情ある御仁として振舞っていただかねばなりません

三成の処分はその後までお待ちになった方がこちらの手札が増えまする」

「致し方あるまいの、其の方は正純に命じて三成の申ししていたあ奴の手足となった者を見つけ出させるのだ」

石田の生き残りは無論、治部少輔の逃亡を助けたのもがあればその者も調べよ。

三本木に出入りする者も逐一見張らせよ」

いつしか勝利したはずの家康の方が防戦一方に立たされていた。

家康は正信の進言とは裏腹に今すぐにも三成を殺してしまいたい衝動に駆られていた。

その百十八 ありばい工作

「上様、頃合でありますれば福島正則と浅野幸長の両名を詮議の場に同席させては如何でしょうか」

正信は三成の詮議が密室で行われたとの謗りを避けるため、北政所に近い正則と幸長を招き入れることを提案した。

「・・・・・・・・」

家康には部外者を加えることに躊躇いがあった。

三成にやり込められる姿を見られたくはなかった。

「上様、北政所様に対して徳川の誠意を見せておかなくてはなりません。正則と幸長はその証人についてつけて御座います」

「わかった正信。してわしは何を申さばよい」

「ここからはわたくしめお任せ下さい。上様はわたくしめの目配せで三成にこう申して下さればよろしいかと。」

『すべて水に流して豊臣の為に徳川の家臣として出直さぬか』、と

「三成はせせら笑って断ることだろうて・・・・・・・・」

「それでよいので御座います。正則と幸長の面前で三成に選択肢を与えた事実が残ればよろしい。さすれば佐和山での経緯も不幸な手違いであったと言い逃れできましよう」

「なるほど、あの二人をありばいの証人にいたすのだな」

「如何にも」

「三成に余計なことをしゃべらせるでないぞ」

「承知つかまつってございます。ただ・・・」

「ただ何だ」

「秀頼様が太閤殿下の御嫡流であることはその場で御認めになられた方がよろしいでしょうな」

「わしが嘘をついたと認めると」

「いえ、嘘ではなく心得違いであったことにいたすのです。

片桐且元から誤った情報を聞かされていたと。事実それに相違御座いませぬ。

それに上様は、たとえ秀頼様が太閤殿下の御嫡流で無かろうと豊臣家を支えて行くおつもりにかわりは御座らなかつたと。

それが杞憂となり、尚一層豊臣家の執政しゅっせいとして邁進いたす所存であると、両名から北政所に伝わるようにいたすのです」

「また執政か・・・」

「しばしの方便に御座いますれば」

家康は正信の巧みな人心掌握術に関心するとともに、やはりこの正信老人を常にそば近くに置いておかねばならぬと再認識した。

福島正則にとって北政所は母も同然、幸長はおねねが養女だった浅野家の三代目である。

北政所に偽りの極秘情報を伝えさせるには、まさに”うってつけ”である。

家康は納戸の外の控え番に広間で待ちくたびれているであろう福島正則と浅野幸長を奥の書院へ案内するよう命じると、自分が先頭になって再び決戦の間に戻るのであった。

その百十九 長政の疑念（前書き）

掲載が遅れて申し訳ありません。

関ヶ原の発端に新たな疑問が発生して、過去の掲載分の修正を平行して行なっております。

修正が完了したところで、第何話を修正したかご案内させていただきます。

その百十九 長政の疑念

本丸一階の広間は、居残っていた大名、武將たちが懇意の者達と関ヶ原での武勇や今後の褒賞のことなどを話し合う声で騒然としていた。

そんな中であつて神妙な雰囲気の一群があつた。

関ヶ原で一番手柄を立てたはずの福島正則の周辺だつた。

正則は同年代で日頃から昵懇の黒田長政、細川忠興と弟分の浅野幸長らと車座になつて話し込んでいた。

父親に似て切れ者の黒田長政が関ヶ原後に思うところを述べはじめた。

「あの唐突に始まつた関ヶ原での地獄から七日、ようやく頭の中が整理されてき申した」

正則が頷いた。

「まさに突然のことで御座つた。我等皆、大垣城に集結した三成どもとの籠城後詰め戦を覚悟しておつたのだからな。

何日何十日かかるやも知れぬ籠城戦に備え、清洲の米を全て運び込む手はずであつた。

それが内府が到着するやいなやたいした状況検分もせぬまま急かされるように関ヶ原に打って出された」

幸長も大いに頷いて、「何より心配だつたのは治部少めが秀頼様を

無理やり戦場に担ぎ出して来てはおらぬかということであり申した
、と関ヶ原での野戦が突然の出来事であったことに同意して見せた。

「今思うに・・・」

長政は視線を遠くに置いたまま己が心に固まり始めた推考を披露した。

「西軍の首領が本当に三成だったのか怪しいと思うておる。

関ヶ原で我らと対峙した西軍はまったくもって見事な布陣であった。霧も去りやらぬ間にいきなり合戦の幕が切つて落とされたが、霧が晴れるのを待つていたなら果たして我等は正気でいられたかどうか。内府はそのことを事前に知っていて井伊直政に霧中の抜け駆けを仕掛けさせ、強行に戦端を開いたのではあるまいか」

正則も無言で同意の意を示した。

「確かに霧が晴れるのを待つておつたら西軍の布陣に一步も動けず睨み合いとなるか、一目散に退散していたかも知れぬな」

「左様、一分の隙も無い見事な布陣であった。あれは完全に待ち伏せされていたのだ」

「違う、山上に大筒まで据えておつたのだからな」

「小早川の寝返りが無かつたらどうなっていたかと思うと、ひやひやもので御座る」

皆それぞれに東軍の勝利が薄氷を踏むものだったことに同意した。

「戦べたの三成ごときにあれほどまでに見事な布陣など出来るはずが無い。あれはすべて大谷刑部少の策であるう」

「……………」

「恐ろしい奴であつた」

「如何に三成とて大谷が味方につかねば正面きつて徳川に挑もうとなど思わぬであらう」

長政は西軍の布陣やその後の戦闘状況から三成が西軍決起の首領であつたとされることに疑いの目を向けていた。

「調べによると西軍の中で真つ先に決起したのは大老の宇喜多中納言であるとのことであつた。

かかる合戦は大老の宇喜多と軍師の大谷が前のめりとなつたのを三成が不承不承首領に担がれたものなのではあるまいか……………」

長政の推理は皆のまつたく予想しないものであつた。

「確かにそれなれば大谷が関ヶ原で腹を切り、宇喜多がいまだ雲隠れして出て来ぬことにもうなずける」

「伝え聞くところでは三成は自ら進んで捕縛されたとのことである」

「その真意は？」

「名譽も城も一族も、何もかも失つたあ奴には守るべきものは何も御座らぬはず。自害もせず捕縛されたはまつこと不思議で御座る」

「……豊臣を内府の野心から守るためだとしたら」

「……」

「確かに関ヶ原の戦勝以降、徳川の連中の増長振りは目に余る」

「いつの間にか上様だしな」

そのときざわざわと騒々しい本丸広間に家康の使い番の大きな声が響いた。

「尾張清洲福島正則様、甲斐府中浅野幸長様、石田治部少詮議じぶのしやうぎに加わられたしと上様がお呼びで御座る」

それを聞いた正則は、「それみる、また上様ときた、徳川の奴ら天下でも取ったつもりだ」

長政が正則を諫めてそつと申し送った。

「豊臣の身内の者だけを呼びつけるは何がしかの魂胆があつてのこと、くれぐれも態度にはお気を付けられよ……」

「豊臣の身内ならほれ、一番手があそこにおろう」

正則はあごをしゃくって広間の隅で一人押し黙っている小早川秀秋を指した。

一斉に皆の視線を浴びた秀秋はいつそう肩身をちぢこまらせた。

世が世なら豊臣の後継者として天下に君臨していたはずの秀秋であ

った。

太閤の晩年に淀の方が子を産んでさえいなければ

秀秋は門前で三成の物言いを真に受けて三成から恨まれていると誤解して更なる自己嫌悪に精神を苛まれていくのであった。

その百二十 三成対正則

三成の詮議の場には当初からの顔ぶれに加えて福島正則と浅野幸長よしながが加えられた。

席次は上座の家康を頂点に、向かって右手に本多正信、正純親子と伊井直政が、反対側に福島正則、浅野幸長らが八の字に座していた。

三成は一人下手に座らされたが、先程までと違うのは四方を脇差差しの衛士に囲まれたことである。

後ろに二人さらに前方二人に取り囲まれ些か物々しい雰囲気である。

三成に対して圧力をかけるのが狙いであろう。

新たに加わった正則と幸長は初めからこのような物々しさで詮議が行なわれていたと思ひ込んだことであろう。

これより先は正信が進行役をつとめた。

「お二方の関ヶ原での御活躍にはめざましいものがあつたと伺つております。特に福島殿、宇喜多の大軍勢を打ち破られたはまつこと御見事」

正信は正則の機嫌を取るところから始めた。

「あいや、一番手柄はそこにおわす井伊殿で御座ろう。まだ霧も晴れやらぬ間に某を出し抜いて戦端を開かれた。あわや同士討ちになるところで御座った」

「福島殿、誤解されておるようだがあれは抜け駆けでは御座らぬ。宇喜多の斥候と出くわしたので若様をお守りするため致し方なく牽制したまで。」

それに某は宇喜多勢を相手に苦戦しておった福島殿が突入しややすいように宇喜多の側面を突いて突撃の機会を作つて差し上げたでは御座らぬか。

あれで貸し借り無しで御座ろう」

正則はむっとして見返した。

「まあまあそう味方同士で当てこすりされるな。ここは敵の総大将の治部少輔殿の詮議の場で御座ろう」

正信は正則の突っかかるような態度の裏に徳川に対する不信感があると気がついた。

「さて治部殿、これよりは豊臣家の縁戚を代表してこちらの兩名に同席を願うがよろしいか」

「詮議される身の某にことわりを入れる必要なのは御座らぬであろう」

三成は二人を同席させる正信の腹など読めていた。

「さて治部殿、今度はこちらが質す番でござつたな。」

此度の騒乱は大老たる上杉中納言、宇喜多中納言、毛利中納言といった者達はその立場もわきまえず我が徳川内大臣家康様を豊臣政権の中枢から追い落とすべく、政権への復権を計る奉行のそなたと結託して徒党を組み係る大乱を企てたのに相違御座らぬか」

「見方によつてはそうとも云えよう」

「騒乱の首謀者は治部殿、そなたで御座るな」

「如何にも」

三成はさらりと全ての責は自分にあると認めた。

「では如何なる沙汰も異議申し立てなく賜ると申すのだな」

「すでに某は己が磔はりつけとなるより惨い仕打ちを一族に受けておる。

これ以上どのようななぬ責め苦を賜つたとしてもすでに我が魂はこの世にあらず。

好きに致すが宜しかろう。

ただし、この件に関して大坂城は一切関知せず、淀の方ならばに秀頼様に内府殿に対する敵意など微塵も無いことを御承知置きたいだきたい」

「しかし毛利輝元殿は大坂城を根城に西軍の指揮を執っていたのであろう。大坂城が無関係とはにわかには信じることは出来かねる」

そこに正則が口をはさんだ。

「あいやお待ち下され本多殿。我等が徳川にお味方したは豊臣家に住み着く三成という獅子身中の虫を共に追ひ払う為。

大坂城を敵とみなすは同盟の趣旨に反するであらう」

「如何にも、我等は豊臣家の御為に戦つたので御座る。徳川の天下を助けるためでは御座らぬ」

若い幸長は抑制が利かず露骨に本音を漏らしてしまった。

それを正則が目で制した。

三成は幸長の言動に一瞬肝を冷やしたが正則はじめ関ヶ原で敵対したはずの諸将の間にも徳川の野心に対する警戒間が共有されだしたことに安堵した。

しかし今は反抗心を剥き出しにするときにあらず。

次なる展開に備えて兵馬を蓄え養うのが肝要である。

責めは己一人が負って黄泉にいけば良い。

三成は己が心が正則に届いていたことを知り、豊臣の今後に一筋の光明を見た気がした。

その百二十 三成対正則（後書き）

掲載が滞りまして申し訳御座いません。

下記の投稿済みの話に大幅に加筆・修正を加えております。

今後の展開を左右する筋の修正がありましたので、ご面倒でも再読をお願いできればと思います。

いつもご愛読ありがとうございます。

作者

その五十七 三成拳兵

その九十 吉継の勝算

その九十六 吉継の最後

その百 無辜の存在

その百二十一 茶番

「徳川の問いにはお答えし申した。某が問う番で御座る」

ここで正則と幸長はようや三成と徳川が交互に問いと答えを繰り返す形で詮議を進めていたことに気付いた。

大罪人であるはずの三成の詮議にしてはひどく穏やかなものに思えた。

まあ敗れたとはいえ三成は二十万石の大名にして元奉行である。

そのくらいの面目は保ってやるというのが内府の温情か、それとも何か魂胆があつてのことか。

何にしても朝方に門前で晒し者にしたことは不釣合いな待遇である。

「本多殿、常に内府殿の右腕として側近くにおるはずのそこもどが、関ヶ原に居らなかつたの何故で御座ろうか」

それに対し正信は注意深く言葉を選びながら答えた。

「此度某は秀忠様と行動をともしておつた」

「大事な決戦を控えて秀忠殿と徳川の本隊はどこで道草を喰つていたので御座る」

「行き掛けの駄賃に大坂方についた真田を懲らしめようとしたまで」

「懲らしめられたのは徳川であるつ」

「否定は致さぬ」

正信は涼しい顔で答えた。

「徳川が真田にてこずるはこれで何度目で御座ろうか」

「はて、某は戦向きのことには疎くての。年寄りの某はもっぱら上様の伽役（かやく）で御座るのでな」

正信は都合が悪くなると年寄りを口実にとぼけた。

「行き掛けの駄賃などというのは口実で御座ろう。真田を攻めればてこずるは端から計算づくであつたはず。

虎の子の徳川本隊をかかると大戦に出し惜しみしたいばかりに、わざと関ヶ原に來なかつたというのが事の真相では御座らぬか」

それを聞いた正則と幸長は頭を殴られたような衝撃を受けた。

「……我等豊臣の大名は徳川の陰謀で同士討ちをさせられたのか……」

「はっはっはっ、へたに頭の良い奴は何でも陰謀と結びつけるから困る」

それまで黙って成り行きを覗いていた家康が満面の笑みを浮かべて

割って入った。

「徳川が誇る歴戦の三河軍をむざむざ出し惜しみするなどあるわけではないではないか。

確かに関ヶ原での東軍は寄せ集めの混成部隊であった。

しかしそれは西軍とて同じこと。ゆえに土壇場で裏切りにおつたりいたすのだ。

わしとて出来ることなら徳川だけで戦いたかったわ。

皆を巻き込んでしまったために要らぬ悲劇も引き起こしてしまつた。細川の珠様にはまことにすまぬことであつた。

まさか治部殿がそこまで敵方の妻子を追い詰めようとは思わなうでな」

家康は話をすり替えて正則、幸長らに三成が京、大坂で如何に非道な事をしたか印象付けようとした。

「明智の珠様の件はまこと遺憾の極みで御座る。何を言われても申し開きできぬ。

忠興殿が某を許せぬと申すのであれば忠興殿にこの首を刎ねられても致し方あるまい」

三成は潔く己が不手際を詫びた。

三成があまりにあっけなく非を認めただのかえつてのらりくらり言い逃れを続ける徳川の印象の方が悪く映った。

「治部殿」

正信が改めて質した。

「仕える主君や行く道は違えども、某はそなたの才覚を高く買っておるのだ。

信長公が身罷つてより僅か十年足らずで豊臣政権が国中を治められたは一重にそなたの知恵と手腕の賜物で御座ろう。

領地などよりも政の中樞で己が才覚を存分に振るいたいと願うところなど、某とそなたは似たもの同士である。

あまり人に好かれぬ性格も似てしまったは余計であるがな。

そこで御座る・・・

もし、そなたが大坂城における毛利中納言こそが此度の騒乱のまこと首謀者であつたと皆の前で証言いたすのであれば、

そなたの罪は大いに減じて大名としての再起も許すがいかがであるうか・・・」

ここで正信は家康に合図した。

「ああ、・・・ 治部殿、すべて水に流して豊臣のため徳川の家臣として出直さぬか」

言葉の内容とは裏腹に平板な音声で家康が打ち合わせどおりのせりふを言った。

心からの問いかけではないことなど三成ならずとも見通せた。

茶番である。

あまりのあほらしさに笑い出してしまうのを三成はずいぶん苦勞して堪えた。

四方を取り囲む衛士が脇差の柄に手を掛けて三成が無礼な態度を致さば切りかかってくる気配をにじませていたからである。

死ぬ覚悟などとうにできていたがあまりにあほらしい死に方は御免である。

どうやら内府はここまで来て裏約束どおりに毛利の所領を安堵することが勿体無くなったようである。

まあ気持ちは判る。

せつかく三成を敵に仕立て上げて大戦に勝利したのに、西国の大名どもを焼け太りさせてしまっでは、せつかく手が掛かった天下が遠のく。

島津を討ち漏らしたことがこれほどまでに大きく災いしたのはまさに自業自得である。

三成がどのような返答をするのか正則は気が気でない様子で見守っていた。

その百二十二 覚悟

毛利を売って徳川の家臣として出直すなら命を助けるといふ提案を受けた三成は、正則と幸長よしながが途中から同席を許された理由が読みどおりであつたと確信した。

家康が三成に対して助命のための選択肢を与えたことが彼らから北政所に伝わるようにと目論でいるのだ。

三成が到底呑めるはずもない条件を出して

この様子を目の当たりとした正則は、たとえどのような生き恥を晒そうとも三成生き延びるべしと思つた。

己が領国を守ることだけに汲々とする大老などたとえ豊臣に何人残ろうと、老獪な家康の防波堤にはならぬ。

. . . . 貴様を裏切つて徳川と手打ちをした毛利など、内府に売り渡してでも生き延びる!

本当はそう言つてやりたかつた。

「うおほんつ」

ひとつ咳払いをして正則が三成に向かつて問いかけた。

「治部少じぶのしょう、そもそも此度の騒乱の首謀者が其の方であつたといふの

は事実と違つのでは御座らぬか」

正則の言葉に家康が真顔になった。

「何を今更申される、福島殿。治部少が諸国の大名達に上様の告発状を送りつけたは承知しておろう」

正信が制した。

「あいやお待ち下され。京から漏れ伝わるころによると西軍で一番早く決起したのは宇喜多であつたそうな。

上杉が拳兵し、宇喜多も決起の知らせを聞いた大谷は、我が清洲を目前としながらも佐和山に取つて返し、そなたにも決起致せと迫つたのが真相では御座らぬか。

そなたの戦下手は賤ヶ岳や小田原攻めの頃より、誰よりもよう知つておる。

関ヶ原での完璧な布陣といい、戦い振りといい、とても其の方の差配とは思えぬ。

本当のところ、あれは宇喜多と大谷が仕掛けた戦であつたので御座るう。

そうでなくては大谷だけが合戦の中で腹を切り、宇喜多が雲隠れをして出て来ぬことに説明がつかぬではないか」

正信と家康は顔を見合わせてうんざりといった顔をした。

これでは福島正則をこの場に呼んだことが藪蛇となつてしまふ。

三成は余計な詮索が正則の立場を悪くすることを案じた。

正則の存在は今後の秀頼と豊臣にとって大切であつた。

「かつてあれほど某のことを憎んでおられた其の方がそこまで気遣って下されただけでこの三成、感謝にたえぬ。これからも秀頼様の御為、豊臣家に御忠臣下され」

三成は正則の指摘には一切答えず家康に返答した。

「内府殿の身に余る御温情は有難きことなれど毛利中納言殿はお気の進まぬまま名目上の総大将に担がれたまで。

それは関ヶ原での毛利勢の振る舞いが如実に表していると申せましよう。

それを我が身助かりたさに偽りを申して毛利こそ首謀者だなどは武士の面目に掛けて申せませぬ。

御期待に沿えず申し訳ありませぬがすでに覚悟はきまっておりますればこの辺りでご勘弁を・・・」

三成は家康の期待通りの返答を返すしかなかった・・・

その百二十三 今生の別れ

「もし叶うならば、この場をお借りして福島正則殿、浅野幸長殿に豊臣家の代表として某の謝罪をお聞き届けいただきたく存じます」

正信が家康の方をみて指示を仰いだ。

正則と幸長の両名が同席してより、三成から徳川を糾弾する内容の発言は陰を潜めていた。

衛士の刃が効いたのか、それとも両名に類が及ぶのを三成が潔しとしなかったのか。

おそらく後者であろう。

謝罪したいというのを許さないのも不自然である。

家康は無言で頷いて三成に発言を許した。

三成は正則、幸長らに向きなおし頭を垂れた。

「某が引き起こしし此度の騒乱の為に幾多の豊臣家に繋がる大名家がその命を、その職を失い、豊臣家に多大なる損失を被らせたること、まったく持って某の不徳の致す処にございます。

如何なる罪状、仕置きを賜ろうともこの身でお引き受け申します。ただ、ただ一つだけ心残りがあるとしたさば、それは大公殿下より託されし秀頼様の今後でございます。

いくつかの誤解があったようですが秀頼様はまごう事なき
太閤殿下の御嫡流」

ここで三成の視線を感じた家康は不承不承頷いて見せた。

「ますますもって豊臣の要となられる筆頭大老の内府殿のお力にすがりして、これよりも秀頼様ならびに豊臣の治世が磐石となるよう御奉公くださいます様御願ひ奉る次第に御座います・・・」

「うむ、あっぱれな口上である」、家康がほっとして感想を述べた。すかさず正信が、

「刻限で御座る。これにて石田治部少輔三成殿の詮議を終わると、ぴしやりと締めた。

それを受けた衛士達が腕を取って三成を立ち上げらせようとすると半ば立ち上がった三成ががくと膝を突いた。

精も根も尽き果てたのである。

引きずられても文句の云えない立場の三成を衛士達は、両脇から支える様に抱えて退場を促した。

この小柄な男は只一人で徳川二百五十万石と渡り合ったのだ。

そついう衛士達の敬意の表れであった。

両肩を抱えられて去り行く三成が正則の方を振り返った。

その目はこう語っていた。

…… 今生の別れぞ ……

正則は込み上げてくるものを必死に堪えた。

…… 己が愚かであった ……

正則と幸長の心がすでに徳川から去っていることを家康と正信は見抜いていた。

これから彼らを待ち受ける運命は三成と同じく悲惨を極めることになる。

…… 世代を超えて。

大津城での家康との会見を終えた三成は家康の命で鳥居成次に預けられた。

成次は関ヶ原に先がけて三成が攻め落とした伏見城の城代、鳥居元忠の三男であった。

その百二十四 魂胆

夜半に血相を変えた本多正信が家康のところによつてきた。

「上様、治部少輔を鳥居成次にお預けになつたと聞き及びましたが何故でございますか」

「ああ、もうそなたの耳に届いたか」

家康はきまり悪そうにとぼけた。

「三成めは今しばらく生かしておく必要があると申し上げたはず。鳥居に預けるは殺せと命じているのも同じでございますか」

「まあまあ、殺せとは命じてはおらぬ。命じておいて後から鳥居を取り潰す訳にはいかぬであろう」

「……」

「そういうことだ、正信」

「……伏見城に鳥居元忠を居残させたは元忠を始末するためであつたと……」

「左様、かねてより鳥居を徳川から排除する機会を覗つておつた。伏見城へ居残させたはまさに一石二鳥であつた。鳥居本人もわしから疎んじられておることは承知しておつたはずじや」

「しかし三男の成次までも失脚させずとも」

「まあ、そういう役回りの定めということだ」

「」

正信は主君家康が天下を目前として、いよいよ天下人の非常さを身に纏い始めたことを感じた。

かつて羽柴秀吉が殺戮を好まぬ氣の良い親父から、冷酷な支配者に豹変していったように

その頃すでに精も根も使い果たし疲れきった三成は鳥居成次に預かりの身となっていた。

すでに三成は今宵限りの命と観念していた。

何しろ三成が預けられた鳥居成次は鳥居元忠の三男。

鳥居元忠は関ヶ原の前哨戦に三成が直接手を下して落とした伏見城の城代であった。

城を落とされた元忠は腹を切つて果てた。

三成はまごう事なき父の仇である。

それを家康は成次に預けたのである。

「殺せ」と命じたか、「殺してもよい」と許したかのいずれかに

違いない。

馬に乗せられ成次が陣屋とした小さな屋敷に運び込まれた三成にはまず風呂が与えられた。

鳥居の家来が見張るなか、小物が丁寧に三成の垢を落とした。

前の晩の正純のところでは風呂までは与えられていなかったのだから成次はさっぱりして生き返った心地がした。

……清めてから殺すつもりか……

風呂を上がると渡り廊下と庭に面した小さな座敷に通された。

一人で座らされた三成の前に膳が運ばれて来た。

急場の陣屋にしては充分に心を尽くされた食事が並び、それが決して最後の食事として出されたものではないことが分かった。

ここに来て三成も当家の主に自分を殺すつもりが無いことを察した。

幾分か体調も持ち直した三成は久方ぶりに腹が満ちるほど食した。

膳が下げられると障子の外の監視の者達に動く気配が感じられ障子が開いた。

すらりとして端正な顔つきをした男が立っていた。

面識は無かったがこの人物が主の鳥居成次であろうことはすぐに察しがついた。

その百二十五 鳥居成次

「御挨拶が遅れて申し訳ございませぬ。

治部少輔殿をしばしお預かりさせて頂くこととあいになりました鳥居成次でございまする」

「石田三成でござる。今宵は風呂といい夕餉といい暖かいもてなし痛み入り申す」

二人の間をしばし沈黙が流れた・・・

成次は多弁な男ではないようであった。

「某の如き者のお預かりとなり、さぞや御案じ召されたことでありましょう。

されど一切御懸念には及びませぬ」

「夕餉をいただいて懸念は失せ申した。今は心中穏やかな心地で御座る。

これほどまでに丁重にもてなして頂いて、後々そこものお立場に差し障が生じるのではないかが気掛かりである」

「ご心配には及びませぬ、某は主の客人の饗応を任されたと合点いたしております」

三成は徳川の家臣の末席に、かくの如く筋目を通す武人がいること

に驚いた。

いや、この厚い人材こそが徳川の権勢を支えているのだとも納得した。

「なるほど、いつでも政権など取って代われるということか」

「翻って豊臣にそれほどの人材が今有るかと問われれば些か心許ない」

三成はずばり問うた。

「某をお父上の仇とは思っておらぬのか」

「思つてはおりませぬ」

「」

三成の疑問に答えるように成次が語りだした。

「父は石田様ではなく家康様より死を賜われたので御座います。

父は以前より家康様から疎まれておりました故、」

「それはにわかには信じられませぬ。

元忠殿は内府殿が御幼少のみぎりより付き従ごうていた最古参の家臣では御座いませぬか」

「故に家康様とて軽々に御処分出来かねていたのでありましょう」

「元忠殿と内府殿の間について何があったので御座いましょうや」

「何という程の事では無いのかも知れませぬ・・・」

成次は重く口を閉ざした。

「ここで相対するのも不思議な縁なれば某に話して聞かせていただ
けませぬか。」

どうせもう某はほれ、先の無い身で御座いますれば他所に漏れる心
配も御座いますまい」

成次は目の前の知性溢れる男が徳川に楯突いた極悪人とは到底信じ
られなかった。

「些か長い話になり申す。石田殿はたいそうお疲れのはず。
そのような仕様も無い話にお付き合い頂くは御身をお預かりする身
としては申し訳ありません」

「是非に・・・」

と乞われて成次は重い口を開いてぼつりぼつりと話し始めた。

その百二十六 長篠

「某がまだ五つか六つの頃にございます。」

主家を武田から徳川に鞍替えした奥平を討つべく、武田の若き頭領の勝頼様が長篠城を攻めた戦がございました。」

「うむ、長篠の戦いの発端でござるな・・・。」

「如何にも。奥平は寡兵にも関わらずよく持ち堪えたそうにございます。」

「その際に織田、徳川連合軍は野戦と見せ掛けて堅固な陣地を構築していた・・・。」

「・・・石田殿は昔の合戦にもお詳しいので。」

「ふふ、受け売りでござる。古今の合戦に詳しい友がおったのでな」
大谷吉継の最後を思う三成の顔に影が差した。

「それまでの戦勝に酔った勝頼様は慎重な重臣達の説得を振り切つて織田方の仕掛けた後手必勝の待ち受け戦の中に飛び込んで行かれました。」

「武田のような戦闘力に長けた軍勢ほど深く嵌る恐ろしい罠でござるな。」

「如何にも。石田殿にはこのあたりの説明は要らぬようでございますな、この部分は飛ばして本題をお話し致します。」

武田の重臣の中に馬場美濃守信春という男がおりました。敗走する勝頼様を逃がす為、反転迎撃して自らは討ち死にいたしました」

「うむ、武田の強さは主家を力強く支える有能な家臣団にこそあった」

「はい、しかしそのほとんどが長篠の戦いの中で失なわれてしまい、それより僅か七年で武田は滅びました」

「んー、して武田の滅亡が鳥居殿と内府殿とにどう関わると申されるのだ」

「馬場美濃守信春には跡目の昌房殿と娘が一人おりました」

「・・・」

「昌房殿は武田とともに滅び、娘だけが生き残りました。父親の才覚を色濃く受け継いだすらりとした美しい女子おなごでございます」

「・・・」

「某の母に御座います」

「其の方は武田の・・・」

「武田が滅亡したとき、家康様は才女と評判の我が母を所望され鳥居元忠に搜索の命を出されました。

しかし元忠は母を捕らえたにも関わらず家康様を欺いて己が妻に迎

え入れたので御座います。

母の連れ子の某は鳥居家の三男として育てられ申した」

「内府殿はそれに気付いたのだな」

「狭い家中でそのようなこと隠し通せるはずも御座いませぬ。

人の口から家康様の知るところとなり申した。

家康様は古参の家臣の裏切り行為に衝撃を受けたはずで御座いました。が、そこは天下をも狙おうかという家康様で御座います、

元忠のしでかした不祥事を一笑に付して一切お咎めも有りませんでした」

「元忠殿は内府殿に恐ろしい借りをこしらえたもので御座りますな」

「如何にも、それが伏見城への居残り城代を申し付かった真相に御座います。」

. 奥平と鳥居が

関ヶ原と長篠がまた別の糸でつながった。

その百二十七 腹芸

明けて九月二十三日、三成は鳥居成次の陣屋より再び大津城へ戻された。

どかどかと足音を響かせて本多正信が家康のところへ駆け付けた。

「はあはあ……、上様、三成めが生きたまま戻されましてまいりましたぞ」

正信の嬉しそうな顔を見て家康は舌を鳴らした。

「鳥居の倅め、どういづつもりだ……」

今度は家康がどかどかと荒々しい足音を響かせて、目通りを許された鳥居成次が待つ本丸広間へ向かった。

家康が荒々しく床を踏み鳴らす音は広間の手前で次第におさまっていった。

気配を察した鳥居成次は平伏したまま家康を迎えた。

開口一番家康は、「成次、大儀であった」、とだけ声を掛けた。

顔を上げた成次は、「此度は敵将石田治部少めじぶのしょうめを某の如き者にお預けくださり有り難く存じ上げます。

上様のお心尽くしまことに以って痛み入りますが、我が父彦右衛門は正々堂々の公戦にてその一命を差し出したもの。

治部少輔殿に対しては些かの遺恨もございませぬ」

家康はその心中とは裏腹に、「天晴れである成次。そのほうの申す処もつともなり。いよいよ大儀であった」、とだけ言い放ちその場を引き上げた。

神妙な面持ちで廊下で待ち受ける正信に、「これでよろしかろう
・
・
・
、」と言ってぶいっとした。

「上出来でございまする」

「ふんっ、天下人とならんとするのはなんと窮屈なものよ。思ったことも言えず、怒り散らすことも叶わぬ」

「いましばらくの辛抱にございまする」

家康はでっぷりと太った腹をぴしゃりとたたいて自分自身を奮い立たせると、「さて、いよいよ大坂に乗り込むぞ正信」、と言ってやっつと正信の方を見た。

「その前に三本木をお忘れなく」、正信が念を押すように言った。

「判っておる」

「されば三成めは一足先に堺、大坂で晒し者と致し、西国勢に圧力をかけておくといたしましょう
・
・
・
」

「其の方に任せる」

家康が三成に会うことはもう二度となかった
・
・
・

その百二十八 直江山城

三成が命を削りながら最後の闘争を繰り広げていた頃、遠く奥州では上杉と最上による長谷堂城の攻防が熾烈を極めていた。

と云っても過酷なのは攻めあぐねる上杉軍にとってで最上軍は地の利を活かして易々と上杉の攻撃をしのいでいた。

奇しくも関ヶ原と同じ九月十五日に始まった長谷堂城の戦いは、僅か半日で片が着いた関ヶ原とは大違いの長期戦にもつれ込んでいた。

…… 兼統の計らいによって ……

兼統のぐずぐずと煮え切らない作戦指示に上杉の家中からも不満の声が高まりつつある頃、更に事態を複雑にする動きが東方に現れた。

最上の本拠、山形城を見下ろす高地に蔵王山地の国境を越えて伊達の援軍が姿を現したのだ。

いや、援軍かどうかは輕輕には判らぬ。

最上が総力戦のうちに滅ぶのを傍観し、激戦に消耗した上杉に襲いかからんと虎視眈々と窺っているかにも見えた。

これで兼統は、より時間をかけて慎重に行動する大儀を得た。

・・・ 伊達殿も良い頃合で兵を出されたものよ・・・

徳川、伊達、最上、そして兼続とすべてぐるであつた。

しかしなぜ兼続は主家の上杉を危機に陥らせるようなことを徳川と企てたのだろうか。

かつて正信からそう問われて兼続はこう答えたことがあつた。

「我が主、景勝様にとつても上杉にとつても百二十万石の大大名で有り続けることは負担でしかありません。

大殿下より大老職を申しつかったこととて持て余しております。上杉はせいぜい三、四十万石の中堅大名として生きるのが身の丈であります。」

かつて秀吉も大老としての景勝の力量には期待してはいなかつた。

しかし上杉には戦国を生き延びてきた実績と家名がある。

秀吉は上杉を伊達と最上の監視役として会津に国替えさせたものの、その実務は米沢に領地を与えた兼続に一任していた。

兼続は上杉の軍事力を後盾に、伊達と最上をうまく押さえ込んだ。

三成も上杉と兼続が働きやすい様に側面支援した。

秀吉の存命中はそれでうまく収まった。

しかし秀吉の死後、兼続の伊達、最上との調整役としての立場は豊

臣に災いと転じることとなる。

兼続はこの時代の武将には珍しく、己が領地や石高には無欲な男であつた。

ただ権力にのみ固執する人間であつた。

三成とも正信とも、ずっと後の世に土佐が生み出す郷土とも相通ずる性質であつた。

実力者の手足となり、間を取り持ってどでかいことを成し遂げる
・
・
・

そんなことに血道を上げるのが何より生き甲斐とを感じる人間であつた。

兼続が次の時代の覇者に選んだのは豊臣でもなければ、まして上杉でもなかつた。

兼続は豊臣の公家臭さがどうしても許せなかつた。

聚楽第のけばけばしさも、関白や太閤などという朝廷官位が武家を束ねることにもうんざりだつた。

その点、徳川は武家の中の武家、武士の中の武士と感じられた。

兼続は正信を通じて急速に徳川に傾斜していった。

徳川にとつても兼続は得難い人材であつた。

名家上杉を自在に操り、豊臣政権の要の三成の信任も厚く、扱いに
くい伊達の当主をも手玉に取る腹芸にも通じていた。

正信は大願成就の暁には徳川政権の要職に就かせる密約をもって兼
続を取り込んだ。

後の世の土佐の脱藩郷土がそうであったように . . .

その百二十九 反転攻勢

二万五千の上杉に対して僅か一〇〇〇人で長谷堂城に立てこもった最上が防戦一方だったかと云えばけっしてそうではなかった。

幾度か不意打ちの夜襲を仕掛けて上杉に大損害を与えている。

おかげで上杉勢は昼間はぬか田に阻まれて攻めあぐね、夜は夜でおちおち寝られずと、神経戦でも最上に主導権を奪われていた。

長谷堂城に籠もる城代は志村光安。副官は鮭延秀綱である。

実は兼統は半年前に彼らとも会っていた。

最上義光と長谷堂城を囲の砦とすることに合意したとき、義光のはからいで彼ら兩名と相對していた。

義光の言葉を借りれば、「この者たちは奥州の如き辺境の地に留め置くには惜しい強者達である」、ということであった。

出羽で最上がここまでになれたのも彼らの働きがあったればこそである。・・・

上杉に焦りと厭戦気分が蔓延し始めた頃、北関東で江戸の守備に残っていた家康の次男の結城秀康から兼統宛てに和平の提案を装った密書が届けられた。

それは関ヶ原の行方を知らせるものであった。

~~~~~ 九月十五日早朝より美濃近江境の関ヶ原に於いて東西両軍の総力戦が勃発。

結果は徳川の完全勝利也、上杉は包囲を解いて国許へ戻られよ ~~~~~

兼続の役目は果たされた。

このまま静々と上杉領へ引き返すことも出来たはずである。

だが兼続はそうしなかった。

上杉にはまだまだリストラが足りなかった。

この戦後処理で上杉百二十万石は大幅に減封されて並みの大名とならねばならない。

……この際、余分な兵員は削減しておかねばならぬ、最上の手を借りて ……

兼続は関ヶ原の情報を握りつぶした。

同じ知らせは山形城の最上義光にも、伊達軍を率いる留守政景にもたらされているはずである。

今夜は長谷堂から最後の夜襲が仕掛けられるであろう。 . . .  
それも過去最大規模で。

やがて山形城から長谷堂に反転攻勢を知らせる狼煙が立ち昇り、夕刻の北の空にたなびいた . . . .

果たして兼続の読み通り未明の長谷堂から忍の様な黒装束に甲冑すらまわぬ身軽ないでたちの奇襲部隊が音も無く上杉の最前線に襲い掛かった。

敵の隊長は勇猛で知られる長谷堂の副将、 鮭延秀綱である。

最上はほとんど死傷者も出さずに上杉だけに一方的に損害を与えた。

同士討ちの混乱の中で上杉の重臣で高禄で召抱えられていた上泉秦綱らが討ち取られた。

しかしである、上杉が更なる大打撃を被るのはこれから始まる撤退戦で山形城から打って出た最上本隊と伊達の連合軍から猛烈な追撃を受けたときである . . . .

## その百三十 見ざる

未明に受けた奇襲で大損害を被った上杉勢は死傷者の処置に追われていた。

間の悪いことにそんなどさくさの最中に会津から景勝の伝令が届くのであった。

それは関ヶ原の顛末と、あわせて速やかに最上領から撤退せよという命令であった。

それまで傍観の構えを取っていた伊達の援軍も山から降りて来る様子が覗え、山形城の最上と共に撤退を余儀なくされる上杉を追撃してくる姿勢を鮮明にした。

ここに及んで兼続もようやく全軍に最上領からの撤退を指示した。

しかし間際に死傷者が多数出たため、本来迅速であるべき陣の引き払いには機敏さが欠けていた。

上杉の撤退開始は遅れに遅れ二日後の十月一日に延びた。

もたつく上杉の内情を察した最上と伊達の連合軍が一系乱れぬ隊形で浮き足立つ上杉に襲い掛からんとした。

最上の新型鉄砲が一斉に火を噴き上杉の混乱にさらに拍車をかけた。

上杉は撤退戦の隊形も陣形も満足に作れぬままに潰走しはじめた。

．．．．あまり逃げ足が速いのもよろしくない．．．．

面目も体面もかなぐり捨てて逃げ出そうとする自軍に対して兼統は、上杉の家名を汚さぬようきっちり殿軍戦しんがりをするよう仕向けた。

殿軍の隊長は年甲斐も無く目立ちたがり屋の新参者、前田利益（慶次郎）が買って出た。

これまで満身に軍を指揮したこともない利益は、見た目だけは派手な無鉄砲さで最上の先鋒に突進していった。

あわや鉄砲の餌食と思いきや最上の前線が緩ゆるんだ。

ここぞとばかりに上杉の殿軍部隊が橋頭堡を築こうと踏みとどまると伊達と最上の突撃部隊に呑み込まれて全滅した。

肝心の前田利益は後退して難を逃れていた。

こんなことを何度も繰り返すうちに上杉の犠牲者だけが積み上がった。

．．．．すべて兼統と義光の打ち合わせた通りであった．．．．

優位に展開する最上軍の中にあつて義光に異を唱える者があつた。

「殿、如何に駒姫様の復讐とはいえ、このような不義の戦、御家の

為になりませぬ。

殿は徳川に利用されておるので御座います。 . . . 」

こう云つて義光を何度もいさめてきた重臣の堀を不幸が襲つたのは追撃戦の最中であつた。

義光の横で馬上にあつた堀を背後から飛来した弾丸が貫いた。

義光ら周囲の者が落馬した堀を確かめるとすでに事切れていた。

義光はかぶっていた兜を脱ぐと配下の射手の一人に自らの兜の前楯を撃たせた。

「良いか皆の者、堀は上杉に果敢に立ち向かいわしを守らんとして敵の銃弾に倒れた。

わしも兜に鉄砲を受けて九死に一生を得た。

撤退する上杉の戦ぶりは敵ながら天晴れなものであつた。

上杉の殿軍は敵将、直江山城と音に聞えし豪傑、前田利益である。皆の者、これに相違無きと心得よ」

義光の方針に異を唱える者はもういなかった。

最上の者達は義光のこういうやり方に慣れていた。

かくして兼続と義光の出来レースは無事計画通り全うされた。

## その百三十一 無血開城

「大坂城で籠城戦など、淀の方がお許しにな訳なかるう . . . .  
」

毛利輝元の提案を片桐且元はぴしゃりとはねつけた。

当の輝元とて徳川を相手に籠城戦をする気など毛頭無かった。

ただ強行に徹底抗戦を唱える立花宗虎と叔父の毛利元康の手前、淀の方が承諾せぬのを承知の上で提案したのだ。

同席した立花宗虎が且元に食って掛かった。

「城攻めの名人であらせられた太閤殿下が、その全てを注ぎ込んで造り上げた大坂城をもって戦えば、如何な徳川とてけっして攻め込めるものではありませんせぬ。

我が立花が誇る鉄砲隊がその力を存分に發揮するのは頑強な砦に籠つての迎撃戦で御座います。

現に朝鮮では幾多の籠城戦で明の大軍を殲滅してきたではありませんせぬか。

たとえ相手が十万だろうと二十万だろうとそんなことは関係ありませんせぬ。

敵が大軍勢であればあるほど標的は多くなります。

狙撃手が身を隠したまま速射できる籠城戦に於いては、標的が多ければ多いほど無駄弾丸が減らせるということになります。

敵は死体の山が積み上がっていくことに恐怖し、和議か撤退を余儀なくされるでありますよう」

宗虎の言い分は至極もつともであった。

大坂城と立花鉄砲隊を組み合わせれば向かうところ敵無しであろう。まだ豊臣に臣従する者も多く、如水や清正も健在なこのときに、覚悟を決めて家康と対決していれば、たとえ結果が痛み分けになったとしても豊臣が滅亡することは避けられたに違いない・・・

しかしお茶々の選択肢には、わが子秀頼を対決の前面に据えるなどということとは、けっして有り得ないことだった。

・・・ 弟の万福丸の二の舞にはさせられぬ・・・

それまでのやり取りを上段の上座で黙って聞いていたお茶々が、強硬に籠城戦を主張する宗虎に向かって言葉を投げかけた。

「立花宗虎、・・・」

お茶々の凜と通った声に居合わせた者達が居ずまいを正した。

「そもそもあなたが大津城ごときに梃子摺らずに大垣に集結した治部少達のしやうと共に関ヶ原に参戦いたしておれば、このような最悪の事態には至らずに済んだであろう。

何故、大津城ごとき二、三千の兵で取り囲んでおいて関ヶ原に馳せ参じなかったのじゃ」

これには宗虎も返答のしようが無かった。

数日前、孝蔵主たかざうに申し開いたのと同じことをもごとく口走った。  
・  
・  
・

「大津には淀の方の妹御のお初様が立て籠もっておられましたゆえ  
思い切った攻撃が出来なかつたので御座います。・・・それ  
に敵を背後に置いたままでは進まぬのが定石」

それを聞いたお茶々が宗虎をこきおろした。

「たわけ者が。たとえ親兄弟であろうと敵味方とならば命を奪い合  
うのが戦国の倣いであろう。」

女の身のわらわですらそれしきのこと承知しておる。

そなた、太閤殿下の治世で平和ほけしたか。

日の本一勇猛果敢と聞こえた立花宗虎が聞いてあきれれるわ！」

お茶々にここまで言われては宗虎も引き下がらざるを得なかった。

頃合と見て且元が落とし処を説いて含めた

「輝元殿。此度の騒乱は内府殿じぶのしやうと治部少じぶのしやうが豊臣政権の執政の座を奪  
い合つた私闘である。」

其の方も疑われて困るような野心が無いのならさつさと西の丸を引  
き払つて毛利の所領に帰られるがよい。

大坂城を戦場いくさばにするなど亡き太閤殿下は決して許されぬであろう。

左様承知いたすがよい」

輝元は己が望み通りに且元が評議の場を差配してくれたのでほつと  
して引き下がった。

・・・ これで毛利の安堵は間違いない ・・・

大坂城の明け渡しは豊臣姓を合わせ持つ福島正則によってつつがなく進められ、天下の堅城は無血開城した。

家康はすでに奥平信昌を所司代に置き京都まで支配下に収めていた。

## その百三十二 義弘と宗虎

大坂城で徹底抗戦する道を閉ざされた宗虎は、失意のうちに領国柳川に帰ろうとしていた。

宗虎は考えていた。

もしあのとき井伊直政の調略を撥ねつけて伊勢経由で大垣城に駆け付けていたなら、関ヶ原の結末はどのように変わっていたであろうか。

…… 関ヶ原を間近に見た者から話が聞きたい ……

そう願って止まない宗虎のところへ偶然にも関ヶ原の渦中を生還した大名から救援の依頼が舞い込んで来た。

島津義弘であった。

関ヶ原の最後に徳川の本陣目掛け敵中突破を果たしたあの島津義弘である。

宗虎は一も二も無く九州までの同道を受け入れた。

摂津のはずれで義弘の一行と合流した宗虎は島津方の人数があまりに少数なことに驚いた。

宗虎は家臣に「島津の家中の者達はまだ揃っておらぬのか ……  
」と問うた。

「……………殿、島津の生き残りはあれが全てで御座います」

……………なんと、七、八十人見当しかおらぬではないか。

「殿、申し上げて宜しいでしょうか」

家臣の一人が宗虎に具申した。

「かの島津公は先代の道雪様の仇に御座りまする。

仇を討つのにこれほどの好機は二度と御座いますまい。

御下命いただければ我らが手で……………」

家臣の云うとおり島津義弘は宗虎をここまでの武將に育て上げてくれた養父の立花道雪の仇であった。

「其の方の申す事もつともなれど、敗軍の將が恥をしので保護を求めて来たのを親の仇だからとこれ幸いに討ち取るのが果たして武人の誉れとはわしには思えぬ」

「御意に、お言葉どおりに……………」

以降、立花の家中は島津を丁寧に出会った。

程なく両軍の撤退の行軍が始まると宗虎は共も従えずに島津の隊列に寄り添い義弘と鞍を並べた。

傍目には敗軍の將である義弘の方が背を伸ばして堂々と、無傷の宗虎の方が意気消沈して見えた。

「島津殿、同道の道すがら関ヶ原でのことをお聞かせ願えまいか……………」

・・・  
「

宗虎の懇願するような態度に義弘は宗虎の悔恨を垣間見た。

「よかでござす・・・」

こうして義弘と宗虎との間で、奇妙なほど符合する境遇が語られようとしていた・・・

### その百三十三 義弘の告白

「そもそも鳥津は徳川に味方するつもりでござした . . . .」

「 . . . .」

義弘は命を助けてくれた礼に、宗虎に全て正直に話すことにした。

「けっして大軍勢とは申せぬ鳥津が徳川に最も恩を売れるのは籠城戦であると思ひ至り、

孤立する伏見城の援軍を買って出申した。

しかし城代の鳥居元忠は頑強に援軍を断りよつた。

聞いておらぬとぬかしてな . . . .

あれは如何にも不自然な返答でござした。

誰がどう考えても一人でも多くの援軍が欲しいところでござそう。

おそらく . . . . 内府が鳥居に申し渡した命は、伏見城を如何

に持ち堪えさせるかではなく、

如何に壮絶に死するかということであつたのでござそう。

徳川に同情する同調者を増すためと、東軍の結束をより強固にするために。

それに大坂方を足止め分断する役目は、伏見城の先の大津城が果たしましたゆえ . . . .」

そう言つて義弘は宗虎の方をちらと見た。

「東軍からあぶれた鳥津は仕方なく大谷と宇喜田の誘いに乗り、腹を決めて西軍の一員となり申した。

薩摩からの増援を期待されもしたがそんなものは来もうさなんだ。

京摂津界限の親戚縁者を総動員してようやく千五百まで兵を集め、

どうにか格好が付き申した。

大谷と治部めはさぞかし失望したことでござろう・・・  
そんなおり、どうやって嗅ぎ付けたのか西軍が支配する京近江界隈にも関わらず井伊直政の手のものが接触してきもつした。

当初の約束通り徳川側につけと。

一旦西軍に加わった以上、薩摩者がころころと陣営を変えられるものかと一蹴しもうした。

直政はさらにその先を読んでおりもつした。

明確に味方せずとも良か・・・兵を動かさずばそれで良かと

ここまで聞いた宗虎の心はざわめいた。

島津も井伊直政からの調略を受けていた。

その上で島津は関ヶ原に参陣していた。

義弘は続けた。

「いくら兵を動かさずば良かと云われても、薩摩の突進力を買われて最前線にでも配置させられてはそうはいきもさん。  
すると直政はこういう手まで用意しておった。

島津の相手は井伊の軍勢が引き受けると。

お分かりになったでござろう宗虎殿。

島津は井伊直政の軍勢と戦う振りをばしておればよかということ  
ござす」

宗虎はあわや落馬しそうなほどの衝撃を受けた。

・・・井伊直政・・・

義弘は馬上で天を仰ぎ見た。

「直政の調略にまんまと乗った島津が愚かでありもうした。いや、直政本人は信じるに足る人間でありもうした。如何に策謀を巡らせようと自ら結んだ密約を破るような男では断じてありもうさななんだ。」

おそらく土壇場で約束を反故にするよう命じたのは . . . . 家康！

小早川の東軍加勢によって勝敗の行方が決定的になったとき、それまでの態度を一転させ伊井の赤備はあかぞねえ猛然と島津に襲い掛かって来りもうした。

我らは多大な犠牲が出るのを覚悟の上で徳川本陣を掠める敵中突破を敢行しもうした。

すべて天下に徳川の裏切りを知らしめるためでごわす。

あれを目の当たりとしたもんは島津の憤り尋常ならざるものと理解したでごわそう。

だからでごわそう、直政は執拗ともいえる執念で我らを追撃してきもうした。

密約の存在、そんなもってそれを反故にした徳川の不義が他国に漏れんようにわしを消すため . . . .

尋常ではござらん追激戦の中で、我が甥の豊久が討ち死にし、どうやら直政と家康の四男坊も手傷を負ったようでごわす。

わしは御覧の通り僅かな兵とともにそなたの助けを借りて薩摩まで帰る事が叶いそうでごわす。

しかし勘違をしてもらっては困りもうす。

己が命を惜しんで薩摩に帰ろうとしておるのでは御座らりもうさぬ

「 . . . . 」

宗虎は義弘の意図を察した。

「わしが家康の犯した不義の生き証人である限り徳川は薩摩に手出し出来もうさぬ。」

太閤亡き後の家康の狙いは、まごうことなく天下取り . . . . 天下の差配を執り行なおうかという者が、密約とはいえ大名同士で交わした約儀を反故にしたことが明るみとならば誰も徳川に付き従わなくなりもそう」

「 . . . . 如何にも . . . . 」

「おいどんが恥を忍んで立花殿に助けを求めた訳もお察しいただけたでござろう」

「当主としてもつともな御振る舞いで御座る」

「そしてこん話を聞き及んだ立花も、徳川に対する持ち札が増えたということでもござろう」

「 . . . . 」

宗虎の中で絡みついた糸がすーとほどけた。

「島津殿、某にもお話しておくことが有り申す . . . . 」

その百三十三 義弘の告白（後書き）

薩摩弁のわかる方、監修お願いいたします。

## その百三十四 宗虎の告白

「先程、島津殿が申された大津城が大坂方を分断する役割を果たしたという件で御座るが、某はまさにその毒饅頭を喰らわされた身で御座る」

宗虎は些か躊躇しながら語り始めた。

「恥を忍んでお話いたそう。

実は某も伊井直政からの調略を受けており申した。

それは、立花の軍勢が大谷刑部少の作戦どおり、伊勢経由で大垣城を目指していたときのこと御座る。

近江から伊勢方面へと西進する我が軍に、伊井直政の手の者が接触して来たので御座います。

徳川の多数派工作など端から受け付けぬと跳ね返し、その場で使者をたたつ切ろうとしたところ

「あからさまに味方せずともよかと申して来たのでごわそう

「・・・如何にも。

立花の軍勢はあくまで西軍の一員として徳川の用意する罠の砦に張り付いておれば良いと

それで立花の面目も行く末も両立するではないかと

「似たような話でごわすな」

「太閤殿下の御恩を忘れて徳川に付くぐらいなら戦って死んだほうがましであるとさえ言い残して柳川を出立して来た身で御座る。」

しかし国許に残した家臣や一族郎党のことを慮れば、世間知らずの馬鹿殿の面目を立ててばかりもおおられませぬ」

「……大人として振舞わねば大名家と云えども立ち行かぬ誰にも責められぬことよ」

「伊井は某の心に隙に実に巧妙に付け入って来申した。

『立花は西軍から寝返った京極高次が籠る大津城を攻める振りをして近江に留まられよ』、と……」

「……」

その勇猛さで音に聞こえた二人の大名は互いにしばし無言となった。

先に言葉を発したのは宗虎であった。

「……もしあの時、伊井の調略を撥ね付けて、伊勢の小城など踏み潰しながら大垣城に馳せ参じておつたなら、

我が無敵の鉄砲隊が関ヶ原にその途切れることのない轟音を響かせていたなら、天下分け目の趨勢が果たしてどう変わっていたのか、今更ながら思いを馳せずにはいられぬので御座います。

島津殿は最後まで関ヶ原に踏み止まり、すべてを目の当たりとされたので御座ろう……」

「関ヶ原には密かに野戦陣地が築かれておりもうした。

大谷と治部は、端から関ヶ原を決戦の場と決めていた節が御座りもした。

小早川と大谷以外の西軍がまだ大垣城にあつたとき、対峙していた東軍に内府の旗印と僅かばかりの徳川の陣旗が立ちもうした。

わしは徳川の全軍が揃う前に敵の野営地に夜襲を仕掛けて先手を打

つべしと進言しもうした。

大垣城の大將の宇喜多中納言もわしの策に賛同しはった。しかし参謀格の治部めが強行に反対しおった。

「……段取りを済ませた必勝の策に差し障りが生じるなどめかしてな」

「必勝の策とは……」

「わしらには詳しく話さなんだ。

どこからか秘密が漏れると困ると思っておったのでござろう。

島津んことも宇喜多んことも心底信賴してはおらぬ様子でござわした。そげん奴に島津の行く末を預けるわけにはいきもさん。

わしはそこで西軍に見切りをつけもうした……」

「……」

「関ヶ原に大谷が築き上げた野戦陣地は、かなり大掛かりなものでござわした。

騎馬では乗り越えられぬような土塁が積みまれ、笹尾山の山上には前もって五門もの大筒が担ぎ上げられておりもした。

数日程度で段取れるものでは到底御座いもさん。

ましてや大垣城から急遽関ヶ原へ展開したものでも御座りもさん。

そして小早川は旗色不鮮明なまま、初めから松尾山を占拠しておりもうした」

「なんとも不自然な布陣で御座るな……」

「雨中、深夜の移動で急遽大垣から関ヶ原に出張らされたのでどのような布陣となっているのか夜が明け、霧が晴れ渡るまでさっぱり見えもさんだ。」

あの城砦とも呼べる堅固な野戦陣地に立花の鉄砲隊が加わってあったなら、合戦の趨勢に決定的な影響を与えていたことをごわそう。戦局もあれほどの膠着状態とはなりもさず、小早川とて迷いに迷った拳句に徳川に寝返ったりしなかつたのかもしれないことをごわす。しかしでこわんど、徳川は立花の戦力を警戒したればこそ調略の手を伸ばしてきたのでごわそう。

内偵に長けた徳川は伊賀、甲賀衆をば取り込んで京、摂津、近江、美濃界隈の状況を事細かに掴んでいた様子。

宗虎殿が徳川に靡かないとなれば、また違った策を講じてきたことで御座ろうし、内府がこのこに畏に嵌まり込んで来たかどうかも怪しいところをごわす　・・・・・・・・

義弘の話聞いた宗虎は、いくらか心の重荷が軽くなったような気がした。

その百三十五 三本木

「石田殿は某が裏切ったと思っておる、某のことを恨んでおるのじや……………」

秀秋はそう言つて泣き崩れた。

おねねは優しく諭すように秀秋に語りかけた。

「佐吉はそなたを恨んだりしてはおらぬ。そなたの身を案じて突き放すような物言いをしたのじゃ……………そなたにはそれが解らぬのか」

焦燥しきつて些か精神に異常をきたしかけた秀秋には、おねねの言葉も届いていないようだった。

考えあぐねたおねねは傍らの孝蔵主にもう一人の客をここへ通すように申し付けた。

しばらくして、おねねと秀秋が待つ、中庭が見渡せる部屋の前でおねねが一人手を付いた。

もう一人の客は若いおんなであつた。

秀秋にも見覚えがあるおねねの着古しを身に付け、武家髪に結つてはいるがどこことなく板についていない感じもした。

おねねはそのおんなにも部屋の中へ入るようにすすめた。

おずおずと末席についてまた手を付いたおんなは、三成が北政所に遺言を託した古橋村のおいねであった。

顔を上げたおいねに秀秋は初対面であるはずなのに不思議な懐かしさを感じた。

．．．．  
若き頃の北政所おかが様に似ておる　．．．．

「この娘は佐吉が長浜の近郷の村で、捕縛される寸前まで匿い世話をしてくれた者でおいねと申す」

おいねはちらと秀秋をみてまた手を付いて平伏した。

「おいね、挨拶はもう良い。なかなか上出来じゃ。いつでも内府殿をお迎え出来よう」

「！、内府殿がここへ立ち寄ると？」、秀秋が驚いておねねに尋ねた。

「かならずな　．．．．」、「とっておねねはにっこりとおいねを見た。

「ここにおわす若い殿方は、こう見えてもれっきとした大名であります、それに豊臣家の第二位継承者でもあるのじゃぞ」

「．．．．　小早川　．．．．　秀秋様」

おいねが名を当てた。

「さすが佐吉が見込んだ娘じゃ。おっと、もう立派な奥方であったな」

そういわれておいねは初々しく少し照れた。

「固くならずとも良い、みな身内じゃ。

おいねや、これから豊臣を背負って徳川と立ち向かわねばならぬこの若者に、そなたが佐吉、いや佐和山の殿様から申し付かった遺言を聞かせてやってはもらえまいか」

運命の不思議な糸に手繰り寄せられて、傷心の秀秋は三成の遺言を心に刻むことになる・・・

## その百三十六 三成の遺言

「佐和山のお殿様はわたくしのような者を相手に、実にたくさんのお話をお話し下さいました」

そういつておいねはどこから何を話し始めればよいのか思案した。

北政所には数日を費やして話し終えたばかりである。

目の前の憔悴しきつた秀秋は、そんな気力も時間も持ち合わせてはいないように覗えた。

おいねはつとめて小早川に関わることに整理して話すようにした。

「佐和山のお殿様は松尾山のことも、佐和山のことも、小早川様をお恨みするようなことは一切申されておりませんでした」

うなだれて聞いていた秀秋が顔を上げた。

「三成様は明智の怨念を巧みに利用した徳川様に、大谷様の策略がことごとく裏を斯かれたと申されておりました。

残念ではあるが策士策に溺れるであつたと・・・」

そのことには秀秋も心当たりがあつた。

「小早川を主君の意思に背いてまで東軍に走らせたは明智の家老の娘。」

西国の強豪、立花を大津に足止めしたは明智の元家臣の京極。

大坂で三成様を窮地に陥れた細川の奥方は明智の姫君。

最後の最後に戦局の均衡を打ち破る決定的な役割を果たされた脇坂のお殿様も元は明智。

豊臣は明智があつての豊臣とも、申されておりました。

明智の滅亡の上に成り立つ豊臣が、因果応報、明智の怨念に敗れたのだと・・・」

秀秋の目に元来の思慮深い光が戻り始めた。

「大谷様の築かれた、後手必勝の待ち受け戦とやらは、それは完璧であつたとも申されておりました。

双方が霧が晴れるのを待っていたなら、西軍の威容に開戦の火蓋は切られずに済んでいたのではないかと。

しかし徳川様はそれらを承知の上で、自分自身を囿に關ヶ原に現れ、自ら戦端を開かれたと。

小早川様の軍を必ず東軍に引き込む確固たる裏付けがあつたのであると」

秀秋は松尾山での出来事を思い出して身震いして悔しがった。

「あの時、平岡と稲葉を主馬の進言通りにたたっ切っておれば・・・」

「たとえ小早川の軍が東軍に傾こうとも大谷様は手を打たれていたので、勝手に御座います。

家康様の切り札の小早川を抑え切ることで、もはや西軍の優勢間違いないと。

日和見の軍団は徳川に見込み無しと見切りをつけて西軍に傾くと・・・  
・・・  
ところが、まさかの脇坂と。

大谷様と共に越前、北陸を転戦してきた盟友の脇坂のお殿様がまさ

かあそこで寝返ろうとは流石の大谷様も見抜けなかったであろうと。秀秋様、……関ヶ原で西軍が負けたのは小早川のせいでは御座いませぬ。

小早川の軍を退けつつあった大谷軍の一番もろい側面を、僅か千の兵で突いた脇坂様の裏切りこそが決定的。

三成様は間違いなくそのように申しております」

「……石田殿は佐和山でのことについても某を許すと」

「許すも許さぬも御座いませぬ。三成様は小早川のお殿様に、この難局をしぶとく生き延びて豊臣家の支え手になっていただくのだ、それを是非とも伝えよとわたくしめを遣わしたのでございます」

おいねの話聞き終えた秀秋はおいねの傍に進み手をとった。

「よくぞ、……よくぞ知らせてくれた。この秀秋、悪い夢から目が覚め申した」

大名の殿様から、かくも厚く礼を言われたおいねは恥ずかしそうに、でもとても誇らしげに見えた。

……これで佐和山のお殿様の御遺命を全うできる……

## その百三十七 おねねの政治

おいねから三成の遺志を伝えられた秀秋は、いったん京郊外の小早川の陣に戻った。

そのまま三本木に泊まることも出来たが、隠居屋敷はすでに徳川の監視下に置かれた気配があり無用の長居は避けるべきと判断した。

秀秋は陣屋に戻るや否や幾日か振りで深い眠りに落ちた。

翌日、もう一度ふらっと立ち寄ったかのような素振りです本木の門をくぐった。

おねねは秀秋の叔母であり育ての親でもあるので、度々訪れることに何の問題もありはしない。

秀秋は昨日までの焦燥しきった表情が嘘かおのように元気を取り戻していた。

玄関からではなく、こっそり中庭から顔を見せて、おねねとおいねを驚かせようとした秀秋が目にしたのは、庭の片隅の石ころに花を手向けるおねねと同年代と思しき女の後ろ姿だった。

秀秋はその後姿の主にぴんと来た。

・・・ 大谷殿の母御 ・・・

関ヶ原で自刃して果てた大谷吉継の母、東ひがし殿局は久しく北政所の次

女をつとめていた。

秀秋はさすがに吉継の母には顔向け出来ぬ心持ちであった。

秀秋がそつと玄関に戻ろうとすると、吉継の母が振り返って秀秋と目が合った。

秀秋はとてもまともには顔を合わせられず視線を下に落とした。

吉継の母は静々と秀秋に近づき秀秋のすぐ目の前に来ると深々と頭を下げた。

ようやくの思いで正面を向き直した秀秋に東殿は語りかけた。

「吉継のことはもうお気に病まないで下さいませ。

吉継は自らの強い意志で徳川様に立ち向かったのでございます。  
この母の意向も汲んで……………」

「東殿局……………」

「吉継と宇喜多殿に加え、自部少殿まで去ってしまわれる豊臣にとつては、貴方様が最後の守り手に御座います。

どうか何卒、北政所様のお力になって下さいませ」

吉継の母はそれだけ言うつと屋敷の裏手へ下がろうとした。

呆然と見送るかに見えた秀秋は、ふと何を思ったか東を呼び止めた。

「東殿局！……」

東は立ち止まって秀秋を振り返った。

目には今にも零れんばかりに涙が潤んでいた。

「少し、お話したきことが御座います . . . .」

秀秋に促されて二人は中庭を見渡す縁台に腰掛けた。

数ヶ月前に家康と北政所が同じように腰掛けて秀頼の父親について話した縁台である。

秀秋はきまり悪そうにはあるが、ぼつり、ぼつりと自分の知る大谷吉継の最期を語り出した。

「某が大谷殿と最後にお会いしたのは関ヶ原の前夜でありました。表向きは旗色不鮮明なまま東軍寄りを装う小早川を西軍へ誘い込むために訪れたことになっておりましたが、

実際は平岡、稲葉の両家老の心を金子きんすでくすぐっておき、

土壇場での某の西軍加担への豹変に対して反乱を起こさせないよう布石を打っておく策略に御座いました。

某の印象では平岡の心は五分五分にまで揺れ動いて見えました。

一方の稲葉は慚然とした表情を崩しませんでした。

片方だけでも切り崩せれば首尾は上々と踏んでおりましたが . . .

結果は御承知の通り . . . . 某の不甲斐無さで多くの人々の生き死にを変えてしまいました . . . .」

東の涙は乾いていた。

「吉継の最期を見たものは . . . .」

「おりませぬ、・・・」

ただ、藤堂の家中の者が大谷殿と一心同体の五助が、！」

秀秋が黙った。

「どうぞお続け下さい」

「・・・五助が、大谷殿と思しき御印みしるしを埋めたばかりのところを見咎めたと。

五助は己が首と引き換えに大谷殿の御印を埋めた場所を秘してくれと懇願して果て申したそうに御座います。

大谷殿の最期を見取ったのは、その五助であつたのだろうと・・・

「

東殿は先ほどまでとは違うさっぱりとした面持ちで、「秀秋様、吉継の最期をお話下さいましてありがとうございます。」

吉継は思い描いた通りの大戦おほいくさが差配できて満足してこの世を去っていったことと思えます。

たとえ結果は負け戦であろうとも。

あの者の念願ねんがんでございましたゆえ・・・」

そういい残して東殿は秀秋に礼を言って去っていった。

「秀秋殿・・・」

奥から今までの様子を覗いていたおねねが縁台に出てきた。

「刑部殿のことを・・・」

「はい、」

「よくぞ話してやってくれた、そなたも辛かるうに」

「いえ、某の辛さなど母御のお気持ちに比べれば……………」

「秀秋殿、少し話がある……………」

おねねは気持ちを切り替えて今後の方策について秀秋に知恵を授けようとしていた。

「秀秋、そなた秀頼のことをなんと呼んでおる」

「はあ、赤子の頃は、お捨すてと呼んでおりました」

「今は何と？」

「小早川を継いでからは遠国ゆえ、そうそう頻繁には会えなくなりました。

公式の席では、秀頼様と呼ぶように心掛けておりますが、たまに遊んでやる時には秀頼、秀頼と呼んでおります。

兄弟ですから、それが何か？」

「これからは公式の場でも秀頼と呼び捨てにいたすのじゃ」

「しかし、しばらく会っておりませぬし、お茶々様……………いや、淀の方の手前も御座いますれば何とぞ」

「お茶々には私から言い含めておく」

「はあ、しかし何故で御座いますか。また他の大名どもから、なんやかや言われまする」

「そうはならぬ、むしろ逆じゃ。

いきなり人前で呼び捨てにするのがおつくうならば他の大名どもに先駆けて大坂入りして、秀頼と遊んでまた仲ようなっておればよい」

「しかし秀頼を手懐けたぐらいでどうやって内府を追い詰められると言つのですか」

「ふふふ、そなたの太閤殿下はそれで天下を掠めたのだぞ . . . . わたくしとて、信長様の御威光をお借りして、ずいぶん秀吉をとっちめたものじゃ。

自分に御威光が足りずば他所から借りてくれば済む話じゃ」

「 . . . . . なるほど」、秀秋はおねねの助言に膝を打った。

「もし秀頼に会つのを且元あたりが邪魔立て致すようなら、北政所から淀の方へ直に手渡す書状を携えておると申せ」

「片桐且元が . . . . .」

「左様、且元はすでに徳川の軍門に下つておると承知しておけ . . . . .」

「 . . . . .」

「今後の豊臣にとってそなたの存在は命綱じゃ。

忘れるな、そなたは秀頼の兄にして、今でも豊臣の第二位継承者なのだぞ」

「・・・しかと。石田殿の御遺志は承りました。  
もう某は大丈夫に御座います、北政所様」

秀秋は昨日訪れたときは明らかに違う力強い足取りで、家康を出し抜くべく大坂城へ向かうのであった。

## その百三十八 三人の客

秀秋が大坂へ立った翌日、おねねの屋敷の周りを物々しく三種の旗印が取り囲んだ。

黒地に縦の白い波線が入った福島正則と、白地の上半分に黒い横三本戦の浅野幸長、それに黒地の中央を白抜きにした黒田長政の旗印であつた。

周囲の隣人達は本能寺の再現ではと慌てふためいた。

屋敷の玄関先に三人が並び立った。

「御免！」

おねねの義理の甥の幸長よしながが奥に声を掛けた。

外の騒がしさから屋敷内でも客が来たことぐらい判りそうなものだが出迎えはなかつた。

「北政所様おつか」

今度は正則が大声でおねねを呼んだ。

ようやく次女が出てきて板の間の暗がりくらがりに手を付いた。

「北政所様は中庭の方でお待ちでございます . . . .」

そういつて顔を上げた次女を見た三人は息を呑んだ。

「これは、いったい、おかさまが若返った」

「昔の叔母上だ！」

「・・・・・・・・」

そのとき三人の背後でおねねの声が出た。

「むかしむかしで悪うござったな、いまはほれ、この通りの肥えたばあさんじゃ」

三人は玄関先の次女と後ろのおねねを代わる代わるに見比べた。

「ほれ、説明は向こうにいつてからじゃ。茶を用意してある」

おねねは三人の武將を従えて玄関の外から中庭に回った。

中庭にはいくつが縁台がしつらえてあり三人は並んでその縁台の客となった。

「内密の話は野点で語るのが一番安心じゃ、屋根裏も床下も御座らぬからな」

おねねは日傘のある広めの縁台に上がり茶を立てておいねに配らせた。

おいねは茶を差し出しながら穴の開くほど見つめる正則に聞いた。

「そんなにおねね様のお若い頃に似ておりましたか？」

正則にはなぜか大名という気兼ねが感じられなかった。

「おお、そっくりじゃ。惚れてしもつた、嫁に来てくれ」

正則がいきなり求婚すると。

「おぬしにはもうおっかない嫁がおろう」

長政がたしなめた。

おねねが、「残念でござつたな、もう奥方であるそうじゃ」

「何と、何処の家中の者だ。決闘だ、そ奴と決闘してでも嫁に貰い受けるぞ！」

「これこれ正則、いい加減にしいや。おいねが真に受けて怯えてしまつではないか」

「某は至つて本気である・・・」

正則が余りに上手におどけたので皆笑い出した。

「ふっふふ」

「はははははは」

「がははははは」

「ほっほほほほ」

久しぶりにこの家に笑い声が響いた。

「さて、殿様が三人も首を揃えて今日は何用かな」、正則におねねが尋ねると。

「わしらはこれより大坂城の受け取りに行かねばならぬのだが、内府殿が寄り道をして北政所様のご機嫌伺いに立ち寄れと勧めて下さったので、こつやつてまかり越した次第に御座る」

「家康殿が・・・」

「かなりしつこく勧められ申した」、と幸長が続けた。

「会津に行くときには誰も立ち寄らなかつたくせにな・・・」  
、おねねは不満げであった。

「そなたたちはわたくしの意向も聞かずに徳川殿に付き従ったのである」

「あの時点では北政所様を政争に巻き込むべきでは無いと判断したからに御座います」

長政が堅苦しく言い訳した。

「家康殿は何故そなたたちをここへ寄越したと思う」

正則と幸長は顔を見合わせた。

「我らが豊臣に繋がる者であるからに御座いましょう」

「大津城で行われた三成の詮議にも途中から我ら両名だけが同席を  
請われ申した」

「詮議の場では何が話し合われておった」

「我らは最後のほうにちよこつと顔を出しただけで御座つたのでな  
んとも、ただ内府が三成に対して輝元殿を売れば助命して大名にも  
取り立てると・・・」

「ふざけた話じゃ」

「如何にも。はじめから三成が受けるはずも無い条件を突きつけた  
としか思えませぬ」

「しかし助命を申し出た事実は事実。」

そなたたちからわたしの耳にも入るであろうとの狙いであろう。  
小ばかにされた三成は余りに哀れ。

正則、そなたは今でも三成が憎いか？」

「・・・」

「昔は、そなたも清正もあんなに佐吉と仲が良かったではないか」

「・・・、三成は一つだけ内府に認めさせたことが御座いま  
した。」

秀頼様は正真正銘太閤殿下の御嫡流であると。

内府の方は腹の底からは信じておらぬ様子でしたが」

「さすがは佐吉、蜂の一刺しよのう。

家康殿の嘘を覆しよったか・・・

家康殿もおいそれと秀頼を粗末に出来なくなつたであらう。

しかしそれはな、危ない賭けでもあるのじゃぞ。

いや、秀頼の血筋を疑うてゆつておるのではない。

ただ、今となつてはむしる曖昧のまますておいた方が良かったやも知れぬ。

後々災いと呼び込むこととならば良いのだが・・・」

「秀頼様が殿下のお子では都合が悪いことでも・・・」「、正則が怪訝な顔で聞いた。

おねねは黒田官兵衛の長男の長政が気になった。

「黒田殿はどう思われる」

「某は治部少殿とは大津の門前で一言二言交わしたただけでありますれば、詮議の様子は正則殿から聞き及んだだけで御座います。

しかし、内府はどのような条件でも治部少を生かしておくはずは無かるうと思ひます。

佐和山の惨たらしい一件とも合わせ見て、関ヶ原の全ての責任を三成に押し付け徳川に逆らつたものがどのような末路を辿るのか、見せしめにいたすつもりでありますよ」

「さすがは官兵衛殿の御子息であられる」

・・・ 父親からは何も聞いておらぬか・・・

「かつて家康殿の御人徳に心酔し、豊臣政権内の権勢を内府殿に集中させようと協力してきたそなた達もやつと目が覚めたであらう。

徳川は天下を欲してゐる。

今わたくしが北条政子よろしく豊臣の敵、徳川を討てと命じたらそなたらは如何いたす」

「討ちまする」

「是非に」

「・・・・・・」

「宇喜多、小西、大谷、三成ら同門同士で死闘を演じたそなたらにもはやもう一勝負する余力は残されてはおるまい」

「それこそが内府の狙いであつたと・・・・・・」、正則が答えた。

「左様。」

しかし、関ヶ原の前にそなたらに大谷や三成に味方して徳川を討てと命じたとしてもどうじゃ・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「思いとどまられるよう、お引止め申したでしょう・・・・・・」

「覆水盆に返らず・・・・・・今は今なりの策を考えてゆかねばなるまい」

おねねは自分自身も子飼いの武将達の手綱を緩めすぎたことを悔いていた。

## その百三十九 苦難の道

「今後そなたたちを待ち受ける道は苦難に満ち溢れたものとなるう。そなたらが見習わなくてはならぬのは家康殿のこれまでの我慢強さであろう。」

思えば本能寺で信長公<sup>おやかたさま</sup>がお亡くなりになってより実に十八年、家康殿は天下に手が届くのを一日千秋の思いで待っていたのだらう。でなくば、病に倒れたとはいえ秀吉がまだ存命のうちからそなたたちの取り込みに走りはしまい。だがな、家康殿に戦を仕掛けてもけっして勝ち目は無いと思ひ知れ。関ヶ原をつぶさに見たそなたたちなら分かるであらう。

天武の才の大谷刑部が如何に戦略を用いても家康殿の政略には勝てなんだ。

そなたらが束になって掛かろうとも結果は同じ、いやそれにすら及ばずまい。

何しろ徳川二百五十万石はまったくの無傷で残ったのだ。

戦後処理で彼我の力の差は更に広がるであらう。

そなたたちは闘志を衣の下に隠して、家康殿に媚び、へつらい、手足となつて働き不興を買わないように生き延びるのじゃ。

それは潔く散るよりもつらきことであらう」

おねねの言葉を三人の武将達は心に刻んだ。

「さて、これより内府殿と互角に渡り合つてゆくには官兵衛殿のお知恵が必要と思つておる」

それは大津城の門前で三成が長政に託したことでもある。

「長政殿、おねねが官兵衛殿にくれぐれもお力添えをと申しておつ

たとお伝え下され」

そういつておねねは長政の左手をきつく握りしめた。

長政の心情は複雑であつた。

つい最近、やはりこうやって左手をきつく握りしめられたばかりであつた。

関ヶ原の功を労う家康本人から . . . .

すると何を思つたのかおねねの脇に控えていたおいねも長政の空いている右手にすが縋り付いて握りしめてきた。

美しい顔立ちとは不釣合いなごつごつとしたママだらけの手の平がしっかりと長政の心までも捉えた。

. . . . どうか、佐和山のお殿様の御遺志を . . . .

これには長政も参つた。

このけつして情には流されない男の心の中にむくむくと熱いものが湧き上がった。

長政が真剣な目で見返すと、おいねはぱつと手をはなした。

「も、申し訳ございません。お殿様に . . . . 「あとは言葉にならなかつた。

それを見ていた正則も両の手を差し出してきた。

「ずるいぞ、長政。其の方だけいい思いをしおって」

「おほほほほほ、正則や。ほんとは両方ともおいねににぎってもらいたいのであるっ」

「あいや、こちらはおかか様専用でございます」

おねねとおいねは正則、幸長と順にその手を握って頼んだ。

やがて三本木を後にした三人は馬を並べて大坂を目指した。

時間とともに高揚感が薄れてくると三者三様に事の重大さに身が引き締まった。

…… 徳川との十年戦争、いや二十年戦争か ……

…… 内府め、いったいあと何年生きるつもりだ ……

…… 父上にもあの娘を引き会わせたいものだ、さぞかし驚き、  
もしかすると ……

## その百四十 家康再訪

「お久しゅう御座います北政所様、お目にかかるのは正月以来でございませうかな。」

こうやってまたお会い出来て恐悦に存じます」

家康は慇懃なまでにへりくだっておねねに挨拶した。

「わたくしもこうして内府殿にお目に掛かれてうれしゅうございませう」

やれやれ、どちらも腹の芸にかけては東西の横綱級同士といったところである。

「さて、某はこれより大坂城を貰い受けに行かねばならぬ身にて単刀直入に申しますが失礼の段、何卒お許し下され」

「腹の探り合いはお互いに時間の無駄に御座りましょう。お互い長い付き合いに御座いますれば四角張らずに率直なところをお話下さいませ」

「さすがは北政所様、話が早い。」

さて此度、関ヶ原で大戦が行われたわけで御座るが、いくつか合点のいかぬ点が御座いますな、ここは西の丸を出られたとはいえ情報通の北政所様にお伺い致さば家康の疑問も解けるかと思ひ、まかり越した次第」

「おんなのわたくしに戦向きの話がどこまで分かりますかどうか

・ ・ ・  
「

「あいや昨今の戦はかつてのように領主同士が角突合せ領地を奪い合うような牧歌的なものでは御座い申さん。

引き抜き、寝返り、買収などによる多数派工作と情報戦による政治力が勝負を分けるようになり申した。

さすれば北政所様とてこれはもう立派な武將に御座います」

「やれやれ随分と買いかぶられたものじゃ」

「関ヶ原で我らを勝利に導いたのは北政所様の甥子である小早川秀秋殿がお味方下されたお陰。

しかしその小早川には妙なところも御座った。

関ヶ原を見下ろす松尾山に置かれた小早川の陣には徳川から奥平と申す軍監を差し向けており申した。

ところがその者は戦の後に平野部の激戦地で遺骸で見つかり申した。小早川に言わせれば奥平は自ら一軍を率いて激戦地に飛び込んで行ったとのことであるが、軍監の職務は参謀であり指揮官では御座らぬ。

奥平ほどの歴戦の武將がその程度のことをわきまえておらぬはずがない　・ ・ ・ ・

わしは本当のところ小早川は土壇場まで一枚岩では無かったのではないかと見ております。

果たして東軍と決めたのは誰で、抵抗したのは誰であったのか　・ ・ ・

まあ、このようなことを北政所様に問うても見当違いに御座いますかな　・ ・ ・ ・

「さすがに家康はおねねに対しての攻め所を狙いすましてきた。

このときすでに家康により、京都所司代に件の奥平の甥子にあたる奥平家の当主、信昌が任じられておりおねねもそれを承知しているはずであった。

「秀秋とは昔から反りが合わずたくしの所へなどまったく寄り付かぬのでございます」

おねねはすぐに嘘と知れる言い訳をして、否定とも肯定とも取れるよう曖昧に答えた。

「さらに関ヶ原の後、大津城での顛末を聞くに及びこの家康、大いに肝を冷やしまして御座いますぞ。」

孤立無援で大津城に籠もった京極高次殿を一刻も早く降伏させるべく、北政所様が奔走されたそうに御座いますな。

あと一日でも大津の開城が早くば関ヶ原の行方もどうなっていたか予断を許さぬ事態となっていたことでありましょう」

「何とでも解釈されるがよろしかろう。何なら三成と二人並んで首を討たれてもわたくしは一向に構いませぬぞ」

逆にここまで開き直られると家康には打つ手が無かった。

そんなこと家康が出来ようはずも無いことは、おねねも先刻承知である。

「いやはや参りましたな。某は政所様と決裂するために来たのでは御座いませぬ。」

某は二度と天下を割つての争いが起こらないような方策を話し合いにまかり越したので御座いますれば」

「何ゆえ内府殿は、三成一人に拳兵の責任を押し付けて首を切ろうとなさるのでありますか。」

そもそも西軍の成り立ちは宇喜多殿が先ず兵を挙げ、大谷刑部が三成を誘い込み、お飾りの総大将に毛利中納言殿を担いだのが事の真相。

三成を首謀者に仕立て上げて全ての責任を負わすは如何にも乱暴ではありませぬか」

家康とおねねの話し合いは平行線をたどりなかなか進展する様子が見えなかった。

二人の会話が途切れたとき、次女が一人障子の向こうに手を付き、茶の替えを持参した旨を述べた・・・

その百四十一 条件交渉

「茶の替えをお持ちいたしました。 . . . 」

そういつて家康の前に新しい茶を差し出したのはおいねであった。

おいねの顔を見た家康は一瞬何がどうなっているのか判らなかつた。

そこにいるのは若かりし頃の木下藤吉朗が妻おねねの生き写しであった。

一言も発せられぬ家康を残しておいねはついと下がっていった。

我に返つた家康は、「 . . . . 今の娘は? 」と聞くのがやつとであつた。

おねねは悪戯つぽく笑いながら、「さあ、何でしょうか . . . .  
「、とはぐらかした。

. . . . 娘にして若すぎる . . . . だいち、北政所は子を  
産んでおらぬはず . . . . 浅野、いや木下の家の縁者か。

家康には見当がつかなかつた。

北政所があのおねにわざわざ茶を持ってこされたのには何がしかの意  
図があるはず。

家康は気になってそわそわしだした。

家康を散々じらしてから、おねねはおいねについて語った。

「あの娘は長浜の近郷に暮らす縁者の者に御座いますれば、今は武家の行儀見習いにわたくしが預かっておりまする」

「正月にまかり越しましたときにはおりませなんだな」

「はい、ほんの四、五日前からありますれば……………」

「ほう、四、五日……………」

……………あの娘だ！……………

……………三成が北政所に遺志を託した人物とは、あの娘に違いない。

北政所の親戚筋では迂闊に手が出せぬではないか。それに今更何をしても手遅れ。

もはや三成と北政所は情報を全て共有しておる……………

「ふ……………」と家康は大きくため息をついた。

「北政所様、腹の探りあいはいはこれぐらいにして条件交渉と参りましよう」

「はい」

「三成を助命する替わりに御願いの儀が御座い申す。

北政所様は西の丸をこの家康に譲り渡していただき、御髪あぐしを下ろして仏門入りしてくださらぬか」

この条件で家康が失うものは何も無かった。

三成は佐渡か隠岐にでも流しておいてから頃合を見て病死びやくしでもさせれば良い。

「三成の助命など誰が望みましたか？」

「何と、では政所様は何がお望みか。これに及んで徳川は一步も引き申さぬぞ」

家康が気色ばんだ。

「どうぞ、何なりと。ただし、秀頼に千姫を申し受けたく存じまする。

わたくしの条件はただそれ一点のみにございます」

「……」、家康は黙り込んだ。

千姫は家康の初孫にして最愛の孫娘である。

目の中に入れても痛くないとはかくのごとくかと思えるほどの可愛がりようだった。

「千姫はまだ四歳に御座りますぞ」

「構いませぬ、豊臣で責任を持って御養育いたしまする」

「しかし・・・」

「家康殿、わたくしは三成とは違い、豊臣が政権の座に居座り続けることには拘こたわっておりませぬ。

ただ豊臣が名誉を保ちながら幾久しく続いてくれればそれでよい。

千姫はそのための徳川と豊臣を結ぶ強い絆となりましょう」

おねねは体裁よく”絆”という言葉を使ったが要は人質である。

いずれ秀頼と千姫の間に子が授かれれば、もはや豊臣と徳川は抜き差しならぬ縁戚関係となるう。

家康はおねねの想定外の条件提示に困惑した。

・・・三成め・・・

家康は折れる覚悟を決めた。

「それが、仏門入りの譲れぬ条件とあらば・・・」

それで北政所が北条政子とならずば安いものと思わねばならぬ。

しかし、千姫の輿入れは徳川にとって思った以上に高くつくことになるのだった・・・

## その百四十二 聞かざる

毛利輝元が退去した西の丸には、日を置かずすぐさま家康が入り、関ヶ原の戦後処理にあたった。

筆頭大老から単独執権の座に昇格した家康が先ず手がけるのは論功行賞である。

この時期、本多正信は日夜付きつ切りで家康を補佐した。

徳川にとって、今後数日間には正に正念場である。

関ヶ原でのようなへまは今度こそ避けなくてはならない。

「上様、そろそろ秀頼様と淀の方への戦勝報告会の刻限で御座いますれば……………」

「分かっておる」

家康は機嫌が悪かった。

おねねとの取引で最愛の孫娘の千姫を豊臣に輿入れさせる密約を交わしたことで、関ヶ原で自軍の消耗を避けるべく借り物部隊で勝利したのはいいが、外様への加増が嵩むこととなり、生来がけちな家康は褒美を出すのが勿体無くてしやうがなかった。

……………輝元めは難癖を付けて所領を取り上げれば良いにしても、吉川と小早川は加増せぬわけにはいくまい……………

清正、正則、幸長、長政、高虎、高次、高知、一豊、嘉明、皆北政所には頭の上からぬ者ばかり加増せねばならぬ・・・

一番手柄はやはり正則ということか・・・ふんっ！

家康は仏頂面のまま会見の会場となる本丸広間への廊下を突き進んだ。

「上様、もちつとご面相を愛想よくお作り頂かぬと、まるで喧嘩を売りに行くようで御座いまする」

「・・・・・・・・」

途中、玄關側から登城してきた藤堂高虎と鉢合わせた。

家康は仏頂面から満面の笑みに豹変した。

「これはこれは高虎殿、その節のお働き、この家康きちーんと報いさせてもらいますぞ」

家康は心にも無い言葉をかけた。

高虎は一礼すると更に家康に擦り寄って、「内府殿、関ヶ原の首謀者は実は三成ではなく大谷刑部で御座ったこと、ご承知でありましようか？」と囁いた。

家康の顔が一瞬で険しくなった。

「何故そうだと・・・・・・・・」

「五助が死の間際に白状いたしておりました」

「……高虎殿、そのことをたれぞに？」

「いえ、まずは内府殿にと……」

「悪いようにはいたさぬゆえ、そのこと他言無用に願いたい……」

「……承知いたしました。藤堂家からは一切漏らしませぬ」  
安堵した家康に高虎が念押しした。

「今後、藤堂は譜代も同様に内府殿の手となり足となり徳川をお支えする覚悟にございます」

「お心遣い痛み入る……」、家康はしぶしぶ高虎の申し出を受け入れた。

こののち、藤堂家により大谷刑部少輔吉継の墓が関ヶ原に立てられるのだが、けっして善意で立てられたわけではない。

関ヶ原の真相を藤堂家が握っていることを、末代まで徳川幕府に知らしめておくためである。

藤堂家は外様でありながらこれより二百六十六年後の第二次長州征伐に至るまで、譜代の伊井家と並んで徳川の先鋒を約束されることとなる。

天下を目指す者あれば、その果実の分け前にありつこうと擦り寄る者あり、今も昔も権力は腐敗の難から逃れられない定めである。

## その百四十三 淀の方

大坂城本丸奥御殿の謁見の間には、すでに家康を除く全ての東軍大名達が刻限通りに参上していた。

通常、年頭の挨拶のような大勢の大名が一同に会する公式行事の場合には、参加者はいったんいくつかの控えの間に事前に集められてから先導者に導かれて本会議場である謁見の間に案内されるのが恒例である。

今回は通常の公式行事以上にナーバスな対面であるにも関わらず、控えの間は用意されず三々五々と登城してきた大名達はいきなり謁見の間に通されたことに面食らっていた。

おそらくいつものように控えの間を社交場として開放してしまうと大名達の間で様々な情報が交換されたり、良からぬ噂が流布することを家康が警戒したためであろう。

堅苦しく長いあいだ待たされる方は、たまったものではなかったが誰一人文句を言うものはいなかった。

一段高い上席から、かなりあいだを空けて、前列には石高順に小早川秀秋、筒井定次、福島正則、細川忠興、黒田長政、浅野幸長、蜂須賀至鎮、藤堂高虎らが。

二列目には、吉川広家、池田輝政、田中吉政、松平忠吉、井伊直政、本多忠勝、山内一豊、脇坂安治らが。

最後列にはその他の小大名と関ヶ原に遅参した徳川秀忠、そして陪

臣ながら本多正信が列席していた。

朽木、赤座、小川ら土壇場での寝返り組みは東軍とは見做されず、哀れな末路を辿ることとなる。

大名達は等間隔に座して、秀頼のお出ましを今か今かと待ちかねていた。

上段と前列との間がかなり開いてしまっているのは、そこに座るべき主がいまだ到着していないからであった。

前列の中ほどにすでに着座した正則は、家康がわざと秀頼より後から入室してくるのではないかと疑っていた。

……秀頼様を蔑ろにするようなら、内府の本心も丸見えとなるろう……

やがて上段に、主君のお出ましに先立ち、大柄な太刀持ちの小姓が現れ、まもなく主もお出ましになる気配となった。

この席の進行を務める片桐且元のところには小役人が入れ替わり立ち代り寄り集まり家康の不在と秀頼のお出ましを諂りかねていた。

その様子を真近に見る正則は、

……淀の方の御気性なら、内府が間に合おうが間に合わなからうがお出ましあそばすであろう。さすれば早くも決裂決定か……と、先行きを案じた。

他の者もいきなりの緊迫した状況を察した様子であった。

皆の緊張が極限までに高まったとき、正則の前をさっと黒い人影が過ぎり最前列に着座した。

でっぷりとした体型に似合わず、機敏な動作で現れた人影の主は家康だった。

皆がほっとしたそのとき、お茶々とまだ幼き主君が上段に現れた。

間一髪であった。

……内府め、わざとか？ ……

平伏して迎えた面々の頭上を茶々の凜と通る声が響いた。

「皆の者大儀、……面を上げられよ」

上段に出ました淀の方は遠くのほうから皆の顔ぶれをゆっくり見回し最後に最前列に唯一人座す徳川内大臣家康に目を留めた。

その目には怒りも恐れも憎しみも帯びておらず泰然としていて不気味ですらあった。

……太閤殿下の御寵愛を膏に、わがまま放題のお姫様かと思っておったが、いつの間にかどうしてどうして、たいした貫禄では御座らぬか ……

正則は居並ぶ大名たちも皆そのような印象を淀の方に抱いたである

うと思った。

……これは結構期待できるかも知れぬ……

お茶々の横には八歳の秀頼が伏目がちに、姿勢良く座していた。

これがあのちんちくりんの太閤の子だとは俄かに信じられないほど、すらりとした面長の美少年に成長していた。

……母方似には違いなかるうが、なんとも太閤おやせ殿下の面影の微塵も御座らぬな。内府にはさぞかし好都合であつたらう……

司会の且元が緊張をほぐすためかひとつ咳払いをして、いよいよ戦勝報告が始まるうとしていた

## その百四十四 戦勝報告

「これより、めでたくも賊軍を打ち破りし徳川内大臣殿より、戦勝の御報告を賜りとう御座いまする」

すっかり豊臣の家老然とした片桐且元が重々しい口調で家康を指名した。

悠然と顔を上げた家康は敵意をひた隠した満面の笑みであった。

「秀頼様、御母堂様。またこうして御前に参上仕り、しかも戦勝の御報告が出来ます事、この徳川家康、心より恐悦至極と存知奉りまする。」

今よりふた月も前に、秀頼様の御命により、勅命をも携えて、会津に上杉を討伐に出立いたしたときには、よもやこのような仕儀となろうとは夢にも思わぬ、東国遠征にございました。

紆余曲折は御座い申したが、今こうして豊臣に巢食う、獅子身中の虫を一掃し、大坂城に凱旋できましたことは、これひとえに、秀頼様の御威光の賜物であると心得まする。

これからも幾久しく豊臣家の御繁栄と天下に泰平が続きますよう、家康、ならびにここに集いし領主たちの名にかけて、身骨細粉、御奉公させて頂く覚悟に御座いまする」

野心のかけらも仄めかさなない、模範解答のような文言がちりばめられた家康の口上であった。

且元が目でお茶々に家康への労いの言葉を求めた。

ふたたびお茶々の凜とした良く通る声が広い謁見の間を満たしてい

った。

「徳川家康殿、ならびに徳川殿に御味方下された諸侯の方々に、秀頼に代わって厚く御礼いたしまする。

長きに渡る行軍の果てに、袂を分かつたとはいえ、かつての友や同僚と合い争わねばならなかったことは、筆舌に尽くしがたき苦行であつたらうと、お察しいたしまする。

泰平の大坂城に暮らす我ら母子には、およそ計り難き辛苦をくぐり抜けてこられたそなたたちに、わたくしは、かける言葉すら見つかりませぬ。

太閤殿下が築かれし、天下泰平の世に、僅か二年を待たず、綻びが生じたことはまっこと不幸なことなれど、今こうして諸侯が再び結束して、この日の本に唯一絶対の豊臣政権を奉じ、諸国一丸となつて国家を再建されんことを、秀頼の母として願うのみでございます」

「はっ、はーーーー」

「おーーーー」

「はーーーー」

武將達が心の襷ひだに負った、深い悲しみの傷を癒すようなお茶々の謝辞が、無骨者たちの魂を揺さぶった。

今にも”千秋万歳”の斉唱でも始まるのではないかと思える晴れやかな空気である。

感極まって落涙したのは、家康の密命により、佐和山に三成の一族を葬った田中吉政であつた。

嘘と建前で塗り固めた家康の口上など、もう誰も覚えてはおるまい。感極まる諸将達の中で、家康、秀忠、直政、忠勝、正信らだけが固い表情のままうつむいていた。

それは上段のお茶々からよく覗えた。

第一ラウンドは完全にお茶々の勝ちである。

## その百四十五 初陣

初手からお茶々に美味しいところを持つていかれた家康は苦々しい  
思いを表に出さないのが精いっぱいであった。

・・・ さすがは信長公の末娘、盆暗揃いの兄達よりよほど天下  
人の器よ。さては織田家は女の方に才覚が強く現れるのか・・・  
家康は早く舞い上がった空気を元に戻すべく、且元に議事進行を進  
めるように目で催促した。

「うおっほん」

場の空気を切り替えるべく且元がまた一つ咳払いをして議事を進め  
た。

「それではこれより、秀頼様から諸将への戦勝祝いの目録を読み上  
げます。・・・」

人間どのようなすばらしい言葉より金品の方が嬉しい。

且元は見事に座の空気を現実に引き戻した。

大蔵方の役人の、ずらずらと続く目録の朗読が延々と続けられた  
退屈し始めたのであろうか秀頼が前列の秀秋の方を気にし始めた。

横や後ろの大名達からは、退屈で飽きてきた秀頼が義兄の秀秋と早  
く遊びたくてうずうずしているように覗えた。

・・・ そう云えば、つい十二、三年前までは、我ら皆、秀頼様  
ぐらいの秀秋殿を太閤殿下の後継者と崇めておったものよ・・・

・・・ あのままであれば・・・

ようやく事務方による目録の読み上げが終わると、且元は各将に対  
して、

「さて本日より、徳川内大臣殿が西の丸で再び起居される運びとな  
り、秀頼君の後見人として政務全般を取り仕切ることとなりました  
ことを皆様に御報告致しまする」

と締めくくった。

これで仕舞いのはずであった。

一応の建前上、且元が首座のお茶々に他に何かお言葉は御座りまし  
ょうやと仰いだ。

お茶々は、「特に・・・」、「と小さくかぶりを振った。

これが合図であった。

それまで、お茶々の横で大人しく座っていた秀頼が急に立ち上がった。

その百四十六 三すくみ

「とくがわいえやす」

立ち上がった秀頼は前列の真ん中にでんと座る家康を呼び捨てにした。

座に居合わせた者達は一瞬ぎよつとしたが、何しろ相手はまだ八歳の腕白盛りであり、この場の全員の主君である。

「はっ、はー」

家康はすぐに冷静さを取り戻して殊更大仰にへりくだって見せた。

「いえやす、そのほうがほしいものはなんじゃ？」

平伏したままの家康から一瞬怒気が発せられた。

顔を上げた家康は、しかし満面の笑みであった。

「この家康、豊臣家と秀頼様の御安寧こそがただ一つの願いに御座いますれば褒美は要りませぬ」

秀頼は家康の小難しい言葉にきよとんとした。

その滑稽な様子を周りの大名達もほほえましく見守った。

しかし、ほっとしたのも束の間、秀頼の次の言葉に全員が凍りついた。

「なんだ、てんかがほしいのではないのか？ほしければさしあげろぞ」

さすがに家康の頬がひくついた。

隣のお茶々は、たしなめる素振りも無く泰然としたまま家康を見つめていた。

もはやこれ以上は子供とて洒落ではすまされなくなったその時。

「はっはっはっはっはっ、秀頼！

ひとかどの武将たるもの、天下を目指すは当たり前ぞ。

そのあたりで徳川殿を勘弁してさしあげろ」

秀頼を赤子の頃から見知っていた義理の兄の小早川秀秋が家康に助け舟を出した。

秀頼は兄の言葉に素直に従い座り直した。

居合わせた誰もが秀秋に救われた思いがした。

……今の一言は小早川にとって大きい……

家康のすぐ後ろで一部始終を見ていた正則はそう思った。

会見が終わると家康は正信らを従えてすぐに西の丸に引き返した。

次は自分が諸大名達からの戦勝の挨拶を受ける番であった。

廊下の途中で正信に、「小早川の小倅に助け舟を出されるとはわしもやきがまわったわ」と吐き捨てた。

家康は年端も行かぬ秀頼にこけにされたことに怒りが収まらない様子だった。

「幼い秀頼が自分であるような事を申す訳がない。全てあの女の差し金に違いあるまい。忌々しきは織田の娘よ……」

「もし、上様があそこで本性剥き出しでお怒りになられてしまわれたらと、肝を冷やしました。

小早川には大きな借りができましたな。

秀頼様を呼び捨てでたしなめられるのは、淀の方と秀秋殿において他には御座いませぬからな」

「ふんつ、まるで三すくみではないか、馬鹿にしくさって」

「ははは、上様も面白いことを申されますな。確かに三すくみで御座います。

秀頼様は義兄である秀秋殿に従順で、その小早川の命運は上様が握り、上様はいまだ秀頼様には臣下の礼を尽くさねばならぬ……

「笑い事ではないぞ」

正信はまだ笑いを堪えていた。

「上様、最近些か忍耐力が失せたようにお見受けいたしますが、お年のせいで御座いますかな」

「我慢ならずーとしてきたであろう。信長公にも、太閤殿下にも。そろそろ天下を頂戴しても誰も文句は無かるう」

「如何にも、しかし最後の仕上げが肝要に御座いますれば、論考行賞が終わるまでは何卒ご辛抱を・・・」

「正信、戦後処理にけりが付いたら大坂城を出るぞ」

「はて、何処へいかれますか」

「伏見の修繕を急がせよ」

「すでに取り掛かせております」

「ふんっ。さすがは其の方じゃ・・・もう一つ」

「はっ？」

「・・・三成を始末いたせ」

「！、唐突で御座いますな」

「あの女への当て付けよ。今の世でわしに楯突くとどうなるか判ら  
せるには、すぐでなければならぬ」

「三本木の方は . . . . .」

「構わぬ」

「 . . . . . 御意に」

三成の処刑は月が変わってすぐの十月一日と決まった。

沙汰はすぐに三成らを預かる京都所司代に伝えられた。

## その百四十七 西の丸

「貴様、あの時にもし内府が逆上しておっいたら何とした・・・」

西の丸御殿に向かう長い渡り廊下の途中、前後に人影が無いのを見てから長政が正則に質した。

「知れたこと、秀頼様の太刀を拝借してあの場で内府を上意討ちに出来たわ」

「わしはあの太刀持ち小姓自身、かなりの使い手だと見ておった。内府もあれでかなりの使い手であるらしいからな。

そのときには後ろから内府の自由を奪うのが、語られずとも貴様の役目であつたのだろう。

徳川の連中とて文句の付けようがあるまい。

まあ、あの老獪な内府がそのような挑発にまんまと乗るようなへまをすることも思えぬが。

小早川に貸しを作らせるのが精々であろう」

「・・・なるほど」

「それにしても淀の方の変わられようには驚いたな」

「如何にも、女の身で、しかも年若であるにも関わらず、内府に格で勝つておつた」

「織田のお市様のお血筋であるうか？」

「おぬし、お市様とは？」

「面識など有ろうはずも無い。こちらら駆け出しで、あちらは雲の上のお方であらせられた」

「さもあろう。浅井への興し入れ以降は、めったに人前には出てこられぬまま北の庄城と共に・・・」

「我が父の申すところでは、三姉妹の中でも飛び抜けて淀の方がお市様と生き写しであるらしい」

「お姿だけでなく、その才覚も強く受け継がれたということか」

「ここにきて徳川も慎重になってきておる、論考には内府といえども頭を悩ませることであろう」

「ふむふむ・・・」

「貴様も古巣の清洲にはよもや残れまい。

そうかと言って四国、九州にこれ以上豊臣方の大名を集結させることも好まぬであろうから、宇喜多か毛利の旧領あたりが順当か・・・」

「毛利？。輝元殿が改易されるとても」

「・・・」

「おい、長政！」

「いずれにしても転封の沙汰が何処であっても一切不平不満など漏

らしてはならぬ。良いな」

「分かつておる、ひたすら・・・忍・・・である」

「左様。我らは内府より長生きをしさえすれば良い」

そこに幸長が口を挟んで来た。

「秀頼様より内府の方が長く生きられようはずが御座りませぬからな」

## その百四十八 歴史からの抹殺

三成は家康の一存で十月一日に処刑されることと決まり、三成と同時期に京都市中で捕縛されていた小西行長、安国寺惠慶らも同日処刑される運びとなった。

捕縛から僅か十日足らずで処刑に至らしめるのには、何か意図的なものを感じざるを得ない。

現代の刑事裁判では、たとえどのような凶悪事件の犯人であっても逮捕から死刑の執行までに三年は要する。

関ヶ原から百年後の赤穂浪士の吉良邸討ち入りの際にも、志士が幕府から切腹を命じられるまでには一月半を要している。

なぜ家康は三成らの処分をこれほどまでに急いだのであろう・・・

それは当事者が生きている限り人々の口に昇り、関心は消えず、下手をすると新事実が浮上してきたり、事の真相を語りだす者が現れるからではないだろうか。

とにかく当事者を抹殺してしまえば後の祭り、死人に口無し、死者に関心を持ち続けるものはいなくなる。

人は皆、過去を清算して前向きに生きようとするものである。

写真もDVDもGoogleも無かったこの時代、人々の記憶から特定の人物の記憶を消し去るのはそれほど難しいことではなかった

はずである。

秀吉は秀次を自身の秘密ごと抹殺するために秀次本人はもとより、妻子までも根絶やしにして聚楽第を更地にし、旧領の近江八幡城まで破却した。

家康もこののち三成の佐和山城を山肌ごと消し去り、謀臣の井伊直政に琵琶湖の湖畔に新城を普請させ地名も佐和山から彦根と改めさせ、直政にこの地を治めさせた。

家康の意向を受けて直政はことごとく三成の痕跡をし去った。

彦根藩は徳川幕府の二百六十年間、一貫して井伊家が統治した。

幕末、安政の大獄で名を馳せた幕府大老井伊直弼はもちろん井伊直政の子孫にあたる。

さて、事ここに及んでも、三成の真相探訪の欲求と豊臣の立場を少しでも有利にしておきたいとの願望には些かも衰えを知らなかった。

神の手の差配か運命の悪戯か、三成がその最後に出会う重要人物は、京都所司代に就任したばかりの、奥平信昌であった。

関ヶ原の敗因解明のために三成に残された時間は、残り僅かである

・・・

## その百四十九 所司代奥平信昌

「徳川内大臣家康様より、其の方ら全員に打ち首との御沙汰が下され申した」

三成らを預かる新任の京都所司代、奥平信昌は無機質な声で三成ら三人に沙汰を言い渡した。

小西行長は瞑目して己自身に滅び行く運命を言い聞かせ、恵慶は所司代の信昌が家康本人であるかの様に睨み付けた。

三成は、  
．．．．． まるで他人事であるかの様に無関心に聞いていた。

「治部少輔殿 ．．．． 大丈夫で御座るか」

声を掛けられた三成はふと我に振り返り信昌に問い掛けた。

「あいや、心配には及ばぬ。今、そこもとが所司代に任せられたのは如何なる理由によるところか思案しておったのでな」。

．．．． この男はたった今死罪を言い渡されたばかりであるのに、  
いったい何を考えておると云うのだ ．．．．

この徳川家臣団の中に於いて、特異な位置付けを占める奥平家の聡明なる当主は三成に強い関心を寄せずにはいらなかった。

「治部少殿には何か疑問な点がおありのご様子なので、それは後ほどごゆるりと相對させて頂くといたす。今はこれにて ．．．．」

夕餉はそれぞれに与えられた座敷で取ることが許された。

もちろん座敷牢とも呼べる厳重な監視下ではあるが。

特別豪華でも粗末でもないごく普通の食事が出された。

信昌の心ばかりの気遣いである。

特にすることはなし、後は休むばかりという場合に三成の座敷牢を所司代の信昌が尋ねた。

手には心尽くしの酒と肴らしき包みが・・・

「お待たせいたしました。不慣れな職務ゆえ何事も手間取ります。今宵はじっくりと治部殿のお相手させていただくつもりで参りました。

その後、お体の加減は如何でしょうや」

信昌は時間が幾ばくと残されてはいない三成の体を気遣った。

「お心遣い痛み入る」

「何の、実は某も治部殿にはお聞きしたきことが幾つか御座い申す。あいにく某は関ヶ原には居合わせておりませんでしたので・・・

「

「さては叔父上のことで御座いましょうや」

「如何にも」

「それではやはり奥平貞治殿は . . . .」

「某が秀忠様と共に大津に到着したときにはすでに茶毘に付されており申した。記録上はまだ存命とされながらも。」

そして、この件に関しては正純殿よりけっして蒸し返してはならぬと厳命されております。

すべて上意であると . . . .

関ヶ原の趨勢を左右したと云われる小早川の軍監を務めていた叔父上が謎の死を遂げたにも関わらずそれを詮索することすら許されぬのは疑問でございます。

東軍の諸大名に真相を聞いて回る訳にも行かず、ほとんど諦めかけておりました。

敵方なれど関ヶ原の当事者であられた治部殿であれば何かお見知りではなかるうかと . . . .」

信昌は初手から三成が答えにくい質問をぶつけてきた。

その百五十 予期せぬ差し入れ

「小早川の寝返りについては各方面からの誘い込みが交差し紆余曲折があつたのは確かでござろう。」

しかし、今後の豊臣にとつて小早川はもつとも頼るべき縁戚に御座いますれば、かの者に関わることはお答え出来かねる」

「治部殿の仰せまことにござつとも。」

どうやら小早川を巡る経緯は徳川にとつても治部殿にとつても触れてはならぬことのように御座いますな。

我ら奥平はそうしたことによくよく縁があるように御座る」

そうは云つても諦めた様子も無く、信昌は酒の肴らしい包みを解いた。

中から出てきたのは小魚の佃煮だった。

「う、賞味あれ」

三成は箸で一本つまんで口に運んだ。

すると懐かしい味が口中に広がり、香ばしい香りが鼻腔を刺激した。

「これは、……もしかや……」

「如何にも、北政所様の御手製で御座る……」

懐かしい味覚と嗅覚に刺激されて、三成の脳裏にあの懐かしい長浜での少年時代が蘇った。

若く美しいおおかか様が、利かん坊の正則が、気難しがり屋の清正がそこにあつた . . . .

「某の為にこれを . . . .」

「何、お役目で御座る。そなた方の御処分を目と鼻の先に居られる北政所様のお耳にお入れせぬ訳には行きませぬので」

「北政所様は何と」

「お言葉は何も . . . . ただ、後から姪御様と思しき娘御にこれを包ませて寄越しました」

「今、何と？」

「北政所様と面影の似た、若い娘だったのでつい姪御様かと？」

. . . . よくぞ . . . .

三成はその娘は間違いなくおいねであると確信した。

信昌は更に良い知らせを三成に漏らした

「おそらく治部殿の御懸念は失せましてございましょう。徳川の名誉に関わることなので表沙汰には致されておりませぬが、先の秀頼様、淀の方様への東軍諸将による戦勝報告の謁見に於きまして、小早川秀秋様が我が主の窮地をお助けなされた由。

これより家康様とて小早川のこと無碍には出来ませぬとのもっぱらの噂に御座います」

「…… 何と、秀秋殿がそこまで立ち直られたと……」

三成は小早川秀秋の回復の影に北政所とおいねの働きがあったであろうことを察した。

「信昌殿、どうやら小早川については、すでに内府殿も事の真相に気付いておりながら、己の謀略が表沙汰になるのを嫌って歴史の闇に葬り去ろうとされている様子。」

「そこもとを歴史の証人にふさわしい御仁と信じて、お話をさせていただきます。ただし、その前に……」

三成は一つ条件を出した。

「先ずお聞かせ願いたい。なぜ奥平が徳川の家臣団の中でも特異な立ち位置を占めるまでに至ったか、その訳を」

「…… けっして人に誇れるものでは御座いませぬゆえ、何卒ご勘弁を」

「信昌殿、某から他に漏れる心配は御座いますまい」

「……」

信昌は意を決した様子で三成に、奥平の暗い過去を語りはじめた。

## その百五十一 奥平貞能の陰謀

「そもそも奥平は鎌倉の頃よりの上州の小豪族にございました。上杉宗家に追われ新天地を求めて東三河の山奥に平和な土地を見つけて住み着いたそうにございます。

ところが平和と置いていたその土地は、支配者がころころと入れ替わる厄介な土地でございました。

はじめは今川家に臣従し、桶狭間の後は松平に、三方ヶ原の頃には武田にと、めまぐるしく仕える主君を変えながらどうにか生き延びておりました。

そんなちっばけな奥平が大きく躍進したのは天正三年の頃に御座います。

我が父、貞能さだよしは奥平が生き延びるためのもつもない謀略を考え出し、当時武田の脅威に怯える尾張の織田信長様に持ちかけたので御座います」

「信長公に、 . . . . .」

「当時は信玄公がすでにお亡くなりになっていることは周辺国にも知られておりました。

しかし、強力な家臣団に支えられた武田の強さに些かも陰りはなく、織田様にとつても徳川にとりまして、武田は目の上のたんこぶに御座いました。

そんなおり、我が父は武田を織田様に売り渡したのでございます . . . . .」

「しかし、奥平一つが抜けたとて武田にとって何ほどでも無かったはず」

「先ほど申しました通り、武田の強さは強力な家臣団と、周辺の国人領主らが固く結束していたればこそ・・・」  
その状況下で中堅どころの奥平が、はいはいと徳川に鞍替えするのを許すようなこととならば、他の国人領主達に示しがつかなくなりま

ます。  
勝頼様は好むと好まざるとに関わらず、奥平を討たねばならなくなりました。

かくして人質として差し出していた我が妻や弟たちは勝頼様の逆鱗に触れ、哀れ見せしめのため串刺しの刑に処せられ、惨たらしく果てたそうに御座います。

その後、勝頼様は奥平討伐隊一万八千の軍勢を率いて、某が預かる長篠城を取り囲む仕儀となったのでございます」

「信昌殿御自身が囷となられたのか」

「それも我が父の策略でございます。

若年の某如きが籠もっていると知れば、勝頼様も先ずは裏切り者の父を捨てて武田へ帰参せよと説得してくるであろうと。

そして攻めるにしても高をくくって来ようと。

果たして家康様はその献策を受けて、まだ若年の某を長篠城の城代に抜擢したのでございます。

実を申せば長篠城は三方を川に囲まれた天然の要害で、如何なる大軍勢をもってしてもそう易々と落とせる城ではございません」

「その際に、織田と徳川は武田を誘い込むための野戦陣地を密かに構築していた・・・」

「！、如何にも、石田殿は昔の合戦にお詳しいのか？」

三成は苦笑して答えた。

「あいや、そういうことに詳しくかった友の受け売りで御座る。今はもうおらぬがな」

「元々が他国の大軍勢と戦う為に出張ってきたわけではない武田の討伐軍は、準備万端で待ち伏せた織田、徳川連合軍三万五千の敵ではございませなんだ。

結果は御承知の通り武田の惨敗でございました。

徳川の追撃は苛烈を極め、勝頼様を逃がす為に武田の家臣達は次々と楯となり、主だった重臣はことごとく討ち死にしまいました。主君の魅力が色褪せ、家臣団が大きく欠けた武田の崩壊は早うございました。

その後の織田、徳川方からの切り崩し工作によって、もはや戦わずして勝頼様は国人領主達に殺され武田は滅びました。

これすべて我が父、奥平貞能の描いた筋書きに御座います。

己の次男や長男の嫁までを犠牲にして武田の滅亡に貢献した我が父に対して、織田様は深い感動と大変な感謝をの気持ちを示して下さいました。

長篠の後、父は家督を某に譲り早々に隠居してしまわれました。余りの罪深さに武人として生きることをはばかられたのであります。よう。

父の代わりにすべての軍功は某が頂戴することとなりました。

信長様からは”信”の一字を頂戴いたし、それまでの貞昌を改め信昌となりました。

後にも先にも例の無いことであつたそうにございます。

家康様からは武田に殺された妻の代わりにと、家康様の長女の龜姫を賜りました。

わが子らは皆、家康様の外孫ということになり申す。

我が家臣達も知り得た秘密を口外せぬ代わりに徳川の譜代同様のお墨付きを頂戴いたしました。

これらもかつて前例の無いことにございます。  
織田と徳川がいかに武田を恐れ邪魔にしていたかの証左でござい  
ましよう。

奥平は徳川の最大の功労者にして、また抜き差しならぬ外戚として  
徳川家臣団の中で特異な地位を占めるに至ったのでございます」

「……………」

三成はしばし言葉を失った。

武田の滅亡が奥平の陰謀であつたとは……………」

「ですから、人に誇れる話ではないと……………」

「今、その陰謀の全貌を知る者は？」

「信長公も父も叔父も身罷つた今、某と”家康様”だけに御座りま  
しょう」

「ふ……………」

と、三成は大きく息を吐くと、心の中で先に逝つた友に語り掛けた。

…………… 刑部よ、相手が悪すぎたようだ……………」

その百五十二 云々

「あま多いる徳川の家臣の中から、あえて奥平貞治殿を小早川の軍監に選んだということは、刑部が関ヶ原に長篠の再現を企てておつたことを内府殿は事前に察知していたということであろう」

「まず間違いございませんまい」

「しかし我等とて、ただ陣地を掘って大筒を担ぎ上げていただけでは御座らぬ。

如何な内府殿と云えども予見不可能な秘策を仕掛けておつたのだ」

「・・・・・・」

「小早川が土壇場で裏切るのは西軍ではなく東軍の方であつたのだ」

「それはまことで御座いますか？」

「秀秋殿は土壇場まで東軍に組した風を装い、すでに内府に抱き込まれた二人の家老を謀っておつた。

最後の最後に主君自ら小早川の全軍に大坂方への加勢を宣言するそのときまでな。

おそらくそこまでは予定通り進んでいたはずである。

叔父上も土壇場の混乱の中で、本当はすでに松尾山で亡くなつておられたのだろう。

反対する者があらば侍大将の松野主馬が排除する手筈であつた故。

しかし小早川の内部で内紛があつたと知られては都合が悪い家老達の手によって遺骸は激戦地に運ばれ捨てられたのであろう。

しかしますますおかしな事になつてしまつたし、内府殿の気付くと

ころともなつたというのが事の真相と推察致す。  
疑いを掛けられた小早川は我が佐和山城攻めの先鋒を申しつかり、  
秀秋殿はさぞや心苦しかった事であろう」

「それでも小早川に豊臣を託すと？」

「如何にも、秀秋殿は秀頼様のもはや唯一の兄弟にして豊臣家の第一  
二位継承者でありますからな」

「……やはりこの男は私利私欲で徳川に齒向かうような人間で  
は断じて御座らぬ……」

「胸のつかえが取れ申した。某、小早川の件は墓場までもって行き  
まするゆえに案じ召さるな」

「……かたじけない」

「石田殿、そなたとはもつと早うに出会っておきたかったもので御  
座いますな。」

その、昔の合戦好きの友とやらとも一緒に……」

二人は杯に残った酒をぐいっと飲み干した。

## その百五十三 最期

三成は自分自身が勇猛果敢な戦国武将であるなどとは一度たりとも思ったことは無かった。

もちろんこの時代を生きる武人として常にかくありたいとは願っていた。

しかし人には分相応というものがある。

それゆえ三成は戦国一の指揮官の誉れ高い島左近を召抱え、当代一の軍略家の大谷吉継と友情という固い絆を結んできたのである。

自分に欠けるものは他の者に補ってもらおうと・・・

しかし三成は関ヶ原で左近も吉継も失ってしまった。

今三成は、自分自身のどこにかくの如き闘争本能が宿っていたのか不思議でならなかった。

三成は悟っていた。

自分は臆病な人間であると・・・

信長公のような孤高の気高さも、太閤のようなに人から愛される愛嬌も、家康のような遠大な思慮深さも、刑部のような知勇も持ち合わせてはいなかった。

それでも今の三成はひどく自分に満足していた。

関ヶ原より十七日間、たった一人で誰も恐れをなす家康と徳川二百五十万石を相手に死闘を演じてきたのだ。

精魂尽き果てたが思い残すことは何も無かった。

今は、世に戦乱を巻き起こした罪を一身に背負い込み、諸悪の大元として処刑されるという最後の役割を果たすだけである。

自分が背負う罪が重ければ重いほど、それは今後の豊臣家の安泰に繋がる・・・そう信じて。

いよいよ六条河原のまつさらな筈むすの上に引き出されて膝を突かされた三成は、左右の隣人達を覗き見た。

左手の小西行長はすでに死人の顔色であった。

口の中でぶつぶつと彼の神への祈りを念じていた。

この善良な切支丹大名を破滅に巻き込んでしまったことを、三成は心底すまないと思った。

右手の安国寺叡慶はさすが仏門の徒らしく達観の境地にあると見え、三成と目が合うと優しく微笑んだ。

・・・毛利一門が済まぬことで御座った・・・何も恐れることは御座らぬ、遅かれ早かれみな行く道である・・・

目がそう語っていた。

背後に処刑人が並び立つ気配を感じた三成は、最後にまっすぐに前を見据えた。

正面の小高く組んだ櫓やぐらの上には処刑の見届け役として表情を殺した奥平信昌があつた。

かつて三成もそこから幾多の処刑を見届けて来た場所である。

この期に及んで三成の鼓動はこれ以上耐えられないほどに高鳴つた。

…… 嗚呼、あのとき駒姫はなぜあの幼さであるように落ち着いていられたのであろうか ……

三成の脳裏に五年前、同じように河原の露と消えた最上の駒姫の処刑の光景が蘇つた。

そのときである。

視線を少し落とした三成の両眼に信じられぬ姿が飛び込んできた。

…… おおかかさまねね様！ ……

そこには三成が佐吉少年の頃に見慣れた、若く美しいおおねねがあつ

た。

．．．．  
夢幻ゆめまぼろしか．．．．

三成が若き日のおねねと見紛みまじつたのは、古橋村の与次郎が妻、おいねであつた。

北政所が、自分が若い頃に着た物をおいねに着せて三成の最期を見届けさせようと寄越したのであろう。

その姿を三成が見咎めやすい正面に据えたのは、信昌のさりげない友情であつたのだらう。

殺伐とした刑場に咲く一輪の百合の花．．．．そんな形容がぴつたりであつた。

はちきれんばかりだつた三成の鼓動がぴたりと静まつた。

刑吏の掛け声で三人が頭こぶを垂れた。

三つの首珠くびたまが同時に転げた。

## 最終話 孤島の老人

伊豆半島の遙か沖合いに浮かぶ八丈島。

夕暮れの海原を見下ろす断崖の上で、一人の老人が岩に腰掛け沈みゆく夕日を見つめていた。

その深く刻まれた顔の皺一本一本に、この老人が辿った数奇な運命が宿っていた。

老人の名は、宇喜多秀家。

かつて豊臣権中納言秀家とも名乗った豊臣家に連なる大名である。

関ヶ原と三成の処刑からは、すでに五十余年の歳月が過ぎ去っていた。

もう、当時のことを知る大名や武将は誰一人として生きてはいなかった。

家康は四十年も前に死去して、すでに東照大権現に祀られていた。

壮麗な東照宮の造営には、焼け落ちた大坂城の地下蔵から密かに掘り出された、

どろどろに溶けた金塊の一部が使われ、残りは江戸幕府二百六十年の礎いしすえとなった。

清正や幸長は豊臣の滅亡を待たずに身罷っていた。

正則が己の不甲斐無さを生涯責め続けながら割腹して果てたのも三十年以上前のことである。

片桐且元はさらにずっと早くに己の所業を悔いて割腹していた。

秀頼と母のお茶々は家康の寿命の尽きる僅か一年前に非業の最期を遂げた。

あと一年、あと一年家康が死ぬのが早ければ、豊臣は滅亡まではしなかったであろうことが悔やまれた。

あいや、秀頼と千姫の間に順当に子が授かっていて、曾祖父の、家康のその手に抱かせてさえおれば、何ごとの問題も無く、ただの羽振りの良い大坂の縁戚として生き延びていたかもしれない。

…… 三成の思い描いたままに ……

「はぁー」と老人は深い溜息をついてから腰を上げ、家路につこうとした。

家といっても雨風を防げるだけの掘っ立て小屋である。

夕日を背にした老人の行く手には、いくつもの岩山がそびえ立っていた。

それらが、さんぜん燦然と夕日を浴びて輝く天守を頂いた、在りし日の大坂

城の姿と重なった。

老人の口から歌が一首こぼれた。

「露と落ち、露と消えにし 我が身かな 難波なにわのことも 夢のまた  
夢、か……………」

老人が口にした歌は、義父の太閤秀吉の辞世であった。

完

## 生物学的解説

このお話の中で秀頼は、豊臣秀吉の本当の子であったということにしています。

当たり前と言えば当たり前ですが、十数人も側室がいた秀吉にしては子が出るのが遅すぎたのでは？

果たして実子だったか怪しい？

という説にも説得力があります。

もし太閤秀吉が死んだときに、すでに成人している跡継ぎがいたなら、

その後の四〇〇年の日本の歴史は、大きく変わっていたことでしょう。

さて、この物語ではなぜ秀頼を実子として描いたのかを少し詳しく解説いたしましょう。

最近の研究でヒトの精子はけっして一様ではなく、いくつかの役割を分担していることがわかってきました。

アメフトのオフエンスのように他人の精子に激突して攻撃酵素を出して撃滅するもの。

他人の精子をブロックして先に行かせぬディフェンダーの役割を担

うもの。

敵を出し抜いてまっしぐらにタッチダウン（受精）を狙うもの。

まるで戦争を前提としたような精子の役割分担がなぜ私達ホモサピエンスに自然に備わっているのでしょうか？

それほど遠くない過去　・・・

私達がまだ家や畑を持つようになるちょっと前まで　・・・

私達は洞穴ほらめなや洞窟どうくつの中で暮らしていました。

家族だけではなく、おそらく何十人かの小グループで共同生活を営んでいたことでしょう。

焚き火が消えてしまえば夜は真っ暗闇です。

洞窟の入り口から差し込む月の明かりでやっと這いまわれるくらいでしょう。

このシチュエーションで血気盛んな若者がおとなしく寝ていられる訳がありません。

昼間に目をつけておいた年頃の娘のところへ闇にまぎれて夜這いをかけます。

（日本でも江戸時代あたりまでは、夜這いはごく普通の恋のアプローチでした）

中には親や兄弟に見咎められて追い払われる場合もあったでしょう。

娘はまだ早い！とか、馬の骨にはやれん！とか。（現代と一緒にです）

でも、娘も年頃となれば家族のためにも部族のためにも子供を産まなければなりません。

パートナーの選択は娘の好みと本能にまかされノーガードとなります。（現代もそうです）

かくして若く魅力的な娘の寢床には毎晩、次から次へとオトコが夜這って来るようになります。

全て受け入れるのも、タイプだけを受け入れるのも娘の自由です  
・  
・

ここで精子戦争が勃発するのです。

成人するまで飢えや病気や紛争を生き残り、娘にも選ばれ、さらに精子戦争にも打ち勝った飛び切りの遺伝子だけが子孫を残し、次の世代の進化を任うのです。

おそらく秀吉は猛烈に精子競争に強いタイプの遺伝子を持ち合わせていたのではないでしょうか。

あまりにも強すぎる精子は独占状態にあるメスに対しては逆に受精しにくくなってしまふという欠点があります。

あくまで精子戦争を勝ち抜くのに適した精子軍団ですから競争相手がいてくれないと勢い余って肝心の卵細胞まで攻撃してしまうのです。

お茶々が初めて浮気をしてくれた女房だったからこそ、そこで精子競争が起きて秀吉の精子に適した受精環境が出来たとも考えられます。

または、秀吉が年を取って精が弱ったおかげで初めて子に恵まれたとも考えられます。

さらにこの物語のように、秀吉も、お茶々も互いに似たような訳ありの出生であるがゆえに、子が授かりやすくなったと想像するのもドラマチックではありませんか。

さて、どの程度御賛同いただけますでしょうか・・・

尚、考察にあたっては生物学者の竹内久美子さんの著書より多くのヒントを頂いたことを付け加えさせていただきます。

生物学的解説（後書き）

長い間の御愛読ありがとうございました。

作者

## 第二部 秀頼と千姫 プロローグ

石田三成の処刑から、十日余りが経過していた。

宇喜多秀家は関ヶ原の敗戦を生き延び、近江と美濃の堺の白檜村の土豪、矢野五右衛門の元に匿われていた。

その秀家に、家臣達の奔走により脱出の目処めどが立ったことが伝えられた。

「進藤三左衛門は徳川との交渉を上首尾まに纏めましてございます。明後日には殿を奥方様の待つ大坂屋敷に、お連れ出来る運びとなりました」

秀家の助命交渉は徳川との間で秘密裏に進められていた。

落ち武者同然の秀家にとって、大坂屋敷に残した妻女めづのことは何よりの気掛かりであった。

京、摂津界限はすでに完全に東軍の支配下に置かれ、大坂城西の丸の家康からは論考行賞が次々と諸大名達に出されていた。

その大坂にある宇喜多屋敷は、前田の姫である豪姫があるゆえ無事であったが、一時は豪姫も秀家がすでに落命していると思ひ込み、落胆に沈んでいた。

秀家の存命は決死の潜入を果たした進藤三左衛門により、大坂屋敷に伝えられていた。

その愛しい豪姫とも、もうすぐ再会できる . . . .

秀家は命ある喜びを改めて噛み締めた。

共に決起の旗を揚げた刑部少も治部少も、今はこの世に無い。

特に、京、摂津、堺、と晒し者となった拳句に打ち首となった治部少達を目の当たりとした大坂屋敷の住人は生きた心地がしなかつたであろう。

秀家は此度、徳川との裏交渉を成功に導いてくれた進藤三左衛門から家臣達に深く感謝した。

三左衛門の徳川方との交渉は巧みであった。

三成らの処刑が済むのを見届けてから、秀家の脇差を手にもその生存を届け出た。

東軍の諸将や徳川の家の中に於いても関ヶ原の首謀者の三成が処刑されたことで戦には一先ずけりが付いたとの認識が広まっていた。

後の興味は己のはたらきに対する論考行賞の加増、移封に移っていた。

それに大事なことであるが、秀家は豊臣家の人間である。

太閤秀吉の養子であり実際、豊臣権中納言秀家と名乗ることが多かった。

捕縛したからといって、豊臣の名を冠する秀家を三成らと同列に打

ち首に出来るかと問われれば、家康も豊臣家にはばからずにはおられなかったであろう。

この頃の家康は関ヶ原に勝ったとは云え、まだ豊臣家の執権であることに変わりは無かった。

それに秀家を断罪するとなると家老の本多政重も同列に断罪せねばならなくなる。

それも徳川に尽くしてくれた影の功労者である本多親子には都合が悪いこととなる・・・

三左衛門は交渉の中で、政重の間諜活動の証拠を握っていることを相手方の本多正信にさり気なく匂わせることも怠らなかった。

かくして宇喜多秀家を捕縛することは、徳川にとっても益の無いことであるとの合意に至り、穩便に遠国おんごくに逃がすことを認めさせるに至ったのである。

ただし、そこは抜け目の無い正信老人である。

秀家を逃がす先は”薩摩の島津へ”と注文を付け加えた。

これは、関ヶ原で不戦の約束を反故にした徳川の弱みに付け込み、改易や減封や臣従を拒むであろう島津に対処するための布石であった。

仮にも豊臣家の継承権を有する秀家をわざと島津に預け、事あらば島津が秀家を奉じて天下を揺るがす者といちやもんをつけるためである。

立花宗虎や加藤清正、黒田如水ら九州の諸大名と結束して九州連合を打ち立て、徳川に楯突くことを画策している島津義弘は必ずこの餌に食いつくであろうと。

いやはや、転んでも只で起きぬとはこの事である。

脱出決行当日、秀家は急病人を装い屋根付きの台車に乗せられた。

垂井に出てから中仙道を西に向かい、途中関ヶ原に差し掛かった。

台車に掛けた日除けの簾すだれの合間から一月前の激戦地が覗い見えた。

福島軍勢を退けた藤古川の土手が、三成が大筒を据えた笹尾山が、小早川が大軍を隠した松尾山が次々と視界に現れ、そして消えていった。

法螺ほひの音が、鉄砲の斉射音が、耳をつんざく砲声が、馬のいななきが、剣戟の音が、悲鳴が、次々に蘇っては消えた。

しかし秀家には何の感慨も沸いては来なかった。

まるで遠い前世の記憶のように感じられた。

やがて街道は琵琶湖の畔に行くようになり、湖の向こうには霞がかつた美しい山並みが見えてきた。

反対側の山上には、これまた美しいと評判の佐和山の城がそびえているはずであった。

秀家にはとてもそれを見ることは出来なかった。

「……………黒田、佐和山城は見えるか……………」

問われた黒田勘十郎は、「残念ながら、石垣だけを残すのみにござ  
います……………」と答えるのみであった。

途中いくつか東軍の設けた関を抜けたが、新所司代の奥平信昌のお  
墨付きでどこも素通りが叶った。

難なく伏見まで辿り着き、そこからは淀川を下る船の客となった。

目指す大坂屋敷は淀川の畔にある、夜陰に紛れ屋敷に到着した秀家  
を妻の豪は泣きながら出迎えた。

「よくぞご無事で……………」

二人はひしと抱き合った。

しかし再開したのも束の間の喜びであった。

この後、関ヶ原の實質的な総大将であった宇喜多秀家が辿る人生は、  
余りにも長く苦しいものとなるのであった……………

## 第二部 秀頼と千姫 プロローグ（後書き）

おかげさまで第二部に突入します。

2話以降はタイトル、『新説関ヶ原 第二部 秀頼と千姫』で、引き続きお楽しみくださいませ。

<http://ncode.syosetu.com/n8589h/novel.html>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8573f/>

---

新説関ヶ原 《完結済》

2010年10月10日10時48分発行